評議員
文學博士 萩野由之
文學博士 黒板勝美
文學博士 松本愛重
文學士 笹川臨風
文學士 菊池謙二郎
文學博士 三宅米吉
（イロハ順）

黒川真道編

國史叢書

上州治乱記 全
上州坪弓老談記 全
上州金山軍記 全
新田正傳記 新田正傳或問 全

國史研究會藏版

解題

上州治亂記　二十卷

本書は、應仁・文明の亂より、元和の始に至るまで、所謂戰國時代に於ける上野國の諸豪族の爭鬪及關係諸家の事蹟を記したるものなり。其の豪族中に於ても、著名なるものは祖先より筆を起し、後裔の沒落の始末を記し、又德川氏天下を一統するに及び、萬民安堵の思をなし、始めて泰平の恩澤に浴する由を稱せり。

本書内容は、箕輪城主長野家の事蹟、或るは小幡家の事蹟、長野家武田信玄に滅さるゝ事、附いて武田家の事及び同家の興亡の始末、織田信長の事蹟、豐臣秀吉の事蹟、さては小田原北條家の事、德川家の事等にして、上野國の豪族は勿論、關係諸家の事蹟は一切記されたり。されば本書は、上州治亂記としては、上州以外の事蹟

を記し過ぎたる憾なきに非ず。是本書の作者の筆の走り過ぎたる故なるべし。本書作者の名を掲げざれば、詳ならず。漢文の序文を加へたれども、是亦年紀氏名を掲げざれば知れず。只世間、類本至て乏しければ、校訂を盡す能はず。善本を待つて、更に訂正を竢つことゝせむ。

上州坪弓老談記　三卷

本書は、上野國坪弓といふ所の老人の昔物語を筆記せし趣、寶永二年の序文に記せり。

內容は、所謂戰國時代、上野國に關係せし上杉家・小田原北條家を始め、土地の豪族由良家・桐生家、又隣國下野國の豪族等にして、是等の人々が、上野國に關係せし事蹟を記したるものなり。

國書解題に云、

上州坪弓老譚　寫本三卷

上野國新田郡金山城主由良信濃守國繁の事歴を記したるもの、關東管領上杉憲政の時代の事に始まりて、越後の上杉氏及び小田原の北條氏に歷仕せし事等より、秀吉の小田原征伐によつて、領地を沒收せられしまでを記せり。本書一卷本あり、又三卷本あり、又異本あり。今此の底本には、予が藏本三卷本を採收せり。此の本には、予が父黑川眞頼、左の通り記して注意せられたれば、揭げて參考に供せん。

『此の三卷本は、一卷本とは小異あり。眞頼按ずるに、三卷本のかた原本なり。一卷本は、それを取捨せしものなるべし。又云、一卷本は、上下二卷なるを合册せるものなり』

以上の譯なれば、茲には三卷本を採收したり。

上州金山軍記　一卷

本書は、上野國新田郡金山城主由良家と、小田原北條家との爭鬪を記したるもの

なり。

内容は、一條づゝ記したるものにして、北條家爭鬪の外に、桐生家の事、上杉謙信の事、佐野宗綱の事、足利長尾家の事迄をも記せり。

由良家は、遂に北條家に屬せしを以て、豐臣秀吉小田原征伐後は、所領を沒收せられ、一族始め新田・足利・小俣の諸族の家人等は、或は牢人となり、或は農民となりて、僅に其の命脈を保つことを得たりと、其の始末を記したるものなり。

新田正傳記　一卷

本書は、新田家の祖先源義國より筆を起し、新田・足利の一族及び其の代々に於ける出來事を記し、後世由良國繁の代に至り、小田原に與力せしを以て、豐臣秀吉に所領沒收せられ、由良家沒落に及びしが、國繁の嫡子新六郎、德川家康に仕へ、御小姓となり、江州に於て五千石を賜はり、漸く家名を繼ぐことを得たるに筆をさしおきたり。

附錄には、新田家關係の附近の寺々の略歴を記せり。

本書異本ありて一定せず。今其の內、最も讀み易きものを採收す。

新田正傳或問　一卷

本書は、新田義重より筆を起し、其の以後に於ける新田家の代々及び故事來歷、或は紋所或は一族の由來等に至るまで、悉く記したるものなり。本書の終にも、新田家關係の寺々を記せり。

大正四年十一月

黑川眞道識

例言

一、本編には、上州治亂記二十卷、上州坪弓老談記三卷、上州金山軍記一卷、新田正傳記一卷及び新田正傳或問一卷とを採收す。

一、上州治亂記卷一卷二は、原書合併なりしが故に、其の儘刊行せし所、刊行後他の一本を見しに、此の書元より卷三は缺卷となりて傳はらざりしを、後世誰人がしわざにや、卷二を卷三と改め、卷の一を卷の一二合併と記し、卷の一二三を、都合よく目錄を改めたることを發見したれば、玆に一言其の事を追記し、本書卷一卷二の合併せし理由をも辨じ置くなり。又闕文せる所あるを以て余儀なく其儘とし、「以下缺文」と記し置きたり。

一、上州坪弓老談記、新田正傳記及び新田正傳或問は、原本片假名なるも、悉く平假名に改めたり。

一、語尾を補うて、通讀の平易を計れるもの頗る多く、且文字の一定せざるものは、

全卷を通じ、多きに從つて、一樣ならしむるに力めたり。

一、人名・地名等にして、採收書中各一定を缺くもの少なからざりしが、此等は原本の誤記と認めたるものゝ外、必ずしも改めざりき。是れ原本各の特徵を窺ふに必要としたればなり。

一、括弧〔　〕を用ひたるは、當編輯部にての註記に據るものにして、稀に□を箝入したるは、原本の文字不明にして、對照の便なかりしものに限る。又本文の左に縱線を施したるは、識者の後考に竢たんと欲するもの、又は誤記脫字にあらざるかの疑を示し、且其下にある括弧內文字と、對照を明にせんが爲めなり。

目次

上州治亂記

上州坪弓老談記

目次終

上州治亂記

夫人之興亡、世之盛衰、時云命云、誰能知其所以然乎。能知所以然、非神明者、定是聖人。抑案本朝七雄戰國之濫觴、足利大樹院尊氏公八代之後胤源師義政公、誇全盛、擅遊宴。依之忘世政道、不顧萬民倥偬、甚至因萬邦觸德政。自是人心好曲、四海悉強竊多矣。諸侯權益盛、源師威日々衰焉。於是諸國不發亂、從應仁文明至元和初百五十年、勃谿無相止事、隕大坂爲家國安全矣。如斯書、大意著其中間之事、若此而已矣。

上州治亂記 卷之二

箕輪城主長野家來由并小幡等事蹟、武田信玄上州發向、箕輪城攻

長野業政

上野國箕輪の城主長野信濃守業政は、在五中將業平の末葉にて、智仁勇を兼備せる勇士なり。管領上杉憲政の老臣にて、地戰には千騎の大將にて、弓矢打物取つては、度々名を顯したる大剛の士なり。然るに管領憲政愚將にして、長野業政が諫を用ひず、管野上野介・上原左衛門が勸めに依つて、非義の政道多かりしかば、諸士背き民恨みて、終に小田原北條氏康に、關八州を奪れ、去る天文二十年、越後の國へ逃行き、先祖の家臣長尾景虎を養子として、上杉の號竝に關八州の管領を讓りし事、前代未聞の珍事なり。憲政、上州平井の城を落ちて後、箕輪城主長野信濃守業政一人、踏留

武田信玄箕輪城を攻む

り、武田家と、八ヶ年の間戰へども、其所領を奪はれず。然るに今度長尾景虎、越中にて合戰と聞えしかば、武田信玄、能透(よきすき)と思立ちて、上州箕輪の城を攻拔かんと、大軍を引率して、上野へ向ひけり。先づ長野業近の婿、西上州和田の城主新兵衛尉朝當・厩橋の城主長野彈正忠景連・嶺の城主小幡尾張守信定・岡本兵部少輔持村・小幡圖書助景定・木部宮内悅輔・倉加野淡路守一與・安中の城主左政大夫忠〔成カ〕城・松井田の城主安中越前守忠政、是等は皆長野業政の婿なれば、箕輪の城に楯籠る。其外長尾新治郎景孝・同新五郎景忠・小幡尾張守が一族小幡參河守景宗・葦田下總守幸成以下、上杉家の侍共、皆心を一致にして、箕輪の城にぞ籠りける。然るに武田信玄、一萬二千の軍勢を以て四方を圍み、持楯・疊楯、大手・搦手揉合せ、先陣戰疲れぬれば、後陣の新手を入替へ〳〵、息をも繼がせず攻立つる。抑此城々、榛名大明神の山の尾崎を掘切りて、築揚げたる城にて、城の南面、箕の手に似たれぱとて、箕輪とは名付けたり。(故は三輪と書くなり。)要害尤も堅固にして、殊に籠れる諸大將は、上杉家譜代の四臣にて、悉く名を顯したる、一人當千の剛兵なれば、敵多勢にて攻むれども、少しも氣を屈せず、遠き敵

をば、鐵炮にて打殺し、近き敵をば、矢を放ち射倒し、櫓門塀下へ近付く者をば、石母呂〔石火矢カ〕を發して打殺し、塀を乘るをば、走り木を構へて突落しける程に、敵兵是に色めき立つ時、門を開いて打つて出で、鑓を構へて突立て、敵退けば城に入る。其進退機變、殆ど神の如し。甲州勢、是が爲に、手負討死する者、五百餘人に及ぶ。されども塀一重をも破り得ず、退屈してぞ居たりける。城中には兵糧多く、其上箭玉藥澤山にて、絕えず打出す矢石は雨の如く、甲を貫き鎧を碎き、寄手は是に射噤められ、楯の影に隱れ、背をくゞめて馬影に廻り、或は人を楯とせり。萎る所を見濟し、小幡三家長尾父子と、和田・岡本の諸大將、替々突出で〳〵戰ひしかば、甲州勢、毎度の軍に利を失ひ、力攻には落つべからず。年を積んで攻戰ひ、勇氣を挫き、城を拔くには如かじとて、甲州へ軍を引入れ、夫より後永祿六年、三年も絕えず、此城を攻めたりける。

小幡尾張守信定・同圖書助不和、武田信玄公

嶺の城を拔く、甲州歸陣

南上州嶺の城には、小幡尾張守信定、千騎にて楯籠る。渠も長野の婿にして、上杉第二の長臣にて、忠義を守りし大將なれども、相婿圖書助と不和なり。然るに圖書助景定、信定を折々、謙信へ讒言しければ、長野業政も、尾張守を惡み、去る永祿三年五月、信定湯治の留主に、嶺の城を攻拔きて、信定を追放し、嶺の城へは、圖書助を入置きける。尾張守も力及ばず、妻子を連れて甲州へ逃行き、武田信玄を賴みける。信玄、本より上野國に心を懸け、攻取らんと思ひ巧む最中なれば、手引の爲と悅んで、信州日向といふ所にて、五千貫の所領を給はり、同九月上旬、信州上州の境南牧と云ふ所に、砦を築き、尾張守を入置きける。時に永祿六年二月十二日、上野國を攻めんとて、一萬三千人を引率し、甲州を雷發あつて、餘地崎を越え、南上州南牧の砦に着陣遊ばされ、尾張守信定を招ぎ、信玄尋ねられけるは、足下の相婿圖書助が氣象は、如何ぞとありければ、信定申上げゝるは、抑圖書助が儀は、器量も力も人に勝

れ、武勇等倫を恥ぢざる大剛の者にて候へども、事に驚き周章仕る天性にて候と申しける。信玄聞召して、扨は術こそあらんとて、內藤修理亮昌豊に下知を加へ、小荷駄馬一疋に、挑燈二つ宛附けさせて、馬追の人夫にも、松明一本宛持たせ、旗本にては、竿の先に挑燈を結付けて置き、此挑燈に火を附けて、旗本より差上げなば、汝が請取の小荷駄の松明に、火を附けて、高き所へ追上ぐべしと示し合せ、旣に軍勢の手分をして、松井田・安中・箕輪三ヶ所に配當して、後詰をさせじと押へ置き、旗本服備へ、數千の兵を進ませて、嶺の城に押寄せて、相圖の挑燈差上げしかば、內藤修理亮之を見て、小荷駄共の挑燈松明一時に燈させて、高き所へ追登せて、鬨を噇と揚げしかば、圖書助大に驚き、敵若干の大勢なれば、防ぐとも叶ふまじとて、城を開いて落行きける。甲州勢追討亂放、終に嶺の城を乘取りけり。翌日信玄、嶺の城を巡見あつて、信定を召出し、是は足下の本領なればとて、尾張守に授けられ、名を改めて小幡上總介信定と號し、信玄、甲府歸陣し給ひける。扨其頃信州には、眞田彈正忠幸隆入道一德齋、上州には小幡上總介信定、一向に信玄へ忠を盡し、譜代の老臣、間然に

信玄嶺の城を奪ふ

仕へしかば、或時信玄、內藤修理亮・原隼人助兩人を使にて、小幡上總介を召寄せられ、信玄宣ひけるは、小幡は數代上杉家の舊臣なり。然れども當時予に屬し、忠義私なし。予是を知る故に、他に異る賞を與ふ。されば當家に伺候の上は、予に敵對する長野信濃守業政が娘を以て、足下の妻とせし事、家に附き身の爲といひ、其理なきに似たり。早く其妻を離別して、譜代の者の中にて、然るべき緣組の事、相叶ふべしとありし時、信定座を退き、修理亮が方に向ひ、返答しけるは、我等誠に上杉譜代の者にて候得共、憲政の行跡、人望に背きし故、家運傾き、北條が爲に荒凶し、越後へ逃走りて、管領を景虎に讓りて、北條家を討たんとする事、甲斐なき振舞口惜く存じ、氏康・氏政を退治せんと、長野・太田等と心を合せ、數度合戰を相勵む。然るに某が相婿圖書助、私欲の讒を構へ、長野業政と一致して、謙信へも惡ざまに申なし、其上嶺の城を追放す。然るを君の恩顧に依つて、本領に歸住す。厚恩更に譬ふるに者なし。信定、粉骨碎身すとも、飽足らず候へども、當家の御大事に臨んでは、一命を奉らん事、鴻毛よりも輕かるべし。況や其外の事、如何なる仰を蒙るとも、爭でか

否とは申すべき。さり乍ら、此女は信定が舊妻にして、廿七年相馴れ、子供數多育て候。一旦嶺の城を出でし時、父業政には勘當せられ、彼方此方力なく、私と共に流浪し難儀困窮の勞を遂げ、漸く君に召出され、適々本領安堵して、愁の眉を開き候。年來此女、内外の事に付きて、露計も身落したる不行跡なし。今日迄添へ來り、唯今離別仕らば、父長野には勘當せられ、憐むべき夫には捨てられ、歸るべき宿もなく、道の邊に倒れ伏され、餓死仕るは必定。此女の恥は、小幡が恥にて候へば、御免を蒙りなんとぞ申しける。信玄甚だ感じ給ひ、誠に信定が志、情あり義ありとて、小幡が娘を、右典厩信繁の息左馬助信元の妻女となし、一家の好を結ばれ畢。

長野信濃守子息業盛へ遺言幷卒去、武田信玄公再び上野發向、城々落去

斯くて長野信濃守業政は、箕輪に籠城して、上杉憲政を、平井の城へ再び歸住の運を謀り、忠戰の功を勵めども、竟に本意を達せず。剩へ永祿三年の冬霜月下旬より、老

長野業政死去

病に責められて、治療驗なし。或時子息右京進業盛を招ぎ、遺言して曰、吾年來身命を顧みず、敵を四方に請けて、怨を國に退け、主君上杉殿を、再び還住せしめんと願ひしに、其有增も空しくなりぬ。然れども此憤、未來際を極めても盡くべからず。我死せば、一聚の塚ともなして築込め、卒都婆をも立つべからず。佛事をも營むべからず。穴賢、敵に降參する事なかれ。敵に向つて心よく討死せば、我が爲の孝養なるべし。嗚呼苦いかなと、大息繼ぎ齒を喰ひしばり、竟に永祿四年六月廿一日、死去せられける。其形勢こそ恐しけれ。嫡子業盛、家老藤井豐後守と密談して、翌年の秋迄、深く隱すと雖も、竟に信玄へ聞えしかば、信玄大に悅び、武州には太田資正入道三樂齋・上野口長野業政、上杉家棟梁の臣として、武威を振ひ、上杉旣に沒落すれども、兩臣諸將と心を合せ、吾と北條とに敵對す。然るに太田は、勢力疲れ、岩槻の城を退き、江戸の城に蟄居す。長野業政、獨り箕輪に堅住し、猛威を振ひ、吾數萬の勢を以て、度々攻むれども、更に落城せず。業政病死して、子息右京進も、父に劣らぬ勇士なれども、諸將の尊敬、業政には似べからず。此時上野國を取らずんば、いつの時

信玄再び上野に攻入る

安中城陷る

をか期すべき。若し油斷せば、北條に先をせられなん。急ぎ上野に發向して、城々を攻拔かんと、其勢都合二萬餘人引率し、永祿六年二月十一日、甲府進發あり。先づ安中越前守が楯籠る松井田の城へは、館富兵部少輔虎昌・淺理式部少輔義胤・小宮山丹後守昌友・城の伊庵・同舍弟忠兵衞尉・原與左衞門尉勝重・市川梅印、此六頭ぞ向ひける。又安中左近大夫忠成が楯籠る安中の城へは、甘利左衞門尉晴吉・小幡上總介信定・原美濃守虎胤・曾根内匠助正淸・此四頭ぞ向ひける。又長野右京進業盛が楯籠る箕輪の城へは、内藤修理亮昌豐・山縣三郎兵衞昌景、小山田彌三郎昌教・馬場美濃守信房、此四頭ぞ向ひける。一度に三ヶ所へ押寄せ、鯨波・鐵炮の音、天地も崩るゝ計打出し、旌旗は武藏野の尾花が末に等し。息をも繼がせず攻立つる。安中の城主左近大夫忠成、爰を先途と防ぎ戰ひけれども、敵多勢、荒手を入替へ〳〵攻付くる。城中は小勢にて、入替るべき兵なければ、終に勢力疲れ、降參すべき由申しければ、甘利左衞門尉取次にて、信玄へ申しければ、則ち渠を免し、安中の城へは、小宮山丹後守入置きけり。爰に松井田の城主安中越前守忠政は、矢・鐵炮を飛ばせ、或は突

松井田の城陷る

安中忠政殺さる

出で、命を惜まず防ぎしかば、寄手若干討たれしかども、敵大勢なれば、死人の上を乘越えて、二の郭迄押破る。されども忠政、猶此所にて防戰す。爰に平尾何某といふ者あり。舊は武田家の侍なりしが、去頃より信玄の勘氣を請け、浪々致しけるが、此城に籠る城の伊庵と鑓を合せ、互に鎬を削り戰ひしが、平尾申しけるは、如何に城の殿、此度の一番乘、貴殿に任せ申さん。某が世悴信州相木方に預け置き、當年七歲に罷成候。是を君へ、宜敷御取成奉るといふより早く、城中へ引入りけり。其時城の伊庵大音に、此城の一番乘なりと、呼ばはりければ、甲州勢、はや城の殿、三の郭迄乘入りたり。各續け〳〵と、攻鼓を鳴らし、透もあらせず攻立つる。城兵次第に討死し、殘兵力疲れ、或は痛手負ひて、今は防ぐべき様もなく、城主越前守降參を願ひける。飯富兵部少輔虎昌、此由信玄公へ申上げける。城へは、淺理式部少輔入置きける。斯くて武田信玄公、安中越前守を御前へ引出し、其元事、敵を大勢討たせたるのみならず、降參する事尤も遲しとて、遂に誅戮せらる。實に惜き士なり。是信玄の不道といつつべし。左近大夫は、早く降參したればとて、安中の城幷に本領を返し與へ、廿

利左衞門が妹婿にぞせられける。既に安中・松井田落城すれば、兩勢合せて一萬餘騎、烏川を渡り、雉子崎をば跳越え、箕輪の城へ押寄する。

上州治亂記卷一二終

上州治亂記卷之三

那和無理之助働、箕輪落城

扨も武田信玄の先手那和無理之助、手勢二百餘人にて、秋間山をはね越え、烏川を渡り、鷺坂常陸助長信が砦を攻立つる。常陸助は、箕輪に籠城故、留主の家人防戰すと雖も、敵目に餘る大軍なれば、防ぐに術なくして、各箕輪の城へ引く。無理之助、鷺坂が砦を放火して、白岩山に到る。然る所に、箕輪より安藤九郎左衛門、百騎計にて助け來り、白岩山にて、那和と大に戰ひ、三度迄敵を追崩し、深入して安藤終に討死す。直垂の裏に、血に一首の歌あり。

老の身は何國の土となるとても君が箕輪に心とゞまる

是を見る人、感賞せずといふ事なし。旣に那和無理之助、鷺坂の砦を攻潰し、白岩山

の合戰に打勝ち、坊合を放火す。寺僧等、佛像鑑卷を抱いて、箕輪の城へ逃げ入る。依之長野の先陣青柳金王、百五十騎を前後に從へ、白岩山に來り、大に那和と戰ふ。無理之助打負けて、軍を秋間山へ引き、青柳も箕輪の城に入る。同廿日、兩軍若田原にて、勇を爭ひ大に戰ひ、青柳金王、內藤修理亮が備を突破る。小幡上總助信定三百餘騎にて、青柳が勢を切崩す。白河五郎滿勝・下田大膳昌勝二百餘騎にて、小幡が備を切崩す。甲州勢の內三牧勘解由・井伊彌四右衞門、三百餘騎を以て、横合より白河・下田を切崩す。藤井豐後守友忠五百餘騎にて、甲州總軍の中へ駈入るを、縱横無盡に切崩す。甲州勢、人雪崩をついて、右往左往に敗軍す。其時內藤修理之助昌豐下知をなし、悉く軍を安中へ引く。城兵も勞れて箕輪へ引入る。斯るに松井田・安中の寄手一つになり、總軍勢二萬餘人、箕輪の城の四方を圍む。南は、波櫻・林馬・內子森。東は保度田・中里・今宮邊。西は高濱・白岩、愛岩の原。北は防蘇山・相馬嶽・舟尾山・桃井の里。夜は篝火天を焦し、野にも山にも充滿して打圍み、鬨の聲矢叫の音、百千の雷よりも恐し。されども小城なりと雖も、籠れる人々は、長野家譜代の者にて、一

騎當千の剛兵なれば、甲州勢見侮つて楯に離れ、城近く押寄せ、木戸・逆茂木を引破らんと、我先にと爭ひける。城兵は、本より萬死に極めたれば、敵の大勢をも恐れず、靜り返つて追々と引付け、鐵炮五千餘挺、一度に打出せば、甲州の先陣百五十餘人、忽ち打伏せられ、先陣色めく所を、城兵一同に矢を放せば、人雪崩を突くを知らず。後陣の大勢、唯一揉と押懸るに、切岸に馬の鼻をつかせ、或は馬より押落され、どよめき騷ぐ所を、城兵之を見て、屈竟の射手八十餘人、塀裏なる武者走りに差顯れ、散々に射立つる。鐵炮の輕卒は、矢狹より、玉藥を次替へ〳〵打出せば、手負死人六百餘人出來たりけり。本より城兵は、今日を限りの事なれば、親打たれども、子顧みず、主討たるれば、死骸の上を乘越え〳〵、死生知らずに戰へば、寄手の大軍、怺へ兼ねて引退く。其時城兵、時分は能きぞと、四方の城門を開き、二百餘人、無二無三に突出でたり。爰に山縣三郎兵衞、遙に之を見て、あれ城兵を切崩せと、下知をなす。爰に山縣の武者所大熊平藏といふ者、眞先に懸り、城兵を捲り付くる。續いて猪子才藏、二番に鑓を入れ戰ひけるが、鐵炮にて、脇腹を打たれて倒れしを、城兵五十餘人、

首を取らんと競ひ懸るを、甲州方に廣瀬郷左衞門、猪子を引立て退く。其時三科傳右衞門、進む敵を突伏せ首を取る。大熊平藏、其間に敵五人と突合ひ、一人突伏せ首を取る。此時敵來つて、指物を取つて引退く。大熊平藏・彼敵を追懸け行き、終に指物を取つて引退く。爰に又榛名山の方へ、信玄の二男伊奈四郎勝頼、初陣にて向ひける所に、城中より、長野右京進の老臣藤井豐後守友忠、初見えとして出でけるを、勝頼生年十八歳なりしが、藤井を目懸け追かけ、相馬嶽の麓にて追付き、大音揚げ、夫へ見ゆるは藤井殿ならん。返し合せ勝負せよといひければ、藤井も、本より望む所と取つて返し、馬上にて、無手と暫しが間揉合ひしが、何とかしたりけん、兩馬の間に落ち重り、上になり下になり、暫が間爭ひしが、藤井は聞ゆる大力にて、勝頼を取つて押へ、既に斯くと見えける所へ、原加賀守國房、諸鐙を合せて馳せ來り、馬より飛下り、藤井を引倒し、勝頼に首を取らせける。爰に又搦手の陣に、城の伊庵が舍弟忠兵衞は、味方の勢、敵の爲めに突立てられ、進み兼ぬるを見て、此小城一つを攻むるとて、大勢の者共、猶豫するといふ事やあるべきぞ。續けや人々と、眞先に進め

ば、百餘人曳い〳〵聲にて攻上る。城中の櫓より、矢・鐵炮を飛ばす事雨の如し。是に依つて、寄手多く討たれ、野臼になつて進み兼ねたる所に、城中より木戶を颯と開き、矢島久左衞門、眞先に進み、鑓の穗先を揃へ突出でければ、甲州勢突立てられて逃ぐる中に、忠兵衞獨り踏止つて、城兵百餘人と暫く戰ひしが、終に討たれける。兄の伊庵、弟を討たせ、安からずと思ひければ、大勢群りたる中へ馳せ入り、十文字に破り輪違に乘廻り、從ふ兵十餘人、伊庵に劣らず働きしかば、城兵捲り立てられて、城中へ逃げ入り、伊庵は首七つ討取り、鑓の柄の撓みたるを、膝にて押直し、突出づる敵を待ちかけたる形勢、大剛の士かなと、敵も味方も感じける。甲州勢氣に乘りて、夫れ伊庵を討たすな、續けやとて、同勢殘らず鬨を作り、太鼓を打つて攻懸れば、城中より雨の如く、箭を放ち鐵炮を打出す。寄手是を事ともせず、木戶・逆茂木を引破らんと揉合ひけるに、兼て構へ置きたる大木數十本、釣繩切つて落しかけ、塀に乘るをば、走り木にて突落し、或は石弩を發したれば、鱗の如く重りたる甲州勢、甲の鉢打挫がれ、手足を打損じ、手負死人四百餘人出來たり。されども敵は大勢にて、城中へ

込入りければ、さしも二心なき長野家の者共も、今は叶はじと思ひ、落行く者多し。流石義を知り名を惜む譜代の郎等被官計り、殘り止りける。城の大將長野右京進業盛、今は郭外をば攻破られ、詰の城に引籠り、猶も稠しく防ぎけり。生年十九歲なりけるが、心も剛に、力も强かりける。今を限りの死物狂ひと、大長刀を橫たへ、多勢が中へ割つて入り、死生知らず戰ひけるが、敵廿八人、馬より眞逆樣に切つて落し、其身も、鎧に立つ所の矢をも拔かず、疵口より流るゝ血は、白糸の鎧を、朱の血汐に染めなしぬれども、見事に士卒を左右に從ひ、本城へ引入りけり。斯くて永祿六年二月廿二日、長野右京進業盛、生年十九歲なれども、父の武勇を習ひ、僅五十に足らぬ軍勢を以て、甲軍二萬餘騎の大勢を、度々突崩しぬれども、蟻の群立つ如くにて、味方僅百騎には過ぎず。依之父の敎を守り、死する時に死せざれば、死に勝る恥ありとは古人の金言と、殘兵を本城に招ぎ戰ふ。此所落ちんと思はゞ、切拔けて落つべかりつれども、父業政が遺誡もあるなれば、命存へて、賴む世とも覺えず。暫の命を惜み、後に不慮の橫死せば、父の遺誡も背き、先祖の名をも穢すべし。所詮自害

して忠義を全くせん。各は何國へなりとも、身を隱し給へと申しければ、誰あつて落行かんといふ者もなし。皆君と共に殉死せんと願ひける。其時業盛大に悅び、然らば一先づ防矢たるべしといひ捨て、其身は持佛堂に入り、父の位牌を三禮し、鎧脫ぎ捨て、一首を書く。

春風に梅も櫻も散りはてゝ名のみ殘れる三輪の山里

念佛三遍唱へ、惜しや十九歲を名殘の花として、終に腹搔切つて伏したりける。防矢射たる人々も、痛手薄手を負ひければ、是迄なりと、互に刺違へ〳〵、同じ枕に伏したる人々には、白河五郎滿勝・靑柳金王忠家・道寺左近信方・下田大膳昌勝・高橋隼人一乘・道寺次郎範安・鷺坂常陸助長信・梶山因幡守吉方・岸出雲守信安・利根木內藏助昌安・今濱六郎業方・小澤次郎友信・細谷新藏俊方・田口兵庫業祐・大久保民部成安・八木原伊勢守爲範・舍弟源太左衞門尉爲永・山田與九郎茂方・田島源六郎、其外北爪・鳥屋・首藤・石原・淸水・內山・志村・里見・長根・中村・中島・岡田・廣木・小暮・新井・橋本・富澤・島方・俊閑・森山・新波・櫻井・井伊等、殘らず自害す。外に花形民部左衞門・道寺久助・町田

長野業盛自盡

兵庫・上家伊勢・寺尾豐後・長沼長八郎・八木波傳七郎・久保島十藏・矢島久左衛門、此等は皆浪々す。

箕輪城陷る

武田信玄不道

抑此箕輪の城は、去る永祿二年の秋より、信玄此城に心を懸け、數度攻めしかども、要害稠しく構へ、殊には城主長野業政、武勇智謀相兼ねたる大將、上杉へ忠義を盡さんと、金石の如く心を凝し、相從ふ輩も、似たるを友とする事なれば、死を善道に守り防ぎし故、終に陷らず。然るに業政逝去あつて、其子業盛、父に劣らぬ勇士にて、義機を勵みしかども、宿運爰に極りけるにや、永祿六年二月廿二日に至つて、落城することそ悲しけれ。業政の一子、二歲になりけるをば、藤井孫治郎忠安・安部孫左衛門淸勝抱きかゝへて、行方知らずなりにける。爰に又業盛の室、十八歲になりけるをも、殺したる其故を尋ぬるに、其頭隱れなき美女なりければ、生捕つて甲州へ連行き、色々と語らひけれども、貞女の道を守り、信玄が心に從はず。是に依つて信玄大に憤り、

信玄西上州を略す

汝予が心に從はずば、忽ち命を失はんといひけれども、業盛の室申しけるは、自ら事、疾にも殉死せんと思ふ折節なれば、殺されんこそ幸なれといひければ、信玄彌怒り、家來原左四郎に申付け、終に誅しけるとぞ。信玄の不道、尤も情なき事共なり。其後長野の侍の中、武勇の譽ある浪人二百餘人、甲州へ召抱へて、內藤修理亮に預けられける。其中にも、花形民部左衞門・道寺久助範兼・町田兵庫好信・神尾圖書助吉景・上泉伊勢守豊成・寺尾豊後守長歲・長沼長八郎道方・八十原傳七郎家方・久保田十藏時景・矢島九左衞門貞勝、此等は皆、長野家武功の侍なり。修理亮此時迄は、五十餘騎の大將なりけるが、今度二百五十騎になり、手の者には、三百餘騎の大將となり、箕輪の城を預り、保度田の砦に居住して、西上州七郡を職取り、足利・武藏筋の先手とせり。今度預る侍共、在々の砦に分置き、箕輪の城番とす。是等は、勢ひ修理亮に屬して、保度田に居住す。抑西上州を御手に入れんと、信玄八ヶ年の間、度々出張すれども、落城せざる事は、偏に長野信濃守の鋒先、强かりし故なり。今年上野國七郡、漸く御手に入りしかば、先づ和田の城主和田新右衞門尉朝連、三十騎にて降參す。

其外白倉城主左衞門尉宗純五十騎、高山の城主四郎高定五十騎、倉ヶ野城主淡路守熙時卅七騎、大戸城主左近兵衞十騎、井田の城主八郎四十騎、倭闕城主長門守宗繁六十騎、藤岡城主澄井右馬亮以下、悉く甲州へ降參す。此時擧つて上杉家譜代忠義の輩、絕え果てける。盛なる者は衰ふるの世とはいひ乍ら、淺ましかりし事共なり。

長野右近進業盛事蹟

爰に法如といへる諸國修行の行脚の沙門來つて、內藤修理亮一相見えて曰、愚僧は業盛と、別けて知音にて、竹馬の友なり。今爰に來つて、里人に問へば、悲哉や、業盛宿因とはいひ乍ら、未だ廿歲に滿たずして、刄に命を失ふ。定めて修羅の苦を受けん。庶幾くは業盛が死骸を弔ひ給はらば、何地にも葬り、追福をも致し度由望みければ、修理亮も、哀れ貴僧の心任せにせよとて、家士に命じて、死骸を彼僧に渡しける。法如悅び、死骸を受取り、里人を語らひ、井出野といふ所に葬る。

弘稱院殿箕山法輪居士と石碑を建て、經と念佛を唱へ、懇に弔ひける。悲哉信玄の

爲に亡び、一族門葉散々に成行き、名は青竹の露に摧け、勢は白河の流に沒す。抑此城は、大永の頃、長野伊豫守築き居住し、夫より僅父子三代にして斷絕す。宿因とはいひ乍ら、上杉憲政愚將にして、政道不正故なりと、皆人申合へり。今武田信玄武威を振つて、西上州の神社佛閣等、悉く燒失す。昔平の重衡、南都大佛殿を燒拂ひ、武威を四海に振ふと雖も、現罰遁れず、平家の一族、終に西海の浪に沈んで、悉く滅亡せり。今武田信玄、猛威を振ふと雖も、佛閣寺院を燒失す。其罪、終には遁るべからず。子孫斷絕遠かるまじと、人々止む事なし。殊に忠義を專にせられし長野業政が最期の一念、恐しき事共なり。

上州治亂記卷之三終

長野右近進業盛事蹟

上州治亂記　卷之四

武田勝頼諏訪參詣妖孽

信玄逝去

去程に弘性院大僧正信玄、去る天正元癸酉四月十二日逝去御座し、三年の間は、深く此事を穩密して、今年天正三年四月十二日、七佛事を執行ひけるにより、彌〻四方の敵國にも、此事を傳へ聞き心を變じ、敵に組する者多かりけり。別して德川・織田の豪家合體あり、勝頼を攻滅す企、嚴密なれば、武田の四臣勝頼を諫め、常に其備の怠をぞ責めたりける。

奥平貞能長篠城に據る

常に其爰に、武田の幕下參州山家三方の內、作司の城主奥平美作守貞能・其子九八郎信昌、去る酉八月、德川家に隨順して、同國長篠城に楯籠る。勝頼、此事を大に怒り給ひ、急ぎ出馬あつて、長篠の城を攻めらるべしと、天正三年五月中旬、甲州の館を雷發故、相從ふ人々には、武田逍遙軒信連・穴山小左衛門大夫入

道梅雪、一條右衞門大夫信龍・武田左馬助信豐・武田兵庫助信實・馬場美濃守信房・山縣三郎兵衞尉昌景・內藤修理亮昌豐・小山田兵衞尉信茂・原隼人佐昌勝・跡部大炊介勝資・眞田源太左衞門尉信綱・舍弟兵部少輔・小幡上總入道新龍言・土屋右衞門尉信近・小山田備中守・小幡左衞門尉・甘利三郎四郎・望月甚八・安中左近進・高坂源五郎・小笠原掃部大夫・和田左衞門・松岡參河守・五甘刑部丞・長根雅樂頭・松本兵部丞・小泉源治郎・相木百兵衞・三枝勘解由左衞門・土屋惣藏・初鹿傳右衞門・小山田掃部助・同源三郎・同八左門・横田十郎兵衞・寺島・甫尾・長坂・釣閑以下、都合其勢一萬五千餘騎とぞ聞えし。先づ諏訪大明神に參詣あり。夫より直に進發せらるべしとて、社に馬を向けられける。既に鳥居の前を過ぎ給ふ時、信玄より相傳はる龜甲の持鑓、栴檀卷の下より折れけるこそ不思議なれ。夫より高任へ着き給ひける時に、板橋を馬上にて御渡しあるに、如何にも堅固なる橋、中程より俄に落ちて、御舍人を始め、小人衆三人迄死する。御馬逸物といひ、いとも勝賴馬上の達者にて御座せば、鐙を當てゝ騷越し給ふにより、御身に大事はなかりけり。去るに依つて、今度の合戰如何あらんと、雜人

共は、さゝやきけるも理なり。

武田勝頼長篠城を圍む、織田・徳川兩家後援、武田長臣等諫言合戰高議

武田勝頼長篠城を攻む

斯くて武田四郎勝頼、夫より直に遠州平山を騷越え、濱松の城を巡見あり、本坂を越え、參州より谷へ押しなされ、大道寺山に本陣を据ゑられ、奥平父子が栖籠る長篠の城に取懸り給ふ。爰に大須賀彌次郎は、勝頼に内應し、小谷甚左衞門・山田八藏と共に、徳川家に背きければ、宍山左衞門大夫入道梅雪、兼て濱松へ密通にて、此事を告げられけるに、加之山田八藏心を變じ、大須賀彌次郎が、一揆を催さんとする企を、具に岡崎三郎信康卿訴へしかば、徳川家則ち大須賀を召捕り給ひ、妻子共に八人、竹鋸して誅せられ、磔にぞ懸け給ひける。是れ則ち武田家にて、奥平仙千代丸を誅せられし返酬とぞ聞えける。

家康長篠城を援く

斯くて徳川家康公、奥平父子見屆の爲とて、軍勢を從へられ、後援として、長篠森へ進發御座すに、山縣三郎兵衞昌景、手勢を以て、是を押へて、

少しも働かせざれば、頓て近臣大栗大六郎を以て、信長の出馬を催し遣さる。既に德川の御使者、兩度に及ぶと雖も、信長此事を許容し給はず。去るに依つて、家康公大に御怒り、三度目には、小栗大六郎を近く召され、仰付けられけるは、旣に予、信長と誓盟の書を互にして、助合ふべき旨を契約するより、江川の箕作・姉川合戰に、至つて、九死一生の場を、予助け置きしに、今更違變の段、信長が表裏、言語道斷なり。此度後援下されずんば、予は武田家と和睦なし、遠州を以て、勝頼に與へ、予は參州一國に坪み、武田家を旗本とし、家康魁師となつて、尾州に發向し、遠州の代りに、尾州を此方へ申請くべし。恐らくは武田・德川兩家合體するに於ては、信長の勇勢、恐るるに足らず。白地に申さずとも、汝が才覺を以て申す如く、矢部善七郎に、此段を申すべしとぞ宣ひける。斯くて小栗大六郎、再び岐阜に赴き、彌〻信長公進發なさるまじきぞと申すに、三度目の使者にも、信長猶更許諾なかりければ、小栗大六、善七に向ひ、此上は是非に及ばず、遠州を以て武田へ與へ、先に織田家御難儀、江州姉川・箕作兩所の合戰の如く、武田家を以て旗本とし、家康魁師となつて、尾州へ攻入る事、

信長、家康を援く

近き内に候べし。既に二度目の時、武田へ隨はんとせしを、某差留め申候と、己が才覺を以て述ぶる口口、是より立歸り、主君に申聞け、武田へ御味方を進め奉らんと、既に座を立たんとせしを、善七暫しと留める。本より表裏の信長、障子の陰に立聞き給ひ、信長出馬なりと宣ひければ、小栗大六郎遙に平伏し、有難く奉存候と、早打にて遠州へ立歸りける。斯くて織田信長公、武田家の武威に日頃恐れ給へば、彌〻今度の合戰勝利の爲とて、壽の連歌をぞ興行せられける。

松高く竹たぐひなき五月かな　　信長
白ふは見えず卯の花かさね　　夕庵
入る月も山かげ薄く消え果てゝ　　紹巴
をたは盛と見ゆる秋風　　信長

此連歌の體を思ふに、誠に德川家の御武運、長久に渡らせ給ふべき事、自然と風情の中に籠りて、目出度とこそ覺えけれ。然るに今度織田信長公・嫡子中將平姓信忠・舍弟北畠少將信雄既に父子三人、相從ふ士大將には、柴田修理亮勝家・佐久間右衛門尉

信盛・明智十兵衞光秀・羽柴筑前守秀吉・瀧川左近將監一益・床山五兵衞尉・丹波五郎左衞門尉長秀・池田紀伊守・金森五郎八・水野下野守・三好宗三・鯰江若狹守・蒲生忠三郎・森武藏守・不破河内守・丹下備前守・稻葉伊豫守・前田又左衞門・佐々内藏介・福富平左衞門・塙九郎左衞門・野々村三十郎・河尻與兵衞・佐藤六左衞門・青山新七郎・加藤市左衞門・安藤杢兵衞尉以下、五畿內の寄合勢七手、近江勢百五十騎、方々の寄合勢合せて十手一組、又攝津・河內・和泉公方家の寄合勢十手、若狹・丹後寄合勢十手、大和國寄合勢一手、此外數ふるに遑あらず。都合其勢十一萬三十餘人とぞ聞え、五月十三日岐阜の城を打立ち、直に尾州熱田大明神に參詣あり、偏に當社擁護の奇瑞をぞ祈られける。時に內陣に、轡の音したりければ、此度の合戰に、當社の神力を添へ下さるゝ所なりと、諸軍勢に是を觸れられける。是れ則ち織田家に用ふる嘗方の謀なり。されども軍勢、更に勇まざれば、滋々と長篠表へ押付け、川上山に於て、先づ德川家に對顏あり、兩家股肱牙爪の臣を集め、五月廿日、合戰の商議をせられける。然る所御閒番役、彼方此方と駈迫る。爰に德川家の長臣酒井左衞門尉忠次、信長の前へ

に進み出でゝ申しけるは、扨も甲州勢、僅に二萬に過ぎず。然るに長篠の押へとして勢を分ち、且鳶巣山に二千人の軍勢を籠め候。今宵密に間道を經て、鳶巣山に軍勢を差向けられ、彼所を揉落し、勝賴の陣後を襲ひ候はゞ、長篠の押へをも狼狽し、勝賴の本陣、亂れん事必定に候と申しければ、于時信長、忠次を礑と白眼み、汝何ぞ是を知らん。今信長と家康會評して、軍議未だ兩將の胸意を出でず。然るを汝武功を面に顯し、猥に非計を言句ると怒り給ふ。依つて忠次は赤面して、言下に答へず引退く。暫あつて信長、獨り忠次を召され、汝が謀尤よし。是れ最上の機術なりと雖も、予諸將の聞く事を恐るゝが故なり。一刻も早く打立つべし。併鄕導なくんば、危かるべしと宣ふ。忠次答へて、某能く案内を知れり。願はくは檢使を差添へられ候へと申す。其時信長、金森五郎八・佐藤六左衛門・青山新七郎・加藤市左衛門を呼びて、忠次に引合せ給ひ、五千人の勢を差添へらる。酒井も三千餘人の逞兵を從へ、兩軍合せて八千餘人、同月廿日の夜亥の刻に打立ちて、正樂寺の後を過り、鳶巣山へぞ向ひける。其外兩家の士大將、各戰場を請取り、諸手の備と、合戰の商議決したりけれ

ば、明日黎明より張出し、備を立つべしと議せられ、德川家は、八劔の本陣にぞ歸らせ給ひける。扨又德川家の侍大將大久保七郎右衞門尉忠世・同治右衞門忠佐・松平周防守・同主殿頭・同和泉守、菅沼小大膳・松平玄蕃允・土井豐後守・鳥井彥右衞門・大須賀五郎左衞門・榊原小平太・本多庄左衞門・小栗又一郎・同大六郎・本多作左衞門・植村出羽守・內藤四郎左衞門・本多平八郎・伊澤前右衞門・渡邊半藏・池水之助・水野太郎作・渡邊彌之助・同平六郎・內藤甚五郎・植村庄右衞門・富永孫太郎。岡崎三郎信康卿御介添には、石川伯耆守・平岩七之助等、都合其勢一萬五千餘人、兩家合せて十三萬八千餘人とぞ聞えける。斯くて德川家の御本陣は、竹廣の奧八劔にて、信長の陣城より、切所を一つ防ぎてぞ備ひ給ふ。織田家の陣城は、川山とて、長篠より坤の方に當りて、濱松の本陣より、東道三里計引下つて、陣を取り給ふ。各兩陣の前三箇所の切所を、要害に捕り、三重の柵を振られしかば、唯堅固なる城郭に楯籠る如くなり。斯くて天正三年五月廿一日、未だ横雲も引離れざるに、兩家の軍勢、各備を立堅む。先づ德川家の一先づ先竹廣の前大久保七郎左衞門尉・同次右衞門兄弟・松平周

防守柵の外へ張出せば、松平主殿守・同和泉守・菅沼小大勝・松平玄番允・土井豐後守・是に續いて備へたり。鳥井彥右衞門竝に牛窪衆・大須賀五郎左衞門・本多作左衞門の三手は、八釼の馬手の方に備を立つる。内藤四郎左衞門・植村出羽守は、御前備を立堅む。本多平八郎・榊原小平太は、御介添となりて、御本陣を守護し、左右に備を立てたりける。扨て又織田信長公の先陣佐久間右衞門尉・瀧川左近將監・羽柴筑前守・明智日向守、柵を離れて備へたり。斯くて織田方にては、一萬餘挺の鐵炮を、柵の此方に備へさせ、前田又左衞門・佐々内藏助・福富平左衞門・塙九郎左衞門・野々村三十郎をして、是を守らしむ。若し武田勢進み來る時、一度に是を放すべし。其□□なき事神の如し。織田・徳川の兩家、合せて、鐵炮の員數一萬三千餘挺なれば、武田家總軍の人數よりも、遙に其數多かりけり。信長の總軍は、都合廿三段に備を立堅め、柵の内を立堅む。柴田修理亮は、織田中將信忠の介添となり、丹羽五郎左衞門は、信長の介添となり、備を立つる。然る所に甲軍の方にては、武田四郎勝頼、分國の軍勢、諸方の押へに殘し置き、其勢僅一萬五千餘人の内二千人にて、武田兵庫助を大將にて、

三枝勘解由左衛門・飯尾彌四左衛門・五味與三兵衛・那和無理之助に差添へ、鳶巣山に殘され、又二千餘人を以て、高坂源五郎・小山田備中守・諸我入道一葉軒・小泉源四郎・相木市兵衛に差添へ給ひ、長篠の城を押へさせらる。さるに依つて、本多僅に一千餘人を四手に分ち、無二の合戰を挑まんと議せられけるにより、當家譜代の長臣馬場美濃守信房・內藤修理亮昌豐・山縣三郎兵衛尉昌景、詞を揃へ申しけるは、敵軍既に十三萬餘と相見え候。其上陣前に、三つの切所を構へ、三重の柵を振つて、唯籠城の體に異ならず。是れ則ち三十萬の敵に戰ふに等し。然るに味方一萬餘人を以て、合戰を挑まん事、思ひも寄らず。大敵既に襲ひ來るに及んでは、當家軍術の奧儀とする隱れ遊ぶの法を以て、是に對するとぞ承る。先づ此度に於ては、是非甲州に御馬を入れられ候べし。さあるに依つて、信長當家の手並を存ずるにより、附慕ふ事候まじ。若し御跡を慕ふに於ては、信州の內に引入れ、思ふ樣に一戰を遂げ候べしとぞ申しける。時に長坂釣閑、進み出でゝ申しけるは、大敵に後を見せらるゝ事を、屋形にも本意なく思召すと申す。其時馬場美濃守信房、諸人に讓らず、武田家は、新羅

三郎より二十代、武功を顯せし家を、織田・德川に追討にせられ、敵に後を見せ給はんよりは、唯今速に軍勢を引揚げられ然るべし。詮ずる所、當家存亡の合戰と存ずるにより、我々頻に是を御諫め奉る。若し左程迄、敵に弱氣を見せじと思召さば、先づ長篠の城を、我攻に攻落され、それを汐に御馬を入れられ然るべし。某此儀を積り候に、城中鐵炮の員數、定めて五百挺には過ぐべからず。然らば初手の合戰に五百人討死し、又二度目に、無二無三に懸つて、攻破り候はん。此時は最初程に、鐵炮中らざる物なれば、三百人も討たるべし。然る時は、手負死人一千人と積りて、多く相違はあるまじければ、此儀に定められ、然るべからんと申しけるを、勝賴の片脇より、長坂釣閑進み出でゝ申しけるは、大敵を前に置き、味方の軍勢多く討たせん事、然るべからずといふに、勝賴、此儀尤なりと御用ひ給へば、馬場美濃守も詮方なく、三度諫め奉り、御用ひなきに於ては、臣は死すと申す事あり。何れの道にも死する命、跡部・長坂は、黑面振つて、甲州へこそ〳〵と逃げ入り候へ。然らば城を拔きて掃除せしめ、本丸に屋形を入れ奉り、御一族悉く後々山に陣取らせ、總軍を以て、御前

備とし、山縣・内藤・某三頭川を越し、一手切に迫合を始め、足輕を懸け、長陣を張り候はゞ、敵は五畿内の軍勢も過半候へば、兵糧の運送に苦み、信長攻に敗軍せん事、疑あるべからず。兵法に曰、小は大に敵たるべからずともいひ、小敵の堅きは、大敵の擒ともいへり。小を以て大に勝つ事、智謀武略を以てせずんば、爭でか勝つ事を得んと、樣々に申しけれども、長坂釣閑・跡部大炊助と、兼て勝頼、仰合さるゝ旨ありければ、既に御旗無楯に、御誓言立てられ、今度の合戰變改せらるまじと、仰出されしかば、此上はとて、三人の長臣も、曾て是非をば申さず。長坂・跡部に向つて、詞に殘しければ、各斯樣に合戰を進め參らするは、必ず此度は、味方敗軍すべき事、鏡に映すが如し。其時は各達、あはれぬれ鼠のやうになつて、甲州へ逃入るべし。我々如きは、敵に總角を見する程にては、多くは生きて本國には歸るまじ。さあらば軍の手分をせんと、一先づ某を始として、一條右衛門大夫・直田源太左衛門・同舍弟兵部丞・土屋右衛門尉、此五手は、大宮前の佐久間右衛門尉・羽柴筑前守・明智十兵衛尉が手へ押懸り、一戰を挑むべし。又内藤修理亮・武田逍遙軒・原隼人佐・和田左衛門尉・五

甘利部少輔兩人、一手水根雅樂助・松本兵部兩人、一手安中左近進、此五手は、瀧川左近將監・蒲生忠三郎・丹羽勘助等に押懸り、柳田の前を働くべし。又山縣三郎兵衞は、武田左馬助・小幡新龍齋・同左衞門佐・甘利三郎四郎、小笠原掃部大夫・松岡參河守・小山田兵衞尉・跡部大炊助、各二手一手にして都合五手、是は正樂寺前大久保兄弟、松平周防守が手先へ押向ふべしとなり。扨武田四郎勝賴公御旗本前は、望月甚八郎、後は武田左衞門佐を一組にして、竹廣奥德川家の旗本に押懸るべしとの定めなり。其時勝賴、仰せられけるは、德川勢をだに切崩さば、織田勢は、何十萬騎にても、物の數ならずと宣ひ、既に大合戰に及びけり。

上州治亂記　卷之四　終

上州治亂記卷之五

長篠大合戰、高坂彈正昌信眞忠

斯くて天正三年五月廿一日黎明より、織田・德川の軍勢、都合十三萬八千餘人を、百八十手に軍勢を分け、各組合せて、廿三段にぞ備を立てたりける。天に飜る旌旗は武藏野の尾花が末に等しく、打出す鐵炮の音は、百千の雷、一度に落ち懸つて、天地是が爲に鳴動し、坤軸須臾に碎けぬべくぞ覺えける。然るに武田の軍勢、僅に一萬千餘人を四手に分け、先づ馬場美濃守手勢七百餘人を以て、閑防山の麓を押出して、大宮前佐久間右衞門尉が五千餘人を以て、柵の外へ張出し、旗本を小き塚の上に押上げ、己が吹貫の馬印を、山風に吹靡かせ、凜々然として備へたるに、馬場美濃守、七百餘人を以て二つに分け、三百五十人を以て、眞一文字に押しかゝり、山道段々の旗

を左右に進ませ、采配を取つて、唯合戰の勝敗に拘はらず、鑓を入れて突崩せば、押付を見られんより、骸を長篠の苔に埋むべしと、乘廻し〳〵、日頃一人當千と賴みし同心被官の勇名を呼んで士卒を進むれば、須臾佐久間右衞門尉、五千人の臺より下に捲り下し、先づ敵兵四十三人討捕りたり。美濃守、則ち臺に馬を乘上げ、山道に旗押立て、戰ひ勞れたる三百五十人を、塚の後に揉替へ、荒手三百五十人を以て、臺の前に備へたり。瀧川左近將監も、四千人にて、佐久間が馬手柳田に備へたるを、中央の二の手内藤修理、千五百人にて押懸り、終に瀧川一益を追崩し、柵の內に追入れ、卅四人討捕りたり。此所左右田切にて、人數の進退自由ならざれば、昌豐武略を以て、先づ軍勢を引揚ぐる。德川家は斯くあるべきと、兼て賢察まし〳〵ければ、佐久間が備に、小栗大六郎・淺井六之助、瀧川の備には、柴山天作・淺井雁兵衞・香村善七郎を以て、仰遣されければ、右兩人の備、柵の外へ張出さるゝにより、敵小勢なれども、猶更合戰は嚴しく致すべく候へば、手負死人大勢に及ばん事、家康が本意にあらず。早く柵の內へ引入れ、備を立てられ候へと、仰遣されけるに、其時佐久間右衞門怒り

て戰はずして崩るゝを、殊に甲州家に於て、見崩と稱して大に笑ふと承る。其方の黨の如く、逃入はすまじと惡口しけるにより、德川家、則ち自身御馬を出され、信長の本陣川上山へ、鞭を揚げて駈けられ、信長に仰せけるは、御家人佐久間盛政・瀧川一益、柵の外へ張出し、武田の魁將馬場・內藤と戰はんとす。多くは、敵付入りにせん事必定なり。さあるに於ては、柵の木を結ばれたる甲斐あるまじく候と仰せければ、信長、此儀尤至極せりと、同心ましし〵、則ち不破彥三郎・山岡美作守を呼び、佐久間・瀧川が備に、軍使を立てらるゝに、兩使川を打渡り、八釼の弓手の方へ打上げけるに、はや佐久間は敗軍に及んで、柵の內へ逃入りければ、軍使は其より取つて返し、信長の嚴命を述ぶること能はず。川上山へぞ馳歸りける。爰に德川家の勇臣大久保七郎右衞門・同治右衞門、六千人を引率し、柵を一町計り離れ、竹廣の前に押出し、山縣三郎兵衞尉が千五百人と打合せ、兩方一足も引かじと攻戰ふに、昌景、千五百人を鋒矢に作り、六千餘人の眞中を、後へつと突破りければ敵味方場を入違へ、參州勢は、正樂寺の方へと靡き散るを、得たり賢しと、昌景人數を二つに乘り切り、參州勢

を柵に入れじと、揃み立てけるに、山縣が破竹の勢に、大久保四度路に反り、漸くして柵の內に引退く。昌景透さず付入にせよと訇り、眞先に駈出す。山縣が勇卒廣瀨鄉左衛門・三科傳右衛門・小菅五郎兵衛・赤白緌張の指物にて、柵の內に突入るれば、大久保七郎右衛門、揚羽の蝶の指物、舍弟治右衛門、金の釣鐘の指物にて、三人と鑓を合せ、士卒を西の柵の外へ追出せば、又咬付いては突入り、追うつ卷りつ攻戰ふに、既に九度の馳合なれば、三科・小菅も、痛手を蒙り引退く。されば廣瀨鄉右衛門は、猶敵中に馳入るを、能武者七騎を突伏せ、十三騎に手を負はせ相働く。其間に山縣、又四度迄敵と突合ひしかば、以上十三度の戰に、鐵炮に中り死する者六百餘人、山縣の勢、僅八百計に討ちなされけれども、猶も虎口を少しも去らず、一時に進んで、柵を引破れと、下知しけれども、八百餘人の銳卒、一度に柵を押破り、死物狂ひに働けば、又二百餘人討たれ、疵を蒙るもの三百餘人。されども手負も、三箇所負はねば引退かず。昌景も、甲の吹返し、射向の懸袖、鐵炮にて打碎かれ、其外胸板・弦走に當り、都て鐵炮疵十七箇所。されども厚がねのためしなれば、裏かゝざりける。其時昌景が勇

山縣昌景戰死

士志村又右衛門、山縣が馬の水付に取付き、既に千五百人の軍勢、千人鐵炮に當り、殘黨五百人、二百人は痛手を蒙り、三百人は殘りて、柵の内にて切死と働き候。今は軍勢を引揚げられ、二の新手に讓り、士卒の咽をも潤させて、再び戰はるべきやと申しける。山縣、實にもと思ひけん、柵の内に馬を乘入れ、自ら敵を押へ、軍勢を引揚げて、敵兵、米の角切折敷の前立を見て、音に聞えし山縣なるぞと、鑓を揃へ懸り來るを、廣瀬郷左衛門・辻彌兵衞・志村又左衛門、敵を押へ引退くに、山縣、鞍笠に乘懸り、軍勢を左右に引取らせ、敵を白眼んで、馬にしさり口を引く所を、敵兵近く覘ひ寄つて、武具の透間を打つ。鐵炮にて、鞍の前輪より、拂手下を後へ打拔かれ、少しも堪へず、逆樣に落つるを、敵兵走り寄り、山縣が首を搔落し、提げて引退くに、破れたる柵に行懸り。少したゆらふ處を、志村又右衛門追懸け、其敵を突伏せ、山縣が印を取返す。されども山縣が備も、右往左往になつて引退くに、大久保兄弟大音を揚げ、又柵の外へ突出づる。是を見て徳川家の御旗本も、備を進めらるゝ旗色なれば、武田左馬之助、一手を別手にして、八釼の御旗本を押へるとて、早雄の甲州勢直に懸

り、戰を始むるに、小山田兵衛尉も押出し、三度迄揉合ひける。其外小幡左衛門・望月甚八・甘利三郎四郎、各一手に備を合せて、以上三度駈合ひけるに、都合竹廣に於て、十八度の合戰。敵は大久保兄弟唯兩人、六十餘人を從へ、備毎に駈行き、鐵炮の口を制し、勝負の汐を下知し、士卒の進退をなさしめければ、誠に離倫の擧動なりと、勝頼も遙に御覽じ、大に感じまし〳〵ける。されども敵は、柵の中へ引入れては息を繼ぎ、唯遠矢に甲州勢を打倒す計にて、鑓付け押込んで、敵を討取る事、一人もなかりけり。味方は敵に渡り合ひ、戰へば鑓付け、或は組んで首を取る。さるに依つて討たるゝ者は多く、敵を討つ事更になかりけり。爰に勝頼の御前備望月甚八郎も、敵を追込み、山縣が討死の場に馬を乘出し、人數を揚げんとせし處に、餘りに鐵炮嚴しく、一度に九つ迄玉來りて、甚八郎が鎧に當り、其中□□内甲を打たせて、終に討死す。又柳田前は、内藤修理・原隼人佐・安中左近・武田逍遙軒・和田・五甘・永根・松本、以上六度の戰。されども信長勢弱く、柵の外へ出でず。唯鐵炮を以て打噤むる計なり。さるに依つて內藤修理、大音に呼ばはり、上方勢の軍は、鐵炮なくんば、

合戰をする事あるべかず。惡し、柵を離れて、武田勢の鋒先を受けて見ぬかと呼ばはりけるに、瀧川一益・羽柴秀吉悚へ兼ね、七騎計にて、柵の外へ押出しけるを、內藤・原、生殘りたる軍勢千七八百人を以て、一戰に打散らし、一の柵を押破れば、瀧川・羽柴大に敗軍して、二の柵を指して逃入りたり。此瀧川が金の三つ團子の馬印、餘りに敗軍して、横に打倒しければ、甲州の軍勢、之を取らんとしけるを、漸くして口を口り、泥田を渡つて、三の柵に逃げ入りたるは、見苦しき事共なり。此時內藤・原・安中三人、馬を乘離し、自身各二の柵を引破りけるに、三人共に鐵炮に中り、枕を竝べて討死す。內藤修理が首は、德川家の朝比奈彌太郎討取りて、采配を添へて引退く。斯くて柳田前・竹廣前は、德川家の勇士、花々しく打出でて戰ふに、右の手先大宮前佐久間右衞門・河尻肥前守等は、馬場美濃守に追崩され、柵より外へ出でざるに依り、直に押懸つて、一の棚を引破り、又敵を崩すに、此時森武藏守・明智十兵衞・不破河內守・床山五兵衞等、佐久間を助けて一萬餘人、大波を立てゝ押懸り、馬場美濃守が六百餘人を左右に立て、眞先に進み、敵中に突入り、二の柵に於て、敵に當る事既

眞田昌綱戰死

に十三度なれば、皆鐵炮に當り討死し、僅に二百餘人になりにける。されども馬場は少しも騷がず、二の柵に馬を乘入れ、二百餘人を下知して、悉く柵を取拂ふに、敵兵敢て出合はず。唯鐵炮を以て打噤めけるに、二の柵に於て、討たるゝ者又百餘人。馬場が八百人の軍勢、此時に至り、唯八十人に討なされけれども、美濃守少しも虎口を緩めず。其時眞田源太左衞門・同兵部丞・土屋右衞門、馬場が備へ馬を乘懸け、軍勢を押出し、是非に引取らんと、追々に軍使を立つるにより、八十人を前後に立て、朱(あけ)になつて引退く。眞田兵部丞眞先に進んで、手勢を下知して、又二の柵を破らんとするに、明智十兵衞光秀が備より、究竟の士卒六七人、兵部丞を目懸け馳せ寄る。眞田につこと笑ひ、滋井の末葉海野小太郎幸氏が後棘眞田一德齋が二男兵部丞昌綱を討つて、各高名にせよといふ儘に、眞先に進む武者三騎、左右に突伏せ、鐵炮に中つて終に討死す。舍兄源太左衞門、二度敵を捲り付け、二の柵を破り、舍弟と同所に討死す。土屋右衞門尉も、三度敵を追崩し、池田紀伊守・蒲生忠三郎が備を、横合より突崩し、少し引下つて、一條右衞門大夫信龍に向ひ、某儀、先月信玄公御法事の

節、殉死を遂げんと欲する所に、高坂昌信に諫められ、今日迄存命、本意なく存ずる所なり。則只今討死と斷りて、三の柵際に至り敵を招き、土屋右衛門尉信近を討つて、高名にせよと、呼ばはりけれども、敵一人も來らず。其時土屋が士卒金九十助・猶井作兵衞なんどといふ者五六人、左右にて、鐵炮に打倒さる。土屋が甲の天邊にも、鐵炮五つ迄中ると雖も、敢て裏かゝず。猶其後敵中に進んで、竟に卅一歲にて討死す。一條右衞門大夫も、二度迄敵を追崩さる。此時又馬場美濃守軍勢を休め、八十人を前後に立て、三の柵際に至り、前田又左衞門・野々村三十郎等が鐵炮の備を追散らす。此時都合九度の駈合に、味方悉く討死す。然れども馬場は、未だ手疵をも蒙らず、同心被官に向つていひけるは、今朝卯の刻に打出し候時は、手勢八百餘人なりしかども、今午の刻に及んで、三時の追合に、僅三十餘人に討なさるまで、汝等此信房を見屆くる事神妙なり。山縣・內藤・眞田・土屋を始め、各討死したる由、汝等は早く引退くべし。我は御旗本を守護し、引退くべしと雖も、一人も落失せず。然る所に一條右衞門大夫、馬場と一所に馬を立てられ、諸手の大將衆、殘らず討死と見えて、

備亂れ候。此上は、恢へても詮なき事なり。御旗本も引退かれ、然るべく候はんかと申されける。其時馬場信房申しけるは、多分勝賴公も、討死なるべきかと存候故、我未だ存命、御先度を見屆け、若し御討死なくば、旗本を退き給ふを見て、某は何れにも致さんといふ。然る所穴山梅雪は、德川家に內通あるにより、終に手を出さず、閑防山へ引退く。扨又本陣々々と、一度に鳶巢山にも合戰始まり、武田兵庫助・三枝勘解由左衞門を始め各討死す。〔是辰の刻より未の刻に至り、以上四度の迫合なり。〕此時一條右衞門信龍の同心和田刑部・馬場美濃守信房に向つて、御旗本の合戰嚴しく見え候。敗卒を集められ、勝賴公の御身、恙なく退け奉らんと申しければ、信房承り、斯るおくれ口は、下知も用ひぬ物なれば、唯忠義には、一人なりとも命を繼いで、重ねての御用に立つべし。汝も早く引取られよといふ處に、御旗本に、德川家の脇備本多平八郞・榊原小平太・本多作左衞門以下突懸る。其時勝賴少しも騷ぎ給はず、眞先に進み給ふを、土屋惣藏、御馬の轡を引留め奉れば、御旗本の逞兵四百餘騎踏止つて、一足も去らず討死す。勝賴を退け奉るとて、大文字の御據旗、敵に左文字を見

馬場信房戰死

せて、一條殿も退かるゝ。馬場美濃守は、屋形に二町計引下りて、敵兵慕ふを待請け勝頼の御無事を見屆け、長篠の橋場にて取つて返し、高き處に馬を乘上げ、是は六孫王經基の嫡孫、攝津守源頼光より四代の孫、源三位入道頼政の後棘、馬場美濃守信房といふ者なり。討つて高名にせよと、尋常に呼ばはりけるが、其時敵兵二十騎計、四方より鑓付に、終に刀に手をもかけず、六十二歳にて討死す。是は昨廿日の夜長坂長閑・跡部大炊助に向つて、合戰を進め奉る各は、生きて甲州へ歸るとも、留め申す我等は、大方討死をすべしと申したる言葉故なり。偖又屋形に始終附添へ奉るは、初め鹿傳右衛門三十二歳・土屋惣藏二十歳。是は金丸筑後守が五男にて、土屋右衛門尉が弟なり。容顔美麗にして、心剛なりければ勝頼の御寵愛雙なし。然るに兄右衛門尉を心元なく思ひければ、兩度迄馬を引返しけるに、勝頼も共に轡を返されける。爰に武田左馬助信豐は、馬上歩者三四十人にて、屋形の後より退かれけるが、勝頼初鹿に宣ひけるは、左馬助が縨をさゝざるは不審なり。我信玄の御時、御先を駈けたるにより、當家重代の母衣に、四郎勝頼と名を記して差したり。今は我屋形の

眞似をするにより、左馬助に讓れり。若し其母衣捨てゝ、織田・德川の兩家に渡り、勝賴が退口に、指物を落したるなんどといはれては、末代の瑕瑾なり。身命は捨つとも、是を捨てゝ引くまじと仰せらるれば、初鹿後へ乘下り、信豐に斯くと申す。左馬助聞き給ひ、餘りに閙がしかりつるにより、串をば捨て、緥は家老の靑木尾張守に持たせ置きたりとて、尾張守が首に卷きて居たりしを、傳右衞門取つて屋形へ差上げ、斯くと申す。勝賴取らせられ、上帶に插み給ひ引返さる。此時初鹿、四五町往返する間、勝賴、馬を一所に立て給ひけるに、流石の逸物大に勞れ、一足も進まず。初鹿聲をかけて追ひかけけれども、少しも動かず。是は口惜しと宣ふ所に、笠井肥後守、いづくよりか此體を見たりけん、諸鐙を合せ馳せ來り、急ぎ馬より飛下り、某が馬に召さるべしと申す。勝賴仰せけるは、汝馬に離れたれば、討死をすべしと仰す。肥後守其時、功は恩の爲にし、命は義によつて輕し。小忰を御取立下さるべしといふて、勝賴の御馬の手綱を取つて押戴き、ゆらひと打乘り、二町計引返し、終に討死を遂げたりける。甲州家に於て、其頃の大剛の武士と譽めけるなり。此時遠州勢十

二三騎、勝頼の御後を慕ひ、逸散に乗寄る。 初鹿傳右衛門・土屋惣藏・心得たりと取つて返し、眞先に進む勇士を、傳右衛門渡し合せて、逆様に切つて落す。 惣藏も一騎切落して、二騎轡を並べて引返す。 勝頼も同じく御馬を返さる。 五月廿一日の焰天なりければ、諏訪法性の甲を、初鹿に持たせ置かれけるが、初鹿敵を討つて、後へ急に進むとて、御甲を深田の中へ取落しけるが、目前に敵を見たれば、御甲を取揚ぐるに及ばず。 猶敵中に駈入り切結ぶに、惣藏は能き敵と組んで落重り、則ち首を取る處に、小山田掃部・弟彌助、寺島甫庵三騎、靜に退きけるが、此所に退懸り、天の與へと悦び、前後より引包んで、各一騎づゝに打取り、三騎に手負はせければ、殘黨悉く逃散りける。 勝頼此體を御覽あり、に大感じ給ひ、殊に惣藏が組打の高名、御祕藏の者なりと仰せられ、扇にて扇ぎ立てられけるこそ有難けれ。 初鹿は綿嚙の外れに血を引きければ、勝頼自ら御藥を付け下されける。 然るに小山田彌助は、首を提げて、彼御甲に行懸り、則ち捧げて御前に持ち來る。 其時初鹿傳右衛門申しけるは、其御甲、某持ちて退きける處に、只今の敵、頻に咬付きしかば、勝負の邪魔なるにより、御敵

とは代へ難く、御甲を捨てゝ斯の如しといへば、勝賴を始め各、初鹿が剛なる心を感じける。扨又長篠の押への內、諸我入道一葉軒は、鞭を上げて、猿橋の彼方にて、勝賴に追付き奉り、長篠の城を卷ほぐし申すべくやと伺ふ。勝賴仰せけるは、急ぎ歸りて、人數を引揚ぐべしと宣ふ。されども諸我入道、屋形の御退口を、心元なく思ひければ、猿橋の橋山の方へ打越え給ふを見て、取つて返し、長篠に至り、軍勢を引揚ぐる。奥平九八郎、大手の軍、勝利なる事を察しければ、軍卒を從へ、城戶を開き咬留まる。

高坂昌澄戰死

高坂源五郎昌澄、是は高坂彈正嫡男なり。殿なれば取つて返し、嚴しく戰ひ、九八郎を城內に追込み、痛手三箇所蒙り、終に討死す。首は揚りて、甲州へぞ歸りける。又參河國西郡の松平主殿介、岩城の瀨を越えて、小山田備中守に附慕ふ。小山田、大返しに返し、主殿介を始め、一人も殘らず討取り、心靜に引入る。是より敵兵も慕はざれば、屋形も靜に引入り給ひける。

扨此合戰は、猥りに批判仕難き合戰なり。其謂れは、十三萬の敵、而も要害に據つて、柵を振り堀を掘りたるに、味方一萬千餘人を以て、敵箭の的になつて押懸り、

三重の柵木、二重迄押破り、卯の下刻より未の中刻に至つて五時の間、以上驅合五十八度、場を隔つる事五箇所。信長の手先は何十萬もあれ、馬場・內藤に追崩され、再び柵の外へ出でず。唯鐵炮を以て、打噤めたる計なり。德川家の御先大久保忠世・同忠佐兩人、竹廣に於て十八度の迫合、是も柵に據るとは雖も、前代未聞の働なり。其五箇所の場といふは、竹廣前一箇所、山縣勢を以て相戰ふ。柳田前一箇所、內藤勢を以て切崩す。大宮前一箇所、馬場勢を以て切崩す。又長篠押への地に一箇所、鳶巢山に一箇所、都合五箇所。武田の士大將・各敵を追崩して、敵の爲に追崩され、又馬場が如きは、八百の軍勢、八十人に打なさるゝまで、新に渡さず。內藤・山縣、猶斯の如し。されども敵兵、味方に百倍すれば、竟に戰死して、名を後代に殘しける。然るを織田家に於ては、此戰を以て、大に面目に備へしとかや。然る上は、負けても、させる恥辱に非ず。勝ちても、させる譽にあらざるをや。其上味方、此合戰に於て討勝つべき謂れ一つも〔以下缺文〕

上州治亂記卷之五 終

上州治亂記卷之六

高坂彈正昌信眞忠

爰に高坂彈正昌信は、謙信の押へとして、一萬餘人を以て、海津の城にありけるが、兼てより、斯くあるべしと思ひければ、軍勢八千餘人を從へ、小馬場迄、御迎として來り、勝頼に拜謁し奉る。屋形仰せけるは、老臣等の諫を容れず、勝利を失ふのみならず。古老の面々、各討死を遂げたる事、勝頼が武運も、是迄と思ふなんと、淚を浮べ給ひ、且つ其方嫡子源五郎討死の事、猶更難儀に思召す由仰せければ、其時高坂彈正霜臺、豁如として、少しも憂へず。是れ君御若氣の致す所なれば、唯兩人の面々にこそ、罪は候べし。一萬の味方を以て、十三萬の敵に、一日五十八度の合戰、吾朝千萬年の後に傳へて、誰か君を以て、弱將なりと申すべきといへば、勝頼、此も快然と

してましくける。斯くて後、高坂御供を飾らせ、甲州へ歸陣し給ひける。其後高坂甲府にあつて、五箇條を以て勝頼を諫め奉る。

一、駿河・遠江氏政へ被ㇾ進、北條の幕下に成らせられ、御先を被ㇾ成、勝頼公は甲斐・信濃・上野三箇國御支配と被ㇾ仰入ㇾ御尤の事。

一、其上にて、氏康の御娘子を御迎ひ取り、氏政の御妹婿に御成、御尤の事。

一、木曾を上野小幡へ御越、小畑上總守を、信州木曾へ御越、御尤の事。

一、唯今迄の足輕大將を、人數持に被ㇾ成、馬場・内藤・山縣が子供を始め、皆同心被官を被ㇾ召上ㇾ奥近習に被ㇾ成、小身にて可ㇾ召仕ㇾ候。明日某果て候共、忰を小身に被ㇾ成同心被官老功の者に御預、御尤に存候事。

一、典厩・穴山に、腹を切らせらるべく候。穴山を典厩に被ㇾ仰付ㇾ、典厩をば我等に可ㇾ被ㇾ仰付ㇾ事。

右五箇條、土屋惣藏を以て申しけれども、碇々御合點のなき事、是非もなき事共なり。

甲陽府館妖孽幷高坂彈正死去

明くれば天正六戊寅年正月元日の賀儀、甲州の御館に於て、四郎勝頼是を受け給ひ、長生の祝言をぞ執行はれける。然るに其頃、怪氣なる事共多かりしに、皆是御屋形滅亡の物怪なりとさゝやきけり。扨甲府の御館にある女童は、朝暮魂をそゞろにして、胸を冷さずといふ事なし。中にも正月十五日、勝頼の帳臺の右の方に當つて、御庭の隅に、大きなる杉の木の茂りありけるが、其本にて、馬の高くいばふ聲二三度したりける。勝頼、不思議に思召し御覽あるに、馬の生首二つ、血に染み、喰合ひてぞ居たりける。之に依つて、御調度懸にありける弓を取り給ひ、山鳥の征矢をつがひ給ふ處に、土屋惣藏、廣縁に立出で、是を見付け、君は如何遊ばされ候や。若し御怪我ありては、惡かりなん。先づ御弓を納め給ふべしと制しけるに、其怪消えて失せたりけるこそ怪しけれ。勝頼は、射留めぬ事を無念に思ひ給ふ所に、高坂彈正昌信、膈を煩ひけるに、病體、少しも信玄の樣體に替らず、次第に事甲斐なくなりければ、勝頼を

高坂昌信病死

上杉謙信逝去

始め、一門譜代の面々集り給ひ、醫術を盡すと雖も、終に死したりけるこそ、誠に武田家の不祥なれ。爰に上杉入道謙信は、信長へ、使者を以て申されける旨あるにより、當正月より、越後・佐渡・飛驒・越中・能登・加賀・東上野八箇國の分國に陣觸して、三月十五日、春日山を進發あり。越前に於て、信長を打崩し、天下を掌握せんと宣ひ、用意甚だ嚴重なれば、上杉幕下の諸士、勇み進まずといふ事なし。斯くて謙信は、兼て北條氏政の舍弟を養子とせられ、上杉三郎景虎と名附く。又甥の喜平治をも養ひて、景勝とぞ名乘らせける。然るに謙信進發の用意調ひ、首途あらんとするに、三月九日、雪隱より難病に犯され、醫療術盡きて、同十三日、四十九歲に逝去ある。然るに其翌日、景勝本丸に楯籠り、謙信の御影を懸け、直江山城守已上を召集め、景虎退治の評議せられける。直江山城守の計らひとして、甲州武田勝賴に、北信州を與へ、後詰を賴みければ、勝賴、長篠以來軍を出さゞれば、是を快しとして、景勝味方に致しけるにより、景虎終に切腹す。依つて勝賴、甲州に歸陣遊ばされける。然れども高坂彈正死去の事、織田家へも聞え、既に甲州へ馬を入れんとの沙汰とりぐ

なり。爰に情なき事は、高坂相果てゝの後、長坂・跡部兩人、恣に國政を執行ひけるにより、賢良明哲の義士、甲州を去つて、他國へ赴きける事、甲家の危き事、旦夕にありと思ひける故、進む義士は少く、退く人々多かりける。是唯勝頼の豪奢にして、賢臣の諫を容れず。依つて佞人恣に權を振舞ひ、代々の武田家、滅亡近きにある事、誠に淺ましかりし事共なり。

織田・德川・北條國々の諸侯甲州へ進發

織田德川北條等勝賴を攻む

斯くて天正十壬午二月十二日、織田信長の嚴命によつて、木曾口は織田中將信忠公、其勢合せて七萬餘人を從へ、甲州へ亂れ入る。又駿河口は德川家、其勢三萬二千餘人、上州口は北條氏政四萬五千人。飛驒口は金森五郎八三千人。伊奈口は織田信長、其勢十萬二千人、都合軍勢二十六萬二千餘人とぞ聞えける。織田中將信忠公は、同十四日に、岩村に着陣ありけるに、御父信長公の先陣、各伊奈口へ向ふべしとの差圖して、河尻肥前守・瀧川左近將監・毛利河內守・水野監物・同惣兵衞尉差向けらるゝ

に、松尾の城主小笠原掃部大夫逆心して、はや手合せをぞしたりける。又信忠木曾口の先陣は、織田源五郞・同赤千代丸・津田孫十郞・稻葉彥六郞・塚本小大膳・水野藤治郞・丹羽勘助・簗田彥治郞・梶原平治、其勢二萬餘人、鳥居峠を跳越え、桔梗原に陣を取る。斯く四方八方より、大敵雲の如くに起り、鷹の如くに擊つて、襲ひ來る由聞えければ、勝賴、諏訪に御馬を出され、所々の要害に、加勢をぞ籠められける。先づ信州伊奈の高遠の城には、御舍弟仁科薩摩守晴淸・小山田備中守・羽切九郞次郞・渡邊合太夫・小菅五郞兵衞を差向けらる。深志の城へは、馬場民部少輔・多田治部右衞門を差越さるゝ。駿州鞠子には、諸我兵部・同大輔・朝比奈駿河守・屋代越中守・關甚五郞。同田中の城には、葦田下野守をぞ遣されける。然りと雖も、未だ御勢二萬餘人相殘し、諏訪に於て、軍議區々なりと雖も、衆議渾殺として一決せず。武田逍遙軒は、信長の請手として、伊奈郡にましましけるが、諏訪にましますす勝賴に、案内もなく軍勢を具して、早々甲府に引退かる。武田左馬之助信豐も、五度の會評に虛病を構へ、兩度ならでは出合はれず。勝賴も、今は忙然とし給ひける體なりければ、足輕大將にて

候ひける城の織部正、此度の合戰の體を申上ぐる。先づ二萬人の軍勢を五千人我等と横田甚五郎に預けられ候はゞ、一番合戰を仕るべし。又五千人は、小山田八左衞門と初鹿傳右衞門に預け下され、二番合戰と定めらるべし。殘る一萬人は、小山田兵衞尉・眞田安房守・小幡上總助に支配させられ、御旗本と一つになつて、九死一生の戰を挑まれ然るべし。如何に信長なればとて、此度に於ては、懸り來る合戰に、柵の木をも結ひ申すまじ。唯平場の合戰ならば、味方一人に、上方勢十人當にても、先づ一應は切崩し申さん事、尤も安かるべく候。然れども、日本國を相手に仕給ふ御事なれば、終には御滅亡疑あるまじ。唯御最期の御合戰を見事になされ、速に御生害あれかしとぞ申しける。されども長坂釣閑、是を甘んぜず。猥りに若者共の申す事を御許容あるは、御運の末なりと申す。阿部加賀守がいはく、先づ河尻肥前守・瀧川左近將監が手に、夜討仕り然るべしと申しけれども、是も長坂釣閑妨げければ、其通にて止みにける。爰に又穴山左衞門大夫梅雪は、九年以前より、德川家に内應せられければ、甲府より、領地下山に立退き、逆心の色を立てられけるにより、是

を見て、各士大將、我先にと身を退き、己れ〳〵が居城にぞ引返りける。武田道遙軒・一傳右衞門大夫・武田上野助・其子左衞門大夫・武田左馬介・子息治郎・御舍弟高山三郎を始めとして、恨を書狀にて斷り、各心を變せられければ、勝頼の御勢、二萬餘人ありけるが、今は僅に、御旗本の勢は三千人には過ぎざりける。然れども去年七月より、籠城の爲に築きし新府なれば、先づ彼所へ引取らんと仰せられ、諏訪を御引拂はれ、新府中に坪み給へども、普請漸く半なれば、中々軍勢の栖籠るべき體にあらざるにより、爰に於て、又評議は區なる所に、武田太郎信勝、生年十六歴にてましましけるが、諸人に讓らず。勝頼に向つて仰せけるは、去年の秋より、宍山といふ腰拔が巧言を以て、信玄公を誹り、甲州の間に城郭を構へられざる事、法性院殿の御思慮薄き樣に申す。左馬介信豐を始め、其外一門の人非人等、長坂釣閑・跡部大炊助と合體し、當地に新府を築き、古甲府を破却し、武田十九代の間、數百年以來立茂り、成長せし古松老柏數十丈なるを、悉く伐倒し、古府中、今は狐狼の栖となりて、誠に淺ましき次第なり。是れ則ち諏訪大明神の神慮にも背き給ひ、御旗無楯の冥慮にも盡き給

ひぬとぞ覺ゆ。信玄公は、寛仁大度にして、能く萬民を撫育せられ、人を以て城郭とし給ふにより、甲州の内に要害なし。是れ信玄公は、天下の英雄豪家、悉く御威光に歸服し、普く天道の免す名君なれば、是非を論ずるに及ばず。然るに信玄公を誹り奉るこそ、言語道斷なれ。されば籠城の爲に築かれし新府中、普請半なりとて、爰を去つて、何國にて合戰を遂げらるべき。たとへ此上、如何なる名城要害に據ればとて、斯くまで人に捨てられ給ふ。御運開き給ふ期もあるべからずと、唯速に御旗無御楯を燒捨てられ、御生害あらんこそ、然るべく覺え候。併某儀は、織田信長の爲にも、甥城之助の爲にも、又甥にて候へば、要つて御諫は申されず候と、理を盡してこそ宣ひけれ。誠や信勝、漸く志學の御年にて、斯る群難の期に至り、金言口口を盡し、御父勝頼を諫めらるゝ事、流石新羅源氏の正統氏姓の器に、備はり給ふ氣質なりと、眞田安房守を始め、各感涙をぞ流しける。勝頼も、道理に屈伏あり、更に物を宣はざりける所に、眞田安房守昌幸申しけるは、信勝公の宣ふ處、道理の至極にては候へども、御生害の儀は、何時も安かるべく候。何卒して、今一度御運を開かれ、信玄公

の御志をも繼がせらるゝ樣にこそ、ありたく存候へ。さ候はゞ、上州我妻に御籠城、然るべく覺え候と申しける。小山田兵衛尉は、郡内岩殿に籠らせられ候へと申す。さるに依つて、未だ何方に籠城あるべきも知れず。密に長坂釣閑に、此事を尋ねらるゝに、眞田は一德齋より三代の臣、小山田は、當家譜代の大臣、數十代の守尉にて候へば、郡内岩殿こそ、然るべく候はんと申すにより、依之小山田にも御暇を下され、用意の爲に、郡内へぞ歸されける。眞田事、隨分と領地を堅固に守るべしと仰せられ、上田にぞ赴きける。斯くて三月朔日、新府より、郡内岩殿に赴き給ふべしとて、御供の人々、用意仕る所に、小山田彥三郎、何國ともなく立退き候と言上す。其外御旗本の勇士共六人迄、缺落仕候と申上ぐる。其時勝賴にも、少しも御仰天なく、阿部加賀守・土屋惣藏を召され、年來先方の者共人質、尤其內、忠不忠の不同混雜せしを、速に選分けらるべしと仰下さるゝ。兩人畏りて、一千餘人の人質、忠不忠の品を糺明したりけるに、尤も忠貞にして變ぜざる者、或は義死を致せし者の人質、漸々百餘人ならではなかりける。殘りて九百餘人の內、先づ今度謀逆の張本木曾左馬頭義

昌が母と妹を引出し、新甲府の大手勝山口に逆張付にぞ懸けられける。其外は、悉く人質曲輪に追込め、燒草を積みて、一度に火をぞかけられける。其中にも、一門譜代の諸將等の妻子、尤も止事なき人々も多かりければ、誠に淺ましき事にぞ思はれける。扨又忠義の者の妻子百餘人を召出され、一人に付、黄金百兩宛下され、御目見を仰付けられ、皆々何方へなりとも立忍び、身を過すべし、時節到來、是非に及ばずと仰せられけるに、各淚を袖にうけて、瀾然として、御前を去りあへざりけるに、勝賴、少しも憂へ給へる色なく、早く何國にも去るべしと、荒らかにぞ仰せける。此日旣に黄金一萬兩、忠賞の爲め行はれけるこそ由々しけれ。斯くて御府を御立ち遊ばされ、古甲府に立寄らせ給ふに、路次に於て、御中間衆起り、天正元年以來、長坂釣閑・跡部大炊等雅意に任せ、我々が器量を押へける事の無念なれと、唯今突殺さんと犇きけるを、屋形奇怪なりと御怒りあるに、忽ちに靜まりける。然るに古府中の御館は、悉く燒拂はれければ、一條右衞門大夫宅にぞ立入り給ひける。

高遠城落城、仁科薩摩守晴清生害

斯くて武田勝頼公御分國の城々、先づ信州松尾の城は小笠原掃部大夫、一番に織田信忠の先手に開き渡して、降人となる。飯田の城に籠め置きし保科彈正少弼も、はや降を乞ひて、城を開渡す。深志の城主馬場民部少輔も城を去つて、甲府に引返す。大島の城に置かれし日向玄藤齋は出奔す。其外數十箇所の要害は攻落され、或は逃去り、降人となり、相殘る要害も、怺へ難く見えける處、信州伊奈高遠の城は、勝頼の御舍弟仁科薩摩守晴信、楯籠り給ひける。相從ふ人々には、小山田備中守・渡邊金太夫・羽桐九郎次郎・小菅五郎兵衛・春日河內守・今福又右衛門・畑野源左衛門・諏訪勝左衛門・飯島民部・同小太郎・今福筑前守・神林十兵衛以下、都合軍勢三千餘人ぞ楯籠りける。然るに二月下旬の頃に及んで、未だ城を開けず。織田中將信忠、飯田に着陣あり、此事を聞き給ひ、我れ旗本を以て攻干すべしと、其勢一萬餘人にて、搦手より向はれければ、翌日小笠原掃部大輔を案內者とし、森武藏守・團平八郎・河尻肥前守・

毛利河内守、其勢二萬餘人にて、大手に馳向ふ。城將仁科晴淸は、持たば忍ぶべき城なりけれども、迚も遁れぬ所なりと思はれければ、花々しく討死し、譽を後代に殘すべし。誠に一門の者共、身命を惜み義を捨てゝ、敵の馬前に降り、剰へ皆誅戮せらるべきこそ淺ましけれとて、仁科重代の桐の葉といふ小實の鎧に、龍頭の甲を着し給ひ、信濃藤四郎と號せられし三尺七寸の太刀を帶び給ひ、一千四百餘人の逞兵を從へられ、三月一日の辰の刻に突出で、縱橫に駈亂し戰ひければ、小山田備中守は、大手より切出で、辰の刻より午の刻迄戰ひ、城中に引入りけるに、敵を請取る事二百七十餘級、味方百七人討たれたり。是より日々夜々、鐵炮の上手を以て、垣の如くなる敵を、矢坪を指して打倒しけるにより、あだ矢一筋もなく、信忠の旗本究竟の勇士、數を盡して討たれければ、河尻肥前守・織田中將信忠公の御前に參り、兎角甲府をだに攻干し候はゞ、其外の枝城は、攻めざるに落去仕るべし。未だ勝頼、安穩にましますにより、敵の鋒先、當り難く候。當城は押へを差置かれ、一日も早く、勝頼を御退治あれかしと申しければ、信忠仰せけるは、武田家の鋒先、奮訊として强勇なる

事、兼て知る所なり。高遠の城だに、斯くの如くなれば、勝頼の根城は、さこそと思ひ知られたり。最期の合戰、一入武勇を振ふべし。所詮大事の敵なれば、信長公の進發を待つて誅戮すべし。唯此城をだに攻落さば、尤も甲府も攻め易かるべし。謀を以て落すべしとて、矢文を城中に射させられける。其文に曰、

既二月廿八日、勝頼甲府の舊館に於て生害あり。一門の面々、或は殉死、或は降人となりて、甲信の間既に平均す。然るに仁科殿一人、堅固に城に怺へらるゝの條、尤も殊勝なり。早く城を開かれ、降人となり給ふに於ては、信忠御命を申請ひ、本領安堵爲ㇾ致候。誠に恐々。

三月二日　　織田中將より

仁科晴清殿へ

と讀み終りければ、仁科殿是を見給ひ、信忠己が心に較べて、我を謀るこそ安からね。勝頼未だ生害あるべからず。斯く謀りて我を降らしめ、縲紲の恥を以て、信長に面縛させ、首を切るべしとや。縱ひ不義にして、千年の壽を保ち、榮花を子孫に傳

ふるとも、我れ何ぞ浮雲の富を旨とせん。さあらば軍兵共に、最期の合戰させ、涼しく腹切らんと、天正十年三月二日、搦手の多門に上り給ひ、我は時日の放戰に、深手を負ひたれば、步行自由ならず。各最期の軍して、我に見せよと宣へば、畏り候とて、追手搦手一度に門を押開き、先づ搦手より小幡周防守・同五郎左衞門・春日河內守・畑野源左衞門・今福又右衞門、千七百餘人を從へ、大波を立て伐つて出で、信忠の備七段迄切崩し、以上四度突出で、首を得る事四百卅七級なり。追手には小山田備中守・朸桐九郞・小菅五郞兵衞・今福筑前守・諏訪勝左衞門、六度まで敵を伐崩し、首數二百八十餘級討捕りける。爰に諏訪勝左衞門が女房、長刀を以て敵に馳合せ、七人迄薙伏せ、終に討死をしたりけり。六度目の馳合に、小山田備中守も討たれければ、其外過半討死し、或は疵を蒙り、竟に城門を打破つて、敵はや城中に込入りけるに、信忠の小姓山口小口・佐々淸藏、馬廻には梶原治右衞門・桑屋吉藏、森武藏守が臣には、賀部兵庫等、一番に乘入りける。是に續いて、戶田半左衞門尉も、搦手の門際に乘付けて、指物を木立に引懸け、少しためらひける所、後陣の大勢、一度にどつと乘入り

仁科晴清自盡

たり。時に小菅五郎兵衞は、仁科晴清の御前に參り、敵既に城中込入り候。今は御腹を召され候べし。某御介錯を致し、御供を仕らんと存候へども、勝賴公の御先途を見屆け度候條、御暇を下さるべし。仰せられたき事共、某傳說仕らんとぞ申しける。晴清其時、矢倉の矢狹間の板を押開き給ひ、寄手に向ひ宣ひけるは、此度我れ心を變じ、信忠が軍門に降らば、一命を續いで、所領を案堵さすべきとの矢檄、苟くも我れ清和源氏の流を出で、法性院信玄が五男なり。何ぞ不義にして一命を續ぎ、媚を匹夫にとつて、信忠が馬前に降らん。早く勝賴父子幷に我が首を捕つて、信長に見すべし。汝が父弱冠より、不義暴惡を以て親族を誅し、或は延曆寺を燒き、數千の衆徒を殺し、將軍家を蔑如(ないがしろ)にし、恣に逆意を擧動ひ、一旦攝然として、武威を振ふと雖も、終には積惡其身に及んで、忽ち亡び失せん事、踵を廻らすべからず。今武田五郎仁科薩摩守、生年卅四歲にて生害するぞ。汝等が武運立所に盡きて、腹切らんずる時の手本にせよといひも敢ず、桐の葉の上帶切つて落し押肌脫ぎて、刀を弓手の脇に突立て、馬手の細腰迄引廻し、返す刀にて、心元に押立て、十文字に搔切り給ひ、

高遠の城陷る

矢倉の狹間の板、押立て給ふと等しく、小菅、御首を打落し、則ち火をぞ懸けたりける。斯りければ、本城二の曲輪所々に火を放ち、一時の火焔とぞなりにける。信忠則ち城中を點検あり、竟に三月二日未の刻に及んで、高遠の城落城あり。仕置等悉く終り、是より直に上の諏訪に至りて、本陣をぞ居ゑられける。

上州治亂記卷之六終

上州治亂記巻之七

小山田兵衞尉逆心附信長進發

斯くて天正十年三月三日の朝、一條右衞門大夫屋敷に於て、仁科晴清・小山田備中守已下討死して、城落去せし由聞えしかば、勝頼公、土屋惣藏・安部加賀守に向つて仰せけるは、返す〲も殘多きは、正月の初めに、信長が長臣明智日向守光秀が方より使を越し、信長を殺し申すべき條、其時節は、早々手合して、都へ旗を進むべし。家康若し上洛を妨ぐるか、又明智を討たんとせば、前後より引包んで誅すべし。柴田勝家・羽柴秀吉、尤も當家の梟將なりと雖も、勝頼が武威に恐れたれば、強ちに敵するに及ぶべからず。其上にも羽柴秀吉は、中國の毛利を賴み、是に押へさせ、柴田勝家と上杉景勝に任せて、家康を卽時に攻潰さんと、藤田傳五郎といふ家人を以て、種々に申

したりしを、長坂・跡部、曾て此旨を請けず、謀なりというて、使者に取合はざるにより、一條右衞門大夫が被官に便り、藤田、數日逗留して、是を申すと雖も、終に我れ用ひず。是皆運の末にて、斯の如くなる事、千悔するに足らず。頼み思ひし高遠、落城する上は、一刻も早く郡內へ立越え、岩殿に栖籠り、敵を待請け、切死をすべしと仰せられ、三月三日、勝沼へと志し、古府中を打立ち給ふに、勝賴御父子の御供、七百人には過ぎざりける。旣に甲府一條小路を打過ぎ給ふに、駿河先方の士下方彥作、勝賴へ向つて申しけるは、先主今川氏眞は、信玄の御旗先を見て、山家の奥に逃げ入らる。夫さへ武田家にては、大に嘲りたると申す。今勝賴公は、信長の旗先少しも見えざるに、郡內を指して落ち給ふ。今川氏眞の敗軍には十雙倍、勝賴公は見苦しく候と申しけるに、勝賴大に御怒りあつて、惡き奴原が雜言かな、打殺せと仰せられれば、御中間衆取圍んで、竟に擲殺す。山縣の勇卒廣瀨鄕左衞門・三科肥前守・小菅五郎兵衞・辻彌兵衞、御供申しけるが、彼者共は、聞ゆる一人當千の者なれば、信勝の御供仕るべしと仰下さる。斯る時節に及んで、御身の事を思召さず、信勝を痛はり給

ふ御心中、哀れに覺えける。爰に小幡豐後守は、去年十月より、脹滿を煩ひ居たりけるが、乘物に助けられて、今生の御暇乞とて、甲府の善光寺に出迎ひ、御目見え仕るに、勝賴御泪を流し給ひ、運命盡きて、斯る群難の期に至り、汝如き者も、今病中にて是非に及ばずと仰せらるゝに、豐後守も、途方に暮れたる體にて、二三町御供申し、御馬に取附き申しけるに、勝沼筋は、鄕人の逆心も心元なく候へば、今宵は梶尾に入らせられ、然るべしと申すにより、梶尾に御馬を向けられける。豐後守も、是より御暇を給はり、黑駒へ赴きける。いよ〳〵小山田兵衞尉は、岩殿へ入り奉らんと申すにより、是より鶴瀨へ御馬を向けられ、小松の鄕に、七日御逗留あるに、三月五日の朝、秋山攝津守、書置をして立退く。其翌六日、高坂源五郞、其勢四十三騎・雜兵二百餘人にて參りけるに、大勢にて參るのみならず、城を捨てゝ來るは、別心を存すべきも知れずとて、御目見も叶はざれば、種々に申し、御供仕らんと、誓紙を捧げけれども、御免なければ、信州河中島へぞ引返しける。其翌七日、山縣源四郞・馬場民部少輔・屋代越中守三人、百騎計・雜兵七百餘人にて參りけれども、高坂同前に、是等も

御免なきにより、皆己々が居城へ引返しける。然るに梶尾寺は、源氏調伏の所なるにより、御遠慮に思召す處、山伏共、悉く御敵となりければ、早く郡内岩殿へ入り給はんとある處に、小山田兵衞信茂、鶴瀨より郡內の間、逆茂木を引き城戶を構へ候。是れ敵を防ぐべき爲の計ひなりと思ひけるに、さはなくして、小山田が被官、密に鶴瀨に參り申しけるは、君岩殿に入り給はゞ、卽時に衆口を持ち申すべき爲なりと申す。勝賴仰せけるは、小山田は、富家隨一の譜代といひ、殊に文道を嗜み、五常を專にし、人にも道を敎訓しける者なれば、猶更人面獸心の奴原かな。逆心を企つるに、我に憤ありて道を背かば、無道なりと雖も、其謂れもあるべし。昨日迄は無二の心底と稱し、今斯る砌に及んで、言語道斷の次第、是非に及ばず。我が最期も、唯風燭の、夕を待つに異ならず。此憤念を首に鏤めても忘れず、逆心を企てし小山田を始め、一族の逆徒悉く、扨は今度甲府を馬の蹄にかけし信長父子が餘類、一人も殘さず年をあはさゞるに、各一命を取殺すべしと宣ひ、御旗無楯に向つて、御祈誓あり。憫然として座し給ひし御形勢、身の毛もよだつ計なり。然る所に同八日の朝、小山田八

左衞門、御最期の御供と申して、素肌にて參りけるに、勝頼大に悅び給ひ、初鹿傳右衞門は參らずやと仰せけるに、彼者は、川浦惠林寺の奧山へ妻子を忍ばせ、其身は御供と存切つて候ひしが、鄕人蜂起して、鶴瀨に參るに於ては、女房子供を、人質に取つて殺すべし申すにより、遲參仕るといふ。 勝頼公、則ち八左衞門に、御召替の鎧を下されければ、御次に於て是を着す。 然るに同じき九日の夜、武田左衞門佐・小山田八左衞門兩人、密に兵衞尉が人質を盜み出し、夜中に落去る。 斯くて小山田信茂、頃日構へし虎口々々より、鐵炮を打出しけるに、唯今迄七百餘人の御勢悉く落ちて、僅四十三人にぞなりにける。 此時長坂釣閑・跡部大炊介も、逃去り候と申す。 勝頼聞召し、雜人はさもあらん、跡部・長坂に於ては、外すまじき奴原なるに、夫れ追懸けて討つて捨てよと仰せけるに、畏り候とて、土屋惣藏・安西平左衞門、弓に矢を取添へて、後を慕うて追つかけゝる。 跡部運の極めにやありけん、月毛の馬に乘りて、挑燈を鹽手に引付け、落行きけるにより、惣藏歩行立にて追付き、夫とは淸らかに知らねども、何者にもせよ、落人には紛れなしと、引固めて兵と放つに、少しも矢坪を違へず、跡

部が火放羽織の馬乘の外れより、唯中を射徹し、根元三寸計、前へつと貫きたりければ、則ち逆樣にぞ落ちたりける。長坂をば、射止めざるこそ無念なれと、惣藏御前へ參り、斯くと申したりければ、勝賴御感あり、大炊介が首を、渠が人質に見せられ、則ち妻子共に首を刎ねらるゝこそ理なれ。斯くて三月十日の朝、鶴瀨の向、田野へ坪み給ふに、下﨟一人もなく落失せたれば、勝賴公の御馬を引出し、鞍置く者もなうして、士大將にてありける土屋惣藏・秋山紀伊守兩人にて、鞍を置きて引出す。龜甲の御持鑓を、安部加賀守と溫井常陸守兩人にて是を持つ。爰に武田の譜代小宮山內膳正父は、遠州二俣の城にて、討死しけるが、內膳大剛の者にて、常に出頭人の長坂・跡部秋山攝津守と不和なる上に、小山田彥三郞と、口論を仕りけるに、小山田は、出頭と申よければ何事なく、內膳計改易ありける。然るに三月十日の朝、內膳、田野の御本陣に參り、案內を乞ふに、下﨟一人もなければ、土屋惣藏立出づるに、是は如何にと、雙方泪に咽び、頓て一間なる所の端近に、勝賴も御着し、信勝もましくけるに、其時小宮山內膳、高らかに申しけるは、三代相傳の御主の、御目鏡を當て申すべくや。

迚も御用に立つまじと思召し、御勘氣を蒙りし我等、御最期の御供致したらば、是れ則ち御目曲尺を逃したるに似たり。武士の道を立てんとすれば、的前の理に背く、理を立てんとすれば義に背きて、臆病の汚名、後代に殘さん。よし〳〵御目曲尺は逃すとも、不義の名は穢れまじ。御供仕候べし。御勘氣御免の儀を、土屋殿計らひ給へといふ。土屋・秋山、各感涙を流し、則ち御所を申直す。爰に又小宮山が弟又七郞は、御生害の御供を存切つて居たりしを、内膳、土屋に斷り、又七郞は御生害の御供と申來にぞ、汝、君の御供と極め、是迄參る事神妙なり。然りと雖も老母と某が女房を、汝引退けて呉れ候へといふ。又七郞聞きて、思ひも寄らず、我は主君の御最期を見屆け奉らんとてこそ、是迄參りたれ。老母の事も、和殿の女房の事も、存せずと申放す。其時内膳、汝の志、左程に存ずるからは、冥途の御先を仕りたると同事なり。是より母を連れて立退かば、君への忠義、母への孝行、兄への見屆なり。是非に賴むといへども、少しも聞入れず。其時土屋申しけるは、我が老母・女房を、被官の臉又市郞を添へて立退かせ候。某が老母をも、偏に賴み存ずる間、是非々々

返られ候へと諫めけれども、用ひざれば、勝頼公御直に、色々仰せられけるにより、是非に及ばずして、又七郎立退きける。小宮山內膳、土屋惣藏に向ひ、此上は心に懸る事なしと悅び、扨某が口論の相手小山田彥三郎と和談致さんといへば、土屋聞きて、彥三郎は、十日以前、諏訪にて立退き候といふ。長坂釣閑はと問へば、昨日鶴瀨にて逃げ候。跡部大炊介はと問へば、是も昨夜、釣閑と一度に逃げ候を、上意にて某追ひかけ、晴夜に、月毛の馬に乘り候により、矢庭に射殺し候といふに、內膳肝を消し、秋山攝津守はといへば、五日以前、小松鄕にて逃げ候と答ふ。內膳泪を流し、誠に御運の末かな日頃御前よかりし程の奴原、一人として腰の拔けざるはなしと、土屋に向ひ、是非もなき世の有樣なり（脫字アルカ）。斯くて織田信長は、同月五日に安土の城を進發あり、相從ふ者共には、織田七兵衛尉・矢部谷七郎・菅屋九右衛門・長谷川藤五郎・福富平左衛門・堀久太郎・長岡與一郎・同頓五郎・蒲生忠三郎・蜂屋兵庫頭・池田紀伊守・舍弟三左衛門・明智日向守・筒井順慶・氏家源六郎・竹中久作・武藤助十郞・原彥次郎・不破彥三郎・高田右近・阿閉淡路守・中川瀨兵衛以下、都合其勢十萬二千餘騎とぞ聞えし。

同月六日、濃州六渡にて、仁科晴淸の首を對面あり。岐阜の長良河原に懸け置くべしと宣ひ、其日は岐阜に滯留なり。然るに信忠は、七日に、上の諏訪より、古甲府の内に打入ると、一條右衞門大夫の館に本陣を居ゑられ、今度武田家を背き、降人となりたる甲陽譜代の士大將一門の者共を方便らせ、悉く首を刎ねらるゝ事、誠無慙なり。斯くて織田信長は、十日に、岩村に陣を寄せらるれば、信忠は、其儘甲府に滯陣せらる。

勝賴父子生害

斯くて武田勝賴公、田野天目山に御座す由、信忠の本陣へ告げ來る。信忠則ち甲州先方の鬮甚五兵衞・辻彌兵衞を案内者とせられ、河尻肥前守・瀧川左近將監・毛利河内守・水野監物・同惣兵衞・津田孫十郎・稻葉彥六郎・丹羽勘介・織田源五郎・同赤千代丸・塚本小大膳・簗田彥次郎・梶原平次以下三萬餘人、田野鄕へぞ向けられける。勝賴此由を聞召し、よき要害によつて大軍を待請け、一度に突出で、勝賴最期の合戰目驚せり

勝頼天目山に據る

と、後代に傳へん。此邊に、少勢にて楯籠るべき要害の地はなきかと仰せらるゝに、御傍に候温井常陸守が申しけるは、常に馬場美濃守存生の時申したる事を、仄に承り候は、此奥山天目山こそ、能き地利にて候へ。麓に流あつて、一騎打の處なれば、大軍却て邪魔になる處と承及ぶと申すに、勝頼仰せけるは、新府中にて、兎も角もならんと思惟せしに、小山田めに計られ、斯る難儀に及ぶ。今必死の身となる勝頼こそ、織田が大軍に怖れて、奥山に逃入りたりといはれんは、勝頼が名折なりと仰せられけるを、色々に進め參らせ、天目山に御座移さす。御前の御供仕りし女房廿三人に、御暇を下され、新館御娘人は、石黑八兵衞・御同明何阿彌を差添へられ、御先に立てられてぞ急ぎ給ふ。此時勝頼四十三人の內、出家衆二人、是非に立退かれ候へと、仰せられけれども、一向落ち給はず。勝頼公、太郎信勝に向ひ仰せけるは、御邊は、旗無楯を推向けて、何國迄も遁れ給ふべし。山續きに、武藏國へ出で候て、出羽・奥州迄も落ちらるべし。上杉景勝も旗下といひ、勝頼が厚恩を請けし者にて、然も伯母婿なれば、賴むといふとも、安かるべしと仰せられけるに、信勝宣ふは、勝頼公は、

北條氏政の御妹婿にて候へば、是より小田原へ御入あらんに、日頃不和に御座すとて、爭でか疎意を存ぜられん。疾々御忍び候べしと仰せければ、勝頼の仰には、村上義清、信玄に國を追出され、越後に在つて終に運を開かず。上杉憲政も、謙信を賴んで朽果てたり。駿州の今川氏眞、小田原を賴んで未だ蟄居す。皆是れ先車の戒なり。運命既に究りて、敵に押詰めらるゝ程にては、切死をこそせめと、常に我が近臣にも語りし。今更我れ何ぞ其言葉を盜まん。死を輕んずるも節あり。此時既に勝頼が、死すべき圖に當れり。唯今に至りて附從ふ者共は、皆勝頼が命に替らんと思ふ輩なれば、汝等を前後に立て涼しく切死をせんには如かじと、少しも變へ給へる氣色なく、郭然として御座せば、信勝仰せけるは、御供の者共に、各御盃を下され然るべしと宣ふ。屋形聞召し、信勝こそ、法性院殿の御家督なれば、盃を賜はり然るべしとあり、互に御辭讓ある時に、秋山三十郎、御盃を持出で、屋形の御前に差置て、勝頼取上げられて、信勝に差し給ふ。時に信勝、謹んで頂戴あり、又屋形へ進上ある。其後勝頼公、何れもに御盃を下さるゝ。其人々には、阿部加賀守貞村・土屋惣

天目山合戰

藏・穐山源藏親久・金九郎助六郎惣藏舍弟・秋山紀伊守・同子息十三郎・小原丹後守・子息忠五郎・秋山民部少輔・子息彌十郎・溫井常陸助・小宮山內膳・小原下總守・同宗十郎・小山田彌助・多田新藏・同角助・岩下右近・同左膳・寺島藤藏・甘利釆女・友野刑部少輔・同又市・甘利彥五郎・曾根內膳・小山田大學・安西平左衞門・雨宮織部・同善次郎・小瓦五郎助・同十兵衞・安田十左衞門・同彌三郎・川村五兵衞・淺波右近・榎並新藏・山下杢助・皆井小助・岩井源藏・齋藤作藏・外に大龍寺の麟岳和尙、是は長禪寺春國の弟子、信玄公御甥なり。今一人は、秋山民部少輔が弟圓首座麟岳の弟子なり。斯る次第を以て、御盃を下されける。後に小山田平左衞門參りけれども、御盃納まれば、此一人は頂戴せざりし。此外士卒二人、勝賴公御父子を合せて、都合四十七人なり。兎角する內に夜明けしかば、織田方の先陣河尻肥前守が釣笠の馬印、遙に見ゆると申すにより、阿部加賀守申しけるは、某儀、君の御先を仕り、河尻が先陣を追散らし候はん。其間に、君は御最期の御用意を遂げられ候へと申して、秋山民部少輔・同彌十郎・小山田平左衞門・同彌助・齋藤作藏以下六騎、名得道具を取つて、勝賴公御父子に、最後の御暇を給

はり、天目山の麓に下り、川を前に當てゝ待伏せたり。左右難所にて、敵の軍勢一騎打に連り、川を越え來る處を、小山田左衞門・同彌助兩人は、聞ゆる鐵炮の手垂にて、横田十郎兵衞が祕術を傳へし者共なれば、道の左右に立分れ、玉藥を込替へて、差取り引詰め放しけるにより、究竟の步卒三十餘人、枕を竝べて打倒す。瀧川が先手津田小平次・藤岡平右衞門眞先に進んで、敵は小勢なるぞ、進めや者共と、制して懸るを、小山田が放す鐵炮にて、津田小平次唯中を打貫かれ、逆樣に落ちければ、隊下の軍勢進み兼ねて色めく處を、阿部加賀守・秋山民部少輔兩人、强弓の矢次早なれば、敵を弓手に引受け、矢坪を違へず射立てけるに、立處に又廿七騎射落したり。其後六騎の面々、太刀を貫き競ひ來る敵數百人の中へ割つて入り、十文字に馳通り、巴の字に廻つて戰ひければ、河尻が先手千六百人、四度路になりてためらふ處を、猶も進んで、敵共五六十人薙伏せ、颯と引いて見たりければ、阿部加賀守・秋山民部少輔は、早打たれたり。斯りければ、敵兵直に進んで攻登る。勝賴口と黑絲の胴丸を着し給ひ、態と甲をば召し給はず、白練の御鉢卷にて、重代の吉弘の御太刀を帶き給ひ、眞先を

駈けられければ、左は土屋惣藏、塗籠籐の弓にて、百矢を迯さず射落したり。右は太郎信勝君、卯の花緘の御鎧を召され、左文字の御太刀を帶せられ、十文字の鑓にて、主從四十四人眞丸になり、河尻が千六百人を、百餘人討捕り、二度敵を追崩しけるに、土屋奇妙の手利なれば、十八人迄射倒し、六七騎に手をぞ負はせける。勝賴公は、元來打物の達者にて御座せば、近付く者を幸に、薙捨て給ふにより、既に兩度の追合に、十三騎迄切伏せられける。信勝君も、七騎迄突留め給ふに、御鑓旣に折れたりければ、是も同じく御太刀打なり。其外の勇士四十餘人、各五騎六騎の敵を討留めざるはなかりけり。其時瀧川左近將監が胴勢、二千餘人にて懸り來る。此時も勝賴公、四方より懸る敵を、十一人迄薙伏せられけるに、土屋も矢盡きて、打物になり、勝賴公に近付き、敵を左右に切伏せ働きけるに、小宮山內膳・溫井常陸助、御後に於て、敵を組止め刺通す。麟岳和尙も、長刀にて、九人迄切捨て給へば、此時又敵兵を討つ事四十三人、味方四人討死す。勝賴公は、縱橫に御働あり、各前後左右を助けて、引くも馳するも一致なれば、敵兵足を立兼ねて、右往左往に亂れ散るを、又兩度迄追崩し、高

き處に引上げ、各息を繼ぎ給ふに、又河尻が荒手一千人押寄せかゝるを、物々しといふ儘に、面も振らず駈入り、八十餘人討捕り、殘兵を追散らし給ふに、此時味方廿餘人討たれけり。されども勝頼公御父子は、未だ薄手をも負ひ給はず、猶も勇威を振ひ御座しけり。都合五度の駈合に、四度敵を追崩し、敵兵三百十餘人切捨て、四百餘人に手を負はせける。斯りける所に、辻彌兵衞逆心して、今日の案内をしたりけるが、五千餘人を從へ、後の山より押下し、鐵砲をつるべかくる事、雨の如くなれば、今は叶はじと思ひけん、小原丹後守・弟下總守・金丸助大郎・武田の簾中御息女を始め奉り、介錯をして、口各腹を切る。斯る所、敵兵勢なし、土屋惣藏に鎗付くる。其時勝頼公、土屋を不便に思召し、眞先に進んだる敵を、六人迄切伏せられけるに、敵兵大將とや思ひけん、四方より進み重りて、勝頼父子を鎗付くる。此時又敵兵、數を盡して討たれ、味方も悉く討死して、御父子の御首をも給はりけり。今日の卯の刻より、巳の下刻に至りて、戰旣に落去したりけるに、味方四十七人をもつて、五千人の敵を、四度突崩し、討捨つる敵、都合三百八十餘人・手負五百人に及びけり。此時に至り

勝頼信勝自盡武田亡ぶ

て、武田二十代の名家忽に滅亡し、甲州田野の郷天目山に於て、生害ありければ、河尻肥前守・瀧川左近將監等、直に進んで、夫々二首を點檢し、勝賴公の御首を尋ねけるに御甲をも召し給はず、御鉢卷許りにて、殊に御働尋常ならねば、敵兵夫とは思ひも寄らず、小原丹後守女房衆を介錯し、毛氈を敷きて、見事に腹を切りたるを、勝賴公なりとて、首を公卿に居ゑたりけるに、關甚五兵衞・辻彌兵衞來りて、勝賴公御父子の御首を見分け、丹後守が首を捨て、屋形の御印を公卿に居ゑる。時に勝賴公卅七歲、信勝公十六歲なり。御父子の御印を始め、都合首數百四十七級を切り、河尻・瀧川大に勇み進んで、信忠の本陣甲府を指して引退く。

上州治亂記卷之七 終

上州治亂記卷之八

勝頼御首不瞑、信長對面無禮

斯くて天正十年三月十一日、武田二十代四郎勝頼公御父子、田野の鄕天目山に於て、御生害ましく〳〵けるが、然るに勝頼の御首、生けるが如く、未だ左の御目を塞がれず。織田信忠公、此由を聞召し、其威義嚴重にして、御父子の御首に對面ある。其後信忠、關加平次・小原助六郎兩使を以て、勝頼御父子の御首、竝に其外の首共殘らず、信長の本陣に送られける。信長公、其日濃州岩村を立ちて、信州禰羽根に着陣の處に、右の兩使參着せしめしかば、信長怡悅淺からず、則ち首を對面あらんと仰せける。關加平次申しけるは、勝頼の御首、未だ左の片眼を瞑れずと申せば、信長公仰せけるは、信忠は、勝頼が首見たるかと宣ふ。兩人承り、信忠卿は、甲府に於て御對面と申

す。其時信長、夫々勝賴父子が首持ち來れと仰す。森蘭丸、御鎧を召さるべしと諫めけるに、信長鎧を着し給はず、牀机に寄り給はず、左右に候する勇士もなし。唯平座し給ひ乍ら、勝賴の御首に向ひ、太刀に手を懸け仰せけるは、如何に勝賴、御邊の父信玄は、我等嫡子信忠を婿に約諾し、天下を望み緣者を變政、其外事々に付きて、信長を方便り、不禮不義のみを盡されし積惡により、都に切つて登るとて、俄に病死せり。其餘殃又勝賴に及びて、今信長が爲に誅滅せられ給ふ。然れども信玄在世の望には、首にてなりとも都に上り、參內を遂げたき由願はれつると聞けば、勝賴其志を繼ぎて、父子早く都へ上り參內あり。其後獄門の木にて、京童に見知られ給へ。信長も、頓て後より登るべしと仰せければ、其時勝賴の御首、快然たる御氣色にて、片眼を塞がれけるこそ、誠に希代の例なれ。是を見る人、怪みの色をなさずといふ者なく、蹶然として、恐怖せずといふ事なし。あゝ是れ信長の擧動、主將の禮儀にあらず。人有ㇾ禮則安、無ㇾ禮則危と心ある人は、眉を顰めてぞ笑ひける。斯る御父子の御首を、信長公、早速に京都へ送られける。

信長父子生害并河尻肥前守、土民に殺さる

斯くて武田家一門、譜代の長臣二十代、年來の舊恩を忘れ、いつしか敵に組して、惡逆不義の私を恣にして、却て勝賴を禦ぎ討たんとし、御最期の場を妨げけるが、忽ち天道の冥慮に背き、悉く天誅に伏しけるこそ淺ましけれ。然るに信長父子は、勝賴の分國殘らず討從へ、新羅三郎よりの屋形、殘らず燒亡し、種々狼籍を擧動はれける。信長父子は、勝賴の分國甲州惠林寺を燒き亡し給ふべしと、河尻肥前守軍勢を從へ、鬨を上げて押寄する。其時快川國師を始め、博識多才悟道徹武の沙門數百人、此鬨を聞き、隱るゝに所なく、山門に逃上りけるを、河尻が軍勢、寺を燒立てけり、後此山門に草を積み重ねて燒立つ。百人程の僧徒、泣き悲む聲す。是れ小僧を抱き、火の中に飛込み死するもあり、煙に卷かれ、誠、阿鼻叫滅の地獄の責も斯く計り。誠に信長が無道、放逸の逆意を、振はれける行末の程こそ恐しけれ。中にも河尻肥前守は、勝賴父子の首を授かりし戰賞に依つて、甲州一國を給はり、勇み進んで、入部を

ぞ急がれける。然るに此度信州諏訪に於て、信長滯陣の時、聊の事あつて、長臣明智日向守光秀が面を、信長自身打擲せられけるに、扈從の者共にも命じ、强く恥辱を與へん爲め、思ひ〳〵に打たせられけるにより、光秀が額即時に腫れて、無念の胸意、面色に顯れ、流石豪傑の光秀も、忍び難くやありけん、顏色を犯し、其座を退出したりける。殊に御次には、德川家康公の御使者榊原小平太康政、伺候せられけるに、此體を見て、危き事にぞ思はれける。時に森蘭丸、信長公に向つて申しけるは、唯今光秀が顏色、何樣君を弑し奉るべき形勢に相見え候。某に討手を下し給はゞ、罷向つて、彼者を誅戮仕り候はんとぞ申しける。信長宣ふは、渠は朝倉義景が輕卒なりしを、我今長臣の列に召加へ、過分の米地を食ましむ。信長の恩は、泰山よりも高く、蒼海却て淺し。然るに何ぞ一朝の怒に依つて、莫大の主恩を忘れ、虎狼の心を懷かん。又汝が小腕を以て、光秀を誅せん事、思ひも寄らずと仰せけるに、蘭丸押返して申しけるは、必定彼者、反逆を企てん事近きに候。是非に討手を給はらん、身命を惜むこそ仕損ずべけれ。縱ひ光秀なればとて、隱密の上意と方便り、近く寄つて刺違へん

に、などか遁れ候はんと、差切つて諫め申せば、左程汝が思ひ入らば、頓て光秀を中國に差下し、羽柴筑前守に密意を告げ、彼者に難戰を挑ませ、是非に戰死を遂ぐるやうの謀にすべし。當時武田が非常を謀りし諸將に、分國を配り與ふといへども、甲信上駿の間、先方諸士の心、未だ靜ならず。然るに今光秀を誅し、刑罰を重く行ふ時は、先方の諸將信長に心を離れ、狐疑の思を含まん事然るべからず。内亂るゝ時は、外より其虚を窺ふに易しと宣ふにより、蘭丸も此儀に伏し、さあらば早く上洛ましまし、明智日向守光秀を赚し、中國に追下さるべしといひて、御前を退きける。斯くて信長、同四月下旬、安土城に參着あり、暫時軍勞をぞ休められける。然るに此度、信長の手に入りし武田分國の内駿河國は、先年長篠合戰の時、御契約申したりとて、德川家康公に捧げられければ、家康御喜悦あり。武田の降人穴山左衞門大夫入道梅雪を召連れられ、同五月十五日、安土の城に參府御座して、謝禮を述べられければ、信長種種饗應せられ、樣々の遊興をぞ催されける。爰に羽柴筑前守秀吉は、其頃中國に下候して候ひけるに、羽檄を馳せて安土に申しけるは、備中國高松の城を攻圍むの處

に、毛利輝元が後援吉川駿河守元春・小早川左衞門佐隆景等、數萬騎にて後詰し、城を攻圍み申す由を告げたりける。信長、密に森蘭丸を召し仰せけるは、去る三月、信濃國に於て、汝、明智光秀が顏色を悟り、彼者を誅せよと、我を諫めたりし。幸なるかな、今度羽柴秀吉方より、中國の軍難儀なる由告げ來れり。さなくとも光秀を、彼方へ追下さんと思ひしに、是こそ天の與なれ。其外二三頭も、能き者を選んで下すべし。光秀に難戰を挑ませ、謀を以て彼を討死さすべしとの密書を、秀吉が方へ遣すべし。日頃秀吉・光秀勇威を爭ひ、中善からざれば、秀吉又此旨を悅び、必定調儀に載せて殺さん事決然たり。則ち汝其書を書くべしと仰せければ、蘭丸頓て筆を執りて之を認む。頓て信長、堀久太郎を呼びて、汝は急ぎ先達つて、中國へ下るべし。秀吉に油斷すべからざる由を申せ。後より加勢を下すべしとありて、件の密書を渡さるれば、池田勝入・同紀伊守・同三左衞門・長園與一郞・明智日向守光秀・高山右近・中川瀨兵衞・鹽川吉太大、此者共をぞ定められける。さるに依つて各下國し、出陣の用意を致すべしとぞ宣ひける。斯くて德川家康公は、御參內あるべしとて、御上洛

なりければ、信長も、五月廿九日、僅に百五十騎を從へ、安土を出で上洛せられけるこそ、武運の盡きぬる處とは、後にぞ思ひ合せける。斯くて明智日向守光秀は、五月廿六日、中國出陣として、坂本より、丹波國龜山の城に打越え、愛宕山に登り、社頭に參籠し、二三度鬮を取りて、同廿八日、西坊に於て、連歌の興行をぞしたりける。是れ謀叛を企つる由を、神明に告げ奉り、本意を達せん事を、祈願する處の連歌なり。宗匠は、其頃の花の下紹巴にてぞありける。

時は今天下知る五月哉　　光秀
水上増る庭の築山　　西坊
華落つる流の末を堰留めて　　紹巴

旣に百韵滿ちて、光秀、己が郎等明智左馬助・同次右衞門・藤田傳五郎・滿尾庄兵衞・齋藤内藏助なんどいふ賴み切つたる郎從を從へ、社頭に於て丹誠を抽んで、信心を凝らし祈願しけるに、內陣に於て、武具の音したりければ、西の坊立出でて、必定今度の合戰、御勝利疑なしとぞ申しける。神明は、非禮を請け給はず。光秀斯る暴惡を

以て、神慮に祈り、何ぞ愛宕宮の擁護を垂れ給ふに至らん。是れ則ち當方の謀なり。信長微弱の頃、今川義元を討つ時、熱田大明神に參籠し、此謀を以て軍勢を勇め、又長篠合戰の時も、熱田に詣でゝ斯の如し。當時信長は、天下を併呑して、武威を海内に振はれけるにより、種々の方便を以て、郎從等を逆意に進ましむるの手段なり。其後神前に、鏑矢を奉りて下向したりけるが、今度中國出陣の軍勢を、信長に卒度見せ申さんと披露し、六月二日の拂曉に、其勢八千餘人を率し、例の五人の者を先駈に進ませ、大江山に差懸り、京都を指して駈けたりける。信長其日は、京都本能寺に寄宿し給ひける事を、兼て知りければ、直に進んで、彼寺をひた〳〵と追取卷き、鬨の聲を作り、一度に鐵炮をつるべ懸くる。信長寢所より御出あり、是は謀叛人なるか、何者の所爲なるぞと仰す。森蘭丸、扨こそ明智日向守光秀が反逆なるべしと、太刀追取り、門外へ出でたりけるに、早や軍勢、雲霞の如く見えける中に、白紙の幣の馬印、忽然として控へけるにぞ、いよ〳〵光秀が謀叛とは知りたりける。森蘭丸御前に參り、某が察する處的中致し、光秀が馬印門外に進み候。凡そ軍勢は、一萬も候べしと

信長弑せらる

申す。信長仰せけるは、誠に虎の子飼をしたりといひも果て給はぬに、早軍勢、寺内に亂れ入りて、四面楚歌の聲を揚ぐる。心得たりと宣ひ、調度懸に立てたる弓追取り、矢を搔負ひ給ふ處に、光秀が勇卒天野源右衞門鑓提げ、遣戶を押破り、信長の御聲を聞き知りければ、あはや是ぞと思ふ儘に、八幡大菩薩と觀念し、障子越しに突鑓少し過つて、信長の左の細腰を、脊骨の逊れにかけて、皮を抄うて突きけるに、流石勇猛の鼎將なれば、鑓の穗先を、帷子の袖にて拭ひ給ひ、障子を押明け、弓に矢を番ひ、源右衞門を白眼み給ふ眼色、彌望たる山嶺に、朝日の差出でたるに異ならず。天野大に恐怖し、鑓を提げて引退く。斯りければ近習外樣の郎從、思ひ〳〵に討つて出で、爰を先途と相戰ふ。信長も、弓にて究竟の敵十六騎迄射伏せられけれども、痛手なれば、竟に腹をぞ切り給ふ。宿直の士には、森の蘭丸・同力丸・同坊丸兄弟三人・今川孫治郞・狩野又九郞・伊藤彥作・伴太郞左衞門・小倉松壽丸・湯淺甚助・中尾源太郞以下七八十八、各信長の前後にて、腹搔切つて死す。爰に織田中將信忠公は、妙覺寺に寄宿し給ひけるが、信長と一所にならんと、京へと馬を向けられけるに、村井春長

信忠自盡

軒父子三人、信忠に行逢ひ、本能寺は早火懸り候へば、信長公は、御生害と覺え候といふにより、信忠、則ち二條の御所に逃入り給ふを、午の刻に及んで、光秀、二條殿を取巻きけるに、此時は、早軍勢所々より馳集ひて、一萬三千餘人なり。光秀下知して、近衞殿の御所に亂れ入り、此御館より、二條の城を見下に、鐵炮を放しけるにより、營中の諸士方便を失ひ、信忠竟に自害し給へば、鎌田五郎左衞門尉介錯して、則ち腹をぞ切つたりける。其外近習の士には、津田又十郎・同孫三郎・同勘七郎・同九郎治郎・同小藤治・赤座七郎右衞門・團野平八郎・野々野三十郎・福富平左衞門・山口小辨治・佐佐淸藏以下七十餘人、枕を並べて討死す。時是れ天正十年六月二日。右大臣平信長公・御子羽林平信忠公、家臣明智日向守光秀が爲に生害あり。織田の豪家、一時に滅亡したりけるこそ、是れ偏に勝頼生害より、日數八十一日目に當りて、此の如く亡び給ふ事、天道自然とはいひ乍ら、誠に不思議の次第なり。去る三月十四日、信州禰羽根に於て、信長、勝頼の御首に向つて、勝頼早く上洛あり、獄門の木にて、京童に見知られ給へ。信長後より上るべしと仰せける時、勝頼の御首、生けるが如くになりけ

るが、快然たる御氣色にて、其儘片眼を塞がれし事、又三月十日、勝頼田野に於て、仰せられし事、爰に符合せりとぞ覺えける。斯くて德川家康公は、京都より堺に御座を移され、滯留ましします處に、信長亡び給ひければ、直に上京あつて、明智光秀に誅を加ふべしと仰ありければ、本多平八郎・石川伯耆守・酒井左衞門尉が諫に依つて、伊勢へ打入られ、尾州を過ぎ給ひ、遠州濱松の御城へ着御ましましける。爰に穴山梅雪は、勝頼に對して、逆心の張本なるが、此度德川家に倡れ奉りて、安土に參じ、泉州迄も後塵に從ひけるが、伊勢路へかゝりては、勝手惡しと稱し、德川家康公に從ひ奉らず、山城國宇治へ懸りて、歸國せんとしたりけるが、宇治田原に於て、雜人の爲に打殺されけるこそ、是れ又希代の例なれ。斯くて信長の士大將河尻肥前守は、甲州を信長に恩賜せられ、甲府に打入りて、恣に刑罰を行ひ、勝頼が黨類といはゞ、三好黨の如く、甲州善光寺に殘らず追込み、燒殺さんなんどと訇りけるが、此度信長父子、家臣明智が爲に殺され給ふと聞きて、國を捨て、逃げ上らんとすれども、道路の害を恐れ、進退爰に谷りて、如何ともすべき様なき所に、德川家康公、不便に思召し、

上方へ逆り上らるべしとある所に、六月十七日、甲州の土民蜂起して、河尻肥前守を打殺す。淺ましかりし事共なり。首をば山縣源四郎が被官三井源一郎討取りて、則ち田野天目山に持參し、勝頼父子の墳墓にぞ備へける。斯くて一年も越えざるに、寇讐悉く伏誅し、勝頼御父子の本懷是に過ぎずと、都鄙遠近に傳へて、諸人之を感稱せずといふ事なし。

上州治亂記　卷之八　終

上州治亂記 巻之九

毛利家・羽柴筑前守請ニ和睦一、織田信長自害に付告ニ秀吉・輝元和評一

毛利輝元秀吉に和を請ふ

時に天正十五年五月下旬、羽柴筑前守、中國に在陣し、毛利輝元と日夜旦暮合戰ふに、秀吉日々に勝利を得るによつて、輝元、退屈やしたりけん、安國寺長老を賴み、秀吉方へ申しけるは、輝元只今押領する分國、相違なく安堵の仰蒙らば、信長卿の味方に屬し、九州御退治ある時、先陣すべしと請けたりけり。秀吉、安國寺に對面し申しけるは、信長卿と、和睦せんとの事ならば、秀吉能きに執成申し、御分國に安堵の事、聊か相違あるべからず。然らば起請取替し、雙方陣を相去るべしと返答したりける。同六月朔日の未明に、安國寺、又秀吉の陣へ來り、仰の趣、輝元へ申聞かせ候處、

大に悦び、日限を相定め、互に誓詞を取替し申すべき由言送る。秀吉則ち應諾す。抑今度毛利右馬頭輝元、織田信長公へ和睦を乞ひたる其下心を尋ぬるに、羽柴・毛利合戰、火水なりと雖も、毛利家每度利を失ひ、持城餘多候故相持扱ひ、防ぎ兼ねたる時、織田信長より加勢として、池田勝二郎信輝・子息武藏助・明智日向守光秀・長岡與一郎忠興・高山右近友祥・中川瀨兵衞淸秀・鹽川大三郎正次、以上其勢七萬餘騎の軍兵、馳向ふと傳へ聞き、其上信長父子、德川家と和平なし、武田勝賴を討亡し、大軍を引率し、猶中國・九州を征伐せんと、近々首途あり。又神戶三七郎信秀は、四國退治の大將として、丹羽五郎左衞門・織田信澄・蜂谷賴重相從ひ、數萬騎を引率し、住吉に屯し、是も近日艤をし、乘出す由風聞あり。依つて輝元つくぐと考へ、天下の大軍に戰ふ事、利あるべからず。若し敗軍の時は、本領安堵叶ふべからず。今毛利家の武威といひ、四國・中國・九州迄輝く。此時信長の味方に屬する者ならば、本領安堵仔細ぞあらんと、和睦の評定に極りける。

斯る所に六月二日午の刻、長谷川宗仁が、京都より出したる早馬、同三日子の下刻

に、秀吉が陣中に馳着き、潜に申しける樣、此度明智日向守光秀反逆し、本能寺へ押寄せ、信長卿を討ち奉り、夫より二條の御所へ押寄せ、屢合戰あり。嫡子信忠卿には、御自害なり。其地の軍を差置き、早速に京都へ馳上り、御敵光秀退治あるべしと、口上にて申しける。羽柴秀吉、大に驚きたりけれども、少しも動ぜず。翌四日の早朝、數百騎を引連れ、馬印一本を持たせ、何となく味方の諸營を巡見し、本陣へ返る所に安國寺又來つて、彌明日は、御和睦調ふべき由なりと申しければ、秀吉暫く思惟し、存ずる仔細候へば、明日其事定むべしと、申含めて返しけり。安國寺は、此由を輝元へ告ぐる。毛利家にては、諸軍勢、此返事を聞きしより、和睦の儀破れやと、堅唾を呑んで策を結び、明くるを遲しと待兼ねたり。翌五日早朝、安國寺又來りて、今日誓詞を取替し、人質をも出すべしと、頻に催促申しける。秀吉申しけるは、明智日向守光秀反逆して、去る二日、主人信長卿御父子を殺し奉る由、一昨日夜、京都より告げ來る。此上にても、以前契約の如く違はずして、和睦あるべくや。又否との事ならば、其返答に從つて、是非の安否を極むべし。此旨輝元へ傳へ給へとて、安國寺を返

しけり。安國寺、毛利家へ行き、右の次第逸々申しければ、輝元大に喜悅して、天の與ふる所なりとて、一族郞從召集め、意見をこそは問はれける。或は諸軍勢半は、大將信長討たれし事は、天の與ふる所なり。和睦の約を違し、此弊に乘り、秀吉を討たるべしと、同音に申しける。粂川進み出で、明智光秀、一旦信長を殺したりとても、久しく世を保つ事叶ふまじ。其上北畠信雄・神戶三七郞存命せり。殊に信長股肱の臣柴田修理亮勝家・丹羽五郞左衞門長秀・瀧川左近將監一益・佐々內藏亮等の剛兵あり。又旗下の大名には、德川殿御座せば、爭てか明智尻舞せざらん。渠が無道の家風に、又あゆまん事候まじ。光秀の滅亡は、廿日の中を過ぐべからず。光秀亡びし其後は、中國退治に向はん事、掌を指すが如し。暫く世上を見繕ひ、其變を見定めて、浮沈を極め給へかしと、憚る所なく申しければ、各是に評議從ふ者と、又秀吉を追打して、天下の草創あるべしと、更に一決せざりける。其時小早川佐兵衞尉隆景進み出で、某愚案を廻らすに、今信長滅亡は、一旦秀吉の身に取ては、不吉に似たれども、畢竟案ずるに、吉軍にて候はん。其故如何となれば、傳へ聞く、北畠は色に耽りて、勇少

なし。其上士卒を愛する心なし。依つて天下を保つ氣質に非ず。又神戸信孝は、勇はあれども、短氣にして、仁心も知信もなく、奢第一の人なれば、兄弟國を爭ひ、後には天下兵亂を引出し、身を亡す人と聞きたり。丹羽・柴田勇はあれども、其身さして大名にあらず。瀧川は表裏の侍なれば、諸卒是に從はず。今天下を取らん人は、徳川殿にてあるならんか。是は大名といひ、智仁勇の徳ある人と聞く。此人などか望あらん。然れども此隆景、直に見ざれば計り難し。今眼前に見る所、天下を示す人、秀吉に限るべし。是は勇氣智謀人に越え士を懐け、殊に中國に下向して、諸國の城々拔取り、武威世上に揮かす。織田家に、渠に雙ぶ者なき大名といひ、旁々以ての事なれば、光秀亡びし後、天下を示さん人は、恐らく秀吉ならん。依つて今度和睦破れなば、其憤を含むべし。信長死去を告げ來るは、去る三日の夜中なるに、取靜めたる陣所の體、凡人の所爲にあらず。陣中少しも騷動せず。誠に奇妙と申すべし。次に信長死去と聞けば、秀吉方より手を入れ、和睦の事を調ふべきに、昨今兩度使を以て、和睦の事を申せしに、其事は承引せず。結句信長討たれし事を、敵方へ告知ら

せ、軍の安否を極めんと申送り候事、日本無雙の猛將なり。今秀吉を討たんとせば、渠等は死兵、味方は生兵。然らば毛利の大勢と秀吉が小勢、生死を論ぜず對揚すべし。又兩虎二龍の戰なり。相互に滅ぶべし。今秀吉の氣質を傳へ聞くに、文を學ばずとも、自然と文道に叶ひ、兵術を習はずして、自然と奇變進退度に當る。是れ雜降絕類の文武なり。夫れ智仁勇の三つは、大將の要樞なりと雖も、此三つを兼ねたる人は、日本に稀なり。遠くは畠山庄司重忠、近くは楠正成、三德を兼ねたりと雖も、聖人の所謂知仁勇には、日を同じうして論ずべからず。今秀吉智ありて勇あり、仁心は少なけれども、謀才義禮此五つは、勢少しづゝあり。然れば今の世の名將、天下の大器といつべし。夫れ天下の大器といふは、天の生める所にして、更に人力の及ぶ所にあらず。此の如き大將も、濁世には稀なり。今秀吉の危き所を見繼がば、秀吉爭でか其芳情を忘るべき。是れ根深うして、楯を堅くする謀にして、家名長久の基たるべき歟。御同心に於ては、先づ信長の悔みとして、老臣一人遣され、其上秀吉上洛して、信長の弔合戰仕らば、加勢の軍承らんと仰せられ、然るべきかと申しける。

滿座の一族郎等共、實にもと思ふ者共あり、又言甲斐なき事なり、何ぞ此時、秀吉を討たざるべけんやと、思ふ族もありしかども、此小早川殿と申すは、元就の三男にて、度度の高名、中國・九州に雙ぶ者なく、殊に毛利家にも續く者なく、數代の大名なれば、誰あつて、詞を返す人もなし。輝元暫く思惟して、小早川の申す所、尤なりと同心して、老臣福原越前守廣俊といふ者を使者として、信長死去の悔を申し、次には以前契約して、今更何ぞ變改すべき。互に誓詞を取替し、若し上洛ありとも、軍兵不足の輩あらば、望みに從ひ、加勢すべしと申送る。福原則ち秀吉の陣へ赴き、蜂須賀彥右衞門尉利政へ、右の口上を申しける。時に早速利政言上するに、秀吉聞きて大に悅び、則ち使者に對面し、和睦の事を調べて、互に起請を取替す。輝元判形見分は、蜂須賀利政・浮田八郎秀家を、差添へ遣しける。是は蜂須賀、輝元を見知らざれば、若し別人を出し置き、輝元なりと披露して、謀判せしむる事やあらん。浮田八郎は、數年毛利家の旗下にて、輝元を能く見知り覺えたる者なれば、副使とはしけるとなり。秀吉の判見分は、福原廣俊・安國寺來り、既に和睦の事終り、秀吉より使を以て、輝元へ

申しけるは、秀吉明日上洛して、御敵たる明智光秀を誅し、亡君の憤を散ぜんと存ずるなり。依之當國には、浮田八郎秀家を留め置き、守護致させ候べし。鐵炮五百挺・弓五百張・旗三十流、御合力給はるべしと請ひける。輝元加勢を出し、右の通り差遣り、又和睦の人質として、元就の八男毛利藤四郎秀包を遣す。秀吉人質を請取り、天正十五年六月朱の刻、高松の城を立ちて、沼の城迄歸りける。折節風雨烈しくして、所々川水溢れ、渡るべきやうなかりければ、翌七日には逗留し、人馬の氣を助けて、九日早朝に姫路を立ちて、駿馬に鞭ち、同十一日の午の刻には、攝州尼ヶ崎に着陣す。秀吉此所にて剃髪しける。是は信長悔みの故なり。斯くて毛利家の郎等共打寄り、此度和睦の事を許しける内に、熊谷伊豆守元直と申す物頭、進み出でゝ申しけるは、今度輝元卿心を變じ、秀吉を討ち給はゞ、さのみ手間は入るべからず。其故如何となれば、既に秀吉加勢として、弓・鐵炮の足輕千人並に心を合せ、秀吉高松を引拂ひ、返さんとする時に、時分を見合せ、味方の大軍後より慕ひ、秀吉河邊に至らん時、火急に追懸け攻討たば、定めて軍を取結ばん。其時加勢の味方の、敵陣にあり乍ら、

弓・鐵炮を射懸け、敵の後を攻むるならば、前後の敵に僻易し、譬ひ秀吉鬼神なりとも、爭でか敗せで候べき。然る時、追詰め〳〵攻討たば、秀吉をも討取るべきを、毛利一族諸大將も、秀吉に氣を呑まれ、おめ〳〵と返す事、口惜しさよと申しける。其時福間口右衛門といふ者、是は熊谷殿の申條、一理あると雖も、小早川武勇といひ智謀といひ、思慮賢き大將なれば、惡しき事は宣ふまじ。實もなき見所の高がけし味方の負けんも見苦しかるべし。行末を見て後にこそ、善惡の批判はあれ。其位にあらずして、其政口せずと申す本文あるぞかし。何程悔みても思ふても、我等が存念の上に、達する事にあらず。然らば詮なき事なりと、熊谷を漸う〳〵と、制しけるも尤なり。

羽柴筑前守秀吉尼ヶ崎着陣、告二義信孝一附諸將大坂を發し尼ヶ崎へ來る

斯くて羽柴筑前守秀吉は、攝州尼ヶ崎に屯して、神戸三七郎信孝、并に丹波五郎左衛

門長秀・池田紀伊守信輝等諸大將に、使者を以て申しけるは、秀吉中國にて合戰し、備中の冠城幷に高松の城を攻取り畢ぬ。然れども毛利は、渠の自國といひ、多勢なり。秀吉は他國といひ、小勢なり。依レ之加勢の事、信長卿へ申上ぐれば、池田父子・明智・長岡・高山・中川・鹽川の人々、下向せらるべき由なれども、事延引す。其內毛利と度々合戰し、毎度秀吉勝利たり。依レ之輝元降參、人質を出したり。中國既に平均せしむ。尤も然る所に、今度明智光秀謀反し、君を殺し奉る由、長谷川宗仁告げ知らす。依レ之備中・伯耆・美作・播磨四箇國、秀吉が領國にも、斯くの如く兵を殘し、既に光秀を討つ爲め、僅に二萬餘騎を率し、尼ヶ崎に着陣せり。秀吉が勢微なる故、毛利輝元加勢として、弓五百張・鐵炮五百挺、軍兵都合百五十餘騎差添へたり。此故に、秀吉急ぎ京都へ馳上り、光秀を討たんと存ず。神戶三七郎信孝卿も、其外の諸大將、御思慮の事も候やと申しける。信孝を始めとして、集り居らるゝ諸大將、京都に押寄せ、光秀と合戰せんとぞ勵めども、信長討たれ給ふにより、國々の集り勢悉く落失せ、小勢にてありける故、如何すべきと尻舞し、十餘日を過したり。然るに秀吉多勢を率し、

上りたりと聞くよりも、信孝以下の諸大將、悅ぶ事限りなし。頓て大阪を打立ちて、尼ヶ崎に會合し、未だ詞も出さずして、互に袂を絞りけり。其後軍評定す。池田勝三郎信輝も、入道して勝入と申しけるが、進み出でゝ申しけるは、明日の先陣は、勝入なりといふ所に、高山右近友祥、渠も同じく入道して、南坊といひけるが、高聲に申す樣、凡そ山崎合戰の次第を、追ていはんには、先陣は此入道南坊なり。二陣は中川淸秀、三陣こそは勝入なれ。然る次第を差越えて、三を以て一とせんとは、得こそ申すまじけれといふ。秀吉是を聞き敢ず信長卿御在世に、定め給ひし御陣合、今更違ふべきにあらず。池田殿、口に御不肖あれと申しければ、勝入則ち靜まりける。依之先陣高山右近入道、二陣中川淸秀、三陣池田勝入とぞ定まりける。今度諸將、尼ヶ崎に會合したる事に付きて、蜂谷伯耆守大に悔みて、大阪の諸將に申しけるは、先づ神戶三七郎信孝卿は、忝くも信長卿の三男なれば、秀吉には、正しく主君なり。次に丹羽・柴田は、雙牙二目の老臣たり。又池田といふは、信長卿の乳兄弟なり。何に付けても、秀吉大坂へ參向し、軍評定仕れと、御返事あるべきに、三七郎殿を始めと

して、尼ヶ崎へ參向すれば、自ら秀吉は、棟梁と相見えたり。渠が多勢に氣を呑まれ、斯るへつらひこそはかなけれ。光秀亡びて其後の天下は、秀吉が物なるべしと、眉を皺めて悔みけるが、後には思ひ合せける。さる程に光秀は、諸將に向つて申しけるは、佐和山の城には、荒木山城守村勝が子息二八郎を、彼城に込め置き、其身は、洞ヶ崎に陣取りて、光秀二男石丸といふを、十二歲になりけるを、人質に遣し、筒井順慶を語らへども、更に味方に與力せず。光秀、齋藤利三郎を近く呼びて、耳語けるは、必ず味方に屬すべき順慶や長岡、心を變じ從はず。偶々味方に與力せし織田信雄は討たれたり。又德川殿は、堺より、伊賀路を經て落ち給はんと、兼て推量する故に國中へ相觸れて、德川殿を討つ者あらば、侍以下嫌なく、厚く恩賞すべき旨、鄕民迄に觸れさせしかば、一揆等大勢にて討留めたるらんと、安堵の思なしたるに、思ひの外に討洩らし、あつても甲斐なき梅雪をば、一揆の奴原討取りたり。又毛利に食止められ、登り兼ねしと思ひし羽柴秀吉も、思ひの外、多勢を率して攻上る。斯くまで物每に相違の上は、天運こそは口惜しけれ。斯樣に仕寄せし天下を、失ふべき果報

の拙さよと悔みける。斯りける所に、羽柴筑前守秀吉の軍勢は、天正十年六月十二日、攝州を打立ち、先陣、既に山崎天神の馬場芥川邊に充滿したるに、後陣未だ西宮に清水邊にぞ控へたり。軍はいよ〳〵明十三日と定め、其夜は彼に屯しけり。明十三日は、山崎表に於て、勢揃すべしと評定して、其夜の明くるを待明かす。

上州治亂記卷之九 終

上州治亂記　卷之十

秀吉遣ニ使者明智方ニ定ニ軍日、敵味方備立手合

斯くて天正十年六月十二日晩景、羽柴筑前守秀吉は、堀尾茂助吉晴を使として、明智光秀が〔脫字アルカ〕遣しける。依レ之柴田源左衞門尉、對面して申しけるは、聞く所光秀は、信長卿に恨あり、弑し奉らるゝ由、高松の城にて承る。依つて彼の地を打捨て急ぎ上洛仕る君臣恩顧の禮法なれば、明十三日兵を進め、久我繩手の邊に於て、弔軍をせんと存じ、案內を申入るといはせけり。此由、源左衞門、光秀に申上ぐる。光秀聞きて返答しけるは、御使祝着したり。光秀身に於て、信長卿を恨みし事、普く世の人知る事なれば、今改めて申すに及ばず。明日の軍、光秀望む所なり。勝負は、必ず天運に任するのみと、返答して返しけり。斯くて羽柴秀吉方にては、翌十三日寅の刻、池

田勝入・子息藤九郎は、山崎表に進みて見れば、高山右近陣取り、早や南門を差堅む。依之池田が兵、一人も叶はず。勝入是を見て、高山は心を變じ、明智に與すると覺えたり、油斷するなと下知し、川添なる細道より、山崎の東なる總構の外を廻り、明智勢に向はんと、馬を早めて打つ所に、高山右近が軍兵は、山崎より打出でゝ、池田が先へ進んだり。抑高山右近、山崎の南門を備へたる事は、他人の勢を通さずして、先陣せんとの智謀なれば、いとやさしく覺えける。扨も明智日向守光秀は、洞が崎に陣取りて、筒井順慶を招けども、更に承引せざりければ、夫より淀の城に入りて、普請せんと企つる所に、秀吉、中國より多勢を率し、依つて淀の普請も差置きけり。然る所に秀吉が使者來りて、彌明十三日、軍すべしと告げゝる故、光秀軍の評定し、其手分をぞ定めける。先陣は波多野遠江守秀尙・澁谷左京大夫秀高、此兩人は、毛利家幕下に屬し、丹波・丹後・但馬三箇國の城主なりしが、織田家の爲に攻取られ、後に光秀、龜山を領せしかば、赤井惡右衞門直家を始めとして、右の輩光秀の與力となる。故に此度丹波の國侍大勢、從つて備へけり。右備は、伊勢與三郎直孝・諏訪飛驒守

賴宣・御牧三左衛門堯冬、其勢二千餘人。左備は、津田與二郎信秋、其與力雜兵、都て二千餘人。大將明智日向守光秀は、諸將の命を司つて、其勢五十餘騎にて打出でたり。勢軍都て一萬四千餘騎とぞ聞えけり。寄手の先陣は、攝州高槻の城主高山右近友祥入道南坊、其勢二千餘騎。二陣は、同州茨木の城主中川瀨兵衛尉淸秀、其勢三千五百餘人。三陣同州有岡・尼崎・花熊三城主・池田信輝入道勝入・子息藤九郎、其勢五千餘人。四陣丹羽五郎左衛門尉長秀、其勢三千人。五陣勢州神戸城主神戸三七郎信孝、其勢四千餘人。本陣は播磨・美作・但馬・因幡・伯耆・備中半國、都て六箇國の大守羽柴筑前守秀吉、其勢二萬餘人、總軍勢都合三萬七千五百餘騎、段々に備へたり。爰に今度の合戰は、日頃朋友寄合故、武勇を勵み名を恥ぢ、氣を磨きてこそ控へたれ。

齋藤利三以₂軍使₁告₂軍術₁、光秀天王山陣所爭の事

斯くて明智光秀の先陣齋藤内藏助・柴田源左衛門等は、六月十二日より、洞ヶ崎に陣取りて居たりけるが、齋藤利三、大將光秀方へ、軍使を馳せ申しけるは、秀吉旣に三萬

七千餘の大軍を引率し寄せ來る。願はくは明日の軍を止め、坂本の城へ楯籠り、要害の地利を便りて合戰あらば、早速は勝負あるべからず。其上安土の城、左馬助在番すれば、後詰の方便も有之、味方の助けともなるべく候。さなくば又迚もの事に、安土の城へ打入り、彼處にして御一戰然るべし。彼の城と申すは、信長卿、數年心を盡して、出來ありし城地なれば、要害に於ては、日本無雙の地なり。殊には弓・鐵炮・玉藥・兵糧等に至る迄、不足の事候はず。今山崎と申すは、味方の爲に地利よからず、大軍を引請けては、防戰すべき地にあらず。先達ても申す如く、山崎にて戰へば、必ず味方敗すべし。爰を深く察し、遠く慮り給ふべし。軍の雌雄分別は、只今にて候べし。時刻移らば、悔ゆとも甲斐あるまじと申送る。光秀聞きて、怒り罵りて云、凡そ君を弑する程の大事を起し、我れ今天下を仕寄せたるに、何ぞ我に敵對する者あらんや。汝等も、必ず憂ふる事あるべからず。速に此地にて、合戰厲むべしと返答せり。翌十三日、光秀山崎へ陣取り、段々に備を立て、軍令下知せしが、松田太郎左衞門尉を招きていひけるは、汝生國は丹波といへども、山崎の案内能く知りたり。

急ぎ天王山に馳せ登り、山崎を眞下に弓・鐵炮を放つべし。然らば山崎にある敵は、途を失うて、進む事叶はじと、下知すれば、松田畏り候とて、弓・鐵炮の者三百餘人・手勢七百餘人を引具し、天王山へぞ登りける。さる程に羽柴筑前守秀吉は、堀久太郎秀政、堀尾茂助吉晴を召して、天王山を敵方へ取られな。はや〳〵打立ち、味方の陣所にせよと、下知をなす。兩人尤と御請しけるが、堀尾は生得氣早なる男なれば、御前より直に馳向ふ。時に預かる所の弓・鐵炮の者二百餘人に申す樣は、隨分騎馬の兵に續きて、天王山へ登るべしと、駿馬に策打ち、山の半腹迄馳付く。是より馬足に及ばず、馬より下りて、我軍兵を見れば、漸く手勢十五六騎にて、弓・鐵炮の者二十人計續きける。堀尾は小勢をも厭はずして、天王山に登らんとする所、早や先達つて松田は、堀尾に先立ち、山上へ登りしかども、弓・鐵炮調はざる故、小勢の堀尾を打崩す事ならず、弓にて防ぐ。下より堀尾は、鐵炮にて打立つる。

山崎一番合戰、明智先手齋藤・柴田合戰

明くれば天正十年六月十三日、寄手の先陣高山右近入道南坊、初の程は、山崎の南門を差堅め、他軍の兵を通さゞりしが、池田勝入山崎の砦總構を打廻るを見て、門を開いて先登し、光秀が右備伊勢與三郎・諏訪飛驒守・三牧三左衞門・舍弟勘兵衞等は、二千餘騎に打つて懸り、東西に開き合ひ、南北に追靡け、喚き叫んで揉合ひたり。互に見逢ふ朋友、恥を思ふ戰なれば、命を惜まず、死を一擧に論じ、未だ勝負附かざる所に、中川瀨兵衞淸秀山を登り、伊勢・諏訪・三牧の左を遮りけり。池田勝入父子は川を渡り、箕手になり、左右より引包んで討たんとす。江州勢は、三所の敵に見驚き、叶はじとや思ひけん、裏崩れして逃げ去る。齋藤・柴田に與力せし近江國の住人阿閉父子・池田・後藤・多賀・久德・小川等の軍將も、愁に武勇を爭ひ。先陣の大將齋藤・柴田が下知ぞとて、軍兵を進め、伊勢・諏訪・三牧を救はんとて、三千餘にて進みける。其備、疎にして、中川・池田に討つて懸る。然るに如何したりけん、一戰に利を失ひ、四角八方へ逃げ走る。中川・高山・池田父子、怯む敵をば追捨て、蹈留まりし敵の大將伊勢・諏訪・三牧兄弟、眞中に取込めて、一人も洩らさじと、散々に攻め戰ふ。伊勢

光秀敗軍

與三郎・諏訪・三牧申しけるは、言甲斐なき江州勢の臆病武者、手足纏は落失せたるこそ幸なれ。今は心に懸る事なし。扨聲華(はなやか)なる軍して、討死せんと申しければ、諏訪答へて、曰、凡そ勇士は、先祖の名を汚さず。殊に子孫の貌を悦ばしめ、義忠に死して骸を雪ぐ。何ぞ遁れて恥を得ん。三牧殿如何といふ。三牧兄弟之を聞き、いふにや及ばん、命は義によつて輕く、骸は恩の爲に野外に曝す。是を勇士の常とするなれば、□□□□、義を士卒に勸め勇を含めて、討殘されたる軍兵千餘騎を魚鱗に備へ、高田・池田父子、中川が九千五百餘騎の中へ、會釋もなく馳せ入りて、十文字に破つて通り、巴の如く廻りけるが、寄手を餘多討つて、伊勢・諏訪の兩將も、諸勢と共に討死す。此時三牧兄弟は、一番に馳破り、其後又伊勢・諏訪と入替り、散々に戰ひ拔け、人馬の息を休めけるが、鞍壺に立上り、左右を顧みて、もはや伊勢・諏訪も討たると覺えて、旗・馬印亂れ走る。江州勢は、一番に逃げ去る。又天王山の軍士も、味方討たれたりと覺えて、堀尾と堀が旌旗、山上に飜る。然れば總敗軍と覺ゆるぞ。大將明智殿の御先途を、見果つるまでもなし。唯此所にて討死し、光秀殿を一先づ遁

さんと、兄弟互に語り合ひ、使者を光秀方へ遣し、味方大略敗北し、敵の大勢等にのりて、今は防がん術もなし。三牧兄弟、爰に於て、防矢射ん、明智殿は陣所を去つて謀を廻らし、重ねて本意を遂げらるべしと申送り、其後手勢二百餘騎、進む敵の眞中へ、一文字に馳せ入り、散々に戰ひたり。されども餘り小勢なりければ、敵味方を見分け兼ね、同士討する事多かりける。池田勝入、采を振り、士卒に下知しけるは、言甲斐なき者共かな。敵は皆腰印を付けたるぞ。夫を目當に組んで討てと、牙を嚙んで下知すれば、軍兵是に心付き、引組み〲、討つ程に、三牧兄弟を始として、一百餘騎の軍兵共、枕を並べて討死す。是より先、光秀が先陣齋藤内藏助利三・嫡子伊豆守・柴田源左衞門口先手に組せし江州勢三千餘騎、邪なるに先懸して、一戰に利を失ひ、逃げ落ちたりと見えけれども、少しも氣を屈せず、二千餘騎を一手に合せ、自餘の敵には目も懸けず、瓜の紋付けたる赤旗、神戸三七郎信孝と見るならば、引組んで討取れと下知して、馬を許矢立に歩ませ寄り、山崎の總構の東なる川を隔てゝ控へたり。此川、大河にあらざれども、降續きたる霖雨なれば、川水溢れ流る。爰に信孝軍士の中、

野々懸彥之丞と名乘りて先馳し、唯一騎進む。齋藤が嫡子伊豆守、十六歲初陣と名乘りて、渠も唯一騎、馬を川に打入れて渡る處に、野々懸も進み、川中にして、一つ二つ打合ふと見えしが、互に無手と組みて、川中へ岸波と落ち、上になり下になり、一時計流れたり。齋藤が郎等馬を進めて救はんとするを、利三怒つて、凡そ勇士の子、十六歲に及び、敵一人討ち得ずして、他人の力を借りなば、存命たりとも、何の用にか立つべき。構はずに捨置き、討死させよと、下知する故、誰あつて合力する者なし。然るに伊豆守は、野々懸が首取つて、遙の川下より浮び出づる。是を軍の手初吉しとして、兩陣進み、矢・鐵炮を合せて戰ひけり。時に齋藤內藏助利三、鐙蹈張り大音揚げ、今日の大將軍三七殿と見るは僻目か。斯く申すは、利仁將軍の末葉齋藤內藏助利三といひて、明智家にては一二の者なり。敵に高下はなけれども、三七殿御爲は、利三親族なり。人の手に懸け給ふなよ。自ら組んで首を取り、信長卿の孝養にし給へとて、四千餘騎の中へ馳せ入り、齋藤父子・柴田三人、三度別れて三度合せ、喚き叫んで馳せ廻る。信孝の軍兵共、敵の死兵に駈立てられ、備しらけて、旣に敗せんと見

えしかば、齋藤・柴田氣に乘つて、勝鼓を打鳴らして競ひ懸る。時に中川瀬兵衛尉清秀、二千五百騎にて、横合より打つて懸る。内藏助急度見て、嫡子伊豆守に、其敵防げと下知すれば、伊豆守と柴田と一所になり、六百餘騎、清秀と揉み合ふ。齋藤・柴田が勢二手に別れ、信孝・清秀と戰ひけるが、味方大勢討死すれば、是迄とや思ひけん、柴田・齋藤父子三人、敵の圍を打破りて、行方知らず落失せけり。今日軍の戰功は、中川清秀、三七郎信孝大に喜悅して、馬を中川に馳せ竝べ、清秀が手を取りて宣ひけるは、今日足下苦戰せし事、信孝一生忘るべからず。大に感ずるなりと申しける。斯る所羽柴筑前守秀吉は、神戸三七殿の後にあり、其身は輿に乘り乍ら、手を出して、瀬兵衛々々々と、高らかに呼懸けて、唯骨折々々といひける。清秀之を聞き、大音揚げていひけるは、筑前守が面貌、誠に天下を口んとする其氣色、今旣に見ゆるなりと、急度申しける。是れ中川と申すは、筑前守を萬事引廻りける人なり。依つて秀吉、一言の返答に及ばざりしとかや。斯くて齋藤内藏助利三・息伊豆守利光・柴田源左衛門雄金、其勢二千餘騎なり。抑利三が母といふは、明智光秀が妹なれば、光秀

が爲には甥なり。又內藏助が妻は、稻葉伊豫守通朝入道が一族の娘なり。源左衞門は、光秀の婿なり。斯うの由緖あるのみならず、度々武功を顯したる者共なれば、先陣とはしたるなり。扨相備の侍は、江州の住人阿閉淡路守政宗・嫡子孫五郎政廣・多賀豐後守高忠・後藤喜三郎秀勝・池田伊豫守忠政・小川土佐守祐忠・久德六左衞門尉國友等、勢合せて三千餘騎、齋藤・柴田が加勢とす。此組都て五千餘兵なり。山の手先陣松田太郎左衞門尉秀詮、鐵炮三百挺、其外丹波國侍都て七組、小野原右京亮・平林平太郎・銘田三郎兵衞・川勝左近・澁谷左衞門・赤井五郎左衞門・高屋越後守、其外若隼減孫右衞門・同主膳・寒川左內・知足十左衞門・鷲尾十郎三郎・曾地五郎左衞門・金田小四郎・位田二郎左衞門・山內喜內、其勢都て二千餘騎なりとぞ、今は聞えける。

上州治亂記　卷之十　終

上州治亂記卷之十一

明智日向守光秀引ニ入青龍寺城一、光秀遁ニ出青龍寺ニ一揆誅戮

時に天正十年六月十四日、明智日向守光秀、三牧が使を越しける迄は、御坊塚といふ所に、五千餘騎にて備へたるが、先陣の味方敗走すと聞きて、馳せ向ひ救はんと、旣に馬を進むる所に、柴田帶刀秀照は、光秀を諫めていはく、敵、氣に乘つて大勢なり、味方の氣は臆したり、小勢にて戰ふとも、利はあるまじ。されば進退途に當るを、良將とは申すなり。難を遮り危を淩ぎ、後の功を立つるを以て、大將の勇とは申すなり。一生の恥を思ひ、一命を輕んずるは、匹夫の勇士の働なり。一先づ靑龍寺の城に入り、夜中潛に城を出でゝ、坂本の城に入り給はゞ、安土の城、左馬助二千餘

騎にて在城す。賴なきには候はず。初め齋藤内藏助利三諫めしも、此事にて候や。坂本に栖籠らば、斯樣に口惜しき負はすまじきを、後悔口に無益と歎めけり。光秀甚だ心臆し、途を失ひけるにや、靑龍寺は、何れの方と問ひければ、帶刀、馬より飛下り、光秀が馬の轡を取つて進み行く所に、敵兵道を差塞ぎける故、此時進士作左衞門・關田太郞八先登して、打破つては馳通り、取つて返つては押拂ひ、光秀僅に逃去りけれども、海道は除くる事叶はず、田の中を傳ひ〱、漸く馬を進め、靑龍寺の總構の堀に馬を乘入れ、土居に登らんとしけれども、光秀の馬沈み、土居へ上り得ざりしかば、進士作左衞門、光秀を馬より下し、其馬を引上げて、又光秀を馬に抱き乘せ、大手の橋より、本城へぞ入りにける。光秀則ち天守へ登り、四方を望み見る所に、敵の軍兵、雲霞の如くにして、さながら五月の菖蒲の會に異ならず。穴夥しの軍兵や、敵の勢は、三萬七千九百餘人とぞ聞えけるが、左程には背くまじく、遠近の諸大名馳付けけるか、又は味方の弱兵共降參して、加はりけるか。此大勢に圍まれなば、落つる事も叶ふまじ。今夜此城を遁れ出で、安土の城へは行かずとも、せめて坂本の城

に籠り、運を天に任すべし。先づ軍兵の着到を付け、勢の程を見よとて、則ち着到付けける。申の刻には、騎馬の兵五百三十騎、弓・鐵炮の輕卒六百人餘ありけるが、酉の刻になりぬれば、以上百人には過ぎずと申しける。光秀申す樣、臆病武者は足手纏、落失せたるこそ幸なれと、廣言を吐きて、日の暮るゝを待ち居たり。其後夜半の鐘を聞きて、明智光秀、潛に靑龍寺の城中を忍び出で相從ふ郎等には、明智勝兵衞尉・進士作左衞門・堀尾與二郎・村越三十郎・山本仙入・三宅孫十郎、此等供致しける。旣に伏見へ出で、小栗栖の里を行く處に、野武士等馳せ集り、藪の中に隱れ居たり。斯くとは知らで、眞先に乘り來るは村越三十郎、思ひがけなく藪陰より、鑓突きかくると雖も、胴丸にてありければ、うらかく迄もなけれども、橫合より突かれし事なれば、眞逆樣に倒れ落つる。次に乘り來る明智日向守が右の脇腹へ突懸けたり。突かれて光秀馬を馳せ除け、高聲に申しけるは、如何に一揆の奴原、何とて味方討するぞ。汝等必ず曲事に行ふべきぞと呼ばはりける。一揆共藪の內より、味方にてはあらざるぞ、夜陰に紛れ、唯五六騎、往還の道を求めず、間道を忍び通るは、落人の正眞、討留

光秀一揆に討たる

めて物具剝げと、籔の中にて貝吹立つれば、數百人、落武者遁すなと追懸くる。光秀馬を進め、三町計馳過ぎけるが、馬より動と落ちければ、從兵周章て馳せ集る。光秀、近習の侍に申しけるは、先程我れ野武士の爲に痛手を負ひ、依つて助り難し。早くも首切つて、智音院へ送るべしといひ終り死したりける。勝兵衞、則ち光秀の首打落し、死骸をば、側なる田の中へ深く隱し、漸く落行く所に、短夜の月山の端に懸り、既に明けなんとする頃、一揆共四方に起り、落人共を討殺し、物具・衣裳を剝取り、大勢立懸り、赤裸になしけるこそ、無慙といふも餘りあり。勝兵衞も、光秀が首、隱すべき樣なかりしかば、馬韂を以て首を包み、溝中に深く隱し、漸う〳〵命を助かりけり。翌十四日の晩景に、秀吉兵を進め、三井寺に至りける。此時村井春長が郎等に、小泉義兵衞といふ者あり。道の側なる小溝の中より、泥足にて上りし跡あり、小泉は足を怪んで、小者に下知して搜させ見るに、首一つ取出す。則ち洗はせ改め見るに、明智日向守光秀が首なり。小泉能く見知りあれば、早速持參して、右の譯言上あり。秀吉方にては、渠が行方尋ぬる所、小泉手に懸けては討たざれども、明智が首

に相違なければ、大に悅び、引出物等給はり、又小栗栖の里人も、光秀が死骸を持參したり。依つて詮議を遂げけるに、鎧といひ威毛立といひ、殊更桔梗の金物を打ち、岩切といふ太刀を帶きたれば、光秀が死骸に紛れなければ、秀吉悅び、彼死骸の首を續ぎ、杖を以て首を打ち、高聲にいひけるは、君を弑する天罰は、はやも來る者かな。今亡君悅び給はんと、暫くが程責めたりける。諸軍此時、秀吉が威に恐れける。斯くて明智の先陣齋藤内藏助利三は、漸々と、戰場をば切拔けしかども、光秀が行方覺束なく、江州堅田へ落行き、民家を借りて居たりけるが、晝夜三日寢ねもせず、軍には疲れし事なれば、痛く寢入り居たりけるを、主の男之を見、落人なりと、慥に見定めければ、太刀を取隱し、其後大勢押入りて、齋藤を搦め捕りたり。早速秀吉へ獻じけり。見れば齋藤内藏助利三なり。秀吉悅び則ち下知し、光秀が首を見せ、品々と責め、其父母二人と内藏助と以上四人、粟田口日岡峠にて、磔にこそ梟けたりけれ。

織田信長横死告ニ瀧川ニ附一益、武州上州諸大名に談ず、使者北條方へ遣す

斯くて天正十年三月十三日、武田家滅亡に依つて、其賞として、瀧川左近將監・大伴宿禰、彼等には、軍功に依つて、上野國を給はる上に、關東管領に補せられ、上州厩橋の城を給はる。然るに武田旗下内藤・小幡・由良・長濱・眞田・葦田・深谷・本庄・安中・成田・木部・上田・和田等を始として、武州・上州の諸大將、皆瀧川の旗下となる。出羽・陸奥の國政迄、悉く沙汰しけり。北條氏政も、當時信長に和睦しければ、是又諸事を、瀧川と談じければ、其威、關東にぞ振ひけるに依つて、暫くも上州靜謐とぞ聞えける所に、杉山小助正次、洛中より出す所の脚力、六月七日の晩景、厩橋の城に來りて、書翰を捧ぐる故、一益披見する所に、明智光秀叛逆を企て、去る六月二日本能寺に於て、信長卿を弑し奉る。同日又二條の御所を攻め、嫡子信忠卿も、御自害ありと云云。依つて一益涙を流して、良詞を出さず。暫あつて篠岡平右衞門・津田治右衞門

尉・瀧川義太夫以下の家臣を招きて、今度信長横死の事を語り、則ち書狀說聞かす。其時一益が甥義太夫申しけるは、此儀は、天下の一大事なり。譬ひ家人へ御談話ありとも、暫の間、御心決する迄は、先づ隱密然るべしと申す。一益是を聞き、汝が申す所、尤も一理ありとは雖も、好事は門を出でず惡事千里を走る習なれば、隱すと雖も、一兩日は過ぐべからず。愁に他人の口より沙汰あらば、人の心疑附きて、一同する事あるべからず。斯樣の時節に、運を天道に任すれば、何れの時か待つべき。一益が一生の浮沈、唯此時に極まりたり。扨又一益の所爲は、關東の諸大將を、悉く招き集め、直に此事を披露して人質を返し、一益は上洛して、明智を討亡し、亡君の仇を報いんと思ふなり。斯樣の時節、敵に氣を呑まるゝは、勇士の恥辱とする所なり。然るに上州の旗下共志を飜し、一益を喰留め、討果さんとするならば、旣に運果てぬと心得、速に討死せん。若し又味方に屬するならば、言甲斐なく此城を、開退けんも口惜しければ、使者を北條へ遣し、若し氏政不渡來るならば一戰し、勝負に構はず、一益上洛して、光秀を討亡し、又こそ攻下るべしと、則ち幕下の諸大將へ使を馳せ、急ぎ

談じ申すべき事有レ之間、厩橋城中へ來らるべしと觸れにける。同十日晩景には、旗下の諸大將、厩橋の城へ集まる。時に一益、座上にて申しけるは、明智光秀逆心して、本能寺へ押寄せ、信長卿を弑し奉り、又二條の御所へも押寄せ、信忠卿御自害候由、七日に告げ來る。是れ去る二日といへり。是に依つて、一益は急ぎ上洛仕り、光秀を誅戮し、亡君の鬱憤を散ぜんと存ずるなり。面々人質を出し、箕輪の城に入置きたるを、殘らず返し候上は、一益が上洛の弊に乘つて兵を起し、此瀧川が首取つて北條へ降參し、本領安堵せんとならば、一益と一戰あるべし。引出物には、此瀧川が首を、面々へ進ずべし。若し又我に一味あらば、北條へ使者を立て、厩橋を渡すべし。然らば北條父子の內、定めて出張仕らん。其時一戰し、其後上洛すべしと存ず。面々の心底、殘らず委細に申聞さるべし。譬ひ心替へられ候とも、聊も恨に存ぜずとて、則ち一間に入る。諸大將此事を聞き、面々如何と評定す。內藤・小幡、一同に申しけるは、瀧川の今の口跡、義勇を兼ねたり。斯程の大事を、少しも包む氣色なく、有の儘に諸大將へ告知らするのみならず、人質を返さんといふ。是れ則ち倫に

越えたり。瀧川義を守りて斯くいへるに、我等又爭でか不義をなさんや。二心なく從つて、生死を共にすべしといふ。諸大將尤も同心し、則ち瀧川義太夫を取次となし、一益方へ申しけるは、先年武田亡びし時、追討あるべきに、我々信長卿の情に依つて、一命を助けられ、殊更本領迄安堵したり。然れども其恩を一度も報いずして、信長卿隱れ給へば、誠に本意なき事共なり。せめての事に、北條と御一戰候はんには、先陣を仕り、大恩を報じ候べし。若し又直に上洛あらば、路程同伴申すべしと、委細に申入れたり。瀧川左近將監一益、此由を聞きて淚を流し、再び諸將へ對面して、各の志、海山と思ふなり。何を以てか報ずべき。されば主君の御敵なれば、某は急ぎ上洛して、明智を討たんと存ずれども、信雄・信孝御兄弟、幷に譜代恩顧の者共、京近くに侍れば、光秀が滅亡、瀧川が上洛迄は、延ぶべからずと存ずるなり。案ずるに氏康父子、信長卿橫死を聞かば、日頃の約を變じ、一益を討つて、武州・上州を押領せんと、必ず出張すべし。敵に先をせられぬ先に、此方より兵を出し、北條方へ使を遣し、厩橋渡すべければ、來り向ひ給へと申送る。勢を出さば一戰し、其後上洛仕

るか、又は討死仕るとも、其時に隨ふべし。各如何と問ひければ、然るべしとて同じける。依つて六月十一日、勢州の住人藏田小次郎とて、大力の剛の者を、小田原へ遣しける。同十三日申の刻、小田原へ參着し、松田尾張守を以て、右の委細を申入る。北條父子大に悅び、御使節其意を得たり。氏政・氏直罷向ひ、厩橋請取るべしと、早早返事したりけり。小次郎則ち馳返つて、爾々と申しければ、一益、さこそありつれ、此上は一戰し、運の程を見んとて、其用意をぞしたりける。

瀧川一益、北條氏政と上州神名川合戰 附 一益上洛

去程に北條、瀧川の使者に依つて、軍兵を集め、新九郎氏直大將軍にて、小田原を打立ち、武州富田・石神に陣を張り、本庄に旗を立て、後陣は其深谷・熊谷・鴻の巢邊に支へたり。其勢二萬餘兵なり。又北條左京大夫氏政は、三萬餘兵を引率して、松田海道を經て、武州吉見領甲山を本陣として、先手神名川・烏川の邊に向ふべしと下知をなす。大手氏政、搦手は氏直、父子の勢都合五萬餘兵、同十八日着陣したり。時に北

條氏邦、武州小衾郡鉢形の城主なりけるが、生得氣早なる若將なれば、此事を聞くより、家の子郎等を集めて申しけるは、瀧川、信長の自害を聞きて、京都へ馳登らんとする由なり。大將も士卒も心臆して、墓々しき合戰なるべからず。其上上州の諸大將等も、定めて心を變じ、瀧川には合力すまじ。たとひ瀧川鬼神なりとも、手勢計にて合戰なるべからず。依つて先陣し、上州の城々攻め落し、高名せんとて、其勢五千計引率して、大軍の列を拔け出で、馬を馳せたり。去る程に瀧川厩橋の城には、瀧川彦四郎を大將として、二百餘騎を差添へ、又松井田城には、津田小平治・稻田九藏八千餘人差添へ、城を守らせ、我身は、其勢一萬八千餘人引率し、金窪臺に陣したり。先陣は上州衆なり。先づ小幡上總助信眞・內藤大和守秋宣・和田石見守義常・由良信濃守國繁・安中左近將監廣盛・深谷庄兵衛尉忠季・成田下總守長氏・上田上野助政景入道・高山遠江守・木部宮內少輔貞朝・長尾但馬守景定・眞田安房守昌幸・葦田下總守・長尾新五郎景繁、一萬八千餘人なり。斯くて小田原の先陣には、北條安房守氏邦・松田尾張守康秀・大道寺駿河守政繁・芳賀伊豫守顯國・原美右衛門尉胤房・高井主水正秀

房・多目權兵衞尉長定・猪股能登守範直・黑澤上野助秋則、其勢都合二萬餘人、金窪に陣し、旣に矢合の軍射違へ、互に鐵炮を放すと其儘、北條氏邦前後をも見ず、繕時作り懸け突懸くる。然りと雖も瀧川の先陣は、上州衆は、皆武田信玄・息勝賴二代迄、彼幕下に屬し、軍に馴れたる大剛の者共なれば、少しも驚かず、馬の鼻を魚鱗に並べ、敵の來るを待請け、半町計來りける。先づ弓・鐵炮の輕卒を以て、射立て打立てさせければ、北條の先陣數百人討殺され、少し白みて、馬足四度路になるを見濟し、颪の發る如く、颯と馳合せて戰ひけり。汗馬東西に馳せ違ひ、追ひつ返しつ、突合ひ、切合ひ、火花を散らして揉合ひたり。頃は天正十年六月十九日、暑さは暑し、重き鎧着て戰ひければ、互に汗馬を進むる故、汗馬の汗目に入り、打つ太刀も安からず。北條氏邦方には、石山大學・保坂大炊助を始めとして、究竟の侍百餘騎討死し、手負二百餘とぞ聞えけり。瀧川の先登上州衆には、佐伯伊賀守を始として、百八十餘騎討死なり。別して北條方は、長途を經て來る故、人馬共に大に疲れ、其上合戰の始め三四町馳せ來つて馳散らさんと時を待つ。上州衆は兼てより、馬には秣を飼ひ、軍

兵等も悉く、兵糧を遣つて待受け、僅半町計になりて、懸合ひたりければ、人馬も疲れざる故に、北條方忽ち討負けて敗北しける。勝に乘つて追討し、百餘人討取りけり。依つて先陣氏邦敗北すれば、新九郎氏直大に怒り、松田肥後守秀詮・同右京大夫清秀・同藤右衛門勝秀・間宮式部少輔好則・同源四郎好宗以下先陣として、氏直自ら二萬餘騎を引纏め、上州・武州の間神名川に馳せ向ふ。上州衆は、水邊に下り居て、今朝の軍の疲を休めて、汗馬を洗ひ馬足を冷して、手負を助け居たる所に、氏直の二萬餘騎、雲霞の如く押し來る。瀧川一益之を見、今度は一益馳せ向ひ、一戰すべければ、上州衆は、二陣に續き給へとて、一益先登に進めば、相從ふ輩には、瀧川義太夫・津田治右衛門尉・藏田小次郎・日置文左衛門尉・津田八郎五郎・同修理亮・富田善太郎・牧野傳藏・佐野與八郎・谷崎忠右衛門尉・栗田金右衛門・岩田市右衛門・矢田五右衛門・長島圖書亮・山田主水以下、手勢僅三千餘人、玉村の方へ馳せ向ふ。小田原勢之を見、敵は思の外小勢なり、蹴散らして捨てよとて、一矢射違ふると等しく、眞鋒に打つて懸る。瀧川の軍兵は、元來小勢の事なれば、兼て討死と思ひ定めたる故、少しも命を惜

しまず相戰ふ。小田原方は大勢なれば、犇々と取圍んで討たんとす。瀧川勢は打破つて、大勢の圍を出づる。又打圍めば打破る。三度迄揉合ひけるが、如何したりけん、小田原勢追立てられ、足を亂して敗走す。瀧川勢勝に乘つて、追懸け〳〵討つ程に、北條方の軍兵、三百餘人討死す。其時氏直、旗本の大軍を以て、眞中に取込め討つべしと評議し、僞り引きけるが、敵に稠しく追立てられ、心ならず逃げける程に、軍兵若干討たれたり。

氏直敗軍

上州治亂記 卷之十一 終

上州治亂記卷之十二

再び神名川合戰、瀧川左近將監一益上洛

斯くて天正十年六月十九日、上州神名川の合戰、先陣・二陣共に北條家紋所に依つて、此註進、大手の本陣甲山へ告げ來るに依つて、大將北條左京大夫此事を聞き、彼れ小勢と見て、忽(ゆるがせ)にはなすべからずと、先陣伊勢備中守貞宗・石卷勘解由康信・同左馬亮康昌・芳賀伯耆守正綱・波多野勘解由左衞門・富田左近信則・小田助三郎長宗・大藤長門守高直・片山大膳治則以下一萬餘人、氏政の舍弟北條美濃守氏則を軍將として、神名川を馳渡し、瀧川が後脇より打出で、鬨を作り引包んで、一人も洩らさじと圍み攻めたり。誠に其の鋭氣を避け、其の惰氣を打つといふ兵書ありと覺えて、遁れ難く見る所に、瀧川が先陣篠岡平右衞門尉・津田治右衞門以下、前後の敵を見て、

今は術盡き、又後陣の上州衆は、今朝の軍に疲れけるか、又は敵の大勢に心臆しけるかや。但し後詰の難を恐るゝか、更に進み來らず。戰ひ疲れたる此小勢、戰ふとも利はあるまじ。微運の我々、長らへたりとも、何程の事かあるべき。命限りに軍して、弓取の義を專らにすべしとて、馬の足を立直す。其時瀧川大音揚げ、下知しけるは、運は天にあり、死生命あり、敵中へ打入りて討死せよ。東國の軍兵と合戰するは、今日が初めなるぞ、惡びれて敵に笑られな。今度軍を弱めば、信長卿の御武名を下し、上方衆、高名なきに等しくなるべきぞ。命を輕んじ名を重くせよ。味方小勢なれば、馬の鼻を並べ破り通り、首は取るべからず。且味方に離るな、左右に眼を賦つて、懸る敵をば一太刀打つて馳通り、組まんとする敵あらば、鞭を打ち、又は鐙の鼻にて蹴落せ。向ふ敵をば、馬の頭を切さす、進み得ざるものと、委細に下知して、後より廻りける氏則が勢に懸合せんと、靜に馬を歩ませける。氣色大勢あれども恐れず、後に味方なきをも憂へず、猛勇邊を拂つて見えたりける。さる程に敵間近くなりしかば、瀧川が兵士共、喚き叫んで、大山の崩るゝが如く馳入る。氏則元來大勢な

れば、犇々と取圍んで討たんとすれば、又打破つて馳通り、取つて返して馳せ入り、一三度が程揉合ひたるに、小田原の先陣追立てられ、右往左往に敗走す。はや瀧川討勝つと見ゆる所に、氏則三十騎程にて、鑓先を揃へて打つて懸る。瀧川少しも屈せず、彼勢に渡り合ひ、散々に戰ひけり。日も既に夕日に及び、氏直の大勢再び進み來り、前後左右より揉立て、戰ひ疲れたる瀧川勢共、大將一益を引取らせんと、篠岡平右衞門・津田治右衞門・舍弟八郎五郎・同利助・岩田市右衞門・舍弟平藏・栗田金右衞門・大田五郎右衞門を始めとして、五百餘騎蹈留つて、悉く討死す。此間に一益は、圍を切拔け、厩橋の城へ引退く。敵もさまで進まざりければ、金久保といふ所にて、敗軍の勢を集め、瀧川、上州衆に申しけるは、面々合力し給ひて、今一度戰して、運の程を試み候べしと申せども、今朝よりの合戰に疲れ、手負餘多候へば難叶候。後日に御合戰あるべしとて、進む人なかりければ、一益今は力なしとて、厩橋の城に歸り、今日討死の輩が假名實名を書記し、金銀餘多差添へて、城下の寺院に持たせ送り、孝養をぞしたりける。其後一益、上州衆を招き集め、少しも憂へたる氣色なく、盃を

取出し、自ら鼓を打つて謠ひけるが、扇を取直し兵に交り、賴みある中の酒宴かなと、舞ひ奏でたりければ、倉賀野淡路守も、又拍子を打つて、名殘今はと鳴く鳥かなと謠ひて、終夜酒宴をぞしたりける。其後瀧川、太刀・長刀幷金銀、其外日頃祕藏しける懸物以下、悉く取出し、上州衆に與へけり。是れ今日の軍功の、褒美とぞ聞えける。旣に曉天に及びければ、一益厩橋の城を出で上洛するに、上州衆餘波を惜しみ皆淚をぞ催しける。是より先、上州衆の人質をば悉く出して、領々へ送りけり。瀧川其日は松枝の城へ至り、上川衆是迄送り、翌日津田小平治を伴ひ、臼井を經て小諸に至り、是より人質悉く、小平治に相添へ返しける。上沼田に至りければ、眞田安房守昌幸馳走して、諏訪迄送り、木曾路を經て行く所に、木曾左馬頭義昌、軍兵を卷添へ、勢州津島といふ所迄、一益を送りけり。是より瀧川、尾州淸州の城へ參り、三法師殿に拜禮して、又勢州にぞ返りける。去程に上州の國侍は、瀧川上洛しける後、皆北條家へ降參し、彼幕下に屬しければ、上州平均せり。又信州小諸の城主道家彥八郎正榮、伊奈の城主毛利河內守秀賴等も、瀧川上京する故に、城を捨てゝ上洛す。沼

上杉景勝信州を領す

田の城主眞田安房守昌幸、德川家へ相屬す。此時より眞田家は、初めて德川家御幕下とはなりたりけり。さるに依つて、信州は忽ち明國とはなりたり。此時河中島・田郡・高井・永內・更科・植科等の領は、森勝藏長一暫く在城しける所に、信長父子の横死を聞きて、越州長尾喜平治景勝、此弊に乘つて大軍を引率し、河中島の城を攻むる。勝藏、弓・鐵炮を飛ばせ、其後突出で〳〵、散々に防戰し、五六日相挑む。之に依つて、景勝勢三百七十騐騎討取る。城兵僅百人には足らず討たれける。されども寄手、若干の大勢なれば、事とも思はず、荒手を入替へ〳〵、夜晝となく攻立つる。此城、今は後詰の方便はなく、味方の城々は、悉く開除きたり。今は力なく、城を落ちん用意をぞしたる。或夜風雨甚しく、敵兵帷幕を垂れ、休息して居たる所へ、城兵都合千五百騎、一向夜討の支度して、景勝が先陣へ、夜討にこそは入りたりけれ。敵は思ひ懸けざる事なれば、軍兵大に騷動して、敵味方の分り兼ね、依つて同士討する者多かりける。此紛れに城兵は、事故なく落行きたり。此故に景勝、信州河中島を押領せり。

秀吉就〻催〻行幸〻申〻送家康公上洛之儀〻家康公大樹寺御參詣

凡そ天下の變化を見るに、文明年中より天正半に至り、君の威衰へ、東西武命微す。南北の諸侯大夫、旣に國々に蟠つて自由を働き、誠に畿內遠境に、君なきに似たり。然れども天正十年には、信長横死ありし後、羽柴秀吉、獨り武威を畿內近國に振ひ、偏に將軍の如くなり。天正十一年三月、小牧の合戰を和睦なし、後天正十二年三月長久手の合戰、是も和睦なし、之に依つて、國々の諸侯、强いて天下の權を讓りけるより、秀吉の威、國中に輝きける。然るに天正十五年十一月、豐臣秀吉公は、西尾小左衞門尉を使者とし、駿府へ遣し申されけるは、來年聚樂亭に、行幸を進め奉らんと思へり。德川にも、上洛あり給ふべき由申送られける。家康公御返事には、聚樂亭へ行幸催せらるゝに付きて、家康も上洛あるべき旨、相心得候。其期に至り參進すべし。御支度に付き、萬一御用候はんには、承るべしとぞ仰せ遣されける。當時關

白太政大臣豐臣秀吉と、官位昇進し、勇猛秀で、古今の智謀世に勝る。故に南蠻を鎮め、北狄を傾け、西戎を征し、今に殘る處は、關八州東夷のみなり。往昔秀吉は、主君の敵明智光秀を誅戮し、君恩を報じて武威普く四海に振ひ、寵榮頗る四民を澤す。然れども天正十五年九月十八日、大坂より聚樂館へ御徙移なり。其後家康公、參州を立たせ給ひ、四月二日入洛あり。秀吉大に悦び、種々御音物を送り、翌三日聚樂に招請し、樣々御饗應し給ひけり。

關白太政大臣豐臣秀吉公、使者遣二北條氏政一催二上洛一秀吉軍勢催促

斯くて關白秀吉公、西戎を征伐するの後は、天下の諸侯、悉く彼の命に從ひしかども、未だ關八州は、武命に從はず。其故は、相州小田原伊勢新九郎平氏長といふ者あり。渠は平相國清盛卿の八男、資盛の末裔といふ沙汰あれども然らず。氏長は、桓武帝より廿一代、伊勢守氏貞には孫、伊勢駿河守照康の子なり。生國は備中な

り。彼國に於て、三百貫を押領す。然るに立身を心懸け、所領を捨てゝ去る。康正元年三月、京都に上り、足利將軍義政卿に奉仕しけれども、立身ならず。是れ廿五代の時なり。同三年の春、京都を出奔して駿河に來り、今川五郎氏新を賴み居住す。明應元年三月、今川氏親より、富士郡下方の庄を給はり、剩へ伊豆駿河境高國寺の城主として、同二年九月上旬、伊豆國韮山の城を攻取り、彼城に移り、其後伊豆公方堀越の御所茶々丸殿を攻殺し、伊豆一國を押領し、之に依つて、伊勢氏を改め北條と號す。剃髮して早雲といふ。其後上杉管領幕下相州小田原城主大森信濃守實穎を追落し、小田原に移る。是は明應四年二月十五日なり。其後上杉管領に打勝ち、終には伊豆・相模・武藏・上野・下野・安房・上總・下總、此八州を押領す。飛龍の如く登り、其子氏綱・其子氏康・其子氏政・其子氏直五代連續し、武威を關東に振ひ、更に朝廷にも恐れず、武命をも憚らず、曾て諸侯の動なし。關白秀吉公、日本政道の衰へたるを、□□□□□天正十七年、津田隼人正信秀・左近將監貞高兩人を使者として、相州小田原へ差下しける。右兩使、小田原に着し、右の趣言入る。之に依つて、北條右衞門康

秀吉北條氏政の上洛を促す

定對面し、關白秀吉公の上意を述ぶる。普天下率土の濱に身を置き、餘多國を領し乍ら、終に參内を遂げざる事、偏に朝恩を知らず、是れ非人に似たるべし。早く上洛然るべし。之に依つて、敕諚此の如しと申送る。北條父子の返答に云、此度敕諚の趣、畏り奉る。尤も氏政・氏直父子、上洛仕るべき旨肯うて、兩使は小田原を立ちて、駿府の城に立寄り、秀吉の口上幷に北條返答、直に德川家康公へ申上ぐる。是れ氏眞、家康公の御婿たる故なり。其後立歸り、秀吉公へ申しけるは、今度北條の有樣、家臣等風情、且つ敕答の趣を窺ひ侍る所に、敕命に應じたるに似たれども、實は應ぜざる體と相見え候。唯言を巧にし、年月を相送りぬ。其間には、如何なる變や出來せんと、百謀千慮するかと覺え候。右あらまし、德川殿へも物語仕候處に、德川殿仰には、北條上洛すべしと申す事、誠し難し。眞實に和睦して、上洛せんと思はんには、人質をも所望し、且又北條も人質を進ずべしなど、其仔細を申すべき處に、其儀なく、關八州の領主たる北條父子が、召に隨ひ、浮々と上洛すべしと申す條、更に誠とすべきにあらず。氏政・氏直、譬ひ愚にして、人質所望の心付かずとも、相從ふ輩は、古老武功

勇士若干にありなんぞ。津田・富田に向つて、人質の事所望せざるべき。然るに更に其事なく、上洛せんと申すは、言を巧みにして、年月を送らんとするの條、鏡に向ふが如しと、仰せられ候と申す譬あれば、秀吉聞きて、德川殿の推量、掌を指すが如し。先んずる時は、人を制するに利ありといふ本文あれば、秀吉遮つて、來春は進發、北條を退治せんとて、はや國々へ廻文を遣しけり。其狀に曰、

來春關東小田原陣御軍役之事

五畿内半役、中國四人役、幷四國同、自坂至尾州六人役、北國六人半役、遠州・參州・駿州・甲州・信州此五箇國七人役、

右任二軍役之旨一、來春三月朔日令二出陣一、攻二平小田原北條一、可レ有二忠勤一者也。仍如レ件。

天正十七年己丑十月十日　秀吉在判

此の如く認めて、國々へ觸れ遣す。其後江州水口の城主長束大藏大輔正家棟梁として、其下奉行十人相定め、年內代官所より、米二十萬石を受取りて、來春早々舟に積み、駿州江尻清水の邊に着船さすべし。彼所に米倉を作り、米穀を入置き、總軍勢に

之を渡すべし。また黃金一萬枚を以て、伊勢・尾張・三州・遠州・駿州、此五箇所の兵糧を買調へ、小田原近き湊々へ着岸さすべしと下知あり。十一月初旬より、軍の用意なしけり。

秀吉氏政と矛盾濫觴

今度秀吉・氏政の矛盾に及ぶ其濫觴は、北條上洛せざる事にあらず〔本ノマヽ〕。其故を尋ぬるに、去天正十年、織田信長、明智が爲めに御生害の砌、甲州・信州兩國は、明國となりけるを、家康公甲州に亂入あり、彼國を靜めん爲め、守護たる河尻肥後守鎭吉に力を添へ給ふべき由、本多百助を以て、仰遣されける所に、川尻は、家康公を疑ひ奉り、殺害して遁れんとしけるを、甲州一揆して、終に彼を打殺す。之に依つて、家康公、甲州を押領し給ひける。然る所に甲州の住人大村三右衞門道賴・同伊勢守道範といふ者、內々此趣を、小田原へ註進する故に、北條則ち出馬して、郡內を討取り、若神子に陣取りて家康と對陣し、足輕軍挑事、百日に及びけり。然る處に北條氏政舍弟 上

野國館の城主北條美濃守氏親は、先年駿河の主將今川刑部少輔氏眞治國の頃、家康公其舊好により、和睦の事を取持ち、勝頼領國の內、甲州·信州一圓に、德川殿の御領として、上野一國をば、北條之を押領し、德川殿息女を以て、氏直に娶はせ、親み結ぶべしと契約しける。家康公御同心ありしかば、切取る所の郡內をも、家康公に相渡し、北條は歸陣したり。其後祝言口息女小田原に入輿の後、氏政使者を以て申しけるは、旣に甲斐·信濃御分國となる上は、兼約の如く、上州殘らず領すべきに、德川殿の從軍眞田安房守昌幸、沼田領を知行して、北條家に從はず。早く下知あつて、渡さるべしとぞ申しける。家康公、尤とて、眞田に樣々仰せけれども、沼田の領は、德川家より、昌幸に給はらず、武勇を以て切取りたれば、叶ふまじとて渡されず。家康公仰には、我が領する分國に、沼田の替地更になし。後日に其沙汰すべし。さなれば先づ北條に渡すべしとて、再三强ひて仰せければ、眞田重ねて申しけるは、信濃國川中島四郡は、上杉喜平治景勝領して、御手に入らず。今眞田昌幸、力を以て、川中島を切取るべければ、給はりなんやと望みけり。然れども此頃秀吉と家康と、長久手合

戰、未だ和睦なき折節なれば、大敵の秀吉と軍を挑む最中、叉景勝と軍せん事、益なき事に思召し、唯沼田をば明渡し、上田計を知行すべし。時分を以て、沼田の替地給はるべしと宣ひけれども、眞田是に從はず、終に反逆を企てけり。之に依つて、家康公より大勢差向け、合戰度々に及びしかども、眞田終に雌伏せず、秀吉の幕下に屬す。然る後家康公と秀吉御和睦調ひ、北條も叉和睦して、氏政が代官として、北條美濃守氏親、上方へ馳せ上り、秀吉へ申しけるは、上野國沼田領、北條に給はるべしと、直に仔細を申しける。秀吉尤と心得國境を糺明し、沼田に渡すべし。然る上は人質として、先づ老臣を差上げ、其身も進登るべしと、御返事ありければ、氏規馳せ歸り、然然と申しけり。氏政の下知として、北條家乘坂部江雪齋を登せ、沼田領受取るべき證文を乞ひけり。秀吉の仰には、沼田領の內、奈久留美といふ所は、代々眞田墓所なれば、此所を眞田に給ひ、其外は悉く北條に渡さるゝ上は、氏政急に上洛すべしとありければ、江雪齋畏りて、來る十二月の時分には、氏政上洛仕らんと堅く契約し、江雪齋は歸りけり。此時に沼田の城は、武州鉢形の城主北條安房守氏邦に與へけり、

氏邦幕下に猪股能登守範直といふ者あり。渠は右大將賴朝公の御家人猪股小平六範綱が末葉なり。近年氏邦に相從ひ、奈久留美の城主とならんと、朝夕心に懸くる所に、奈久留美をば眞田に取られ、口惜しく思ひけり。天性猪股は、夷中武士にて、主より外、恐ろしき者なしと、頑に覺えたる荒夷の不敵者なり。後の煩をも考へず、俄に兵を進ませ、奈久留美の城攻取り、眞田が兵を追散らし、奈久留美を取りしかば、沼田悉く、北條が知行となる。眞田大に怒り、秀吉に訴へけり。秀吉忿怒し、去頃も、明王院を使とし、氏政方へ仰せけるは、上洛せんと申すに依つて、沼田領を渡す所、其約束を變改し、未だ上洛をも仕らず、其上上意を經ず、奈久留美を攻取る事、是に過ぎたる罪科なし。急ぎ北條を攻取るべしと、軍兵を催促しけり。此事北條傳へ聞き、石卷左馬介康昌を差上せ、氏政父子も、近々上洛せんと用意の所に、俄に所勞に依つて、心ならず延引せり。本復次第上京すべし。次に上州奈久留美は、全く氏政下知にあらず。邊土の郎等の所業なり。之に依つて逅進すべしと、樣々陳防す。然れども氏政父子、秀吉を輕忽したれば、其口上を信用せず。剩へ使者石卷を

召捕りて、則ち獄舍に入置き、小田原へ飛脚を以て、難題申送り、小田原發向を觸れたりけり。

上州治亂記卷之十二終

上州治亂記卷之十三

秀吉三箇條遣二小田原一

一、北條事、近年蔑二公儀一不レ能二上洛一殊ニ於二關東一任二雅意一猥藉不レ及二是非一。然間去年可レ被レ加二御誅罰一之所、駿河大納言家康卿之依レ爲二緣者一、種々懇望候間、以二條數一被レ仰出一候得者御請、就レ中被レ成二御赦免一、則美濃守罷上御禮申上事。

一、先年徳川殿被二相定一條數、徳川殿へ表裏ノ樣ニ申上候間、美濃守被レ成二御對面一之上、境目之儀被二聞屆一有樣ニ、可レ被二仰付一候間、郎從差越候得へト、被二仰出一處ニ、坂部江雪差上、畢テ徳川殿ト北條ト、度々堅ク約諾ノ儀、與二如何一御尋候處ニ、其意趣ハ、甲斐・信濃ノ城ニハ、徳川殿手柄次第可二申付一、上野ノ内ハ北條ニ可レ被二申付一由相定、甲斐・信濃兩國ハ、則徳川殿ニ被二申付一、上野國沼田之儀ハ、不レ及二北條自力一、却テ徳川殿相定之

樣ニ、申成シ寄ル事、左右ニ於テ、北條出仕迷惑之由申上候歟ト、被思召、於其儀ハ、可被下沼田由。乍去上野之內、眞田持來候知行三分二ハ、沼田之城ニ相附、可被下北條候。三分一ハ眞田ニ被仰付候條、其中ニ有之候城ハ、眞田可相抱之由被仰定。右北條ニ被下候三分二ノ替地ハ、自德川殿眞田ニ被相渡ベキ旨、御極メ被成、上洛可仕由、一札出シ候上ハ、則上使被差越、於沼田可相定被仰出、江雪被歸下事。

一、當極月上旬、氏政可被出仕旨、御請之一札進上候上ハ、右之一札相濟、則可被罷上與思召候處、眞田相抱候攻取奈久留美城、表裏仕候上ハ、可成御對面候。彼使雖可及生害、命ヲ助ケ候事、秀吉若輩之時成孤、信長之幕下ニ屬シ、身ヲ山野ニ捨テ、骨ヲ海岸ニ碎キ、矛ヲ枕トシテ、夜半ニ寢ネ夙ニ起キ、軍忠ヲ盡シ功ヲ勵シ、然而西國征伐之儀被仰付、大敵ニ對シ雌雄ヲ爭ヒ、明智光秀以無道故ニ、奉弑信長公、聞屆此註進、彌彼表ヘ押詰、任存命不移時刻令上洛、伐逆徒光秀首、奉報恩惠雪會稽。其後柴田修理亮勝家、忘信長公之厚恩、亂國家叛逆候條、是又令退治畢。此外叛者ハ討テ、降ル者ヲバ赦之、旌下ニ屬サズトイフ者ナシ。就中一言之表裏不可有之。

以ニ此故一相ニ叶天命一。予既ニ登龍揚鷹之譽ヲ上ゲ、鹽梅則闕ノ臣ト成ツテ、萬機ノ政關スル所ニ、氏政背ニ天道正理一、口口ノ書巧訴ヲ罰ス不レ知レ拙。誠ニ普天ノ下、敕命ニ逆フ輩ハ、早ク不レ可レ有レ不レ加ニ誅罰一。來歲携ニ節旄一令ニ進發一、可レ刎ニ氏政ガ首事、不レ可レ廻レ踵者也。

天正十七年十一月廿四日　秀吉

北條左京大夫殿へ

とぞ書かれける。氏政此狀を披見して、舍弟陸奧守氏輝に向つて、秀吉といふ猿面郎が、身の分限を知らずして、斯樣の事共奇怪なり。抑此關白は、尾州凡下の者の子なりしが、遠州の地下侍松下加兵衞之綱といふ者の被官となつて、木下藤吉郎と號し、其身才覺ありけるか、又は果報に依りけるか、信長、新參侍となし、手を犇したる高名はなけれども、其身健にして謀賢く、軍大將となりて、度々勝利を得たりしかば、信長渠を取立て、兩國の大將とせられしに、所々の敵を打靡けたる頃、信長生害あり。諸將の心落付かざる所に、秀吉大氣の謀を以て、大敵毛利輝元と和睦し、剩へ毛利方より加勢を請ひ、帝都に攻上り、信長三男神戸三七郎信孝を大將として、明智

光秀と山崎にて戰ひ、光秀を誅戮せる後、はや侈りて信孝を蔑如にし、終に信孝を弑したり。然るに此書、轇に一言の表裏なしといふ事、大に笑ふべし。秀吉、上方の弱敵に馴れ、東士をも之に准ず。酌子を以て定規に用ふる譬の如し。秀吉は、遙々東國に來るとも、忽ち料盡き、能き時分を計り逆寄せし、討散らさん事、何の仔細かあるべきとて、强ひて驚く氣色なく、返翰にも及ばず、脚力を捕へて、則ち獄舍に入る。是石卷左馬之助を、獄舍取入れし返替と聞えたり。

小田原城中奉行頭人評定、伊勢備中守諷諫、氏政、松田尾張守諷諫を申破る

斯くて天正十八年正月二日、北條左京大夫氏政・息新九郎氏直家にて、奉行頭人會合して、關八州の政事を沙汰す。是は每月十一日十七日、兩度宛會する所なり。今月も又公文所に會合せり。其人々には、伊勢備中守貞宗・大和兵部少輔時親・松田尾張守康秀・同肥後守秀範・山角上野助定方・小笠原播磨守長範・山留紀伊守定勝・坪賀伯

耆守綱司・安藤豐後守正秀・坂部紅雪齋等、此時松田尾張守、病氣に依つて出仕せず。今日評定所は、去年の冬、秀吉より、氏政父子の上洛を催促す。肯ひ乍ら未だ果さず。秀吉之を憤り、北條家退治として、廻文を諸國へ遣し、軍兵を催促し、今年三月朔日に究るなり。此事を聞かれ、唯箱根の切所を賴みにして、優緩と其設なし。此事決定なれば、尤も由々しき大事なり。早く氏政の聞に達し、其沙汰に及ぶべしとて、殘らず出仕して、國々への廻文幷兵糧駿州へ廻す沙汰、且つ米穀を買取る儀一々是を申し、其用意あるべしと諷諫しけり。氏政、尤と思へる氣色にて、如何ともいひ兼ね乍ら見る所に、北條家の侍大將松田尾張守は、病氣快氣して出座しけるが、聞きも敢ず居長高になりて申しけるは、各申上げられ候趣を、さみするに似たれども、所存申さずとも、却て僞あるに似たれば、憚らず申すなり。面々の評する所、道理あるに似たれども、慮定まらずや。抑東國と申すは、京都より遙々遠國にて、殊に大井川・箱根等の大難所あり。然るを件の猿面郞、例の不敵の方便として、思立ち候とも、敢て此儀叶ふまじ。傳へ聞く、往昔平淸盛入道、賴朝を討たんとて、嫡孫小松權

平維盛、十萬餘兵を率しけれども、富士川に下り居る鳥の羽音に驚きて、一戰もせず、逃登る。是併東國は、武勇の國と沙汰ある故ならずや。又建武年中に、足利尊氏・新田義貞確執に及びし時、義貞關東に攻め下り、其路次所々の軍に、義貞度々打勝ち、既に其勢、箱根・竹下迄攻付けしかども、彼軍に討負け、京都に逃登る。是れ地の利勝ちたる故ならずや。其上昔に、古人の勇ある國と勇なき國に競べ、對照していふ時は、日本國の兵を以て、關八州の兵に向ひ、又八州の兵を以て、武藏・相模の兵に向ふといへり。然る所に關八州は、北條家の分國なり。地形といひ武勇といひ、旁以て日本勝れたり。案ずるに秀吉の猿面郎、上方邊の弱敵共に打勝ち、其弊に乘り、當表迄も是に類す。强敵の逢ひある事、雲泥萬里の口あり。何ぞ用心に及ばんや。若し秀吉寄せ來らば、小冠者原に口一本々々授け、口々差向けらるゝ者ならば、不足あらじと存ずるなり。又兵糧を駿州へ遣す由沙汰あれども、虛實分明ならず。某案ずる所は、此の如く披露せば、北條家驚きて、定めて降參致すべし。然る時は口口口口を過失として、八州を半減し、家人の思ひをなさんと計り、恐るべきならずといふ。伊

勢備中守申しけるは、康秀推量、さる事にて候へども、傳へ聞く、秀吉假にも申出す事を、飜さゞる人といへり。旣に九州退治にも、其兵二十萬人なり。東國へ向ひなば、定めて勢は多からん。難所を賴み給へども、大軍に切所なし。野も山も、海川共に一面に押寄せば、防戰に方便なかるべし。虎口計を守らん事、謀なきに似たり。庶幾は先非を悔え、誤を謝し給ひ、德川殿を御賴み、御詫言あらんには、本領安堵疑なし。德川殿の仰をば、秀吉更に違背せじ。其上氏直卿、德川殿の御婿なれば、爭でか惡しく取成さん。御賴あらんには、一向取持ち給はんには叶はじといふ事あらん。是非又降參あるまじく御一戰を遂げられれば、道々切所々々に、何程か出城を構へ、或は難所に柵を結ひ、其所にも守兵を置き、長途を經來る敵軍を、所々に惱しなば、敵より和睦する事あらんか。此兩樣思案あつて然るべしと申しければ、一座の頭人評定衆も、然るべしと申す處に、松田尾張守大に怒て、貞宗申す處、地形と人とに心付かず、大軍を恐れ、謀足らざるか。九州の軍を以て、東國の軍に准ず。是れ更に同じからず。兵書にもいふ事あり。天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に

如かず。爰を以て案ずるに、九州の兵多しと雖も、一人々々國を守る。總大將なき故に、九國の勢は和せず。之に依つて勝つべき道理なし。若し九州一味して、大將一人の下知に應ぜば口口べきか。抑關八州と申すは、北條一人大將とて、八箇國の諸將、悉く家人なれば、是れ和したる兵ならずや。地利も又嶮岨多し。人和に付き地の利に付き、九州の軍に似べからず。又德川殿を賴まれんも、口惜しき事なるべし。尤も父子の好あれば、否とは仰あるまじけれども、德川殿、幕下たる眞田を背かせ給ふ事は、北條家の所爲ならずや。剩へ沼田領を、北條家へ取られし故に、眞田をば敵となし、且又沼田の替地をば、德川殿領分より辨へ出さるゝ上は、爭でか怒もなかるべき。身の難儀に及ぶとて、以前の仇せん事は、哀れ彼人を賴まんも、片腹痛き事なるべしと、樣々申破りければ、兎角いふ人なく、其日の評議は破れければ、各々退出したりけり。

上州治亂記卷之十三 終

上州治亂記卷之十四

山中・韮山兩城自二氏政一被レ籠大將人數

斯りし後は、暫く諫めいふ人なく、浮々として暮しけるに、秀吉出陣決定して、國々の軍兵共、駿參と聞えければ、俄に事の出來たる樣に、騷動する事斜ならず。奉行頭人を集めて、評定しけるは、松田尾張守が申す所、君の爲には更にあらず、申す旨を案ずるに、敵とやいはん味方とやいはん、去來や我々罷出でゝ、軍の設けせんとて、伊勢・山田・小笠原・坪賀・安藤・坂部・雪齋等、急ぎ氏政の前に出でゝ、秀吉旣に火急なれば、切所々々の口もならず、有來る城々の內へ、軍兵を入置かれ、敵の先途を遮られ然るべしと申しければ、氏政聞きて、其儀ならば、其設すべしとて、軍兵の手犯をぞなす。先づ箱根山中の城には、岱崎を取入れて、要害を築きけり。此岱崎といふ所

は、昔關所の跡なれば、要害上能かりけり。此城、松田尾張守甥松田右兵衞清秀、數年の城主にてありしかども、今度下向の上方勢を、防ぐべき初めなれば、小勢にては叶はずとて、相州甘繩の城主北條左右衞門大夫氏勝を加勢とす。此氏勝は、氏政の二男なるを、早雲の二男に、北條左衞門大夫氏忠が養子として、家督を讓りけり。則ち氏勝召出され、此次に、間宮豐後守義高・朝倉能登守景澄召出され、正月二十日、三人共に出仕したり。氏直一座にて、今度秀吉多勢を率し、東國へ向ふといへり。其順路の城なれば、山中の城に軍兵を籠め、一戰を遂げんと思ふ、其初の軍なれば、氏勝を將として、兩人を差添へ、高名すべしと宣ふ。依つて盃酒を進めて後、兼氏の刀を、北條氏勝に引かれ、國吉の刀、間宮好高、同脇指は、朝倉景澄に得させけり。氏政重ねて申しけるは、抑山中の城といふは、上方勢、防ぐべき其最初なる故に、三人を加勢として、與力の勢を差添へ、各數年の武功は、今度山中籠城の一擧の勇にあるなれば、構へて怠る事なかれ。松田清秀城主たれども、其身小身なる故差越すと、懇に申しける。間宮好高進み出で、君御心を勞し給ふな、戰若し急迫ならば、我れ忽に

討死せん。苟も死を遁れ、城を開いて降參せじと、申切つて出でたりける。誠に淸く聞えける。爰に朝倉能登守は、其座席をば退出し侍る所に立出で、傍輩に申しけるは、扨愚案を廻すに、北條家の滅亡は、夫れ必ず遠からじ。又山中の城と申すは、其要害も淺間にて、多勢を防ぐ城地にあらず。斯る必死の城地と知つて、親族老臣等を遣されば、一向討死せよとにや。申して詮なき事なれば、北條家の政道は、近年甚だ衰へたり。是は偏に松田尾張守が、奸曲より出でたれば、北條を亡す者は、秀吉にはあらずして、松田康秀に留りたり。總じて其家亡びん時は、秀でたる寵臣出でて、古老の家臣威を失ひ、家人を始め從軍迄、古法は廢り、唯新法の辛き仕置に恨みて、上を疎み親まず、松田に不快の輩は、才智あれども用ひられず、功ある人も賞せられず。唯奸人のみ時めきて、渠に新しく諂つて、不才慮の人共擧げて用ひ、不忠の人も賞せられ、武勇才智の輩は、自然に身を退くのみならず。人見給はずや、遠からず其例あり。今川氏眞治世の時、三浦右衞門出頭し、家中の輩疎み果て、武田信玄と與力して、今川家亡びたり。彼三浦が成果、眼前見たるぞかし。奸人の曲として、權威

に募り勇と見えて、心中は臆なり。尾張守行末と、案に知れて覺えたり。伊勢備中が諷諫、慮賢きを、尾張守が申破る。斯る大事に及んで後、俄に城を構へても、其要害調はず、軍を見て、矢を矯くが如し。誠に笑ふべし。我れ山中に籠るとも、生死更に究むべからず。朝倉が身の事は、氏勝に從はんと、更に憚る氣色なく、高聲に言散らして、其後退出したりける。又二月十六日、氏政の使として、波多野新六郎といふ者を、上州館林の城に遣し、北條美濃守氏規を召されけり。氏規、頓て小田原に參着して、氏政父子の前に出づる。氏政申しけるは、秀吉多勢を以て、東國に發向せり。氏規、伊豆國韮山の城に籠り、上方表を防がせらるべし。一家の案否此時なり。忠節を盡すべし。構へて怠る事なかれ。氏規畏りて、唯今申して詮なき事なれども、氏規先年上洛して、利運の和睦をぞ調ひしかば、急ぎ上洛ありし。先祖早雲入道殿の、粉骨を盡して切取り給ふ關八州を、失はざる謀專一に存ずる所に、奸曲不道の尾張守、信もなき異見を用ひ、一族老臣等の謀をば入れ給はず、既に此亂出來す。備中守が申す如く、德川殿を賴まれば、此儀迄は及ぶまじ。御家人も從軍も、日頃松田が

政道邪威を疎み惡み、上を恨み候者あれば、縱ひ軍を挑むとも、墓々しき軍はせじ。大略は降參し、君を始め尾張守に、先非を思ひ知らせんと、相計り候はん。然らば軍は打負くべし。さり乍ら氏規、其身人數ならねども、氏政連枝として、北條氏を汚す上は、其命のあらん程は、城をば輒く拔かるまじ。韮山の城案否の事は、氏規死生にあらんと、廣言を吐きて出でけるは、追の大將やと感じけり。其頃家康公も、御分國へ相觸れて、三月上旬、駿府の城迄來るべしと、內々御沙汰ありしかば、各用意したりけり。

秀吉京都發向附秀吉、山中。韮山兩城見分御下知

去年秀吉公、諸國へ廻文を遣さんとしける以前、伊東丹後守を使として、駿府の城へ遣し、家康公へ申しけるは、德川殿も、兼てより存の如く、北條氏政さまざま表裏して欺く事、一度二度の儀にあらず。朝威をも恐れず、武命をも憚らず、大國餘多領し乍ら、上洛も仕らず。是朝敵の隨一なれば、敕命を蒙り、北條を討たんと欲す。爰

に難儀候は、氏政嫡子新九郎事は、徳川の婿なれば、攻討たん事忍びず。然りとて、其儘に差置くべき事にもあらず。彼が不義を正さずんば、誰か武命を恐るべき。此事を思ひ候故、諸國の兵を召集め、誅罰せんと存ずるなり。徳川殿同心あらば、則ち廻文を遣すべし。思召の旨あらば、遠慮なく申送るべしと、使者丹後守、駿府大久保治部大輔忠隣の宅に着きぬれば、樣々饗應し、翌朝忠隣同道にて、家康公に見えけり。徳川殿、頓て南殿に出で給ひ、丹後守を召出さる。丹後守進み出で右の口上を申上ぐる。家康公御返事、北條父子違犯の事、是非を論ずる處なし。早く誅罰を加へらるべし。家康は小田原の手寄にて候へば、先陣を勤むべし。氏直は婿なれば、家康方より、諫をも入るべき事に候得共、父氏政が心に違ひ、舅の方へ從はんとは、爭でか申すべきなれば、諫言するに及ばず。父氏政が心解け、幸ひ緣者の好あれば、家康を偏に賴み、和睦の事を申さんには、爭でか相捨て候べき。叶はぬ迄も、幾度も御詫言申すべし。終に一度も其儀なし。然る上は、一戰を心懸くると相見えたり。軍兵御催促然るべしと仰せければ、丹後守罷歸り、右の趣申すに依つて、廻文を遣しけ

秀吉小田原を攻む

り。之に依つて、天正十八年三月朔日、秀吉公進發の事觸れしかば、五畿內・南海・山陰・北陸に及び、近江・美濃・伊賀の軍兵共、雜兵二十萬五千餘人。又德川家康公、參河・遠江・駿河・甲斐・信濃の四萬五千餘人。同月國々打立ち、先陣既に駿河・富士の下方由井・蒲原の邊に充滿すれば、後陣未だ美濃・尾張に支へたり。都合其勢廿八萬餘人なり。されども秀吉、敎正しくして、驛路泊々、聊か人民の煩となる事なし。京都聚樂の留主居には、毛利右馬頭輝元四萬人にて警衞す。輝元の家臣吉川藏人廣家は、軍士一萬五千を率し、家康公の留主を守るべしと、下知に依つて、參州岡崎の城に籠る。又小早川左衞門佐隆景、幷に安國寺兩人は、二萬人を率し、小田原へ向ひける。斯くて天正十八年三月十九日に、總大將秀吉公、聚樂の館を御進發なり。其體甚だ異形なり。作髮に鐵漿黑く、馬鞍・太刀・衣裳に至る迄、善盡し美盡し、供奉の輩は□□□。都鄙遠近の老若、道の邊に出でゝ見物す。同廿七日には、秀吉、駿州沼津に至り、此所にて以前小田原より登せし石卷左馬之助康政に人を添へ、伊豆の境迄送り歸す。氏政へ申すべきは、度々和睦の事を破り、秀吉を嘲弄す。其返報せん爲に向ひ候旨、申

すべしと言遣しけり。此石卷は、氏政の使として、上方へ參りしを、秀吉捕へ禁獄しけるが、今度放し返しけり。又明王院も、去頃秀吉が、氏政と和睦の扱したりけるが、其圖を惡くしたる輩。秀吉大に憤り、駿州邊迄召具しけるが、黃瀨川の邊に於て、磔に懸けられける。翌廿八日には、秀吉方より、先陣の面々へ、使者を遣し申されけるは、今日秀吉、伊豆の三島に着陣すべし。迎の爲め、大名等悉く參るべし。從者數輩は益なし。各小姓五三輩を、時華(はなやか)に出立たせ參るべしとありけれども、俄の結構は、風流盡し難ければ、其衣裳ものずきは、異形輕く用ひたり。秀吉路次にて對面し、三島本陣へは立寄らず、大名等相伴ひ、山中・韮山の兩城邊に進み行き、彼の城より西に當り高山あり。彼所に攀り、山中の城を望み見て、明日より仕寄を附けて、先づ此城を攻落し候べし。之に依つて、三島邊の陣々より、其手寄に隨つて、攻具を取寄すべしと、軍使に仰せて觸遣し、其後三枚橋へ打入りければ、酉の下刻になりけり。秀吉暫く沐浴して、其後福原右馬之助を召寄せ、秀吉、彼に宣ひけるは、明日辰の刻より、山中の城攻油斷すべからず。汝向ひて申すべきは、德川殿御勢は、小田原口

へ押向けられ、信雄朝臣の軍兵と、細川越中守忠興と、蒲生飛彈守氏郷・中川藤兵衞秀政の軍兵と、森右近大夫忠政等は、韮山城の押として、殘し置くべし。山中の城へは、近江中納言秀次を大將として、其外の大名等、相從へ圍むべき由、相觸るべしと申付く。之に依つて、右馬之助畏りて退出し、先づ德川家康公の御陣に來り、井伊兵部少輔直政を取次として、右の趣を申上げ、夫より陣々へ觸れる。

關八州の諸將、小田原所々持口を堅む、伊豆下田城攻

斯くて秀吉公、旣に大軍を引率し、小田原へ寄る由、先達つて聞えければ、小勢籠城叶ふまじとて、去る三月二日、舍弟北條安房守氏邦を、武州鉢形の城より召されけり。抑此氏邦は、北條氏康の四男、氏政の弟なり。幼名を壽虎丸といひし。武州秩父の內、宮田といふ所に、天神山といふ城あり。或は井戶の城ともいへり。彼城主を、藤田右衞門尉邦房といふ。渠昔は、上杉管領の幕下なりしが、管領滅亡せし後は、北條家に從ひ、本領安堵したりしが、實子なければ、壽虎丸を養子として、秩父新

太郎氏邦と名乘りけり。其後氏邦受領して、安房守に任じ、養父邦房死去の後、居城秩父郡横瀬の根古屋に移りけり。此所は、昔畠山二郎重忠が生れし在所、城下の流を、産川と名付けしなり。此所、要害最堅固なれども、山入にて里へ遠く、萬に付不自由なりとて、中頃取立てたる武州小袋郡鉢形の城を再興して、彼城に移りけり。然るに今度小田原へ召寄せければ、軍士を率して參りけるが、武州領分の持城共を、捨置くべきにあらずとて、軍士を引分け、城々へ込め置き、先づ鉢形の城へは、老臣井上參河守を大將として、黑澤上野助・島村近江守・三上外記、幷に上州奈久留美沼田の城主猪股能登守以下の軍兵數百人差添へ殘し留むる。猪股範直の舍弟猪股小平太範家、秩父梁瀨の後なる虎ヶ岡の城に籠る。彼城の大手なれば、田村を掘切り、柵を振り塀を懸け、要害稠しく構へけり。又秩父山中の內千尾の城には、渡邊監物・淺見伊賀守・息左馬助楯籠る。此城々は、甲州より山傳へ海道なれば、德川家康公の御人數は、甲州手寄なれば、此道筋を押來り、武藏國へ打入る事ありやと用心して、斯く軍兵をば籠めしとかや。氏邦、我身は千餘人引具して、小田原の城へ入りけり。去程に小

田原にては、松田尾張守が異見に油斷して、要害おろそかなりしかば、俄に周章て、内外の普請もなし。伊豆・相模・武藏・上野・下野・安房・上總・下總八州の軍兵、凡て四萬餘兵、幷に人夫三萬餘人、總構の外迄、空堀を掘廻し、其土にて土居を積り、重々に櫓をかき渡し、矢倉門塀折臺金の手、其處に依つて、心を盡し普請しけり。中春には出來しけり。先づ宮城野口の番手は、東野・山室・岩崎三ヶ國の城主松田尾張守康秀、武州松山城主上田上野助政景、下總國臼井の城主原口式部大輔胤成、彼は主人千葉助邦胤、去頃家人の爲めに横死して、子息新助貞胤、未だ若年にありしかば、陣代として來りけり。其外上總國には、萬機の城代土岐右京大夫賴春、下總小倉の城主荒野豐前守國清、同東金城主福島伊賀守勝廣、同國相馬の城主堀賀伯耆守綱可。安房の國には、柾木庄兵衞弘正以下、軍兵都合一萬二千餘人なり。湯本口の番手には、千葉新助貞胤、從軍下總鴻の臺の城主推津隼人佐、關宿の城主梁田中務大輔政豐以下、其勢八千餘兵なり。竹鼻口武州八王子の城主北條陸奥守氏輝、幷同國忍の城主成田下總守長氏・舍弟左衞門尉長忠、其一族に成田土佐守長綱・同肥前守長照、相州當麻の

城主富麻豐前守・同又十郎、下野國壬生城主壬生上總介政廣、下總皆川の城主皆川山城守廣照、都合一萬餘人なり。右三箇所に役所を構へ、上方を防がんとす。安房國の守護職里見左衛門尉義賴は、元來北條に降參して、旗下となりける。今年の軍を能き幸とや思ひけん、秀吉に從ひ、寄手の陣に加はりけり。又齋田口の番手は、武州岩槻の城主太田十郎氏房大將にて、國々の集勢二千餘兵にて、久野口共に相守る。此氏房は、氏康の舍弟北條二郎上野介氏朝が子なりけるが、岩槻の城主太田美濃守資正入道三樂齋養子として、太田十郎と名乘らせけり。瀧口は、北條左衛門佐氏忠大將として、千七百餘騎にて之を守る。其頃氏忠、下野國佐野城主たり。彼城にも、家人二百餘人籠置きたり。又早川口へは、豆州戶倉の城主北條右衛門佐氏高大將として、二千三百餘兵之を守る。此氏高は、厩橋・箕輪兩城をも抱へたり。氏高與力の兵は、上州倉賀野の城主倉賀野左兵衛、木部の城主木部宮內少輔、白井の城主小見小四郞、兎取城主高瀨紀伊守、渠は八百餘兵にて、氏高に加はり、早川口を相守る。又關八州の城に、軍兵多く籠置きけり。是は若し小田原の城取詰められば、後詰せ

よとの謀なり。爰に伊豆國下田城に、淸水上野介、六百餘兵にて籠りけるを、秀吉の船手九鬼大隅守嘉隆を始として、伊勢・志磨・尾張・參河・遠江・駿河の兵船數千艘、海手請取り、豆州浦々より陸に上りて戰ふ。されども此城堅く守り、寄手大勢討取られ、城未だ落ちざりけり。

上州治亂記　卷之十四　終

上州治亂記 卷之十五

德川家康公軍兵攻ニ取上州西牧・石倉兩城一北條氏政、軍兵を八州の諸城に入置く

爰に上州西牧の城には、北條方の侍大將多目周防守長宗、四百餘騎にて楯籠る。家康公の從軍松平修理大夫幸正、信州勢二千餘兵相伴ひ、西牧の城を相圍み、晝夜となく攻めにけり。城兵爰を先途と防ぎけり。信州先手衆は、武田勝賴滅亡の後は、德川家に從ひて、本領安堵しけれども、終に墓々しき軍もなく、何ともして忠戰せばやと思ふ折節、此亂出來し、西牧の城へ寄せたりしかば、不顧攻寄手の軍兵直に進んで、門塀際へ犇々と付きて、塀を乘らんとする所に、北條周防守、木戸を颯と押開き突出で、散々に戰ひしに、先手の兵追立てられて引退く。城兵勝に乘つて追ひ來る。

西牧の城陷る

石倉の城陷る

修理大夫自ら進み、城兵を取籠め、洩らさじと攻めける程に、城の大將多目長宗討死しければ、一所に討たるゝ者八十餘人、殘兵怺へず落行く。少々追討し、首九十三級打取りて、城忽ち落ちにけり。夫より直に、寺尾左馬介が籠りたる石倉の城を攻めたるに、初の程、鐵炮飛ばせ防ぎけるが、寄手心を一つにして、四方より攻めければ、叶はじとや思ひけん、降參して城を渡す。依つて兩城には、軍兵籠置きけり。抑此修理大夫は、武田信玄旗下葦田下總守幸成が嫡子なり。勝頼滅亡の後、德川家康公不便に思召し、子息兩人取立て給ふ中にも、嫡子には松平氏を給ひ、松平修理大夫と名乘る。一族の如く御憐愍ありし。然るに今度幸正、信州勢の大將として、西牧の城主周防守を討取り、其城を拔き、石倉の城を攻落し、城主左馬介を降人とす。一方ならぬ高名なりとて、小田原落城の後、上州藤岡の城を給ひける。扨北條方より、關八州に籠城したる人數、所謂上州松井田の城には、大道寺駿河守政繁・子息新四郎政照。同國新田金山城には、由良信濃守成繁・舍弟長尾新五郎景茂。同國館林の城には、北條美濃守氏規家人共、伊豆韮山の城に籠る。同國枝倉の城には間下越前守範

滿。同國飯野の城には、涵名上野介親宗・同粟田釆女正。同國大島城には片見周防守師方。同國藤岡城には富田又十郎吉晴。同國江戸崎の城には、山角上野介定方家人共、定方は小田原に籠る。同國安中の城には、安中左近大夫廣盛。同國市川の城には市川彌太郎。同國大胡の城には、山上新右衛門尉直方。同國伊勢崎の城には、竹澤源三郎。同國名和の城には、津久井駿河守秋敎。同國厩橋の城には、北條左衛門大夫氏高、城代山上美濃守虎盛。同國寺澤山の城には、大貫越中守忠定。同國奈良口の城には、飯富兵部少輔・同赤見刑部少輔。同國箕輪城には小幡山城守。武州本庄の城には、本庄隼人正。同井戸の城には、北條安房守氏邦。同鉢形の城には、右氏邦の家人栖籠る。同日尾の城には、朝伊奈大太郎。根古屋・虎岡・忍三城は成田下總守長氏。倉ヶ野の城には、倉賀野左衛門照明。同深谷の城には、深谷太兵衛尉吉敎。同松山の城には、上田上野介政廣。同岩槻の城には、太田十郎氏房。同八王寺の城には、北條陸奥守氏輝。同六鄉の城には、行方彈正忠明。同稻毛の城には、島田兵部左衛門成景・同横山式部少輔・駒木圖書介。皆是行方の幕下なり。同寄居の城には、北條新三郎

綱矩。同助崎の城には、北條新五郎氏忠。同葛蒲の城には、福島六次郎賴季。同守山の城には、酒井式部大輔忠利。同石濱の城には千葉次郎胤村。同川越の城には北條左衞門大夫氏高。同騎西の城には、小田助三郎長宗・息原十左衞門。同羽生の城には木戶伊豆守。同江戶の城には遠山藤五郎。下野國足利の城には白石豐前守。同鹿沼の城には宇都宮彌次郎貞綱。同小山の城には小山小四郎朝宗。同烏山城には那須與太郎。同榎木の城には近藤出羽介實方。此人、北條氏輝旗下なる故、武州八王寺の城に籠る。同壬生の城には千葉新介貞胤。同小倉の城には荒川豐前守。同推律の城には山角伊豫守。同栗木の城には小笠原播磨守長範。同栗橋の城には大石越後守。同關宿の城には梁田出羽介政綱。同佐倉の城には佐倉筑後守一友。同古河の城には北條氏直家人籠る。同鴻の臺の城には推律隼人佐一吉。上總國一宮の城には柾木筏之助。同廳南の城には廳南五郎。同廳北の城には廳北源五郎。同伊北の城には安藤豐前守。伊南の城には伊南助三郎。同根古屋の城には柾木庄兵衞尉。同土氣の城には松田左衞門尉賴重。同成戶の城には大藤左衞門尉。同小濱の城に

は遠田美濃守弘房。同箕水の城には山角紀伊守實勝。同藤浦の城には柾木左近。同池田の城には土岐右京大夫。伊豆國下館の城には淸水太郎左衛門尉正次。幷安孫子の城には北條七郎氏敎。同泉頭の城には大藤長門守。同楠子濱の城には大石越後守。相模國藤澤城には大谷帶刀左衛門。同津久井の城には津久井太郎二郎可胤。同荒井の城には葦名彌二郎。同三崎の城には小林神介父子。常陸國土浦の城には多目彥八郎・同相馬次郎・同梶原參河守・同美濃守。同牛子丸の城には山中主稅助・上田常陸介。下總國木溜の城には伊勢備中守貞宗。小久保のには大和兵部大輔。米木の城には、小笠原播磨守幷松田尾張守、嫡子笠原新六郎秀範・舍弟左馬介・其弟孫三郎・其伯父肥後守・上田右兵衛大夫・山角四郎左衛門・同左近大夫・多目權兵衛尉・福島伊賀入道道醉・石卷勘解由・同下總守・南條山城守・同右京亮・同左馬介・長尾但馬守・小西隼人佐・富永內膳正・大森甲斐太郎・遠山右衛門尉・芳賀伊豫守・朝倉右京亮・山中主水・伊東右馬允・大藤式部少輔・中山助六郎・同豐前守・富岡六郎四郎・南條式部少輔・安藤兵部少輔・廳南大炊介・內藤左近大夫・依田大膳・羽田小次郎等、凡て關東五十

三箇城の諸將、己々が居城には、軍兵を殘し置き、大道寺駿河守を始め、殘らず小田原へ籠りけり。

結城晴朝攻₂落榎木・鹿沼兩城₁、德川家康公軍兵善德寺の城を取る

其頃下野國結城の城主結城中務大輔晴朝は、北條旗本なりしが、今度秀吉向ふと聞きて、使者を上方へ遣し、味方すべき由申しければ、秀吉悅び、賞は功に依るべしとて約束しける。之に依つて、天正十八年三月下旬、軍兵を引率し、結城晴朝、先づ同國榎本の城に向ひ、終日攻め戰ふ。城主近藤出羽介は、北條氏輝が催促に依つて、武州八王寺の城に籠る。其家臣高橋淸九郎軍兵千餘人殘し置きければ、高橋爰を先途と防戰すれども、小勢なれば叶はずして、終に晴朝に降參す。依つて是を免し城を請取り、人數を入置き、夫より直に同國鹿沼の城に押寄せ、散々に攻め動かす。城主宇都宮彌二郎貞繼勇を勵まし、突出で〳〵戰ひければ、寄手も討死多かりけり。然

鹿沼城陷る

る所に、同國小山の城主小山小四郎朝宗、百廿餘人引率し、鹿沼の城の後詰として來り、結城勢二手になる。一手は城兵を押へ、一手は後詰と戰ひけり。小山が軍勢、何とかしたりけん、裏崩して敗軍す。結城晴朝勝に乘つて、此城を攻落せと、身を採んで力攻に攻めしかども、城兵堅く防ぎ破られず。然る所に下妻の多賀谷修理亮が軍兵、搦手の門迄攻付け、陣屋へ火矢を射入れたるに、折節風烈しく吹きて、城中の諸營に火移りて、燃上りければ、炎大に上り、黑煙地を覆へば、城兵途を失ひ、寄手は勝に乘り攻めしかば、城主宇都宮堪へず、間道より落行きしかば、城兵も或は討たれ、或は落行き、城は忽ち落ちたりけり。結城晴朝、直に壬生の城を攻むべしと議しけれども、軍大に疲れければ、先づ軍兵を休め、再び壬生を攻めんとて、結城の城へ引入りけり。又駿河國善德寺城は、北條の持城にて、北條七郎氏孝大將として、侍大將には內藤大和守、其外軍兵千三百餘騎籠りけるを、家康公の先手本多忠勝・榊原小平太以下、大勢にて向ふと聞きて、一戰にも及ばず、城を開いて、小田原へ逃げ歸る。依つて彼城には、家康公より、軍兵を入置き給ひけり。

上州松井田城攻并國峯・安中・倉賀野・本庄・深谷落城

斯くて天正十八寅年、關白秀吉公、小田原北條左京大夫氏政を亡さんと思召され、三十萬騎を引率し、氏政と對陣す。扨また御加勢に、德川家康公・織田信雄公、都合五十萬餘騎と聞えける。爰に武州鉢形の城主長尾顯長、是は小田原へ子息を遣し、其身は北國の押へとして、北條安房守康邦、鉢形に在城し、櫻澤・八幡前に、砦をぞ構へたり。藤田村正龍寺の後なる太山の上に一樓を上げ、大鐘を釣り、北國勢藤國八幡山に見ゆるならば、此鐘を撞鳴らし、知らすべしとの約束なり。今に其跡あり。爰に上州宇田の城主小幡圖書、四百騎にて楯籠る。宮崎の城主小幡佐右衛門・同彥三郎、五百騎にて楯籠る。國峯の城主小幡上總介、是も同小田原へ相詰むる。城代には、子息左衛門佐信秀を差置く。是文明應仁以來の大合戰、北條家にも、先祖早雲より五代相續し、八箇國の管領ゆゑ、一族門葉廣く、何十萬とも知れざる籠城の事なれば、中々五年十年に、落城すべきとは見えざりけり。之に依つて、關白秀吉公、長陣

御支度して、七十間々々々に陣小屋を懸けさせ、京・大坂・奈良・堺よりも、町人どもを召され、町割りてみせ店出ださせ、何にても不足なきやうに、種々色々の物を商はせ、金銀銅鐵の細工人まで、悉く召され、恰も京・大坂に異ならず。賑しくこそなりにけれ。關白秀吉公、小田原氏政追罰。依つて去年北國并に奥州まで廻文遣し、軍兵催促せられけり。之に依つて、北國加賀國金澤の城主菅原朝臣前田筑前守利家・子息肥前守利長等、兼てより催促に應じければ、大軍を引率し、去る二月十六日、加州を打立ち、木曾路に懸り、中仙道を經て、上野・武藏に入らんと、越後の大守上杉景勝兩大將、北陸道七箇國の勢を率し、笛吹峠を攻登り、坂本を燒拂ひ、松井田の城を、十重二十重に取圍みにける。抑此城は、山の峯を城に構へ、續きたる尾崎を掘切り、重々に曲輪を取り、西南の方は、中仙道の海道なれば、道より脇は、谷深く切れて川流れ、山と谷との間、一町にも足らざる程なれば、大軍の屯すべき樣なし。北の方は地廣ければ、前田利家父子・上杉景勝三大將相向ふ。南の方は、毛利秀賴・眞田幸忠陣したり。彼城は、東西へ續きたる長山の嶺を城として、其尾崎を掘切りたり。西北の

方、堀深くして谷の如く、然れども、城の四邊を圍まん爲め、東の方山の峯は、前田利長大將として、軍兵大勢取上る。西の方の峯へは、上杉景勝の老臣直江山城守大將にて、多勢を引具し、四方を圍みたり。然るに城主大道寺駿河守政繁嫡子新四郎政照等、兼て用意したりければ、前なる碓氷川より、人歩三四人程にて、持つべき程の大石共を、五六百城中に取入れ置きけり。是は敵兵、城際まで攻め寄たる時、大石を巓より落しかけ、打殺さんとの謀なり。其上城兵評議には、上方勢寄せ來らば、幾度も突出で、坂より下へ捲り落し、雌雄を決すべし。斯くて日數送るならば、安中・深谷・本庄、味方の勢後詰し來りて、敵を輒く追拂ふべしとて、彼城々へ牒じ合せ、互に合力すべしと定む。さる程に寄手の軍兵、四方より一同に攻立つる。城中の輩、矢を飛ばせ鐵炮を放し、透間もなく防ぎしかども、目に餘る大勢にて、道にあらざる所まで、平押に押上る。門際迄來るを見て、件の大石二三十、山上より、坂を下りに落し懸けしかば、誠や、石にて卵を打つが如く、人頽を築き、轉び落つる人に人が重りて、手負死人百人に及びけり。又毛利・眞田が軍兵、同時に進んで攻上る。此寄口へ

も、大石餘多轉びければ、石に當りて、手負死人若干と聞えける。されども敵は大勢なれば、討たれども顧みず、曳々聲を出して攻立つる。大道寺も木戸を開き、突出で突出で戰へども、味方のみにて、敵兵透も見えず、中々突出でては、軍の勝利あるべからず。唯引籠り防げとて、矢・鐵炮を飛ばせ石を投げ、堅固にこそは防ぎけれ。八日巳の刻より、酉の刻に及ぶ迄、散々に攻めしかども、城兵強くして未だ落ちず。日既に暮れければ、寄手の方、上貝を吹きて、軍兵を引取りけり。翌九日の早朝に、前田利家、諸將へ使者を立て、評定を凝らしけるは、僅なる小城一つ、此勢にて攻めんとて、日數送るものならば、關東の城々を、他人の爲に攻取られ、手を空しくせん事、口惜しく候へば、總勢心を一つにして、一時に攻落し、夫より進んで、上州の城々乘取るべき由申送る。景勝・秀賴(秀元カ)・幸忠等、皆尤と返答し、九日巳の刻より、城の四面に鬨を作り、一度にこそは攻めたりけれ。然れば大道寺の軍兵共、命を惜まず防ぎけれども、大軍四方より攻落さんと、寄せかゝれば、防ぎ兼ねてぞ見えたりける。安中・倉賀野・本庄・深谷の勢共、松井田を攻むると聞きて、後詰せんと評しけれども、主

人は皆小田原へ赴き、留主居の軍兵多からず。敵は三萬五千と聞きて、後詰すべきやうなし。駿河守防ぎ兼ねて、降參せんと思ひければ、矢倉の上へ人を上げ矢留を乞ひ、其後矢文を射出しける。其文にいはく、

今度依北條家下知、大道寺楯籠當城、自北國下向之兵可遮旨、被示附間、雖拒防候、大軍被攻立、城兵之筋力良疲畢。於爰今は城兵命は將卒共令降參、相加先陣、可抽軍忠。若又免許於有之間敷者、無是非枕此城、討死可仕候。隨御報可極安否者也。恐惶謹言。

天正十八年三月九日　大道寺駿河守政繁

前田筑前守殿

上杉彈正少弼殿

とぞ書きたりける。利家・景勝披見して、秀賴（秀元カ）・幸忠招き寄せ、此事如何あるべきと、意見問はれける所に、眞田源吾が申しけるは、此城攻干さんとし給はゞ、日數も懸り、味方多く滅すべし。所詮渠が望に任せ、明日城を請取り、大道寺を案内にて、

大道寺政繁降る
松井田城陷る

八州の諸城を攻むるならば、小田原の後詰ならず。疾々御免然るべしと、所存を殘らず申しければ、此儀尤も然るべしとて、則ち和睦調ひければ、人質請取り置き、翌十日に城を請取り、軍兵共を入置き、夫より南上州を攻取らんと、軍勢を向けられける。はや宇田の城主降人に出づる。宮崎の城主小幡佐右衞門息彥三郞、支へんと思へども、目に餘る大軍故、父を捨て降人に出づる。依之北國勢、國峯の城へ押寄せ、鯨波を揚ぐると等しく、鐵炮を打ち矢を射かけ、大軍喚き叫んで攻立つる。抑此國峯の城といふは、追手、北向にて山なし。南は秋田山・秩父山まで相連る高山、西は岩染・後口高瀨野岡本迄、何さま屛風を立てたる如くなる嶮山富士・觀音の兩山を、引廻して嶮岨なり。國峯の城は、外山に遙に秀でし峯なれば、寄手大軍にて取圍み、數日攻立つるといへども、本より名城にて、容易く落城の體なし。殊に家老淺鹿民部之丞、智謀あつて、武勇を兼ねたる侍、さまざま計略を廻らし、戰はずして勝利を得。之に依つて、大軍敢て進み難く、唯空しく控へたり。さり乍ら此城山に水なし。東の方谷水を汲む。爰に前田の軍師山崎勘齋といふ者、是を見聞あり、大勢番人を附

けければ、是より城中渴に望む。數日の事なれば及び難し。されども淺鹿民部、急度思案し、馬餘多高所に引出させ、白米を流しかけ、水澤山の樣を見せければ、寄手の大軍是を見て、城中水不足なければこそ、馬共を洗ふなり。むだ骨折つて益なしとて、水番を引く。然れども寄手多勢の事なれば、新手を入替へ、息をも續がせず攻めければ、今は一の木戶を押破り、櫓も塀も引返し、曳々聲を揚げて攻上る。城中よりも、矢・鐵炮を、透間もなく射かけ打かけ、命限りに防ぎける。之に依つて寄手の軍勢、二町計引退く。然る所城內より、淺鹿民部、士卒五十騎計相從ひ、逃る敵を追懸け、爰の谷彼處の落穴へ追込み、大勢討取り引返し、大刀の血を押拭ひ、本丸に上り、大將左衞門佐殿に、軍の次第を申し、淚をはら〳〵と流し、君の御運も是迄なり。隨分城中の者共、防ぎ戰ひ候と雖も、大勢の事に候へば、誠に大水、堤を切るが如くにて、防ぐべきやう候はず。君には早々後の山より、一先づ何方へか御落遊ばされ候。某城中に蹈止り、押付日暮らし申すならば、城に火を懸け、御生害の體に見せ、御後慕ひて參るべし。早く落ちさせ給へと諫むれば、左衞門佐信秀、是非なく暮方に、供

國峯城陷る

をも連れず唯一人、城中を忍び出でさせ給ひける。南の方秋畑は、大山の事なれば、敵の入るべきやうなければ、樵夫の通路あつて草深く、九折なる所をば、樣々辿り辿り行く程に、鷲硏の峯に登つて、國峯を見給へば、炎天に登り、日中に異ならず。屋形櫓燒崩るゝ音に、敵の勝鯨波、夥しく聞えける。左衞門佐信秀は、淺鹿民部が慕ひ來るかと、振返り〳〵、小柏の峠迄辿り登らせ給へども、民部は、更に見えざれば峯傳ひ、鹿島といふ所へ下りさせ給へば、夜は東雲になりけり。信秀思召すやうは、押付夜明けなば、日の谷の者共、我身の樣子を見るならば、必定咎め捕へ置き、敵陣へ註進すべし。若しさあるに於ては、遁れ出でたる甲斐もなく、莫大の恥辱なり。如何せんと思召し、案じ煩らはせ給ひ、傍を御覽あれば、大きなる森あり。此中へ立寄らせ見給へば大社あり。鹿島大明神の額あり。是究竟の隱家と思召し、御戶を押開き立入らせ給ひ、夫れ鹿島大明神は、往昔よりも軍神と申傳へ候へば、秀信行末、安穩に守らせ給へと祈念して、勿體なくも神殿の内に、隱れ居させ給ひしは、心細き事共なり。斯くて北國の大軍、勝鯨波を取行ひ、城へ軍兵を入置き、夫より直に中仙道を

倉賀野本庄深谷の各城陷る

經て、武藏國へ兵を進む。其海道の城々、安中・倉賀野・本庄・深谷の城兵共、面々氣を勵まし、北國より下向の兵、輒くは通さんと、廣言吐きて待ちけるが、其勢三萬五千餘騎、其上松井田の城主大道寺駿河守、先陣に相加はり、案内すと聞えければ、聞怖やしたりけん、安中の城兵、敵の旗も見ず、城を捨てゝ逃去りけり。是より倉賀野・門庄・深谷を攻め落せと兵を進む。此三城は、皆平城、然も小勢籠りたれば、防ぐべき樣なき故降參し、悉く先手に加はり、東國の案內しければ、いよ〳〵大軍になりけり。爰に武州小袋鉢形は、北條安房守持城なり。其外秩父の內、城々餘多有之、軍兵共籠る由、案內者共申しければ、前田利家・諸大將、彼城を攻むべしと、評定を凝らしけり。

上州治亂記　卷之十五　終

上州治亂記卷之十六

大澤不動の由來、小幡左衞門尉信秀入給向陽寺

去程に小幡左衞門尉信秀、谷々をさまよひ、其日も暮れければ、鹿島の神殿を立出でさせ給ひ、暗夜に紛れ、細道を谷川の流を便にて、方便と知らず、山中あなたこなた蹈み迷ひ、谷より峯、又岨傳へ、そこはかとなく行く程に、日野山の北なる大澤といふ所へ、下り着かせ給ひける。行程漸く三四里の處をば、十里餘りにも蹈ませ給ふ、心の中こそ哀れなれ。向を見れば、ほの暗き中に、堂と思しきもの見えたり。近く立寄り見給へば、不動明王の尊堂なり。信秀幸と悦び給ひ、日野にては、鹿島明神に通夜し、今又計らず此堂に來り、明王を拜し奉る事、不思議の因緣と、末頼もしく思召され、拜殿に跪き、出世の事を御祈誓なされ、未だ夜も明けざれば、暫く

御堂の柱により懸り、睡らせ給ふ其中に、日は程なく三竿に闌けたり。斯る處へ雨引村の向陽寺傳州和尙、此不動へ參詣なされ、順禮讀經、悉くありけれども、信秀山谷に疲れ、目を開き給はず。和尙拜禮終り、傍を見給へば、十二三なる容貌淸らかなる侍一人、御堂の柱により懸り、前後も知らず眠り居たり。傳州和尙、此有樣を見給ふに、羽二重の黑小袖に、軍配團扇の中に、七五三の笹の紋付きたるを着、大口の裾高くさしはさみ、金作の左右卷の太刀を帶び、絲の草鞋をしめされたり。和尙不審に思召し、立休らひ、伴僧を頻に呼ばせ給ふ其聲に、信秀驚き目を醒し、顏押拭ひ膝押立て物言はんとせしが、少し遠慮の體に見えければ、和尙の方より申されけるは、愚僧は此隣里雨引村向陽寺の住持にて候が、每月廿八日に、參詣を致候なり。貴公には、如何なる人にて、爰には渡らせ給ふぞや、不審さと、申しければ、信秀聞召し、扨は雨引村向陽寺にて在するや、必ず沙汰ばしし給ふな。某事は定めて聞きも及び給はん、國峯の城主小幡上野介愚息にて候が、此度北國に大戰を挑むと雖も、敵は菅原家の多勢故、終に打負け落城に及び、是非なく此所迄落延び參りたり。爰にて

貴僧に御目に懸る事こそ幸ひ、何卒暫くも貴寺に隱し置き給はれと、慇懃に述べ給へば、傳州聞きて驚入り、近く寄つて手を束ね、扨々如何なる人と存せしに、御物語承りては、聊疎意には存じ奉らず。是と申すも、偏に不動明王の御引合せと覺え候。抑此不動明王は、春日の作にて、靈驗あらたに候。由來を申せば、昔此所、半太夫といひし城主あり。此人神變奇異の名將にて、奈良の都迄、百六十餘里の行程を、日々參內怠らず。又家僕に、八束小脛というて、化現なる者あり。主人に隨ひ往來す。此者の脛八束ある故、八束小脛と申すなり。其頃半太夫、奈良にて此不動を求め來り、堂を建立し安置し奉り、治世安民を祈らせ給ふと、近里の老人、此事語り傳ふ。夫れ春日の作と申す事、或說、藤原の政純の刻たる由を申しけり。此藤原の政純は、春日大明神より、柄に鹿彫りたる小刀を、御社參の時申請け、奇妙の細工をば、刻み浮べ給へり。則ち春日の化身といへり。靈驗に候故、能々御祈念なさるべし。御出世疑ひ候はず。先づ愚寺方へ御立入なさるべしと伴ひ、向陽寺へ歸られける。此傳別忠的和尙は、俗姓を尋ぬれば、甲斐國武田信玄公の御一族にて、先年信玄公、上杉憲

政公と、笛吹峠にて合戰の節も、向陽寺より打つて出で甲州勢に加はりて、若干手柄致されし僧なれば、甲斐々々しくも情を懸け、村童の如くにして召仕はれ、時節をこそは待たせ給ひけれ。

關白秀吉公問軍意見德川家康公

又東海道下向の軍兵、山中・韮山・小田原三城取詰め合戰を挑みけり。抑此相州小田原城といふは、北條元祖伊勢新九郎長氏入道早雲の時、大森の城を攻取りて、彼城を草創せしより、子息左京大夫氏綱、其子左京大夫氏康、其子左京大夫氏政、其子新九郎氏直迄、五代續きて在城す。然る故要害不足なし。殊に兵糧・水木・弓・鐵炮・矢・玉藥・長刀・鑓、戰具の類事闕かず。斯りしかば日本國の軍兵等、力を盡して、五年十年攻むるとも、輒く落つべしとは見えざりける。大將氏政、兼て計りけるは、若し小田原兵糧盡き、或は軍兵討死して、難儀に及ぶ事あらば、關八州の城々より、兵糧を運送し、後詰すべしと。兵糧軍兵入置きたれば、糧の盡くべき様なし。之に依つて秀

吉の先陣、一二を爭ひ攻落さんと勵めども、塀一重をも破られず。此時秀吉、家康公を招き寄せ、何としてか、此城攻落すべき術やあらんと、軍の意見問はれける。家康公仰せけるは、凡そ關東は、皆北條が分國なり。尋常の思をなし、小田原を攻められば、八州の諸將、悉く牒じ合せ、後詰の軍するならば、渠等は東國案内者、殊更地戰なり。味方は當所案内を知らず分內狹く、其上足場惡しく、難戰なれば勝利なし。大勢を賴むとも、寄場嶮岨多くして、多勢の進退輒からず。大勢後詰するならば、却て味方難儀すべし。又何箇年攻むるとも、關八州より運送すれば、兵糧も盡くべからず。家康存ずるは、唯今味方大勢、此城一つを取込めて、無益の力を盡さんより、味方の軍兵を、關八州の城々へ、一將々々取懸り、唯一度に攻討たば、互の後詰なるべからず。悉く降參せん。降る者をば味方とし、先を討たせて案內させ、隨はざるをば討亡し、段々に城を攻むれば、小田原の後詰なからん。まして兵糧運送は、思寄らざる事なり。然る後は小田原にて、後詰の賴を失ひなん。且は兵糧乏しくして、降參するか討死するか、二つの間は過ぐべからずと、委細に術を仰せければ、秀吉大

に悅び、此事更に心付かず、德川殿御智謀、今に初めぬ事ながち、此術こそ類なけれと、手を打つて悅びけり。されば手分すべしとて、大將を定めける。其人々には、石田治部少輔三成・木村常陸介玆重・淺野彈正少弼長政・長束大藏大輔政家・大谷刑部少輔吉隆、其外組番頭・先手の物頭等。又家康公より加勢として、本多中務大輔忠勝・鳥井彥右衞門尉元忠・平岩主計頭親吉等向ひける。又北國の大將前田利家・子息利長・上杉景勝・毛利秀賴〔元カ〕・眞田幸忠等も、彼の勢と共に會合して、秀吉の旨を聞き、手分次第城々を攻むべしと評定し、思ひ〳〵に攻懸け、唯一度に攻めしかば、小田原の城中にも、皆人力を失ひけり。

德川家康公小田原攻ニ破宮城野口一、近江中納言秀次諍ニ先陣一

旣に關白秀吉公、北條家第一の山中の城を攻め落し、夫より韮山の城へ軍勢を遣し、細々と下知をなし、四月朔日未明より、秀吉自身兵を進め、足柄・箱根の山路を越え、

湯本の眞覺寺に陣取り、小田原向に當る松山に石壁築き、彼山上に陣を移し、小田原を目下に見下す。是より霽に、軍兵等手分して、宮城野口・竹浦口・早川口・其外口々より、數萬の軍兵攻寄する。小田原方の諸大將、兼て打寄り評議しけるは、譬あらば知らず、人倫の類として、此切所を防がんに、輒く來る者あらんと、應樣に心得て、驚く者はなかりしに、山中の城攻落され、敵に寄せ來る由、諸方の口々へ聞えければ、俄に仰天しける處に、總大將秀吉は、廿六萬の軍勢を率し、山谷の嫌なく、峯をも岨をも一面に、大軍にて押し來れば、僅の虎口を堅めたる小田原の軍兵共、防ぐべき樣なく、唯啖れてぞ控へける。爰に德川家康公は、此度の先陣なれば、一番に軍勢を進め、宮城の〔宮城野口カ〕十重二十重に追取卷き、井伊・酒井・榊原等、諸將一番に鑓を入れ、終に此口を攻破る。彼口の大將は、北條家の老臣松田尾張守康秀幷上田上野介政廣・原式部大輔胤成・土岐右京大夫賴春・荒川豐前守國清・福島伊賀守勝廣・堀加伯耆守綱可・柾木庄兵衛尉弘正以下、一萬二千餘騎にて堅めける。爰に德川家の先手榊原式部少輔康政・井伊兵部少輔直政、一番に馳向ひ、暫く戰ふと見えしが、松田尾張守、日

家康小田原城宮城野口を破る

頃の口には似ざりけり。兩勢に捲り立てられ、蜘蛛の子を散らす如く、後をも見ずして逃げ去る。上田・原・土岐・荒川・堀加・福島・柾木が勢、入替り相戰ひ、井伊・榊原、先手を捲り中を破つて懸る。之を見て、徳川勢大久保七郎右衛門尉忠世・同治部大夫忠憐・鳥井彦右衛門尉元忠・酒井宮內少輔家次・石川左衛門大夫康道・菅沼新八郎定盈・同小大膳・阿部伊豫守正勝・奥平美作守信昌等を始として、一同に突いて懸る。小田原勢突立てられ、右往左往に逃げけるを、追詰め〳〵討ちける程に、徳川家へ、首三百七十餘級討取りて、宮城野口は、一番に破れけり。徳川家康公より、渡邊半藏を使として、彼首共、大桶三つに入れさせ。人夫に荷はせ、秀吉の陣へ送り、宮城野口の軍の次第、幷に彼口破るの旨、委細に註進ありければ、秀吉公大に感じ、自筆の狀遣されける。則ち彼の首共をば、箱根の峠に、棹に結渡して獄門に梟け、物始めよしと悦びける。去程に宮城野、一番に破れければ、齋先よしと、家康公の御人數共、數萬人押入りたり。竹浦口・齋田口・久野口・早川口を相守りたる小田原勢、防がんとしけれども、一方を攻破られ、敵は後陣に滿々たり。其上寄手の軍兵、道にもあらぬ野山

より、平押に押し來れば、防戰する手術もなし。小田原勢狼狽して、小田原へ逃入りける。氏政・氏直大に驚き、城より外に出張して、相戰ふ事叶はざれば、漸く人數の手賦して、總構をぞ堅めける。爰に寄手の大將近江中納言秀次は、德川家康公の御勢より、跡備に押し給へと、兼て敎令定めしに、其掟を守らず、德川家の、宮城野口攻破り、一番に小田原の城下へ寄せ給ふを、羨しくや思はれけん、進つて兵を進め、先陣せんとし給ふ所に、德川の先陣井伊兵部少輔直政・榊原式部大輔康政、其順路に跨り、大音揚げて申しけるは、今度小田原の先陣をば、駿河大納言殿承りて、軍兵を進む所に、何人なれば敎令を背き、先陣せんとするや、一人も通すまじとて、手鑓取つて怒りける。秀次家人吉田修理亮取敢ず、是は近江中納言秀次の軍勢なり。秀吉公の仰に依つて、先陣に進むといふ。榊原打笑ひ、夫れ君子に二言なし。秀吉公仰として、德川殿を先陣とせられ、其詞を飜し、秀次公を先とせんや。押して通る者あらば、討取れや者共と罵りければ、其郎等はいふに及ばず、相從ふ德川衆に、本多豐後守廣孝・小笠原兵部少輔秀政・內藤彌次右衛門尉家長・保科甚四郞正光・松平和泉守

家業・酒井河內守重忠・子息右衞門大夫忠世・同備後守忠利・永井右近大夫直勝以下、一勢々々に相進んで、旣に珍事に及ばんとす。吉田修理亮之を見て、詮なき事とや思ひけん、味方の勢を引退く。其時德川家康公御覽、仰遣さるゝ趣は、先陣の御心懸、尤も感ずる所なり。兼てより先陣は、家康勤むべしと、仰蒙り候へども、聊論ずる所存にあらず。若年の大將、先登を望み給はんには、家康の兵陣を圍み、先陣を讓るべし。家康元より斯る小事に心を懸け、先手を論じ、功を立てん志には侍らず。小將匹夫の健士等、家康如き强將の其力を借らずんば、爭でか功を立つべきと、常々思案候故、爭でか先後を論ぜんや。況や貴客は、秀吉公の御親族にて候へば、爭でか先後を論ぜん。小田原勢をば、家康が一手を以て切崩し、進み給ふとも、危き事候まじ。先陣に進み給ふとも、御氣遣は候まじ。さり乍ら小田原は、程近く候。其上敵は地戰、尤も案內を知り、御人數は客戰なり、如何なる術か仕らん。凡そ軍の法といふは、暮に及んで、敵近き山下に陣取る事なきは、兵書等にも顯然なり。然れば此度は、此邊に屯を調べて、明日の御先登、然るべく候はんか。是は貴客の爲めのみな

らず、秀吉公の御爲なり。味方の一將利を失へば、殘兵全からざる事、古今其例繁多なり。故に家康が所存を、殘らず申すなりと、思ふ樣に嘲弄し、此口上は、帶刀と茂助を遣され、萬一帶刀遠慮して、申殘す事やあらん、承れとて遣されける。之に依つて兩輩、秀次の御陣に往きて、使に來る由を申し、取次にて聞かんとありしに、帶刀申しけるは、合戰評議に依つて、大事の使に候へば、御直に申上げんといふ。則ち秀次對面す。帶刀臆せず進み出で、家康公の御口上、風情に過ぎて申しけり。秀次は之を聞き、嘲弄の詞を怒り、其色變じたりけれども、秀吉の怒を思ひ、且つ又法を背く事、我誤ありて、家康公の道理なれば、心を靜め怒を押へ、仰越さるゝ趣、尤も至極に候なり。先手の輩無調法は、秀次に御免蒙りなんと、懇に返答して、二人の使を返されけり。家康公の詞に從ひ、秀次其夜は、箱根山の半腹に陣取りて、篝を燒きて夜を明す。

上州治亂記卷之十六終

上州治亂記 卷之十七

關白秀吉公小田原總攻、家康公諫言并由良老母忠節

去程に天正十八年四月二日、關白秀吉の總軍勢、大に進んで、小田原近く押寄せたり。此時秀吉公は、高き所に登りつゝ、家康公を招き寄せ、さゝやき宣ひけるは、敵既に目の下にあり、小田原の滅亡は、尤も近きにあり。若し北條滅亡せば、渠が所領關八州をば、聊の障なく、一圓に進ずべし。此事違失する事あるべからず。宮城野口は、相變らず構へて、軍功あるべしと、堅く契約し給ひけり。其後秀吉は、攻口を定めらる。秀吉の本陣は、城より西に當り　高き山ありける。要害の地利よしとて、去頃より俄に石垣を築かせ、所々に櫓を上げ、悉く屛を懸け、忽ち壁を塗上げて、一夜の中に、白紙を以て張りたれば、白壁新に出來たり。城兵共遙に見遣りて、あな器量の事共

や、昨日秀吉着陣し、白壁を築き重々の屛櫓、一夜の中に、白土迄附けたる事よと驚きけり。されぱにや此本陣を、石壁山と名付けたり。今は古跡に名殘りけり。又丑寅の方は、諸手の軍勢打圍む。先づ九州の大名は、島津兵庫頭義弘・大友豐後守義宗。中國には小早川左衞門佐隆景・細川越中守忠興・織田上野介信包・備前宰相・浮田中納言秀家・中村式部少輔一氏・堀尾帶刀先生吉晴・近江中納言秀次・蒲生飛彈守氏鄕・尾張内大臣信雄公・澤井左衞門尉晴春・天野周防守一吉・土方勘兵衞尉雄久・羽柴下總守晴忠・加藤左馬介嘉明・長曾我部土佐守元親等、次第々々攻懸る。其次は、德川家の陣場にて、御家人共陣す。其次は池田三左衞門尉・脇坂中務大輔・里見左馬頭等、西南の海際に陣す。海上には、四國・九州の海賊兵、船餘多漕寄せて、陸に上りて陣を取る。四方の寄手力を盡し、日々に攻めしかども、城中より鐵炮飛ばせ、之に依つて、寄手若干討死して、城落つべしと見えざりけり。家康公御覽じて、秀吉へ仰せけるは、此城の爲體、力攻には落つべからず。譬ひ此城强くとも、關八州の城々を攻め落すものならば、兵糧運送忽ち絕えて、城は自然と落つべきなり。以前も此旨申上げ、軍兵餘多差

分け、八州へ遣され、城々を攻めらるゝ上は、更に別儀は候まじ、後詰の恐候はねば、諸大將の陣々は、向城を堅く構へ、夜討に逢はざる用心し、兵糧攻にして給ふべし。然る時は城中に、心を變ずる者ありて、必ず其内亂るべし。是れ戰はずして勝つの利なり。火急に城を攻めらるれば、譬ひ此城落つるとも、味方大半討たるべし。要害一つへは、十が二十に向ふといへり。今城兵五萬に餘る。寄手は廿六萬人、敵一人に五人懸り、古法を思へば、寄手の勢は、最も不足なりと申すべし。其故尋ぬるに、寄手城に攻入るには、塀を渡り壘を登り、塀を乘らんとする間に、城中より鐵炮を以て、其敵を防ぐとも、十人の敵兵をば、一人にて、七八人は殺すべし。此故に切所一人、百人に對揚す。必ず攻めさせ給ふまじと、委細に諫言し給へば、秀吉尤と得心し、諸大將に下知して、向陣を堅く取り、此城を攻めんともせず、緩々として居たりしかば、城中の軍兵共、討出づる事も叶はず、退屈して覺えける。此時上野國新田庄金山の城主由良信濃守國繁・舍弟長尾新五郎は、去頃氏政の催促にて、小田原に籠りしかども、其老母は、北條家に恨を含む事ありて、其讐をせんと思ひ立ち、姊孫由良

新六召連れ、三百餘を引具し、上州桐生城口碓水口の寄手の大將前田利家・上杉景勝、此軍勢の先手に加はり、松井田城攻にも、軍忠を勵ましけるが、今日小田原へ參向して、右の仔細を申上げ、秀吉に拜謁す。相從ふ輩は、柳井四郎右衞門・大澤美濃守・根岸參河守・縣近江守・森隼人佐。一族には矢場・鳥山等を從へける。秀吉仰せけるやうは、汝が子共兩人は、朝敵の北條に與力して、小田原に楯籠る。然るに汝は女の身にて、北條に從はず、孫幷に家人を率し、碓水口の先手に加はり、松井田にて忠戰し、唯今是迄參る事、甚だ以て神妙なり。老母が武勇は、今度に限らず、信長卿逝去の後も、氏政・氏直僞り計り、由良兄弟を擒とせしに、汝は猶も從はず。金山・桐生兩城を抱へ、氏政が大軍に、三年の間圍まれ乍ら、兩城共に陷らず、終に其敵を追拂ふ。誠に希代の高名なり。今又早速味方に參り、拔群の働なり。今度北條退治して、老母が方へ忠賞には、常陸國牛久保にて、五千石給ふべし。嫡孫をば、段々取立つべしと宣ひて、直に契約し給ひけり。

伊達正宗東ニ小田原ニ附寄手陣中雜說幷搦ニ捕偸人輩ニ

其頃奧州の住人伊達左京大夫正宗は、秀吉北條を攻むべき由、廻文を遣しければ、三月中領地を立ち、越後國を馳廻り甲斐國を經廻り、四月三日の晩景に、漸く相州箱根に着陣し、秀吉の近士を賴み、拜謁の儀を望みけり。時に正宗、廿四歲と聞えけり。秀吉是を聞きて、其頃小姓頭福原右馬介を使として、正宗方へ仰せけるは、我れ敕命に從ひ、氏政父子追伐の爲め、小田原に發向す。先達つて廻文を遣す故に、上杉景勝・佐竹義宣、悉に進む。正宗獨り從はず。普天の下にあり乍ら、王命を背くの條、其罪甚だ輕からず。然らば近年正宗侵取る會津領差上ぐべし。但し米澤三十萬石餘は口口、若し此事肯はずば、早く本國に歸るべし。汝が會津に至らん頃、北條を討亡し、其馬を會津に進め、汝が所領、悉く沒收すべしと申送る。正宗答へ申しけるは、御催促なかりし故、此事遲く承り、十分の其爲某匹夫の身となりて、此所迄參りたり。死生だも助命あらば、爭でか否やを申すべき。況や僅の都邑をや。會津・仙

道の所領をば、速に差上ぐべしと、御返事したりければ、則ち御暇給はりて、すごすご奥州へこそ歸りけれ。皆人申しけるやうは、何故に正宗をば、唯今放して返さるるや。渠必ず讐をなさん。既に北條討滅し、會津をも又攻められん。擒にしたる正宗を、本領に歸す事、千里の野邊に虎を放す秀吉の謀は、宜しからずと私語けども、恐れて直にはいはざりけり。爰に寄手の陣中に、一つの雜說流布したり。駿河大納言家康公と、尾張內大臣信雄卿は、北條方に密通し、秀吉を謀る由、雜說區々にして、陣中更に靜まらず。秀吉に、或人私語きけるは、信雄、此度隱謀の濫觴は、此人信長の賢息なり。若くは織田家取立つ大將なり。然るに君は、當時天下の主將となり、信雄は幕下となる事、口惜しく思ひ給ひ、北條一味して、君を殺さんと謀られ候なり。また德川殿は、氏直の舅なれば、婿の滅亡せん事、忍び給はず。縡の左右により、城攻を申留め、時變を待たれ候由、誠がましく申しけり。秀吉聞きて打笑ひ、唯今爭でかさる事あるべき。是は大略、敵より雜說をいひするか、然らずば、信雄と德川に、意趣ある者の申出したる事なるべしとて、少しも驚く氣色なし。然るに其日關白秀

吉公、侍童五六人を供として、信雄の陣に往き給ひ、留談する事良久し。夫より直に德川家の御陣に來り、爰にして、談話する事暫くありて、其後密に彼說を、家康公に語り給ひ、定めて是は信雄と貴客へ、意趣ある者の申出す事ならんと宣ひける。時に家康公仰せけるは、信雄は知らず、家康に讐ある者、聊か覺えず。又某が貞心は、申さずとも知召さん。唯今新に申すべき事にあらず。家康が所存は、敵方より、味方の陣へ、忍びの者餘多入置き、斯樣の雜說流布せしめ、味方の中を破截させ、心々にならん時、術をせんとの巧なるべし。諸大將に仰付けられ、一手切に吟味して人別を穿鑿せば、味方に紛るゝ輩は、則ち選び出さるべし。また陣中の商人共をも、一一に搦捕り、御詮儀蒙られて、有樣を申したらば、其命を助けられ、御褒盡あるべしと仰あれば、白狀致す者のあるべし。第一近詮議といふは、此事を申上ぐる其人を召出し、何者の申すと聞き、斯樣の說をば申上ぐると、段々に御吟味あらば、畢竟申始めたる其根元知れ候はん。其者を捕はるれば、必ず敵の偸人ならんと、委細に仰せられしかば、秀吉尤と宣ひて、本陣に歸られけり。秀吉然も小勢にて、兩陣へ見舞

ひ給ひ、緩々と物語ありて、歸り給ふを見るよりも、諸人疑解けたり。秀吉智慮不敵と、皆人大に感じけり。其後秀吉、福原右馬助を召して宣ひけるは、さるにても、汝我に申聞けたりし兩人の謀叛雜說は、何者の申すを聞きしや。福原申上げけるは、木村宗左衛門語るを聞きて申上ぐる。之に依つて、則ち木村を召出し、其仔細を尋ねらるゝに、某も委細は存ぜず、高田小左衛門物語を聞けりと申上ぐる。又高田に尋ねらるれば、小左衛門答へて、熊谷內藏助が物語の由申す。又熊谷に尋ねられける。內藏助答へて、堅田兵部丞物語の由答へける。之に依つて、堅田に尋ねられけるに、答へて曰、增尾隱岐守に承り候と申上ぐる。之に依つて、增尾を召出されけるに、隱岐守答へて、大野修理亮老臣南條主稅介物語の由、答へける。又南條を召寄せられけるに、主稅介申しけるは、織田內大臣信雄卿の家人今泉新之丞と申す者、某に申す樣は、今度信雄卿は、德川殿の一味ありて、北條に密通し、秀吉を亡さんと、密々に評定あり。其心得すべしと申す。抑堀尾隱岐守は、某が婿にて、妹を遣し置くなり。此故に是に語り、此外の輩は、終に口外せずと申す。之に依つて、信雄卿へ使者を遣

し、今泉新之丞へ、尋ぬる仔細候へば、召進らすべき由なり。信雄大に驚き、新之丞を搦捕りて、秀吉公の御陣へ送る。此今泉は、去三月信雄卿、尾州にて、侍十七人召抱へられたり。其内にて、偸人第一上手の由申立て出でたる者なり。片桐市正・寺西備中守を奉行にて、誰人の詞を聞きて、南條には語るやと、其根元を尋ぬる所に、口口して答の旨なし。之に依つて、拷問に及びければ、某は北條氏政の偸人者にて候、小田原より下知に依つて、右の雜說申觸れたり。命だに助けらるれば、今度寄手の陣中に、小田原方の偸人共、大勢交り候へば、白狀すべしと申すに依つて、命を助くべし、白狀せよと申しければ、今泉逸々白狀に及びける。其輩は、横濱民部少輔手に服部助佐。杉若越後守手に服部彥五郎。筑紫上野亮手に大胡孫右衞門。寺西播磨守手に布市右馬助。多賀出雲守手に上野喜太郎。堀門安房守手に鬼石淸兵衞。齋村左衞門手に安東助左衞門小野木縫殿介手に白石文次郎。右八人は、皆今度の合戰に付、召抱へたる新參の侍たる由、此外陣屋々々に、商人の偷人共、新之丞に人を添へ、悉く捕へける。既に十三人を搦捕り、秀吉の前に引据ゑ、頓て彼輩の首を刎ね

られ、大札に假名を記し、小田原追手の門前に、獄門にぞ梟けたり。新之丞は、其妻子親族を質に取置き、金銀を與へ人を添へて、毎日々々陣々を廻して、商人以下を見せける程に、是より後は、敵方の忍共、紛るべき様なかりけり。家康公の御計らひ、尋常にあらずと、秀吉大に感ぜられけり。斯りし後は、寄手の諸將軍卒共、長陣に羸困する由、其聞えありしかば、秀吉是を憐み、早敵を、謠や踊の懸引ありしかば、是より上下の氣改まり、辛勞をも忘れけり。秀吉は又諸將へ茶を給ふとて、數寄屋を立て給ひ、堇の茶入等を床しく飾り、先づ家康公を招請あり。御相伴には細川兵部大輔藤孝・入道玄旨幽齋法橋・利休居士參向す。或時は、織田信雄卿を招かれ、其相伴は、細川越中守忠興・蒲生飛驒守氏卿・池田三左衞門輝政・羽柴下總守勝忠・藤波半八郎等參會して、秀吉より茶を給ひ、女房給仕せり。渠等に扇子を給はりて、謠ひ踊る。其歌の唱歌を聞けば、轟々と鳴る釜の湯泌しと謠ひ踊りて、其心を慰ませられけるとかや。

北國勢拔二武州松山城、德川家康公御家人拔二上州之諸城一

斯くて北國の大將前田肥前守利家・上杉彈正少弼景勝・毛利河內守秀賴〔元カ〕・眞田源五郎幸忠等、さる頃大道寺の籠りたる上州松井田の城を攻め、降參しければ、渠を案內者とし、先陣に打たせ、安中・倉賀野・本庄・深谷の城々を攻落し、降る者をば、悉く先手に加へ、四月朔日、先づ武州松山の城に押寄せ、稻麻の如く打圍む。城主上田上野介は、小田原の城に籠り、此城留主居に、上田家人難波田因幡守・木呂子丹波守・金子紀伊守・山田伊賀守。侍には若林和泉守・根岸長兵衞・山田市兵衞・原藤右衞門・田中傳左衞門・羽生平四郎・比金藤九郎以下、究竟の輩二百餘人、輕卒・鄕民駈せ集り、都合二千三百餘人籠りける。然るに菅原朝臣前田利家、大手へ向ひ、越後の大守上杉景勝、搦手へ向ひけり。毛利・眞田幷大道寺父子、其外安中・倉賀野・本庄・深谷の降人共、城の四邊を追取圍み、諸手一同に攻立つる。先づ寄手方にては、持楯を突雙べ、

松山城降る

其栖の陰より、鐵炮を打懸けければ、塀も櫓も打崩され、城兵今は叶はじと、矢・鐵炮を雨の如く打出す。之に依つて、寄手の輕卒走り廻り、村里を放火し、田畑を荒しけり。城兵之を見て、此城、とても抱へ難し。愁なる軍して、士卒殘らず討殺しては惡しかりなん。此大軍に圍まれ、今は後詰の勢もなし。之に依つて、防戰する事覺束なし。所詮敵に降參し、時の至るを待つべしと、城兵評議一決して、笠を揚げ矢留を乞ひ、馳籠りたりし僧ありしを、使として申しけるは、城兵共の一命を、悉く助けらるれば、先陣に相加はり、忠勤を抽んづべし。然るに於ては、本丸・二の丸共に相渡し候べし。さり乍ら三の丸には、城兵の妻子共を悉く入置き、難波田・木呂子・金子・山田は、二百餘人を引具し、先陣すべしと申しける。前田利家・上杉景勝評議して、此城を攻落さば、思ひの外日數經べし。渠が所望に任せ、此城を請取る體に案内させ、武州鉢形の城を攻むべしとて、悉く是を免す。之に依つて、本丸・二の丸請取り、三の丸には、城兵等の妻子以下を入置き、彼四人に案内させ、畠山・本多の鄕四ッ山城を攻む。氏邦が家人四百餘人籠りしが、大勢に氣を呑まれ、一戰もせず城を落ち、鉢形の城へ

逃げ入りけり。是より嚮き秀吉仰にて、家康公の御家人本多中務大輔忠勝・鳥井彥右衞門尉元忠・平岩主計頭陣取りて、東山頂上より、城中を目の下に見下して、大鐵炮打かけしかば、城兵是に迷惑す。北の一方は、所狹く藪茂り、寄場なければ、勢をば向けず、輕卒數十人に張番させ、北の方より、夜討の出でざるやうに守らせける。四月五日には押寄せて、同十四日迄、十日餘攻めしかども、堅く防ぎて落ちざりける。然るに同月十四日の夜、空曇り風夥しく吹きける夜、丑の下刻、本多・鳥井・平岩等密談して、偷人五六人、東南角諏訪郭へ忍び入り、陣屋に火をかけけり。城兵大に騷動す。時に鳥井・平岩兩人は、兵を進めければ、城兵暫く防ぐ所に、夜討の兵共、無體に塀へ乘り入りしかば、城中の軍兵、火と敵とに攻められ、叶はじとや思ひけん、諏訪郭を打捨て、二の郭へ逃入りける。火は盛になりて、二の郭・土藏二つに燃付き、燒上り燒崩るゝ音、百千の雷の如くなり。城中にて兵糧を失ひ、此時寄手の勢、一同に攻むるものならば、城は忽ち落つべきが、夜中の事なれば、諸軍疑ひて見物したり。然れども本多手へ首六級、鳥井手へ四級、平岩手へ首八級、生捕一人したり

けり。城中には、藏を燒かれ、兵糧盡き、難儀に及ぶ。若しも日野の城の諏訪部遠江守、禰古屋の城には渡邊監物・淺見伊賀守、田野の城には三上外記・安藤兵庫助、其外天神山花照寺の味方の城々より、後詰の軍を心懸け、敵を拂ふ事ありやと、暫くは待ちけれども、此輩、敵大勢に氣を呑まれ、援兵もならざりけり。今は此城抱へ難し、いざや敵に降參し、命助かり先陣に加はり、軍功を勵み、本領〔脫字アルカ〕すべしとて、僧を願使とし、難波田賴〔脫字アルカ〕利家景勝へ降參を願ふ。兩大將是を免す。之に依つて鉢形の城請取り、兵士を入置き、彼軍兵共は、利家手に加はりけり。是より霽・秩父の城々攻むべく評議しけるに、鉢形の城落ちしと聞きて、悉く城を捨てゝ逃去りける。此時家康公より、御使來り、本多・鳥井・平岩等を召されしかば、鉢形より、小田原へ歸り來る。

上州治亂記 卷之十七 終

上州治亂記卷之十八

德川家康公以二御計策一北條氏勝和睦、諸大將向二八州城々一

或時秀吉、家康公を招請ありて宣ひけるは、小田原を相圍んで攻め戰ふ事、旣に久し。城兵定めて困窮せん。然るに能く防ぎて、未だ塀一重をも破らず、關東の諸將、猶北條に與力して、未だ味方に從はず。願はくは德川殿、吾が爲に計り給へ。其時家康公聞召し、爭でか素意を存ずべき。尤も計略候べしとて歸り給ひ、本多忠勝・井伊直政・榊原康政を召して仰付けけるは、相州甘繩の城主北條左衞門大夫氏勝は、去頃山中の城に籠りたりしが、彼城旣に攻め落され、何の面目あつて、再び小田原へ參るべきとて、山中より、直に居城甘繩に籠居して、敵寄せ來らば、聲華(はなやか)に一戰し、討死せ

んと相待つ由、其聞えあり。何ともして氏勝を味方になし、八州の諸將を攻むる案內者に仕り、氏勝味方に與力して、諸大將導引せば、東國の輩は、大略降參せんと思ふなり。汝等深く謀を遠く慮りて、味方になせと仰せければ、三人共に、畏り候と申上げ退きける時、本多平八郎忠勝、都築彌左衞門を呼びて、汝は北條氏勝が伯父の僧了辰法師に、年頃睦しき由聞くなれば、急ぎ甘繩の城に赴き、彼僧に對面し、氏勝和睦するならば、本領殘らず安堵し、則ち甘繩の城に差置くべし。譬ひ籠城すとも、何程の事仕出すべき。小田原の落城は、旣に是れ近きにあり。北條一家悉く滅亡せば、五代の苗孫爰に絕えん。是れ先祖に對して不孝なり。氏勝、此儀を思はるれば、曲げて味方に相屬し、北條氏を相續あるべし。敵に城を攻められて、降參するには縡替り、家の爲め身の爲めなれば、家康と和睦あるべし。秀吉の前に於ては、家康旨を申上ぐべし、御疑あるまじ。甘繩に馬を馳せ、彼所にて仰含められ、趣を敎へける。都築領掌し、然らば彼所の寺中に至り、案內して、了辰對面し、右の趣を細々と語り、和睦の事を勸め給へと申しける。了辰尤と得心し、甘繩城に入り、彼の趣を語りけ

る。氏勝更に承引せず。了辰諫めて、畢竟籠城あるまじき事を示し、次に名字相續の儀を諭しけれども、用ひず。歸り來りて、其趣を都築に語る。都築申しけるは、斯樣の大事は、一度二度にて、同心にならざる者なり。今一度も二度も諫言して給はるべしと、一向賴みければ、再び城に入り、樣々に意見しければ、氏勝漸く心解けて、和睦すべしと申しければ、了辰歸りて、然々と語りけり。都築は大に悅びて、是一偏に了辰の御影なれば、其旨をも申すべしとて、小田原に馳歸り、此旨主人忠勝に告げしかば、忠勝則ち家康公の聞に達す。家康公御感あり。氏勝も人質を獻じけり。其後氏勝、小田原に來りければ、忠勝誘引して、家康公に對面す。則ち秀吉へも、斯くと仰ありければ、頓て氏勝御對面あり。懇の仰あり。氏勝退出したりければ、秀吉は、家康公を近付けて、今に始めぬ事ながら、德川殿の智弁に相口、奇なり妙なりと仰せけり。家康公仰せけるは、氏勝味方に屬すと聞けば、東國輩、大略味方に與力すべし。氏勝を案內として、早く諸城攻めらるべく仰せければ、秀吉尤と同心し、淺野彈正少弼長政・石田治部少輔三成・木村常陸介重茲（むげゆき）等に下知して云く、早く東國城々

北條氏勝降る

を計略すべし。本多中務大輔を監察とし、北條左衞門大夫氏勝を案內者に付けらるる上に、猶旗本の健士大勢、差添へらるゝ由なり。是より先面々手分して、武州に打入り、江戶・羽生・口柄・忍・岩槻、下總にては佐倉・土氣・東金・關宿・古河、上野に足利・館林、此外の城々をも、一々攻落すべき由を下知あり。之に依つて、諸將大軍を引率し、諸城へ向ひけるに、防戰叶ひ難く思ひけん、皆悉く降參し、寄手の勢に加はりければ、猶大勢とはなりけり。今相殘る城とては、上州の館林、武州忍・同岩槻・同八王寺の城、僅四箇城殘りける。諸大將打寄り、先づ館林を攻落し、直に忍の城を攻むべしと、軍兵着到付くる。

上州館林城攻附城鎭守稻荷奇妙幷城兵降參

斯くて關白秀吉方の諸大將評定して、淺野彈正少弼長政と、石田治部少輔三成二手に分れ、長政は武州岩槻の城へ向ひ、館林城へは、石田三成・大谷刑部少輔吉隆・長束正家幷七組の頭速水甲斐守時之・堀田圖書助祐吉・野々村伊豫守忠春・中島式部少輔

氏種・伊東丹波守有能・松浦安太夫宗清・鈴木孫三郎重朝等なり。案內者には、北條左衞門大夫氏勝、都合其勢一萬九千四百餘人なり。五月廿三日、三手に分れて、館林の城へ、三方より寄せ懸けたり。此故は、此城東南の方は、つゝじが崎とて、渺々たる大沼を抱へたる事なれば、人馬の通路更に絕えたりと、案內者北條氏勝申すに依つて、味方の軍士を三手に分けて、三方より向ひけり。先づ西の大手は、石田治部少輔三成大將として、相從ふ人々には、速水甲斐守・中江式部少輔・松浦安太夫幷關東の諸城降參の兵加はり、其勢七千餘人、佐賀・和田の渡りを越えて、佐野口より、西の大手に向ひ、土屋原の松林に陣取る。又東北の間なる加保志口の大將は、大谷刑部少輔吉隆、相從ふ人々には、堀田圖書助・鈴木孫三郎幷諸城降人、彼是軍勢五千六百餘人相向ふ。又東の方下外張口へは、搦手の大將として長束大藏大輔、相從ふ人々には、野々村伊豫守・中島式部少輔・伊東丹後守幷諸將降人、合せて六千八百餘人、都合一萬九千四百餘人、城を圍んで、鯨波の聲を揚げたり。當城主北條美濃守氏規は、氏政の下知に依つて、伊豆韮山の城に籠り、此城には、家人南條因幡守を城代として、旗下

の輩に、間下越前守・淵谷上野介・片見因幡守・富田又十郎・白石豐前守・富岡六郎四郎・朝林甚內以下の侍百七十餘人、足輕の軍兵二百餘人籠りければ、其勢都合六千餘人、百姓・町人・寺法師・社家・山伏迄馳集り、其內女童千餘人。此輩三方の敵に對して、矢を放し鐵炮を打かけ、透間なく防ぎけり。寄手は、若干大勢なれども、究竟の要害なれば、輙く攻落すべきやうもなく、互に鐵炮を打合せ、五日廿二日より同廿六日迄、五日の間遠攻にして、徒に日を送りけり。廿六日に、石田治部少輔三成は、長束大藏大輔・大谷刑部少輔を招き集め、評議しけるは、扨愚案を廻らすに、此城東南大沼にて、攻寄すべき便なく、手明にて、城中の輩は、唯三方を防ぐ故に、持口に人多く、防戰するに便あり。某が存ずるは、軍兵六七百に、人夫二三千を差添へて、大岱山に入り、大木小木を斬倒し、大沼へ投げ入れ、在家を壞ち、筏に組み入れ、八九間に道を作り、其上を打渡り、城を攻むるものならば、城兵は小勢なり。勢を四方へ差分けば、口々の人數減じて、防戰の事叶ひ難し。此時諸勢時刻を定め、只一度に城を攻むれば、忽ち城は落つべきか、如何と意見を問ふ。長束・大谷之を聞き、然るべしと同心

し、近隣迄相觸れて、人足の價を極め、人夫を催しける程に、寄手の人夫に相加はり、旣に二萬に及びけり。近山の木を斬倒し〳〵、彼大沼へ打入れ〳〵、段々に是を筋ぎ、竹木を堅く重ね、筏の如く組みける程に、晝夜六日の其内、道幅九間に二筋迄、水上に道を付けたり。城際近くに及びては、三方の寄手共示し合せて、口々を破らんと、强く攻むる。城中の兵は、沼に道を付けさせずとしたりけれども、三方の攻口とも、危しと告げたりしかば、急なるを防げとて、三方へ向ひしかば、沼の方には人もなく、少々鐵炮打ちけれども、寄手の方の輩には、楯・竹束を突立て〳〵、段々に攻寄せて、其楯蔭よりして筏を組み、鐵炮打たせ、塀矢狹間閉ぢたれば、心安く道を作りける。北の方は、要害能ければ、城の普請も淺間なれば、中々迷惑しけるとかや。旣に道も成就しければ、石田は大に悅び、明廿九日には、未明より城の總攻と、陣へ相觸れけり。扨大沼の寄手には、梯餘多用意し、塀に打懸け乘入らんと、明卯の刻を待明す。然る所に城中には、廿九日の夜中より、松明二三千程燈し連れ、人夫二三萬人もあるらんと、思ふ程なる人聲にて、普請する事夥し。寄手の軍兵之を見て、穴夥しの

人聲や、是程迄城中に、人あるべしとは思はざりし。定めて是は今度新に、堀に柵を附くるものなるべしと推量す。城中には之を知らず、松明の火、普請の聲は、寄手方と思ひしかば、穴夥しの軍勢や、此城滅亡も、明日にあるべければ、名殘も今宵計なりと、諸勢一つ所に集り、暇乞の酒宴して、無明の睡を覺しけり。抑此普請は、寄手にもあらず、城中にも、夢にも知らずありけるに、何者の所爲ならんと、不思議なりし事共なり。既に其夜明方になりしかば、石田治部少輔三成が軍兵共、大沼を渡らんとて、鬨の聲を揚げければ、三方の寄手、同じく鬨を合せたり。去程に石田が軍士大沼を渡らんと、三千餘人の兵共、面々馬を乘放し、持楯・竹束先に立て、水邊に至り見れば、二筋付けたる道の材木組みたる筏、目前に皆泥中に沈み、一木も見えざりけり。斯りし上は、渡りて攻むべきやうなく、呆れて途を失ひけり。終夜城普請は、材木をや取捨てけんと、寄手奇異の思をなしにけり。此折節、北條氏勝、石田に對して申しけるは、夜前の松明普請の體、又此道に沈みし體、人間の所爲にあらず。此城の奇妙に依つて、往昔を案ずるに、此城の開基といふは、中頃赤井但馬守法連と申す

者、狐の引道に依つて、此所に城を築き、法連、是に居住せらる。狐忽ち老翁に變じ、誓を立てゝ申しけるは、予は必ず此城の鎭守となり、幾久しく、此城を守護すべしと、堅く契約せしとかや。依つて社を爰に建て、稻荷曲輪と申すなり。又其昔北條より、此城を攻めたりしに、二三千の松明燈し、六七千の軍兵を率し、後詰の人數の如く、鬨の聲を作りしかば、北條方の軍兵共、此後詰に驚き、悉く敗北せしに、後詰に來りし人はなし。是皆狐の所爲といへり。斯樣の事共を存ずれば、夕の松明、人夫の體、稻荷大明神の所爲にや候べきと、昔を引きて申しければ、石田以下の諸大將も、不思議の事に思はれけり。此上は和睦して、此城を請取り、是より直に兵を進め、忍の城を攻め取るべしと、氏勝に評議して、和睦の事を繕ひけり。氏勝則ち書を認め、城代南條因幡守幷旗下七人へ、連狀にして送りける。其詞に曰、

態令啓上候。然らば氏政・氏直以下一族郞從栖籠小田原城所、三十萬餘兵を以圍城、日夜旦暮雖相戰、城兵堅く防之、未不落。然れ共城中兵糧に令闕之、軍兵大に致困窮、兼而又從八州諸城、可有兵糧運送旨、被定置候所に、秀吉多勢を八

州の城々へ差分け被二責緊一。依レ之兵糧運送并軍兵後詰之術、曾以難レ叶。小田原獨爲二孤城一滅亡期有レ近。依レ之北條氏欲二根絶枝葉枯一。今苟氏勝爲二北條之苗裔一纔欲レ令二相續名字一然而令二和睦一。秀吉致二本領安堵一。當城之主將氏規朝臣籠二韮山一、被レ圍二大軍一苦戰令二心痛一。今面々秀吉に和睦被レ致、速に城を渡し、先陣に相加り、軍忠を被レ盡ば、面々本領安堵可レ被レ致。城主氏規後難を遁れ、頗眞實忠節可レ爲歟。今氏規・氏勝と親昵の好ある故、思二後榮一心底を振所也。不宣。

天正十八年五月廿八日　　北條左衛門大夫氏勝判

南條因幡守殿
間下越前守殿
淵名上野亮殿
片見因幡守殿
富田又十郎殿
朝羽甚内殿

白石豐前守殿
富岡六郎四郎殿

とぞ書きたりける。之に依つて八人の輩、其外城中軍兵を招き集め、評定凝らす所に、氏勝の狀を披見し、將も士卒も勇氣撓み、皆降參に極りけり。之に依つて、其旨返答す。氏勝返翰持參して、石田・長束・大谷に、然々と申しければ、三人共に大に悅び、今度氏勝の相働、拔群なりと褒美せり。則ち和睦調ひ、同晦日に、館林の城を請取り、番兵大勢入置きける。今度歸降の軍兵を、悉く先陣とす。其外國侍、此後馳加はり、其勢既に二萬二千百餘人着到す。是より直に、成田長氏が持城、武州忍の城に寄すべしとて、軍の手配したりけり。

館林城陷る

成田居城忍の城攻附水攻、堤押切り寄手溺死す

既に上州館林の城和睦しければ、秀吉諸大將、一兩日人馬を休め、武州忍の城へ押寄する由、先達つて聞えければ、忍の城中には、成田下總守が妻女、幷家臣柾木丹波守・

酒卷靭負助・柴崎和泉守・吉田河内守等を始め、諸家中を呼集め申しけるは、誠や秀吉家臣石田治部少輔・長束大藏大輔・大谷等といふ者、數萬人を引連れて、館林をば攻取り、此城へ押寄すと聞く。然れども城主長氏・舍弟左衞門佐共、軍兵數百騎を供として、小田原の城へ楯籠る故、城兵少し。長氏當城に居給ひなば、譬ひ味方は小勢なりとも、城より打出で、川股渡りに陣し、川を隔てゝ相防ぎ、叶はぬ時は、城中に引籠り、定めて合戰せらるべきか。當時は此城、主將なく、殊更僅小勢なれば、城を離れ、軍ならじ。唯要害を便として、死を顧みず拒ぐべし。言甲斐なく攻落さるれば、長氏の死生も計り難し。此趣を、勇士輕卒の輩にも、能く申含むべし。城中の侍多からねば、百姓・町人・寺法師に至る迄、悉く馳集め、城中に籠置くべし。又兵糧・大豆・粟・稗・麥等の食物になるべき物は、申すに及ばず、炭・薪・油糠・藁に至る迄、日頃農人・商夫等、寺社に養ひ置きたる雜物迄、少しも殘らず取入れ、近郷隣里の輩は、五穀の類を隱しなば、敵方へ亂妨せられ、永代損失ならん。城中に入置きなば、己々が身を養ひ、軍利運になるならば、一倍にて返すべし。此趣を相觸れよと、細々と下知し

けり。誠に女性の心根は、奇特の事とぞ沙汰しける。柾木答へて申しけるは、仰畏り候。たとひ味方は小勢なりとも、八州の城々は敵に降り、羽生・口柄二城も降參し、前後左右に味方なし。吾々川股に向ふと聞き、程近き城々より、後を攻めんと存すれば、出張は叶ひ難し。唯此上は、籠りて敵兵を防ぐべしと、評定相究め、一兩日の其內に、近鄉隣里相觸れて、五穀の類數百石、忍の城へぞ取入れける。農人・商夫・寺法師、成田が所領にあらぬ鄉民迄、糧を荷ひ財を負うて、忍の城へ取入れける。其後軍の評定して、持口を定めけり。先づ長野口の出張は、柴崎和泉守一時・吉田和泉守照末・同新四郎・三田加賀守・舍弟治郎兵衞・鎌田三左衞門・成澤庄五郎・秋山惡右衞門、其外足輕廿四人、農人・商夫相加はり三百餘人、透間なく弓・鐵炮を構へて相堅め、北谷口は、栗原十郎兵衞・藤井大學・同右馬助・橫田大學・沼野兵庫介・江田主水助、弓・鐵炮足輕三十人、農人・商夫・法師・山伏、合せて二百五十餘人。佐間口は、柾木丹波守・福島主水・長谷部隼人佐・內田三郎兵衞・櫻井又右衞門・內田源六郎、幷弓・鐵炮足輕四十餘人、農人・商夫、都合四百四十餘人。下忍口は、酒卷靭負・同右衞門次郎・手島釆女助・

青木兵部丞・矢澤玄蕃允・櫻井藤十郎・堀掬五郎・足輕の兵百人、弓鐵炮組合・農人・商夫、合せて六百七十餘人。大手竹田口には、島田出羽守・今村佐渡守・坂本將監・荻澤傳右衞門・福田治部右衞門・吉野源太左衞門・同源三郎・同源四郎・福島勘解由、并弓鐵炮足輕百二十餘人、農人・商夫五百人。四尾口には、篠塚山城守・安東治部右衞門・宮原左近・長瀬與三郎・市橋内匠助、并弓鐵炮足輕二十五人、農人・商夫・寺法師百五十人。持田口は、長瀬村の農人を屯させけり。

上州治亂記 卷之十八 終

武田居城退還の後文間水攻堤押切り寄手溺死す

上州治亂記卷之十九

忍の城の要害

抑此忍の城と申すは、大手長野の出張より、本丸迄の間に、堀を掘り壘を築き、木戸を構ふる事、都て九重、其中に大沼二箇所、殆んど湖に異ならず。城の南北も又大沼にて、水漫々と湛へたれば、船なくては渡り難し。城の四邊は深田にて、用水岡迄溢れしかば、何れの口の寄手も、進んで攻むべきやうなし。一騎打の細道を、順に進んで寄せんとせば、寄手勢は盡くるとも、城の落つべきやうなし。されども城を攻めずして、城の落つべきやうなければ、四方の寄手牒じ合せ、一度に攻めんと進みけり。僅なる細道を、我劣らじと爭ひ進めば、味方の勢に揉み落され、深田に入りて泥にまぶれ、湟に落ちて水に溺れ、鐵炮の爲に打殺され、手負死人數を知らず。中にも四尾

口の寄手は、二千計順に進んで、馬より下り、歩立になりて、押寄せ、急に爰を破らんとす。城中の輩は、鳴を靜めて待懸け、敵を近々と引付け、松橋内匠助といふ鐵炮の手垂者、大鐵炮にて狙ひ濟し、寄手の內に打入れたるに、程は近し人は多し。なにかは以て怺ふべき。敵八人迄矢庭に打殺し、手負の者も多かりける。是を軍の手初めとして、城中の兵共、鐵炮稠しく打出す。寄手大勢走り懸り、木戶・逆茂木を引破り、塀に乘らんと、心計は勇めども、道は狹し人は多し、左右は沼にて、水は湛へたり。先に進む軍兵は、的になりて打たれしかば、寄手の軍兵堪へ兼ねて、本陣迄逃歸る。中江式部は是を見て、此口難所にて、足場大に惡しければ、力攻は叶ふまじ。栖樓を組上げ、鐵炮にて打てやとて、栖樓二箇所に組上げて、鐵炮を打たせつゝ、軍を止めて控へけり。城中には兼てより、敎令を出しければ、何れの持口なりとも、味方勝利ある時は、貝を吹くべし。味方難儀に及ぶならば、鐘太鼓を合せ鳴らせ、若し鐘太鼓を聞く時は、他の持口より助け來れと、兼て相圖を定めけり。爰に石田三成は、近臣七人相具し、陣所を立出でゝ小山に登り、忍の城を下壘に見て、本陣に立歸

り、大谷刑部少輔・長束大藏大輔方へ使者を遣し、談ずべき事の候、急ぎ我陣へ來り給へと申送る。二人則ち來りける。時に石田治部少輔申しけるは、城の體を見るに、究竟の要害に、玉薬も澤山なり。兵糧も又乏しからず。進んで城を攻めんとすれば、堀沼多く道狹く、多勢進退途を失ひ、今度東國の城々共、忽に乘取る事は、或は要害淺間にして、防ぎ戰ふ事叶はず。或は城兵怯弱にて、味方の大軍に恐れ、攻めずして降參す。今此城のみ能く防ぐ。我れ熟々と案ずるに、此城要害の有樣は、地下りにして、而も流れ水の便あり。城の四邊に堤あり。又利根・荒川を切かけ、水攻にするならば、城中の輩は、悉く溺れ死なん。各も如何と申しければ、大谷・長束、然るべしと答へける。石田則ち近郷隣里の農人・商夫へ、段々に觸れければ、僧侶は申すに及ばず、男女兒童によらず、忍の城外に馳集り、土を運び堤を築きければ、米錢宜しく給ふべしと、此觸を聞くより、近郷隣里の農人・商夫等、我勝に集りければ、端的其内に數十萬人集り、夜晝の差別なく、簣に入れて土を運び、數萬間の堤、横四間高さ二間、唯四五日に築立てけり。其時石田三成、奉行に下知を加へ、米錢を與

ふるに、晝は人夫一人に、永樂錢六十文・米一升、夜は永樂錢百文・米二升と定めけり。米を與ふるは、遠方より來る輩、面々手前の扶持にて、普請する故なり。然るに城中の農人・商夫共、忍々に城より出でゝ、夜普請に紛れて、土を運び堤を築き、米錢を取り、彼の永樂錢にて米を買ひ、城中へ入れたりける。此事、奉行に告ぐる者あり。奉行人驚き、此城に糧を入るれば、落城する事あるべからず。城より出づる輩をば、逸に搦捕り、首を刎ぬるものならば、重ねて出づる者あらんと、石田に斯くと告げしかば、三成更に承引せず、其事大に悪しかるべし。堤だに成就せば、譬ひ米は城にありとも、唯一人も人足多く、堤の早く出來る事を、專一とすべきなり。若し一人も搦めたらば、自餘の人夫も驚きて、逃げ走る者ならば、堤は成就すべからずと、大に禁呵しければ、手を指す者もなかりけり。同月十一日に、既に築地出來しければ、人夫をかけて、利根川を切かけしかば、一滴も洩らさずして、忍の城へ流しかけたり。依つて城外數十町、忽ちに水湛へ、漫々たる事、湖に似たり。水湛ふる事、晝夜十三日、皆人毎に、城兵の溺れ死せん事を哀れみける。然るに城兵水に溺れず、低き所は、水入

れけれども、高き地形は水入らず。泥や壘の上高ければ、少しも水には痛まず、逆浪天に漲りて、數十町は海に似たり。尤も通路絶えしかば、城中の輩は、敵寄すべしとも思はず、甲冑を脱ぎ、帶紐解きて、此間の辛苦を忘れんと思ふ所に、彼坂東太郎の利根川溢れける故、近里の地多く水に浮み、城の壘に游ぎ來る。是を殺すに障なく、大に城兵迷惑に及びけるとかや。されば十一日の晝前より、城外に水溢れ來る。寄手は堤の外に、帷幕を垂れて居たりしに、同十六日の申の刻より、俄に雷鳴りて、暴風烈しく、雨車軸を流し、白浪頻に堤を灑ぎ、其夜半に及び、北川といふ所、堤四五間押切れたり。新に築き揚げたる堤なれば、上よりは雨流れ、浪又堤の腹を敲く。なじかは以て堪ふべき。此處彼處を押切りしかば、堤の外なる寄手の勢共、闇さは暗し、道は見えず、水一面に押し來れば、堀溝も見えず、深き所に落入りて、流れ死する者、若干とも其數知らず。暫くして水干けれども、其道筋、悉く深き泥となりしかば、暫く人馬の通路、叶ひ難く見えければ、寄手は城を遠卷して、徒に日をぞ送りける。

徳川家康公以二御計一成田長氏を相語らふ

さる程に、小田原の城をば、去る四月上旬より、日本國中の軍兵共、粉骨を盡し攻めしかども、城堅くして能く防ぎ、未だ塀一重をも破られず。然る所、徳川家康公御計にて、諸大將を差分け、上州・武州に遣され、城々を攻めしかば、或は城を攻落され、或は城兵降參し、上方勢に加はりしかば、寄手はいよ〱多勢となり、口に申遣す趣は、成田下總守事、志を秀吉公の味方に通じ、某に依つて、降參仕るの間、忽ちに免許せらる。未だ其城とまらざれば、早速に圍を解き、關八州に從はざる城あらば、馳せ向ひ攻め取るべしと、委細に申送りけり。之に依つて、寄手の諸將之を見て、右の趣、城中へ告げ知らせ、六月廿七日午の刻に陣所を引拂ひ、城中に籠りたる農人・商夫・寺法師・山伏・男女兒童に至る迄、籠を出でたる鳥の如く、悦ぶ事は限りなし。又北國の大將前田利家・上杉景勝等は、さる頃、武州八王子の城を攻取り、生捕の輩共を、小田原へ遣しければ、秀吉を始め大に悦び、彼生捕の者共を、本陣に召寄せけり。此

故は、八王子の城主北條氏輝は、三千五百人を引率して、小田原に栖籠り、今生捕の者共は、彼軍勢等が父母妻子、兼て家康公と相談して、彼の者共を中船五艘に取乗せて、態と小田原の沖を漕ぎ通す。北條氏輝の籠り居たる海手の方の役所より、鐵炮を打かけたり。此時船より呼びけるは、此所を堅めらるゝは、八王寺の人々か。暫く鐵炮を止め給ひて、申す所を聞き給へ。船中の人々は、皆八王寺の者共なり。彼城既に攻落し、籠城しつる父母妻子は、悉く生捕られ、誰々の妻子共、某が船に候ぞ、過ばしし給ふな。然れども秀吉より、憐愍を加へられ、殺す事勿れとの下知に依つて、唯今本陣へ參るなりと、聲々に呼ばらせければ、聞く聲耳にとまりけん、鐵炮を止めにけり。其後船は漕ぎ通る。八王寺の軍兵共、怪しき事に思ふ所に、中山勘解由・狩野一庵、首二桶に入れさせて、禪僧二人に是を持たせ、役所の近所に桶を置き、此役所の陣中に、中山勘六殿幷狩野主膳殿、御渡し候や、親父に對面あるべしとて、御大將より遣されしとて、河原に首桶捨て置きて、二人の僧は歸りけり。彼所の輩之を聞き、若しも實にてありけるかと、彼桶を開き見るに、誠に兩人の首なりける。

扨は以前の船共は、疑もなき我々が父母妻子なりけるよと、皆々呆れ果てゝぞ居たりける。陸奥守も之を聞き、氣も甚□□けり。是よりして氏輝、□に志を〔脫字アルカ〕寄手の爲に利を得られん。所詮敵方へ、降參するより外なしと、山上郷右衞門尉に、八千餘騎を差添へ、成田が陣を警固しければ、小田原の城中騷動して、いよ〳〵危く見えたり。

忍の城寄手解レ圍、家康公秀吉と相計り、氏輝を奪ひ、兵の勇氣を挫く

成田下總守、既に降參しければ、秀吉方より飛脚を以て、城の寄手へ遣され、飛脚則ち忍の城下に參着して、石田三成方へ、一封の書狀を渡す。之に依つて、淺野彈正少弼・大谷刑部少輔・長束大藏大輔・木村常陸介、其外諸將悉く會合し、彼書披見する所に、山中山城守より、秀吉の仰として、成田下總守と舊友なれば、誠に狀を遣し、渠を秀吉に降らしめよ。其時山城守、畏りて宿所に歸りける。抑此成田下總守長氏は、

常々連歌を翫び、毎年秀逸の句を記し、使者を京都へ差上せ、法橋に點を取る。又山城守も、日頃連歌を好みければ、兼て互に書翰を通じ、其中睦しかりけるを、秀吉委しく知る故、此の如くに下知しけるとなり。之に依つて、山城守則ち書を認め、緣を求め送りけり。其文に曰く、

捧₂一封₁伸₂寸志₁畢。仍年々預₂温問₁事、甚以恐悅之至り、更に以て甚深に候。就中關八州氏政家人の城々五十二箇所、大半或は致₂落城₁、或は降人となり畢。然れば其城□□之泊眼前に候。貴翁先祖の家業絕不絕昌不昌、有₂唯今之寸志₁。秀吉御前の儀は、宜しく執申條、御心可ㇾ被ㇾ安候。急に被ㇾ變₂御心₁尤に候。委曲は使者に可ㇾ得₂芳意₁之條、禿龍不ㇾ湟。恐惶謹言。

六月二十日　　中山山城守長俊

成田下總守殿

此密通の使、夜中に出し遣す所、恙なく成田が陣所へ到りけり。成田、使に對面し、口上を聞き、書狀を見て思ひけるは、且つ聞く所、北條の滅亡は近きにあり。名字

を相續し、先祖を祭る事、絶えざるやうに致すべし。思案して、則ち返翰を遣しける。

其文に曰、

御內狀之趣辱次第、難ㇾ盡ニ楮上一。委細之儀申ニ任使一有ニ口上一條、止ニ口管城一候。恐惶謹言。

季夏念日　　成田下總守長氏

とぞ書きたりけり。山城守、成田が回章を持參して、秀吉に獻じければ、秀吉大に悅び、小田原の落城は、旣に近きにありとて、德川家康公を招請して宣ひけるは、德川殿願はくは、成田が返翰を、氏直の方へ遣され、渠に示し給ふべし。關八州の諸城も悉く降參し、城に籠る諸大將も、皆秀吉に密通す。然る上は、小田原の城全からず。氏直速に、秀吉が軍門に來り、身命を全うして然るべしと仰せられて、給はりなんやと賴まれけり。家康公御肯ひ給ひ、成田が書狀を遣して、然々と仰越さる。氏直、成田が狀を見て、大に驚き怒りけり。是よりして、小田原の城中、群疑泉の如くに涌き、浮說雲の如くに起る。其時氏政、人を成田が陣に遣し、評議すべき事あれば、本城に

參るべしと申送りけるに、下總守、病氣と稱して來らざりし。之に依つて、使者三度に至れども、遂に來らず。氏政、又使者を遣し申しけるは、沙汰に、二心ある由、我れ潜に之を聞けども、未だ其實否を知らず、其事聞かん爲め、再三人を遣せども、足下來らず。此事、虚なりや實なりやと、醫師安栖に申送る。成田聊か陳防せず、返答を申しけるやうは、敵大軍を率ゐ、忍の城を圍み攻む。妻子郎等幷に農人・商夫の妻子等迄、悉く殺さん事、忍ばざる故、山中山城守に依つて、秀吉に降を乞ひ、城兵の命を助けんと仕る。此事更に僞にあらず。定めて御憤深かるべければ、下總守が首を刎ねられんに如かじ。忍の城中の輩二三十が命に、長氏が一人替られん事、少しも痛む所にあらず。御人數を差向けられば、我兵、雜兵僅五百人には過ぎず、速に自害して、討手の大將の引出物に仕るべしと返事しける。之に依つて、小田原城中にても、渠を攻殺さんとせば、城中大に亂雜し、障る者なかりしかば、之に依つて、關八州の城々より小田原へ、兵糧送る味方なく、又は人數を入るゝ將もなし。斯りければ、城兵次第々々に困窮に及びける。爰に又石田治部少輔三成・長束大藏大輔正家・大谷刑

部少輔吉隆三將の方より、大將秀吉の方へ註進しけるは、關東の諸將、大略攻取り候。下總・上總・安房・常陸は、程遠く候故、未だ手遣仕らず。上野・下野・武藏の敵は、雌伏仕る。只今上州館林の城を取詰めて攻め候處に、城兵堅く防ぎて、落ち難く候。然るを北條左衞門大夫氏勝計りて、城兵降參仕る間、之を免し、押付城を請取り、夫より直に成田長氏が居城忍の城に馳向ひて、攻むべき由を申送る。秀吉註進を披見する折節、德川家康公、御見舞として、秀吉の陣に來り給ふ。秀吉大に悅び、則ち三將方より遣す所の書翰を見せて、軍の意見を問ふ。其時德川家康公仰せけるは、傳へ聞く、忍城は堀沼多くして足場惡しく、大軍の進退、自由ならざる城と承り候。然るに之を攻められば、味方の人數若干討たれ、殊更日數を送るべし。人を損せずして剛敵を口るは、良將の法なり。幸に忍の城主成田下總守は、小田原にあり。味方の内に、渠と睦しからん者を以て、和睦の事を取繕はせ、軍兵を殺さずして、やすやすと城をも取るやうに、御計らひあるべしと仰せければ、秀吉大に悅びけり。家康公退出の後、秀吉は、六月二十日、祐筆山田山城守を召して宣ひけるは、汝は日頃

忍の城主〔以下缺文〕

上州治亂記　卷之十九　終

上州治亂記卷之二十

小田原落城

抑相州小田原の城をば、秀吉公、日本國の軍勢五十四萬餘騎を以て、去三月上旬より今七月迄、打圍んで攻めしかども、城堅くして落ちず。然る所、徳川家康公の計として、味方たる關八州の城々、大方ならず攻め落し、之に依つて、小田原へ後詰致さん味方なく、兵糧運送の便盡きたり。斯くては畢竟、此城にて運を開かん術もなし、如何せんと、諸大將打寄り評議に及びけり。然る所、下野國宇都宮の住人芳賀伯耆守進み出で、扨愚案を廻らすに、當城と申すは、要害稠しく、相構ふのみならず、關八州の名ある大將籠りければ、三月の初めより七月に至る迄、相抱へ戰ふに、秀吉・家康、日夜旦暮攻むれども、塀一重をも破り得ず。又敵方にて、品を替へ術を盡しぬれど

も、返忠の者なし。唯松田・成田二人の外、心を變ずる人なきは、誠に東國は、武勇の國と相見ゆれば、各心を一致にして戰はゞ、五年十年落城あるべからず。其内北國・中國の諸將退屈して、心替らん其折を見繕ひ打つて出で、運を天に任せんに、〔脫字アルカ〕手に取るやうに申しける。之に依つて、諸大將、誰あつて、今度の大軍を出張して、戰はんといふ人もなく、旣に籠城に究りける。斯くて天正十八年七月十日、關白秀吉公・德川家康公、兩勢合せて五十萬餘騎、且北國菅原朝臣・上杉家、又關八州の城々降參人・野武士等、都合其勢八十萬八千餘人とぞ聞えける。小田原の城を、十重廿重に取詰め攻立つる。城兵未だ評議一決せず、降參と申す者多かりけり。はや其内、一の郭を攻拔かれ、三の郭に各楯籠る。其時氏直諸將を招き、今般一族從軍迄、此城を枕として、討死を究めしかども、我れ大勢の士卒を殺さん事忍び得ず。此故に武名を捨て恥を忘れて、氏直は自ら敵の軍門に降り、諸卒の命を請け助く。然る上は面々も、志に從ひて、何國にも身を隱し、月日を送り給ふべし。氏直若し存命ひて、再び思立つ事あらば、舊好を忘れずして、見繼ぎてたべと申されければ、大將も軍

氏直降る

氏政自盡小田原落城

兵も、兎角の返答申し得ず、各鎧の袖を濡しける。誠や北條家、運の盡きぬる時節にや、誰一人駈向ひ、敵を防がんといふ者なく、各評議のみに及びけり。はや其内に、秀吉の軍勢八十萬騎、段々に本丸迄攻寄する。大將氏政、今は下知も屆かず。氏直は、敵方へ降を乞ひたる由を聞き、渠は德川家と、親子の交あれば、家康能きに計らんと、其身は鎧を脫ぎ捨て、一首を書く。

雨雲の覆へる月も胸の霧はらひにけりな秋の夕風

と書き終り、氏政押肌脫ぎ、聲を發し、腹十文字に搔切りたるを、舍弟北條美濃守氏規介錯し、御首を打落す。時に是れ天正十八年七月十二日、北條左衞門大夫氏政、五十二歲なり。德川家康公の御計らひとして、秀吉へ申しけるは、今般の大敵氏直、降を乞ひ候故、落城に及び候。之に依つて、新九郎氏直を、高野山に遣しける。相從ふ一族には、北條美濃守氏規・同左衞門佐氏堯・同十郞氏房。郞等には松田左馬之助・大道寺孫九郞・同內藤左近大夫、其外近習三十餘人。凡そ從者三百餘人と聞えけり。此事案ずるに、德川家康公御爲には、氏直は御婿にて御座せば、斯く懇にはせられしと

氏直死去

や。然るに天正十八年十一月十日には、高野山の寒氣を察し、秀吉公の下知として、氏直以下の者共を、高野山に到り慰むべき由、御書付きしかば、彼所に下山して、寒苦をこそ凌ぎけれ。翌年五月、高野山より呼び迎へ、大坂に到りければ、織田信雄卿の家屋ありしを、氏直の屋敷とし、白米三千俵其外十五種積並べ、氏直へ恩賜。其年臘月には、秀吉、氏直に對面し、種々饗應の事畢り、來春になるならば、西國方に於て、一箇國を扶助すべしと、直に契約ありけるに、天正十九年十一月十四日、疱瘡を病み出し、三十三歳にて、忽ち卒し給へけり。是れ則ち徳川家康公の婿なれば、秀吉斯様に憐愍し、末頼母しき事なるに、世を早くせられし事、北條家の滅すべき、天の時こそ至りけんと、皆人之を勞はりけり。斯くて天正十八年七月十二日、小田原落城に及びければ、關東忽ち平均す。是れ偏に徳川家の計らひに依るなり。秀吉公大に感悅し、之に依つて、關八箇國を家康に進せられ、軍功を賞せられける。唯今迄家康公、領せさせ給ひける參河・駿河・甲斐・信濃の事は、秀吉諸大將に配分致候べしとの上意にて、此度恩賞の諸大名へ、御墨付出す。

關白秀吉

一、右關八州　徳川大納言家康公

一、尾張幷北伊勢五郡　近江中納言秀次卿

一、陸奥十二郡幷越後内五郡高四十二萬石　蒲生飛騨守氏鄕

一、陸奥内八郡　木村伊勢守

一、參河内十五萬石　池田三左衞門尉輝政

一、同國岡崎城十五萬石　田中兵部大輔吉政

一、遠江内十二郡十五萬石　堀尾帶刀先生吉晴

一、同國五萬千石　山内對馬守一豐

一、同國三萬石　渡瀨左衞門佐繁詮

一、駿河内十四萬五千石　中村式部少輔一氏

沼津領二萬國は　中村彥右衞門一榮

一、甲斐國　加藤遠江守

一、甲斐國　丹波少將豐臣秀勝
一、信州小實城五萬七千石　仙石越前守
一、同國小笠原郡　石川出雲守
一、同國伊奈郡　毛利河内守秀頼（元カ）
一、同木曾二郡御藏入代官　石川掃部介
一、同州諏訪郡二萬八千石　日根織部吉明

此の如く恩賜あり。是れ則ち今般德川家康公、關八州の主とならせ給ひ、之に依つて、駿河・遠江・參河・甲斐・信濃、此五箇國明國となりし故、此の如く恩賜を行はれけるとかや。

小幡一家菩提所寶積寺

抑小幡權頭平朝臣實高は、元來勢州の人なり。甲陽信虎公の十九歲の時、出勤せられ、所々に於て手柄をいたされ、其後上州に來りて、國峯に在住す。之に依つて、所を

小幡と云々。後入道して、日城と號す。寶德二年庚午三月、寶積寺を建立し、卽庵宗覺和尙を開山とす。卽庵には、小田原より來りて、轟村鷲翎山奥天壽庵に住す。一牛を飼はれける。糧米なき時は、牛の角に一つの袋を懸けて、彼深山を出されける。牛、轟村に下り、家每に廻れば、村里の男女之を見て、角より袋を下し米を入れ、元の如く懸くれば、又外の家に行く。此の如くにして、袋に滿つれば、牛は庵に歸る。後には之を卽庵牛と云々。此卽庵和尙は、小田原の最乘寺了庵和尙より三世の孫にて、春屋和尙の嗣子なり。此寶積寺、元は律寺なり。其時の石碑今にあり。延應と號記梵文あり。開基小幡上總介といふは誤。寶德庚午は、人皇百三代後花園院の年號なり。將軍は、足利高氏八代の孫源義政公なり。上總介は、人皇百七代正親町院の御宇にて、永祿・天正時代の人なり。既に此上總介には、天正十八年、小田原陣に、氏政公へ加勢す。是を以て見る時は、日城入道開基たる事明かなり。卽庵和尙の傳記にも、開基小幡實高とあり。法名は、華翁榮仲居士と號す。

再び宮崎城主小幡彥三郞・宇田城主小幡圖書寶積寺合戰

永祿六年の事なるに、宇田の城主小幡圖書と、宮崎の城主小幡彥三郞と、異論の事ありて、合戰に及ぶ。　圖書謀に乘りて終に討負け、夜中に、妻子諸共寶積寺へ落ち來りて、魯岳和尙を御賴み申されければ、魯岳にも、一世の大事と思はれ、如何せんと思案致されけれども、流石相緣の事といひ、殊にまた魔毘王の袂に、鳩の入りたるを、助け給ひし事を思ひ出され、見捨て難く、早々寺中へ入れ申し、前後の門を堅めさせ、圖書殿に對面し、夜中に不慮の御入來、御賴みの趣、何とも大難に存ずれども、檀緣を慕ひ、御賴み來り候上は、異儀に及ばず。　御心易く御合戰なさるべし。　當寺の儀は、山高くして、一方口の事なれば要害能く、河內國金剛山にも、劣りはいたし申すまじ。　押付宮崎の城主彥三郞、寄せ來り申すべし。　御支度あるべしと、魯岳にも、方丈に、入衣の袖引結びて肩に懸け、裾取りて挾み、練絹にて鉢卷し、寺に傳はりし小長刀

を、妻手の脇に掻込みて、去來圖書殿出で給へといひ乍ら、山門に走り上り、四方を下知して控へたり。五六十人の大衆も、我れ劣らじと進み出で、福襟の袖を結びて肩に懸け、元より寺の事なれば、鑓も太刀もあらばこそ、俄の事なれば、唯山に有合ふ樫木、我も〳〵と手頃に拵へ、敵亂れ入らば、無二無三に打殺さんと控へたり。先づ圖書殿の装束には、白絲の鎧、敷目拵へたるを、草長に着て、同じ毛の甲の緒をしめ、大立物の臑當に、脇楯の下迄引籠めて、三尺八寸の太刀を帶び、重籐の弓を横たへ、魯岳と同じく山門に上り、矢束解いて押寛げ、寄せ來る敵を待ち居たり。寶積寺は東向にて、南は鷲翎の大山、西へ連なり、北は山はなけれども、大木あまた茂り合ひて、矢・鐵炮も、中々通り難き要害なり。總門の前は、鷲翎山の奥より、漲り出づる谷川、深くして底見えず。水岩石に當りて激する事、恰も雷の轟くが如し。大門を上り、八町は谷を右にして、霧の中を行く。岩石所々に横はり、中々進み難き嶮岨なり。然るに圖書に隨ふ侍廿四人、僧俗合せて七十餘人、今宵限の討死と、思ひ定めて待ち居たり。案に違はず、宮崎の城主小幡彥三郎、透もなく襲ひ來り、門外に馬

を立て、三百餘の軍勢を、前門後門に手配し、其身馬上に伸上り大音揚げ、いかに圖書、何とて居城を落ち去りて、山林に逃入りけるや。但し妻子諸共尼入道になり、降參せん存念か。然らずば、早々出でて、勝負をせよ。さなくば忽ち蹈み込んで、狼藉せんと申しける。時に圖書、山門にて此言葉を聞き、弓杖突いて申す樣、只今の雜言は、彦三郎にてありけるか。某不運に、汝が謀略に乘りて討負け、是迄落來り、更に尼法師となり、降參の心なし。汝若し來らば、快く一戰し、汝が首を取るか、我運盡きて腹切るか、是非の勝負を決せんと、大衆の合力を賴み、楯突いて相待ちたり。先づ珍しからず候へども、合戰の習なれば、矢一つ仕らん、請けて見よ彦三郎と、二人張十二束打番ひ、切つて放せば、門の上を鳴渡り、彦三郎の鎧の袖に、はつしと立つ。彦三郎驚きて、馬の手綱を搔繰つて、遙か遠くへ馳退きて聲張上げ、侍共にいひけるは、寺中に、さのみ人は大勢あるべからず。門塀を押破り亂れ入れと、頻に罵りければ、畏り候と、我も〳〵と切つて懸る。其時圖書は山門より、差詰め引詰め、矢種限に散々射かくる。侍共は、門を開き切つて出づれば、僧法師も、續いて打つて

出で、入亂れて戰ひける。寺中の者共は、命限り切伏せ打伏せ、火花を散らして戰ひける。されども寄手は大勢、味方は小勢、殊に僧徒は、大刀・長刀も持たざれば、皆枕を雙べて討死す。彦三郎は大に悦び勇んで、門の內へ馬を乘り込み、圖書は何處にあるぞ、侍共唯生捕れといふ所へ、圖書・魯岳爰にありと、廻廊の蔭より飛んで出で、十文字・巴の字切つて廻れば、彦三郎、此勢に驚きて、總門の外指して引返す。又寄手の者共、一息繼ぎて取つて返し、中庭まで亂れ入る。爰に六尺計なる法師一人、櫻の丸太一丈餘なる尺四五寸も廻るを、輕々と引下げ、多勢が中へ打つて入り、東西南北・四維八荒・乾坤宇宙迄飜せば、此棒下にて死する者、何十人とも其數知れず。寄手是に恐をなし、大將彦三郎、士卒の討たるゝを見て下知を傳へ、此坊主、よも人間にはあらじ。如何さま此山に住む天狗なるべし。先づ此陣を引上げよとて、我れ先に主を捨て親を捨て、下村へ逃げ迷ふ。又唐門へは、丹生五郎といふ者、大將にて向ひけるが、門塀を押倒し、庫裡に火をかけければ、魔風忽ち吹き來りて、諸堂一時に火移り、炎々と燃え上り、寺中一面、黑煙となりければ、圖書も力及ばず、妻子を刺殺

し、自身も頓て腹搔切つて、炎の中へ飛入りける。魯岳和尙も合掌し、結跏趺座して燒死にけり。大力の法師は、本堂の後に、大盤石のありけるに飛上りて、大膝組み、腹搔切つて死にけり。此石を其時より、天狗の腹切石と申すなり。釣鐘は總門に上げ、釣鐘樓門といひけるが、山門の下へ、火急に火移り燒崩れ。鐘は谷へ刎返り落つ。其時鐘落ちたる所淵となり、今に天晴れたる時は、龍頭見ゆる、又見えざる時もあり。嗚呼一炬焦土となりて後、僧堂燈は消え、秋の蟲啼く音を添へ、誠に方見の伽藍の土地變じて、戰場の巷となり、數多の死骸は、寺中に滿々たり。魯岳は寶積寺十代なり。十四世に至りて、石室和尙、寬永七年に、諸堂悉く建立の時、大門を轟村の方へ廻し、寺も北向に立てられたり。

小幡左衞門佐信秀御出世

去程に、小田原落城に及びければ、日本國中、太閤秀吉公の御手に入りければ、天下一統に治り、關八州は、德川家の御分國となり、上州宮崎の城をば、奥平美作守拜領あ

り。此殿、仁政を以て領地を治め給へば、御家中民百姓に至る迄、皆萬歳を唱へけり。或時奥平美作守、雨引谷へ猪狩に御出馬なされ、向陽寺へ御立寄らせ給ひ、本堂の椽に御腰をかけられ、御茶御所望なされければ、住寺傳州には、物氣付きたる人なれば、御立寄もあらんかと、兼てより湯をたぎらかし、待設けられたる事なれば、濃茶を立てられて、臺にて信秀殿に持たせ進らせられければ、美作守御機嫌能く、御褒美なされ參らせける。時に美作守、傳州へ御尋ねなされけるは、此若輩者は、如何にも御心ありければ〔脱字アルカ〕傳州、能き序と悦び、是は小幡上總介世悴にて御座候。先年國峯落城の砌、拙寺へ落ち參られ候を、漸々隱し置き參らせ、時節を相待ち候處に、只命御尋に預り奉るこそ、幸の砌と奉ㇾ存候。哀れ君の御情に、何卒折を御伺ひ、上聞に御吹嘘あり、少し知行にても御召出され候やう、偏に奉ㇾ仰と、謹んで申されければ、美作守聞かれ、御機嫌能き砌なれば、信秀殿、是へとの御意にて、忝くも御盃を下されける。信秀謹んで頂戴ある時、美作守は、傳州へ向つて仰せられけるは、貴僧の願、尤に存ずるなり。某參府の節、將軍家の台顏の砌、宜しく上聞に達すべしと

仰せられ、宮崎へ御歸城なされける。來る年に御參府なされ、奥平美作守、將軍秀忠公へ、小幡信秀の事を、具に言上なされければ、其者召せとの御上意にて、早速に御召出され、御目見相濟みければ、忝くも西上州に於て、野殿村にて、千石拜領なされける。是と申すも、美作守御意の宜しき故なり。其後信秀、野殿村に於て、一宇を建立し、請うて傳州和尚を開山とす。信秀開基となり、寺號を宗泉寺と名づく。信秀逝去の後、宗泉寺院殿傑州宗三居士と號す。既に御當家に至りて、絶えたる家を興し、再び小幡の舊名をかゝげられたるは、此左衛門佐信秀なり。是より子々孫々繁昌す。小幡家中興の人なり。

上州治亂記卷之二十　大尾

上州坪弓老談記

序

東照宮の天下となりて、靜謐の世となり、士民心を安んじ、弓は袋にし、甲冑を箱に納む。賤男賤女迄も、神君の神德を崇め尊む。關ヶ原軍記・難波記等を見侍るに、御軍法御智謀、誠に予が如きの者、申すも憚ありと語りければ、或人予にいひけるは、先の歲、上野國・下野國に君用ありて、久しく上州坪弓といふ所に逗留す。或時、所に久しき老人參會し、物語などしけるに、上州・野州は、新田・足利の一族多く、今に子孫、或は百姓となり、或は國士となりて、居侍りけるなどと語りける。故に彼者問ひていひけるは、天正年中、新田・足利・桐生・佐野・館林・前橋等の合戰ありし事、聞き及びたる計にて、未だ其の故を聞かず、老人聞き傳へたる事共咄し候へと望みければ、老人答へて、先祖より申傳ふる事、語り申さんと、終日語りけるを。側に硯・紙ありしに、之を書き寫し、坪弓老談記と云々。

寶永二乙酉孟春日

上州坪弓老談記　卷之上

一、關東八ヶ國の管領は、上杉則政公の御支配にて、大名・小名毎日出仕往來して、御門外に駒の立所もなし。幷今川の一家、北條氏政・太田道灌・結城春知・佐竹義信・武田信玄・長尾謙信・那須の一族、其外近國の小名迄、其家々の本家を失はず。領分境目を構へて、民を憐み仁義を先として、上を崇め佛神を禱る事、何れの時にも勝れたり。近歲は大小上下、共に志少しづゝ奢り到來して、應變を忌み、其家々の系圖を自慢して、歲頭・節句の禮物を論じ、其方へ恨み此方へ忌まず。或は年頭を略し音物を中絶し、下人百姓の缺落を出さず。領分境目の論を扱はず。國主大官の腹立を顧みず。則政公よりの掟目を背き、奢を心の奥に構へて、高位に行連れて、我儘の代となりにけり。

一、北條氏政は、就中大名なる故、則政公を掠め背き、動もすれば出仕を中絶し、少し

氏政、則政に叛く

の御心口りをも背配して、本として數度野心を起し、終には夜軍を催し、深谷の御座所を追散らし奉り、御家人多く討死して、忍・深谷・松山迄も、小田原より支配の地とぞなりたりける。去るに依つて、則政公、なさるべき樣なければ、越後謙信公を御賴ありて、漸く引退き給ふなり。扨其の後、麓邊の小名を掠めて、出仕音信いたさせ、氏政の威勢日に增し月に重く、見え募りけり。且又、山入の小名・寺社の面々も、俄に出仕を願うて音信を催し、小田原へ運送〔せぬ脫カ〕日もなかりけり。

一、氏政公仰せらるゝは、遠國の大名は、其志何と有之とも苦しからず。近邊の小名は心にくし。甲州・越州・江戶・結城の事は、出馬せば、五日以前に其沙汰あるべし。備へたる敵は恐るべからず。去ながら武藏國寄居の城には、北條安房守差添ひければ、心許なき事多くして、三百餘騎の加勢を、梅澤の八幡の宮の前に新關を居ゑ、山上には遠見番を催して、用心きびしく見えたり。去るに依つて、則政公敗散の以後は、皆思々の方へ出仕を勸め、幕下を願ふ者多かりけり。

一、新田金山の城主・足利の城主・館林人數、幷に小役の城主・佐野城主、右五人衆計

は、何方の幕下ともいふ事もなし。去りながら新田・足利と、佐野・桐生とは、領分入組み多し。三四歳以前、境論・馬草場論起りて、夏は早苗をふり、麥作立毛をふり散らす。去るに依つて、國主代官の下知を得ず。就中俄に境目繁昌の村里には、寄居を構へ出城を拵へて、物見番の侍を遣し添へ、歩弓を相添へ、近邊の百姓集り居て、亂暴狼藉を防ぎけり。

一、北條氏政公も、武州・西上州迄は、度々出馬なされけれども、新田・足利・館林抔へは、出馬なされたるためしなし。甲州信玄公も、東臼井坂越えたる儀なし。越後謙信公は、武州・松山・前橋迄は乘取り、新田・桐生・館林を御攻めあるべしとて、奥澤山の峯に陣場を拵へて、先づ桑和・伊勢崎を攻むべしとて、増田主膳之助を大將として、二百餘騎押寄せ、戰はんとしたりけれども、敵は皆逃去つてなき故、亂暴狼藉、思の儘にして戻りけり。成田の城をも、水攻めになさるべしとて、御意を聞き及び、早々和談を願ひ給ふ故、それになされける。新田・館林をば、何とか思召しけむ、御攻めなさるべき沙汰もなし。去りながら、上州境目を御巡見あるべしとて、佐野犬臥へ御通り

謙信、新田勢と合戰

なされけり。相州、敵の城下をも恐れず、御通路有之。先年深谷へ御越の砌、近邊案内なしにて遊ばさるゝを見て、小俣・簑輪・鷹の巣の者共、境目へ備を張出し、懸合はんとしたりけれども、謙信公鋒先におそれ、野心を和げて引退く。上泉伊勢抔は、油斷故、殊の外おくれを取り、漸く退くなり。夫より下野國へ御通り、佐野・桐生の道筋山の中御覽のために、鹿田山の峯にて御辨當をなされ、廣澤境野原を御通り、足利八幡へ御懸り、二千餘騎の人數、後先に押行く。細道案内なき故、左右の膓田畑を踏みて、狼藉限りなし。其砌、茶臼山の寄居物見番頭には、金井田左衞門といふ者、在番して居たりけるが、謙信公御通りを聞きて、雨沼の邊に出向き、遠見して居たりけるが、謙信公の先陣の侍、之を見て、走向つていひけるは、如何者なり。大軍をも恐れず、馬上して居たりける、近國邊士の使者の仁にてやあるか。無禮至極なりといひければ、左衞門此由を聞きて、扨は越後の國主ちんば殿か。斯様にまかりあるは、新田の家人金井田左衞門と申者なり。此山の番所に在番仕るなり。是より足利迄は、由良・長尾一家支配の地にて御座候間、其方外樣の面々、狼藉仕らざる樣に仰付けらるべ

しといひければ、先陣の者共、具に申上げたりけり。謙信公聞食して、御機嫌能き砌なれば、大笑なされて鋒先をも恐れず、無禮至極なる奴かな。其屑者は田夫なりと見えたり。志不使なれども、其の分に赦し置くならば、行先に無禮者多かるべし。扱又新田・足利より、態とたはけ者を出し置きて慮外をさせ、謙信が心を引見るらん。先手寄歩弓人に觸れて、一人も逃すべからず。其上、寄居の番所をも撫切にして通るべしと、仰出されければ、先陣の歩弓人之を承て、我先にと押行き進み懸けたり。左衞門も其色を見て、足早に馬に乘りて逃延びんと思ひけれども、大勢に取籠められ、神明の森町田が屋鋪の前にて、立腹切つて死にけり。左衞門與力の侍、野村源七郎・梅田半九郎取つて返し、さりとは存じ寄らず、只今討死すべきの時節、到來したりと覺えたり。其處を引くなといふ儘に、二人諸共火を出して切合ひけるが、梅田・野村が手に懸けて、好き敵三人切つたり。大勢に手を負はせ、我身は薄手も蒙らざりけり。二人目を見合せ、寄居の番所へ逃げ入り、妻子老童を山の奥谷へ逃げさせ、夫より番所の峯へ登り見れば、敵早寄居の城内へ込入り、亂妨狼藉したり。隣邊の百姓・

坊主・山伏共、竹鑓・棒を出して騒ぎけれども一懸合もせず、我先にと逃げ去つて、漸く死命を遁れしなり。番所の峯には、鐘・貝を鳴らし、新田へ早使を以て、御告げ奉りければ、信濃守殿驚き給ひて、所々の番所に觸れて、早鐘をつき、隣邊の人數を集めてどよめきけり。謙信公も、新田早鐘の響に驚いて、先勢の小荷駄と紛れて、早々渡良瀬河を越えて、佐野・足利の境なる早崎山に御着ありて、諸勢を待居給ひける。新田殿も、金谷因幡守・横瀬殿を召して仰せられけるは、此度謙信、野州東方見物、佐野宗綱方へ、見舞計に聞き及ぶ所に、存じ寄らず、廣澤の番所に置きたる者共を追散らし、狼藉撫切して通るが、如何樣新田・足利の心引見んためか。又番の者共、謂れなき慮外抔を催すか、心許なし。兎角是程の狼藉者を其分にて口(罪カ)せずんば、敵の思ふ所、民百姓の所存も恥しき事なり。早速胴湖・市場・八幡へ人數を出し、敵の有樣を見合すべし。足利には此事隱れあるまじ。館林に急使して野田・猿田・河崎の邊迄、人數を出し前後を見合ふべし。自然小俣・足利迄抔も狼藉有之ば、前後左右より押寄せ、謙信を討留むべし。扨亦館林へは城越十郎左衛門を以て、早馬を遣み遣はされけ

る。顯長公も驚き給ひて、早鐘・早太鼓を打たせて、隣邊の勢を集め、上を下へと翅しける。扨金山城中には、加勢の人數揃へて、吉澤丸山の峯に遠見を置き、橋道の普請觸れて、可働便り能き難所を構へて、敵の迯を拵へて、音を靜めて居たり。明神南の馬場の前後燒山の腰に走集りて、勢數を知らず。自然戰など始まるならば、謙信の人數は一人も迯すべからず。働くべき樣もあるまじきに、彥間・桐生より集りし勢は、自然謙信方へ志深き者もあるべし、思ひ寄らず横鑓を出して新田勢敗軍に及ぶ事もあるべし。緣者好身の人たりとも、心をば緩むべからず。渡良瀨河の上下瀨々に逆茂木を入れて、用心嚴しくしたりけり。其日申の上刻計り、漸く越後勢も廣澤に寄居て、亂妨狼藉して、先陣は山川の前原にて、前後の勢を集めて、靑龍の備を極め、道筋難所にて馬足を休めて、馬上・步弓人に至る迄、同心に押行きける。程なく二千餘騎になりて、岡崎にぞ着きたりける。謙信公も悅び給ひて、二千餘騎を引連れて、佐野の城へ急ぎ給ひけるなり。由良殿も明神の前迄御出馬ありて、諸大將・諸物頭の面々に、下知御座ありけるが、足利より告げ來るは、謙信は佐野へ通過ぎ給ふと

聞召して、御馬入れながら、扨々口惜しき事かな。謙信心奧のやさしきをば知らず、隣邊を騷がしつる事やとて、御馬を靜に召して引入らせ給ふ。足利勢も、廣澤左衞門が討死の委細を知らず、新田早鐘の音に驚きて、人數を揃へ、弓よ鐵炮よと騷ぎける。謙信公は今朝辰の刻過に、小荷駄に紛れて、五六十騎にて岡崎山迄過ぎさせ給ふと聞きて、扨々口惜しき事かな。謙信と知るならば、足利勢計にても討留むべきものをと、籠の鳥・簗の魚を失ひたるとて、齒をならしたり。

一、謙信公、岡崎山に御馬を立てられ、後勢を待ち給ふ。程なく人數も揃ひければ、諸大將に向つて仰せけるは、新田・足利、早鐘をならして、謙信が鋒先に驚き、近邊の者共迄騷がしたると見えたり。由良・長尾が向はゞ、後陣の備を立直し、無二無三の合戰遂べし。其ひまに桐生・佐野・前橋より勢を招き寄せ、新田・足利はいふに及ばず、館林へ攻入るべしと思ふなりと、仰せければ、諸物頭承つて、如何にもせめ、亂妨思の儘にして、越後勢の鋒先を見せ申度と、申上げければ、謙信も御機嫌斜ならざる所へ、佐野より赤見・皆川・富士・大祓・竹澤御迎に來る。宗綱公も廻間山の後まで御出なさ

れ、則ち謙信公も御對面ありて御悦び、早速佐野本城へ四五日御逗留なされ、能を御見物、虎松殿を御所望なされ、越後へ御同道遊ばさるゝなり。扨又、新田・金山にては、野村源七郎・梅田半九郎を召して、始終を御尋ね聞召して、尤も左衞門が言分の樣子、謙信程の大將を、慮外千萬なる申分かな。右二人に、永樂を五貫文宛御加增を被下之、廣澤番仰付けらるゝなり。

一、由良・長尾殿も、小田原氏政公の御取持にて、謙信公と和談なされし故、近歲は折折使者を以て、御禮などありて、謙信公前橋へ御出馬なされ、小名淵城を攻めて、落城以後、長尾殿へ進せられ、城代には荒井圖書を足利より置かれ、北條氏康公、武州河越へ出馬有之由を、謙信聞召し、館林迄御出馬なされ、其序に羽生・飯野の小城を、撫切して御通なり。成田勢・深谷勢・秋元越中守・岡部加賀守を大將として、謙信を押へ寄申すべしとて、大勢催し待ち居たり。顯長公も此由を見て、某走向つて一合戰仕るべしとありければ、謙信仰せけるは、氏康親子出馬の由申候。定めて横鑓を構へあるべし。能々見合せ候べしとなり。其ひまに、物見番の方より告げ來るは、氏康親

子、松山より小田原へ御歸陣なりと、申すに依つて、謙信も早速越後へ歸陣なり。

一、下野國小俣の城主澁川相模守殿領分は、佐野・桐生と入組み、山の內の百姓、毎日境論・馬草場論不ㇾ有ㇾ之といふ事なし。之に依つて、佐野・桐生・小俣とは、取分け中惡しき由を、謙信聞召して、序あらば御攻あるべしとて、內々其沙汰ありけり。謙信公の家老萩田備後守、前橋へ入部の砌、御物語なされしを、備後守承つて、此度幸の序なりと心得て、膳備中守と內談を極めて、俄に小俣の城へ押寄せ、天正十年四月廿日に、下菱山・中島兩方より攻寄せたり。折節相模守殿は、小田原へ御越なされ留守なり。御家人若侍一騎當千の者共は、皆々御供致して在合はせず、城中隣邊の者ども、油斷して居たりしが、大きに驚きて、取る物も取敢ず、小俣の御屋形へ走集り、內談評定取々なり。籾山出羽守申しけるは、越後大勢にて攻寄せたる事なれば、定めて由良・長尾殿も横鑓を入るべき樣もなるまじく、籠城の用意もなし。御留守といひ、只一向に城を敵に渡し、諸人命を續け、相模守殿御堅固にさへ御座候へば、後日に旗を揚げんには如かじと、申す者ありければ、諸人此言に從つて、今敵と戰はんは、夏の

蟲の火に入ると同じと、口々に申しけり。其の時石井尊空、諸勢に向つて、氣色を替へて申されけるは、夫れ師の勝負は、全く人數の多少によらず、天理を專にして、忠孝を爲し、命を捨てゝ子孫の爲に名をなすべし。幾萬騎來るとも恐るべからず。某愚慮を廻らすに、小俣の城計を目懸けて、越後勢來る事にあるべからず。小俣を攻めば、新田・足利より、後詰の加勢を出すべし。然ある時、三ヶ所の敵を一所に集めて、無二の働を遂すべしとの軍法なるべし。謙信公の家の習に違ひて、向城も不本ずし、急に勝負をのぞむは、如何樣不思議なる事なり。由良・長尾出合はずば、相模守殿小田原より〔誤カ〕家人一族は、皆小身者なり。相違なく、城は我物なりとの軍法なるべし。敵の謀に乘らんも口惜しき事なり。萬一相模守殿、小田原より直に御若勢あるべきなり。御先祖式部大輔義國公より、今に至る數代の家を、一戰にも及ばず、城を明渡したるものならば、澁川家の輩は、人に面を向くべしとも覺えず。兎角時節究りたると思ふべし。小勢なり共、此城を堅固に守りて、叶はざる時は、討死するより外あるまじ。さあらば、小田原の聞えも宜しく、相模守殿を御取立もありぬべし。御

支配の城主、今思惑もありて、名々我等臆病を働かば、子孫長く根葉を削り、御憎しみを請くべし。討死をしたる人々は、生代高名の名譽を傳ふべし。日本無雙の謙信公を引請けて、討死する事、嗟の中の悦なり。尊空一家に於て、別儀あるべからず。若し臆したる人やあると、居長高になつて申されければ、寄集まる所の歩弓人感議して同心したりけり。扨集まる者には、籾山出羽守・久保澤豐前守・泉備前守・桑子左近・別府・下山・阿戸・小泉を先として、笛吹坂の前後に集りて、押寄する敵を待ち居たり。石井尊空・同安藝守・同丹後守・大河土佐守・石渡彌五郎・神田平六・松本太郎・山本雅樂之助・片岡金五郎・久保田金八郎を先として、雞足寺山峯に登りて、前後に備を出し、石弓・落穴を掘らせて、攻上る敵を、微塵にせんと催しけり。全め集むる所の軍勢上下百五十人には過ぎざりき。尊空面々に向つて申されけるは、御留守といひ、小勢といひ、大軍を引請けて、勝つべき師にはあるまじ。さり乍ら神力・佛力を賴みて、今度の難はあるまじ。幸ひ五大尊佛雞足寺法力も、昔に少も劣るべからず。敵退散の法を禱るべしとて、則ち鷄足寺の住職後國法印も。昔の定有法印に少も劣る

べからずとて、壇を俄に構へて退敵の法を禱りけり。程なく敵亂入、中島隣邊の小家に火を懸け燒拂つて、亂妨狼藉隙なし。粉山出羽守强ひて、前後左右の山の上より、弓・鐵炮を打つて、岩をつぶてに投懸くる。女童の啼き叫ぶ聲に、鬨の音紛れ合ひて、山も崩れ瀨浪も荒れて、暫く前後を失ひてぞ見えにける。膳備中守案內にて、萩田備後守搦手へ巡り、くらみ澤より攻登る。是には尊空一家、幷に大河土佐守・加藤隼人介・桑子左近を大將にて、都合七十人計り控へたるが、爰を破られては、生代家名の疵なるべしと、火水になりて攻戰ふ。谷より攻登る大勢の事なれば、防ぎ倦んで、矢種・玉藥もなし。唯大石・丸木を落しかけ防ぎける。其日午の刻計に、大風大雨になつて、敵の攻登る向ふ樣へ吹懸け、二時の間、闇の如くになつて、敵も味方も知らざりけり。眞先に進む膳備中守が家人一族五十人餘、大岩・材木に打挫がれて、一人も生殘るはなし。越後勢之を見て、叶はじと思ひけん、澤谷・大石の陰を賴んで迷ひ居けり。此風烈しく大嵐の事なれば、敵味方の馬の色合も見えず。谷道難所を步み兼ねて、起上る隙もなく、馬に乘る武者一人もなかりければ、乘り放ち

たる馬ども喰合ひて、口になつて、猛き兵も働くべき便を失ひ、きよろ〳〵として立迷ひけり。備後守之を見て、後陣の備を立直して、米澤山の腰へ引きて、勢を取直さんとしけれども、くらみ澤の人數は、後へ引くべき事もならず、上るべき便もなく、立すくんで居たりけり。堀切けづり下に取捨てたる弓矢・物具・死人は、數を知らず。備後守も漸く人數を集め、大手口の勢と一所になりて、早々前橋へ引きたり。膳越後勢、人馬ともに三百人計り死にたり。備中守だまされて、くらみ澤より攻登りたる故なり。此後、攻寄するならば、天氣を見合ひて、西口より攻落すべしと、諸物頭に向つて申されたり。我身の程を知らぬ人よと、諸人さゝやきける。五大尊佛の威力、昔に違はず難有、小俣の軍勢一人も死せず、尊空が忠心の眞を、天の憐み給ふ所なり。之に依つて、近郷他門の人々迄、五大尊佛拜まぬ者はなかりけり。

一、新田・金山にては、由良殿病氣づき給ひ、萩野養意を召して御藥内談、御一族老中寄集まりて、御療治の沙汰ありける所に、三浦久四郎、早馬に乘つて告げ來るは、謙信公の御家人萩田備後守大勢を催し、膳備中守案内者にて、境野三堀原に野陣を張り、

近邊を掠め狼藉限なし。相模守は小田原へ參られ、留守といひ、防ぐ術を失ひ候と申上ぐる。國重公聞召して、早後詰の勢を出せとて、足利・館林へも告げよと、上を下へと騷ぎける。大雨大風は吹きつ。早鐘・廻文も屆き兼ねて、人數も揃はず、漸く集り、次第に渡良瀨川端まで押寄する勢もあり。折節水增して川濁りければ、恐れて川を越しかぬる者多かりけり。其日申刻過に、又告げ來るは、越後勢前後より攻寄せ、近邊を狼藉して、御屋形、番所、峯まで攻上り、亂妨限なく候なり。俄の術を拵へて、諸人身命を惜まず、鬭をいたし候故、敵もこまりて見ゆる。折節大雨風に攻め倦んで、備しどろになり、備中守を始め、一族家人殘らず討取り、御城恙なく、味方堅固に候と申しける。由良殿聞召して、いつもながら尊空・土佐守の忠比類なしと、感議斜ならず。軈て家老城代方へ御使者下され、今度新足の後詰も馳合はざる處に、手勢の殊に小を以つて、大敵を早速取挫ぐの條、諸兵以ての働、神妙の事に候。殊に味方手負も之なき旨、欣悅斜ならざる者なりと、仰せ遣されければ、諸卒大きに喜びて、御意難レ有ぞ覺えける。尊空は此度の軍記、委細御物語の爲めとて、金山の

澁川相模守膳の城を攻む

城へ伺候仕りければ、御大將御對面あり、難有御意共多く、御茶抔拜領仕り戻りけり。〔膳カ〕幡備中守が討死、委細御聞ありて、術方便を知らぬ大將の騷くかたかいやぶりなるは、軍卒の大損なりと、老武者の傳ふる所、大將の自身の働して、軍團扇を忘るるは、大將の强き儘、味方を亡すといふなりと、仰せられけるなり。

一、澁川相模守殿、小田原より御留守中の兵亂、始終御聞ありて、味方の小勢なるに依つて、牛岩の口懸すくなき故にてこそ、萩田備後討洩しぬる事こそ無念なれ。先以つて諸兵の働、比類なき事言語に絕えたりと、感議斜ならず。雜兵童女集りて三日の中さゞめき渡りて、御酒宴遊興催されける。新田殿仰せられけるは、今度備中守案內をして、越後勢を引向くる事、隣邊といひ、遠慮もあるべき所に、如何なる意趣を以て、謂れなき振舞かな。之に依つて、天命遁れがたくして、一族骸を野徑に晒したり。早く思召立ち、膳の城へ押寄せ、殘類を討散らし給ふべし。新田・足利・小俣の勢を以て攻むるならば、手間も取るまじと仰せければ、澁川殿、實もと思ひ給ひて、居城に戻りて、一族を催して內談を極めて、天正十九年六月廿八日に、石井安藝

守を大將にて、都合其勢百七十騎、膳の城へ押寄せたり。新田より加勢は、藤生紀伊守を大將にて。金谷因幡守・增田伊勢守・鳥山伯耆守・木村伊豆守都合二百餘騎、足利の大將には、白石豐後守・梠本牛七郎・小花彌五郎・小菅彌太郎・宮崎五太夫・市川主馬之助を先として、上下百八十五人なり。三箇所の人勢ども、今度は晴がましき合戰なるに。負を取らざる樣にと、親類緣者一つに固つて、縱ひ亂妨すとも、一手際能くせんと進みけり。扨膳の城には、俄の事なれば、集まる勢もなし。先月備中守と一同に討死したれば、殘類年寄りたる腰拔・女童計りなれば、出向つて鬪はんといふ者は一人もなし。備中守殿御子、當歲四歲にぞなり給ひ、春松殿と申しけるが、宗次公討死の後は、齋藤右近・鶴具〔元ノマヽ〕玄蕃抔、濁口仕へ奉り、御成長ならせ給はゞ、一郡の御主ともなし奉るべしとて、謙信公へ御對面を願ひて、御心易く御座ありける所に、思寄らず、小俣・足利より勢を向けらるゝ事、兎角亡ぶべき時至るやと、見えたりとて、諸物頭の人々集りて、內談しけれども、大將なき評定なれば、面々むき〳〵の內談にて、埒も明かず。野村彈正申しけるは、備中守討死致さるゝ事、若少の至り

強過ぎての事なり。今度も如何に小勢なりとも、無二無三に働して、一方は討破つて、紀伊守抔を討取る事もあるべければ、桐生・小俣の勢計にてはなし、新田・足利も後詰を思ふ事なれば、何と戰を勵ましたりとも、味方の勝利あるべからず。唯一向に城を渡して越後へ退出し、重ねて謙信公の御旗本を頼みて、本意を達すべしといひければ、此事を聞き、むき〳〵に落散りて、合戰を致さん者なし。小俣・新田の者共、思の儘に亂入して、狼藉限りなかりけり。森松殿をば、鶴谷・永崎抔御供を仕り、夜に紛れて前橋へ退き給ふなり。桐生・小俣の勢も城中へ亂入して、諸道具を取勝に取つて歸りたり。爰に哀なるは、月田又四郎・齋藤友之助は一家なり、龍源寺山林へ逃入りて隱れ居たりけるが、何者が見出しけん。爰に能き敵の大將籠りたるとて、大勢折合ひて、二重三重に取廻し攻寄するを、又四郎・友之助之を見て、迚も遁るべき方なしとて、一文字に切つて出で、火を散らして戰ひ、一族下人諸共に殘らず討たれ。今は又四郎・友之助、太刀取直して逃去りけるが、老父母妻子の行方心許なく思ひ、此處や彼藏とする所を、敵大勢折合ひて、赤裸にはぎむくして、命計を

扶けて、生骸はなけれども、傍に立餘きけり。斯く程恥に逢ふべきと知るならば、膳の城を枕にして、討死すべかりけるものをと、齒嚙をなして悔えけれども、甲斐はなかりければ、せめて妻子の行方を尋ねんと思ひて、二人諸共に、行方も見えずなりにけり。日入方になりて、藤生紀伊守・白石豐後守・石井安藝守、人勢を集めて、鹿目山迄引退き、自然前橋より後詰ありて、味方を救はゞ、此人數にて攻むべしとて、野陣を構へて、二日爰に逗留ありける。其後、春松殿は、謙信公の御旗本にて、御成人なされける。膳の城へは、何方よりも城主もなく、落城の儘なり。近隣村里の神社佛閣、寺中山林に至るまで、手に當るを幸に、捜し取りければ、坊主・山伏・土民、口々に申しけるは、備中守殿謂れなく、小俣の軍案内をし給ふ故に、其身も命を失ひ、一族從類憂目を見給ひて、我等如き迄、所に迷ひぬる事よと悔み合へり。

一、上州桐生の城主大炊之助殿は、御代繼の御子なく、近國といひ、御一家なれば、下野國佐野の城主天山殿の御舍弟又治郎殿を、御養子となされける。佐野より御供の人々には、荒井主稅之助・茂木右馬之亮・山越出羽守・津布久刑部、此四人後見とし

て附き來る。諸仕置を任せ家臣を勤めける。大炊之助殿、程なく御死去ありて後、古來の家老谷右京・大屋勘解由左衞門抔は、何事にも構はずして、右四人精を出して、寺社或は百姓・町人の訴論を捌きけるが、新法を専にして、古法を用ひざるに依つて、武士は立退きて指をし、新參の集りなれば、毎日喧嘩口論止む事なく、少しの事をも見出し聞出して、評定するに依つて、理非の輕重を構ひなく、贔屓の沙汰に及びし程に、坊主・山伏・土民・町人、非利方には科錢をいださせ、勝利の方よりは税を出させ、津布久・山越に輕薄する者は、無藝無能にしても、高知行を宛行ひ、己が氣に入らざる者には、諸藝に達し忠孝を宗として勤仕する者も、惡難の沙汰ぞしたりける程に、上泉伊勢・八木傳七郎・根津采女は、行方知らず立退く。之を幸と思ひ、上杉・甲州・今川家抔にて、臆病不覺の名を取つて笑はれし者共、身の置所なくして、津布久・山越に輕薄を入れて、奉公を勤めんことを願へば、大家より來りて當家をのぞみ、家の規模たりと取囃して、數十人大知を宛行ひて抱へ、我儘なる振舞を、荒井主税・茂木右馬亮も腹を立て、四人の同役、二つに割れてけれぱ、此家亡ぶべき時節到來したり

とつぶやきて、荒井・茂木は、今日切の勤と思ひて、朝暮胸をこがしけり。古來より初座大身なりしかば、阿久澤能登・廣瀨一不〔可カ〕・荒卷式部抔と、座組も平座にして、無禮千萬の體なり。右の外五三人ある物頭の衆同前に、氏政公・謙信公抔にも、御存の人々なり。武勇に勝る古參にも、新參の禮式之なきは、片腹痛き事共と、童女迄も申合へり。領内の貴賤、仕置の猥なるを恨み、津布久・山越が、あはれ討死もせよかし。さあらば餅を杵き、軍神に捧げ奉るべしと沙汰し合へり。

上州坪弓老談記　卷之上　終

上州坪弓老談記　巻之中

桐生又治郎里見上總入道を攻む

一、里見上總入道殿は、桐生大炊助殿御代に、甲州より御牢人なされ、桐生殿を御賴みあるに依つて、遁れ難く思召し、則ち仁田山八鄕を添へて、赤萩の出城を進らせられ、嫡子隨見・次男勝安と申して御兄弟あり。智勇武士の道、諸人に過ぎ、一方の大將ともなるべき人々哉とて、大炊助殿も賴もしく思召し、半族名を改めて御懇限なし。程なく大炊助殿御死去、又治郎殿御代になり、諸道最行末になりて、上下の褒貶を悲むを、笑止千萬に思召して、書付を以つて、御意見有之けり。津布久・山越是を聞きて、推參至極なる事かな。是程太平に、萬端靜謐なる時節に、惡事を觸催す人は、自然の砌は、必ず同士軍を初め裏切を初め、內通を沙汰する物なりと、度々讒言申上げたりければ、又治郎も眞事に思召して、諫言も御承引なく、剩へ里見親子を御惡みなさるゝ故、出仕も大體に勤めけり。隨見・勝安も越州へ退出す。上總入道殿も、桐生よ

り粗略なさるゝに依つて、入道殿も通路之なし。津布久・山越、色々讒言申上げければ、又治郎殿も共に御聞き御座ある所に、隨見・勝安暇乞もせず、越州へ退く。其上、入道先代の御恩を忘れ出仕を止め、大祓佐兵衞が惡言の沙汰も免れ難く、兎角入道に、生害仰付けらるべきに定りければ、津布久・山越、此由を承つて、延引もせば、和談の訴訟も出來なんと思ひ、早速押寄せ腹を切らせんと思ひて、石原石見方へ內通を申遣しければ、速に領掌仕るに依つて、人數を催し、赤萩の屋形へ押寄する。山越出羽守先陣にて、荒卷式部・津久井和泉・齋藤丹後・阿久澤能登守・風間將監・水沼主水・內田主馬之助・藍原左近・清水道山を始として、宗徒の人々十一人、赤萩の西方畑の平へ押居て、鬨聲を上げたりけり。入道少しも騷がず仰せられけるは、定めて桐生より寄せ來らん。兄弟の者共有合ふならば、一合戰〔火の字脫カ〕花を散らし見物すべきに、留守なり、今小勢といひ、又大炊助殿恩賞忘れ難し。ひとまづ谷山へ退き、後日の沙汰を待ち見んと、仰せられければ、石原氏、此儀尤に候とて申しける。大祓佐兵衞委細を承つて、石原を礑と白眼(にらみ)て申しけるは、扨々淺ましき入道殿の御所存やな。運命盡きぬれ

ば、才覺の花も開かずとは、今思ひ知られたり。谷山へ退き給ふとも、此度こそ運の極まる所なり。縱ひ小勢なりとも、寄せ來る敵に、矢の一筋をも射ずば、死して後迄も、御兄弟の思召も恥しき事なり。侍の名乘、天理も長く朽ちぬべし。里見家に傳はるは、其方我等計り、今日迄肩を竝べ膝を組みたること、口惜しき次第なり。早速各は御供ありて、谷山へ退出あるべし。御後にて心靜に、左兵衞は討死仕るべしとて、大の眼より涙を流し、唯御名殘惜しきは、御兄弟の人々かな。今生の緣は薄くとも、來世は同蓮の緣にあづかり申すべしと、家人一族も僅二十人には過ぎず。其中にも一味同心の輩は、大祓彥八郞・次男彥七郞・舍弟源左衞門、家人には篠田兄弟、思切つたる有樣なり。廣庭眞中に竝び居て、最期の盃を、差しつさゝれつ呑みたりけり。桐生勢、程なく近く寄せ來りければ、佐兵衞、門外へ乘出し、大音を揚げて申しけるは、寄來る勢は、定めて桐生より、又治郞殿御出馬と存候。入道は、只今石原を召連れ、谷山へ退出仕る。何分にも前の如くに、御支配を背き申すまじとの事なり。某一家計り此所に殘り申し、出馬の面々へ一矢宛、さび矢御馳走申度存ずるなり。請けて見

給へとて、中指五十本、弓手・妻手へ並べ置きて、心靜に射出しければ、寄來る勢、上下三百人計集り居たる事なれば、あだ矢一つもなかりけり。扨夫より拔揃へ、大勢の中へ割つて入り、十文字に切つて廻り、人馬の嫌なく、當るを幸に、面を振らず切入りけり。淸水道仙・水沼主水、家人一族十五六人討死したりけり。佐兵衞も親子計に討殘され、弟源左衞門は生捕られ、敵は大勢なり、初より遁るべきとは思はず、能き敵と組まんと、走り巡りけれども、次第に勢弱り、果は是迄と思ひ、御屋形に火をかけて、門前に走り出で申しけるは、今日御出陣なさるゝ衆、敵少にて御殘多き事もあるべし。能々骨を嗜み置け。追付桐生へも、新田・足利より攻むべし。中にも出羽守、因果は今の佐兵衞に似るべしと、親子諸共に切つて出で、出羽守に組まん、戰はんとしたりけれども、終に合はず、荒卷兄弟・風間將監に、渡合ひ、親子共に討たれける。石原兄弟心替なくんば、桐生よりも攻むまじ、和談にもなるべきものをと、皆人申しける。佐兵衞親子の首、桐生峠に獄門に懸るなり。出羽守は歸陣して、始終を又治郎殿へ申しければ、入道、谷山へ退き降參を致さば、攻むまじき物をと、水沼・

淸水が討死もあるまじきに、大祓佐兵衞が働は、敵にありては、いやな侍なり。弟源左衞門も、早く首を切つて懸けよとて、歲二十三歲にて切られけり。惜まぬ者はなかりけり。入道、谷山へ御つぼみなされけれども、石原不忠露顯せば如何とて、入道にも生害させよと、石原石見に仰付けられ、終に生害せられける。首をば則ち石見守に下されける。石原兄弟も、又治郎殿御家人になりて勤めけり。扨越州に御座ある隨見・勝安、右の趣を御聞及び、口惜しき事かな。切腹・討死は、武士の家に珍らしからず。佐兵衞親子・源左衞門が働、不便千萬なる事なり。如何にもして、二度桐生へ參着して、津布久・山越と刺違へて、本望を達せばやと思ふなり。逆心の奴原は、意趣を報ゆるには及ばず、天命にて子孫永く絕え果てん事、遁るべからず。桐生騷動今に絹らずと聞召して、大炊助殿の御恩を思出され、笑止千萬なる事かなとて、御淚を浮め給ふなり。

一、上野國新田の城主由良殿は、大澤下總・林越中・藤生紀伊を召され、仰付けられけるは、桐生又治郎家中は、新參・古參を諍ひ、其上、山越出羽守・津布久刑部が仕置に

退屈して、歩弓の者迄、能き者は皆退出し、百姓・町人も在寺籠者に〔脱アルカ〕寸隙を得ずと承り候、荒井主稅・茂木右馬亮は、諸色構はず。右四人は、殊の外なる奢り者故、大方桐生は騷動して、終には破滅するに疑なし。定めて隣邊に、其沙汰隱れあるまじ。必定ならば、荒井・茂木に內通して、押寄せ追散らし、新田支配になすべきなり。縱ひゆるし置くとも、他所より入馬せば、後日六ヶ敷事なり。よく〳〵聞屆けられ、然るべき樣に計らひ候ふべしと、仰せられければ、紀伊守承つて、仰聞けらるゝ所、少も違ひ之なき樣に承り候と、申上げければ、足利顯長公仰せられけるは、尤も追散らし度事なれども、佐野と一家の事なれば、後詰・横鑓を出さば、手間を取るも知れず。兎角新田・足利の人數を損ぜざる樣に、謀り候べしと、仰せられければ、大澤下總承つて、紀伊守は、桐生に緣者ありければ、委細を存ぜられ候、能々內通を聞屆けられ、時日を移さず、思立ち候はんとぞ申しける。扨紀伊守は、津久井和泉・齋藤備後・關口尾張・中里・若狹・彥部加賀守を招き寄せて、內談を極めて、荒井・茂木に通じたりけり。大屋勘解由左衞門・谷右京進連判を印して、紀伊守方へ送りける。風間將監佐持・下

新田勢桐生を攻む

橋治部・荒巻式部・伊藤帶刀は、連判なけれども、兼ねて紀伊守と面談にて、定約したりけり。　津久井左京は老體、薗田・岩下・砂永・下山抔は、桐生殿の御家人たりといへども、勘解由・鹿貫將監・白石掃部は、山中の五蘭田攻の時、加勢に謙信公御家人萩田備後守に頼まれて、先陣して、家人一族共に討たれけり。　山中の卷下・阿久澤・松崎善惡の沙汰なし。　蜂須・長澤・土屋・馬見田・木村・森下・書上(かきあげ)・生方(うぶかた)は、此頃の新參者なれば、いふに及ばず。　外に永井彌市郎・飯塚播磨守・稻垣主膳・内田庄之助抔は、高知行なれども、津布久・山越が與力同前の者なり。　敵に此五三人計り心にくし。　其外、小身侍は、手に立つ者はなし。　早速新田より人數向けられ候べしと、上下願ふ所に候なり。　遠藤・根本・片山・宮内・村上は、役人の事にて、にくむべき仔細なし。　扨天正元年三月十二日、藤生紀伊守を大將として、桐生殿の御屋形へ押寄す。　先陣は荒戸寄山腰に集り、近邊より集る勢を待ち居たり。　新田より紀伊守加勢には、小金井四郎右衞門・金屋因幡守・木村伊豆守・國定玄蕃・岡田石見・芝山久助・廣瀨長藏・岸根彦五郎・畑六之助・松下十藏・齋藤織部・同甚九郎・濱田内匠・南佐渡守を先として、上下百七十五人

寄來り、境野原に陣を取つて、紀伊守に便を通ず。小金井四郎右衞門・藤生紀伊守勢を合せて、久〔又カ〕勢を三手に分け、天神の森・もぐら山の腰・淺部山の峯に待つて、三方より押寄せたり。山越出羽守之を見て、上下五十人計り召連れ、何と戰はんやうはなけれども、小勢なりとも馳寄つて、小金井・藤生を討取り、本望を達したしと計るなり。先づ軍神の血祭せんとて、岩間・中島・野口抔は、紀伊守方へ内通をしたる科に依つて、十二日の朝召寄せて、三人共に首を切り、けはひ坂の右の田の中に曝したりけり。夫より靑蓮寺近く迄乘出し、前後の敵を見るに、野も山も皆勢取巡り備へて、鬨聲を上げ押鼓を打つて、籠の鳥の如くに味方なりて、遁るべき樣はあるまじ。能き敵陣を見合せ、懸入りて討死せんと思ふ所に、觀音山腰川の前後に、百人計り備へて居たり。是れ大將の居陣と悅んで、面も振らず懸入りて、東西南北切つて廻る。是は藤生が人數なるに依つて、宗徒の侍・歩・弓人に至るまで、一騎當千の集り、敵を眞中へ取廻し、時もあらせず、又左右に相付きて、謬討に討取るもあり。出羽守、火を出し戰ひけれども叶はず。敵は彌〻勝に乘りて攻懸り、味方は次第に精弱りけれ

桐生又治郎、佐野へ退く

ば、行人塚の前迄引退き、味方を見れば、五六十人の者共、大方討取られ、二十餘人に討殘され、剩へ五ヶ所三ヶ所疵を蒙らぬはなし。我身も八ヶ所に疵を蒙り、遁るべき樣もなし。皆々腹を切るべし、我等も腹を切るべしとて、鎧の上帶を解かんとし給へば、木村・岩下押留め申しけるは、是程になりて、腹切る事や候べき。百騎が一騎になる迄も、敵と戰つて、敵をば一人を滅したるこそ、子孫の譽も少くなり、後世に名を殘してこそ心地はよけれ、といひければ、出羽守も打笑つて、我もかくこそとて、二十餘人の者、皆徒立になりて、大勢の眞中へ一文字に懸込み、縱橫無盡に割立ち押廻して、大將と組まんと、我身を顧みず、戰ひけるが、多勢に無勢叶はずして、一人も殘らず討たれける。天晴强なる働やと、諸人の目を驚し、名を末代に留めたり。御屋形をば、津布久刑部御供を致し、山傳ひに佐野へ引退き給ふ。扨桐生の城代には、橫瀨勘九郎を仰付けられ、藤生紀伊守を相添へて、諸支配を改めて、天正二年三月九日に、新田殿入部なされ、山地に渡り迄御見物なされ、西方寺へ御寄り、住持に御對面あり。大藏院へは御使者を遣され、其外地侍殘らず召出され、

御對面ありて、津布久・山越等に好身ある者は、百餘人追放し、或は百姓・町人も、桐生に有ㇾ忠者の分は、改易せられて、辻小路に迷ひける。扨神社佛閣夫々に御心を添へて仰付けらるゝに依つて、諸民、此殿萬歲と唱へて、喜ばぬはなかりけり。

里見勝安謙信に賴る

一、里見隨見・勝安、越州へ退出なされければ、謙信公御賴もしき御意ありて、御懇なる故、月日を送り御座ありける。越後にても、數度高名比類なしとなり。又治郎殿御敗亡の由を聞きて、我等退出の後、猶以て諸仕置善からずと覺えたり。兼ての事とはいひながら、殘多き事どもなり。上總入道に御恩賞厚く、某ども手族の假名の親、昔を案じ今を思ひ、悲淚袂を絞り給ひ、入道殿御切腹は、津布久・山越が讒言故なり。桐生殿を限り申すべき謂れなし。何とぞ一先づ桐生へ行き、惡人原を亡し、藤生等にも矢一筋射懸けて、念望達したき者をと、朝夕胸を苦しめ給ふ。ある時、好身の者を招き集めて、心體を御物語ありければ、皆賴もしき挨拶にて、餘儀なき同心の輩百人計り出來たりければ、隨見兄弟、斜ならず悅喜して、天正五年九月初より催し、上州桐生に來つて、隣邊の樣子を聞合せ給ふに、黑川・澤入の面々は、近年何方の騷動に

高津戸の要害

も加勢なく、一族假名惜にあり。是は右入道に好身深く、懇なる者共なれば、賴みて見ばやとて、先づ黑川神梅へ御越なされ、道津古伯入道へ初中後を〔脱字アルカ〕、兩人承つて、讒言の敵を討ちたき御企尤に存ず。さり乍ら桐生を攻むる事は、思ひも寄らず。今時新足(につそく)兩家の鋒先、出づる日の如くにして、隣里隨はざるは微し。代々の懇を中絶も宜しからず。御住宅には甲山を借し申すべし。〔脱字アルカ〕隨見悅び給ひ、頓て土木の功を營まれけるが、半にして思召替りて、高津戸へ引きて、要害を取立て住居し給ふ。是は桐生山中境地にて、領主なき所なり。之に依つて、攻むる方もなし。先年上總入道盃久保亂の時、此山に陣を張りて、桐生・赤萩の用心を構へられたる所なり。西南は渡良瀨川を引廻らし、水の流、大瀧の如く、しかも底深くして、渡るに便なし。北は高山にて岩角立ち、大木・蔦生え茂りて、人間の通るべき便はなし。東一方平地にして、馬の駈場はよけれども、山際はげしくて、輙く登りがたし。殊に大堀を所々、堀切を拵へ、落穴を拵へ、城內には三段・四段に堀切土手を築き、其上に七尺計なる柵を引きて、きびしく構へたれば、妙術を得たりとも、忍び入るべき樣

もなし。隨見、勝安に向つていひけるは、入道殿御存生の內ならば、如何ばかり悅び給ふべきを、近年の亂世に、我も人も當事違ひ、皆僞の浮世となれば、思ふに甲斐なき仕合なりと宣ひ給へば、勝安を始め、座中の面々も、昔今の物語に思はず、袖を絞りけり。扨其後、四方の咄になりて、酒宴を催し遊與ありけるが、隨見宣ひ給ひけるは、松島古仙（伯カ）入道は、今度連勢する事あるべし。故は上總入道殿とは、取分け入魂なり。其上、孫四郎の爲めには、半族の親みなりければ、勝安何とぞいたし、阿久澤能登守をも、一所に賴み然るべし。さなくば、古伯入道も、慮を用ふる事あるべしと、申されければ、此議然るべしとて、阿久澤と松島方へ、意趣を御內談ありて、御賴ありければ、阿久澤申されけるは、古例に仔細ありて、兩人の家來一族は、日本國亂れ立ちて戰ふとも、何方へも味方仕らず、唯々山中を堅固に計り存ずるなり。さり乍ら全く粗略仕るべきにては候はずと、申されければ、力及ばず歸られける。扨小倉・須永・高津戶、仔細を紀伊守に告げければ、大きに驚き、石原石見・須永八藏・薗田治郞を召寄せて、事の樣を尋ねけるに、三人申しけるは、高津戶要害山迄は、松島が領內と承り候。

山中の者共を賴みて、隨見・勝安住宅を願ひ申す由、承及び候なり。大勢楯籠り候樣には、風聞致候得共、皆牢人者共、新田・足利の鋒先を承及び、御家奉公の望にて參りたるも知らず。一說には、上總入道生害を殘念に存じ、桐生又治郎殿敗散を、心許なく思ひて參りたるとも、沙汰申候といひければ、紀伊守聞きて、去ながら目近き所なれば、油斷あるべからずと申されける。扨隨見は、御家人正木大藏を近付け仰せられけるは、近邊の淸水の便を拵へ、俵物は麥・米・大豆・小豆等、隨分心得用意あるべしと宣ひける。何卒して石原兄弟・津布久・山越を討つて後、桐生へ亂入すべしと思ひ、折々佐野足利へ忍び御座ありて、時の至るを待ち給ふ。聞く人憐まぬはなし。

一、新田國繁公は、此由を聞き給ひ、尤も逆心者末類にてもなし。惡むべきにはあらねども、目近き此方へ、一通りの禮式もなく、後日山中の者共を語らひ、旗を上ぐべき願もやあらん。諸浪人を抱へ置くは、心の奧、得心し難き有樣なりと、橫瀨勘九郎殿に御內談ありければ、橫瀨殿承りて、仰の如く僞もなき取沙汰なり。去ながら里見が分にて、さまでの事を仕出し申すべきにも候はず。定めて石原兄弟・津布久・山越等

に意趣を含んで、時を窺ふと承る。此方の領分へ狼藉さへなくば、其通に追拂ひ申すべき事は、早晩とても、手間取るまじき事にて候と申しければ、新田殿も賴もしき人と思召して、笑ひ乍ら横瀨連節に諷を謠ひ給ふ。扨隨見思召すは、山越出羽守は討死す。津布久刑部を討つべしとて、佐野へ忍び、種々謀つて見給へども、討つべき樣もなく、玖蘭原遠藤織部と好ある中にて、遠藤が館に入り給ひ、越方の物語などして、四五日御逗留ありて、扨内々の趣咄し給へば、織部承つて、刑部も此頃は惡病を煩ひ、人前もならぬ由、隱れなく候。科作りに同じくば、御延引然るべしと申しければ、里見殿聞き給ひ、それ必定ならば討つも益なし。因果は急に報ゆる物かなと、氣和ぎて、暇乞して上州に歸り給ふ。さらば石原石見ぬを討つて、入道の孝養にせんと、天正六年五月二日に、里見兄弟・正木大藏・大祓長順丸・平山伊之助上下二十三人、石原が住所へ押寄せ、撫切にせんとし給へども、兼ねて石原も遠見番を附置き、用心構きびしくしたりけるが、とても叶ふまじとや思ひたりけん。今立去りたる體にて、人一人もなくなりければ、力及ばず、高津戸の要害へ歸り給ふ。其後

は石見親子の者共は、足利栗崎といふ所に隠れ居て、用明の住宅には、一族少々殘し置き、用心嚴しくしたりけり。新田殿、此由を聞召して、藤生紀伊守を召して仰せられけるは、里見兄弟は、此頃親の敵、又治郎・大藏佐兵衞子供等に敵討のぞみ、石原が住宅へ押寄せ、狼藉したりと風聞す。尤も侍の志は、左もありたきものなれども、石原兄弟は、今某幕下になりて、地侍並に勤むるなり。目前にて討たせては宜しからず、如何せんとありければ、紀伊守承り、仰の如く、兎角追散らし、住所を失はせ申さん。其儘にて置かば、日にまし狼藉仕るべし。去ながら越後牢人百五十人と相聞え候へば、小勢にては叶ふべからずと、申上げければ、新田殿、彌後日を氣遣ひ給ふならば、桐生・新田勢を催し、用明の出城へ集め置き、攻むべき體を見するならば、大方は逃げ散るべし。此方へ一通りは見舞はあるべき所に、雅意の振舞心得難し。此方へ逆心もなき者を、急に攻むべき様もなし。又里見父孫は、代々新田家と好身深し。上總入道は、近年は仔細ありて通路をせざり。鴻野臺根津尾張守を攻むる時、新田勢に不_レ雜、佐竹義信方に寄居て、日和見合ありければ、佐竹勢も是を見て、幕下に內

通の勢にてもなし。新田勢と組すべき者なるか、心得難し。心許して、横鑓か裏切を仕出す事も知らず、油斷するなと、觸れたりければ、首尾を失つて、其後は新田方へも出入なし。漸く桐生大炊助を賴んでありけるが、讒者の爲に、去年亡びしなり。其子供なれば、通せざるも斷あり。夫れとても、我近隣の狼藉を聞きながら宥し難し。兎角押寄せ追散らせ。異議に及ばゞ撫切にせよとて、紀伊守承つて軍勢揃へ、高津戸要害へ押寄せ、先陣關口尾張守・荒井主稅・茂木右馬亮・荒卷式部・伊藤帶刀・大谷勘解由左衞門・福田權三郎・森下長左衞門・風間將監・下橋右近・岩永喜太郎・岩下織部・飯塚又五郎・常見隱岐・籾山太郎左衞門・伴田久六郎・箱島午之助・江原與右衞門・下山監物・鹿貫將監・片山十藏・宮寺左近・中里若狹・彥部加賀・齋藤丹後・伊藤右京・福島出雲・伏島勘解由・野村彥八郎・津久井左京・下山縫殿助・內田兵庫・峯岸志摩・稻垣源治郎・書上甚四郎・堀越內藏・木村縫之助・大澤午之助・薗田彥六・須永八藏、此人々は、紀伊守旗下に付きて、我先にと乘出す。新田勢は後陣にて、金谷因幡守を大將にて、丸橋越前・金井田傳吉郎・引田善八郎・岡部石見・木村伊豆守・齋藤織部之助・戸崎源三郎・渥美

又兵衞・同源五左衞門・安藤治郎助・松井半之丞・寺島小兵衞・島田久五郎・永島外記・板橋外市郎・岡新三郎・堀越茂左衞門・高山平六・坂庭與市郎・生方隼人・藤浪輕右衞門・中根藏之助・小村虎之助・川上民部・小泉左京・芝山大助・薗田彥七郎・井上出羽守・篠瀨藤九郎・小田兵部右衞門・瀧野良之助・宮路市十郎・鈴木新之丞・荒山兵部・大塚半藏・木戶彌治郎・久永圖書、以上宗徒の人々三十六騎、上下三百五十人、阿佐見原を行過ぎて、桐生村の眞下に陣を備へ、桐生勢と同時に攻め寄すべしとて待ち居たり。紀伊守勢も大方集り揃うて、用明の出城に陣す。高津戶にては是を見て、隨見と勝安と越後勢悅んで、今迄戰ふべき敵もなくて、旅陣退屈の所に、如何樣新田・桐生も兵を勝つて寄せ來らん、望む所の幸かな。懸るも引くも味方を捨つるな。敵は大勢、味方は小勢、若し敵に取籠められれば、故なき死をすべし。兎も角も同じ枕に討死して、新田・桐生の者共目を覺させよとて、勇み進み給ひけり。天正六年九月中旬、新田・桐生の大勢、野も山も軍勢取廻らし、籠の中の鳥の如く、越後勢も肝を消す者、本國へ遺狀を送る者もありけり。去る程に、桐生勢、新田勢に先を越えられじと、大谷勘解由左

衞門・常見隱岐・荒卷式部、手勢に內談究めて、拔懸に乘出す。北の攻口より馳寄りて、鬨の聲を揚げたり。要害にては聲も合せず、靜り返つて音もなし。新田の軍勢是を見て、扨こそ桐生勢共拔懸したり。我先にと押寄せ、渡良瀨川を隔てゝ、鬨の聲を揚げ、遠矢を射る者もあり。金谷因幡守旄を取り、川を渡せと、下知をしけれども、前後に亂れ合ひて、過半川の岸に臨んで迷ひけり。其隙に桐生勢押寄せ、落穴をうめさせ、過半逆茂木を引退けて、亂れ入らんとしたりければ、城中より勝安進み出で、堤の上に登つて、大音聲にて名乘りけるは、唯今爰許に罷り出でたる者は、上總入道が次男、平四郞勝安と申す者にて候。寄せ來る人々、如何なる意趣か御座ありて、斯様に多勢を催し給ふぞや。我等は近年越後より迷ひ、假の住所に仕候得共、當國は生國なるに依つて、愛執に存じ、住宅暫く仕る中に、何方より構の所にても之なき由承り、幸と存じ、此所こそ永く露命つなぐべき所と、古朋友を招き居候處に、惡樣の風聞に依つてか、新田・足利殿にも立腹なるべし。今夫とても、身命遁るべきにも候はず。御存知の通り讐を報ぜず、彼者共を安樂に仕るべき事、口惜しく存候。先づ此

度は、其陣を御退き本意を達し候上は、兎も角も御計らひに随ふべきにて候とぞ申されける。新田勢も、思ひやりて如何といふ者もあり。又是程の軍を催す上は、是非合戰をして、高名をせんといふ者もありて、評定一決ならざる中に、新田・足利の物頭、我れ先にと川を渡り、無二無三に攻寄す。新田・桐生の勢共逸り過ぎて、伴田久六・岩下織部・永島外記・板橋外市郎宗徒の侍、十三人討たれければ、藤生紀伊守・金谷因幡守驚き、旆を取直して、用明の堀切迄さつと引退き、暫く息を休めけり。其外下下、歩弓・落穴・逆茂木に討たれて、死する者數を知らず、小勢を侮り、唯一揉と思ひける故、大勢を討たせたるはと、口々にいひあはれける。皆明日こそ勝負をせんとて、野陣を構へて居るもあり。大方は用明の城に、取籠りて居たりける。

一、隨見・勝安、合戰に討勝つて喜悦斜ならず。去ながら、未だ敵も遠引もせず、大方用明に集り居て、夜明けば早天より押寄せて、今日の恥辱を雪がんと思ふべし。某兄弟始め、連勢の輩、明日は必死と思ひ定め、萬が一生きたらば不思議、新田・足利の大勢を引請けて、萬に一も勝利あるべからず。如何にもして藤生紀伊守・金谷因

幡守を討取り、大炊助殿の孝養にせんと、思ふなりとありければ、越後勢承りて、仰尤に存じ候得ども、遁れざる身を以て、死すべき所を知らざるに似たり。今夜此方より用明へ押寄せて、不意を討つ程ならば、後は兎も角も、一戰の勝利は、必ず得べく存ずるなりといひければ、随見、打笑つて、我もさこそ存ずるなれ。さらば打立ち申さんとて、思々に裝束し、其夜八つ時押寄せ、百人計の人數を、三手に分けて、三方より鬨の聲を揚げければ、新足の大勢驚き立ちて、草臥果て、前後も思ひ寄らざる所へ、寢耳に水の入りたる心地して、十方を失ひ、弓よ鑓よとひしめく間に、思の儘込入りければ、終に仰天して、敵を味方と思ひ、行當りては、はつと切られ、動搖してうろたへける程に、半ば同士討にてぞ切られける。藤生紀伊守是を見て、敵は四五十人迄もあるまじきぞ。面知らざる者ならば、身方なりとも討捨にせよと、大音揚げて下知しければ、味方の勢、此聲に本性にありて、桐生・新田の勢、一所に寄集りてければ、随見の勢も思ふ儘に打散りて、勝たば甲の緒をしめよと、一かたまりになりて、引取らんとしたりけるを、藤生紀伊守是を見て、一人も逃すなとて追懸け、散々に

戰ひけり。越後勢も此時に、廿三人枕を並べて討たれける。新田勢にては、引田善八郎・渥美又兵衞・島田久五郎・藤沼源五右衞門抔討死す。桐生勢には、木村縫之助・大澤午之助・薗田彦六郞・稻垣源治郎、以上桐生・新田の勢八十六人討死す。疵を蒙る者數を知らず。隨見・勝安も漸々高津戶へ引入りて、味方の討死・手負を改めけり。勝安も深手負ひければ、養生叶はずして死にけり。平三郎隨見、越後勢も力を落し、亡士共の後を弔ひけり。隨見も力盡きて、兄弟ある中は、如何なる惡神なりとも、怖る心なかりけるが、平四郎死したる上は、國土の賴もなし。我も早く死して、勝安と同じ道を急がんとて、正木大藏を以て、藤生紀伊守方へ申送りけるは、某生國の樂を以つて、住宅を構へ候處に、如何なる讒言の者かありて人勢向けらる。之に依つて、謂れなく戰を仕り、兵士を失ひ候。當城の者共も、皆浪人執行武者共なり。自然新田・足利殿御尋にも預り、御家人竝にも召し出さるべくやと、心懸け候の處に、不計戰に及び候。某兄弟が首送り申すべし。毛頭御雙家へ、讐を存ずるにては之なし。隨見に赦見〔免カ〕を蒙り、越後より連勢をば、本國へ速に歸し給ふべしといひて、遣さ

れければ、紀伊守、之を聞きて、趣神妙の事に候。其地敗散に及ぶ上は、隨見切腹に及ぶべし。連勢の衆も、武士の法意を捨てず、賴もしき事に存候。勿論此方より遺恨もなし。御兄弟の儀は、折節を以つて、國繁・國長方へ、宜しく取成申すべしと、返答せられければ、大藏悦びて歸り、具に申したりければ、隨見斜ならずして、去ながら我等今、死を遁るれば、里見の家の恥辱たるべしと、切腹致され、兄弟の首を送りけり。紀伊守、之を見て、切腹には及ぶべからず、いとをしき有樣なりとて、則ち新田殿の實檢に入れければ、新田殿御覽ありて、扨々哀れなる事かな。里見は末孫といへども智勇を失はず。子孫の者もあらば、御取立なされたしとて、御淚に袂をぬらし給ふ。則ち御首をば、大藏給はつて、懇に御菩提を弔ひけり。越後勢も力を落し、本國に戻りけり。

里見隨見自殺

一、上州勢口郡神梅の寄居に、阿久澤能登守・松島式部、代々武士の名家を失はず、其谷の支配を全くして、桐生大炊助・同息又治郞殿迄、幕下になりてありけるが、桐生敗散の後、緣を求め小田原へ、一箇年には二三度づつ勤めけり。新田殿、之を聞き及び

給ひて、小金井・藤生に仰せけるは、桐生殿領内阿久澤・松島が事は、如何と御尋ありければ、兩人承りて、委しくは存ぜず、小田原へ通路を願ひ候由、承り及び候と、申されければ、扨は桐生落居し、里見兄弟亡びし事を、情なく思ひ、目近き此方が幕下を願はず、無禮至極の者なり。實否を正し、桐生の地侍・新田の歩弓人を交へて遣し、蹈散らし候べし。新田の物頭は、一人も出すべからず。されども新田の兵共は、案内を知るまじければ、能々聞届け候へと、ありければ、兩人承りて事をたゞすに、小田原へ出仕紛なければ、時を移さず押寄すべしとて、吉澤・廣澤・境野・菱公方・荒戸・木宿・小倉・仁田山・高津戸の地下人七百五十人、名ある侍には、大谷・岩下・風間・佐下橋・荒井・茂木・戸山・荒卷・伊藤・小林・原石・須永・籾山・福田・書上・常見・大澤・箱島・永井・稻垣・江原・加藤・栗原・鹿貫・片山・野田・下山・內田・高橋、是等の人々、地下人を引率して、桐生峠を越えて、鹽原神明の森に集り、新田勢は、金谷因幡守を大將として、吉澤・廣澤の鄕人宗徒の人々には、薗田・岡田・萩原・關口・中里・大澤・津久井・須藤・下山・伏島・野口・岩下・彥部・小泉・布目・梶〔脫アルカ〕板橋・寺田・川上・矢野・峯岸・島田・松下、彼是歩弓人殘らず、

因幡守を眞先に立て、口向坂峠を越えて、梨木坂の上の原に集りて、桐生勢と內談して押寄せんと、伊藤・石原・木村縫之助を鹽原へ遣しけり。日暮方の事なりければ、歩弓人三十人計連れ、橫瀨山の峯を通り、穴原へ出でて、何樣敵味方の見分をもせばやと思ひ、押行く所を、高草木・鄕戶の者共、松島式部方へ內談を通ずるに見怪しみて、すはや敵は寄せ來るなり。大勢ならば逃散るべし、小勢ならば討留めて、軍神に奉らんと、事の樣を見るに、上下五十人計なり。此方より切つて懸り、夜中迄戰はゞ、山中案內者なくとも、一人も遁さず討取るべしとて、上下四五十人は、手の者共ありければ、左右は皆味方なり。忍々に觸れよとて、先手に觸れ渡しければ、谷々澤々より、我先にと出合ひ、前後三百人計り集つて、右京・縫之助を火水に攻め寄する。雨人是を見て、遁るべき樣もなければ、一族下人・歩弓人の者、死すべき時こそ到來せりとて、面も振らず切つて懸り、十方へ切つて巡りけれども、無勢に多勢、殊に案內は知らざれば、夜の事にてはあり、一人も殘らずに討たれける。新田・桐生の者共、是をば夢にも知らず。夜明けなば、早朝より押寄せんと待ちけれども、石原も縫殿之助

も歸らざりける。其間に討たれたる由、告げ來りければ、扨は山中の者共は、早備を出して待ち居たりと聞えたり。さらば、桐生へ相談迄もなし。押寄せよとて騷ぎけり。金谷因幡守是を見て、粗忽に寄せて、如何なる大事か出來なんと、藤生と同心に攻め、味方の損せざる樣にとて、其日は內談評定にて暮らしけり。扨山中の物頭共、神梅の寄居に集りて內談しけるは、一向に神梅の寄居を新田方へ渡し、後日に和を願うて然るべしといふ者多かりける。其時、鄉戶・高草木の者共申しけるは、新田殿も山中の古例、阿久澤家守護不入の事をば知らず。時の讒言に任せて、人勢を向け給ふと覺えたり。叶はぬまでも、今度は和を願ひ給ふべし。昨日の狼藉、新田勢も口惜しく思ふべし。さる上からは、此度の戰は、無二の戰あるべし。何程味方勵むとも、勝利あり難し。山中の一族は、根葉を切つて、長く滅亡疑あるべからずといひければ、道伴古伯入道申されけるは、鳥海彌三郎・栗谷川治郎より數代の家名亡ぶべき時節なりと見えたり。驚くべきことはなけれども、家人一族、亡ぶべき事無念なり。叶ふべきとは思はねども、一先づ通じて見んとて、松島彌治郎に、犬目・平澤・田

澤・和久丸を相添へて、高津戸へ遣しけり。紀伊守・因幡守も對面して、事の樣を尋ねられける。彌治郞は若輩者なれば、伏澤・犬目・平澤申しけるは、松島・阿久澤家と申すは、天喜五年の春、阿部貞任九州へ流さるゝの時、上下七百三十人、奥州供仕る中にも、栗谷川治郞・鳥海彌三郞一家の者共、數多御供仕りたり。義家公仰せられけるは、箱根山越えては、大勢仕叶ふべからずとて、御供百人に定り、外は捨てられ、淚を流して離れ申す。其時、貞任仰せられけるは、行先の國は遠國と聞く、奥州へ中の文便の爲め、此邊に住居をせよと仰せられ、松島・阿久澤二人は、家人一族百餘人此所に殘し置かれ、外は皆奥州へ歸る。時に義家公御朱印具に御認め、此谷合澤中殘らず永代安跡〔堵カ〕の御書付拜領仕り、今に至る迄、數代全くありける所に、如何なる讒者かありて、斯樣に新田殿御勢を向け給ふ事、思の外に存候。新田・足利御兩家へ、宜しく御取成賴み入候と、申したりければ、紀伊守此由を聞きて、仰尤には候へども、桐生又治郞殿迄は幕下に組し、其以後目前の新田幕下にも願はず、近年は不屆多し。讒言承らずといひければ、犬目・平澤承りて、向後は幕下に罷成り、一族の內よ

り、新田殿へ證人に參られ申すべしといひければ、紀伊守聞きて、此度赦免なくば、山中の者共永代滅亡必定なり。 思へば情なき事なりとて、新田へ此旨申送りければ、新田殿聞召して、近年の不屈、免じ難き事なれども、其志に任せ許し置くべき由、御返答ありければ、紀伊守悅んで、山中へ趣を通じたりければ、大に悅び、奇異の思をなしにけり。 山中の者共は、此和談を知らず、此處彼處にて軍初まり、鄉戶・鹽原・花輪・穴原の者共は、撫切にせられたりと聞きて、皿久保・五蘭田へ走集りて、事の樣を聞くに、彌治郞・犬目・平澤・和久丸も、高津戶へ歸らず心許なしとて、人數三百人餘、平押に出でけるを、新田勢備陣催し押寄すと見て攻め來る。 新田勢は戻りて、山中の寄攻に合ひたる抔と、邊の沙汰も恥しき事なり。 川を越えて戰ふべしとて、先づ上下五百六十八、一度に川を渡つて、横瀨の西北に群集して、火を出し戰ひける。合戰最中に、和談の由告げ來りければ、其陣を引くもあり、皿久保五蘭田迄、追懸けて戰ふもあり、穴原・奈良坂の方へ遁れ亂るゝ勢もあり。 金谷因幡守是を見て、早鐘をならして人勢を集め、新田より此度御赦免なり。 皆々歸陣なすべしと、新田・桐生の

勢共を引歸しけり。謂れなき事に、新田・桐生勢共、百八十餘人死にたり。奈良坂の麓にて、松島彌治郎も討死したり。犬目・平澤も深手を負ひて三日過ぎて死にけり。阿久澤道伴は、新田殿と和談をばしたれども、小田原の首尾、心許なくや思ひけん。此度新田勢討死の首共を揃へて、小田原へ註進の爲め持參したりければ、氏直公仰せられけるは、山中の奴原、新田・足利へ通路せざるは無禮なり。此度の和談は、新田・足利にも、此方へ遠慮なるべし。去りながら、新田・足利も、早速此方へ知らせざるは、後日の罪科なるべしと仰せられける。扨阿久澤能登守・松島式部、山中・高草木の者共を引連れて、新田・足利へ參り、仔細を詫びて、金谷因幡守・小金井四郎右衛門を以て、向後幕下の契約をして歸りけり。

上州坪弓老談記　卷之中　終

上州坪弓老談記 巻之下

一、佐野宗綱公、極月廿九日に、富士源太を召して仰せられけるは、來る元朝、旗本の數人を以て足利へ押寄せ、敵不意の所を可ㇾ音。本道寺岡は道法遠く、殊に宗綱出馬、館林・新田へ知れば、即時後詰馳集るべし。此度は名草へ出で、藤坂の寄居を蹈散らし、須花の小曾根筑前が住家を攻めて、夫より足利本城へ攻入るべし。萬一新田・足利・館林の人勢集り、佐野へ引纂ぬると見ば、物頭・歩弓人・鄕人を進め、働可ㇾ出と仰せける。源太も始終を承りて、兎角御返答申上げず。又仰せられけるは、佐野・足利度々の戰、味方一度も負を取らず。先年若林・猿田川端合戰の時、野田・小曾根を越えて押詰め、館林の城邊迄狼藉して歸陣したりし時、新田・足利の後詰大勢催し來る故、陣を引きたりき。其後、妻鳥の城の戰にも、負を取らず。足墨・西川邊の早苗合戰の時も、鄕人・歩弓人、共に數百人討取るなり。此方の分とては、須花・糀崎を預

け置きたる小野兵部兄弟討たるゝ計なり。其遺恨故か、近年妻鳥領名草境の馬草場を荒し、麻の畑を蹈散らし、立毛をふり狼藉限なし。山上入道・天德寺抔が思はんも、恥しき事なりとありける所に、大祓隼人參上す。時に宗綱公、右の由を御物語あり。隼人承りて、畏り奉り候。去ながら小の月の段日と正月元朝は、合戰の日取、項羽亡び、大に嫌ひ申すなり。三月迄は御延引然るべしと、申上げけれども、御承引なく、朧の夜の丑の刻に、手巡に相觸れて、俄に出馬なされける。次の段別書に記す。依て爰を略するなり。

一、由良國繁公御死去の刻、御子達一家中へ、御遺言數條の外に、仰せられけるは、居城の事、義重公より以來德川なり。平城堀一重屋鋪構計り。去ながら三德ありて城郭妙あり。某今、金山に城を取立てたる事、本來を背きたれども、昔に替り、奈和・伊勢崎・前橋皆和談して、味方同前なる故なり。自然箕輪・鷹の巢・小幡・沼田、東は佐野・結城・榎木・栃木・壬生・小山より寄せ來たるとも、四方取卷く人數ありとは覺えず。若し八州を敵に請けては知らず、夫も一重二重漸くと覺ゆる。旗本の勢計にて、目下に敵を見て、鏖討にせんも易かるべし。山の頂上には用水あり。薪・秣に餓ゑず。近國

由良國繁の箴言

無雙の名山城なり。楠正成が千破劒の城は、五德相應の名地、それに一德も負けざるなり。然も夫を賴んで籠城あるべからず。日本國の勢を請くるとも、東北は渡良瀨川、西南は利根川、何れも十里へ、馬足を入らせざる樣に理謀りて、大將心の奧を研かば、縱ひ百年攻戰ふとも、落城あるべからず。大將の祕する所は、軍の度每に奧儀あり。其款別傳記にあり。由良・長尾は、兄弟の事なれば、別儀あるまじく、近邊の國主より招くといへども、兄弟共に行く事必ずあるべからず。酒宴遊興の時も、同座にある事なかれ。出陣の時、同じく集り陣すべし。隣邊の小名を愛し、家人一族を大切に思ふべし。逆心不忠を免るべからず、民の小科を沙汰すべからず、神社佛塔を掠め破却すべからず。其外、謂れなく弓矢を催し論ずべからずと、仰渡されければ、横瀨殿を始め、御一家集り給ひ、淚を流し、御諚意難有感じ、袖を卷いて泣び居給ふ。

一、足利長尾殿は、宗綱を討取る事を、小田原へ訴ふべしとて、御名代として横瀨勘九郎に、久米伊賀守を相添へて遣されければ、氏直公御對面ありて、新田・足利の働

北條氏直由良長尾を拘禁す

今に始めず、家人一族の武勇、感じ入り候こと斜ならず。横瀬殿・伊賀守にも、御褒美下されて歸りける。同五月廿五日、小田原より御名代として、山上五右衞門を以て、前橋新田・足利へ遣されけり。別して由良・長尾殿へ、御懇に御口上あり。先年由良殿武勇を以て、桐生又治郞を退散し、今長尾殿は宗綱を討取る。兩家の武勇無雙なり。此上、甲信の兩州も御手に入れ、先づ以て、佐野宗綱の一族、居城を堅固に守りてあれば、如何にもして彼等を追散らし、佐野を支配の地になさるべし。壬生・結城・小山・皆川後詰あらば、此方よりも後詰致すべし。寄居・八形の者共にも、兼て申含め候。兩家の軍法、心許なき事候はず。又兩家の働にて、攻取り給ふ名地たりとも、此方より望み毛頭候はず。近年兩家の御苦勞察入り候。今度山上五右衞門を遣し候も、密々御相談も候間、其御志に任せ、御誘引候へかしと仰遣はされければ、何心も辨へず、由良・長尾殿も、山上五右衞門と伴うて、小田原へ御越なされけるが、思ひの外に對面もなく、暫ありて、山上五右衞門を以て仰せられけるは、何れもの參着珍重の至なり。然れども宗綱を討取る働品々、飛書を以ても、早々註進あるべき所に、兎角

の案內延引の條、不屆の至なり。又先年北條安房守・同大和守・久米伊賀守等を以て、佐野を攻め候砌は、成田が勢案內して、行田・岩付・目沼・川越の勢、殘らず加勢に出づる。之に依つて、佐野・前川原迄押詰め、宗綱が二三の備を切崩し、旗本後詰の備迄、色めき立つて危く見え候處に、佐野の侍細野治右衛門・富士源太・赤見・竹澤・大祓以下、四角に備を立てたりけるが、旗本と一つになり合うて備を直し、火花を散し、身命を惜まず戰ひける故、岩付・行田・川越の勢、大畑與十郎・早川玄蕃抔を始めて、宗徒の勇士十八人討死す。其時、兩家より加勢を出し、近國の事なれば、難所案內を知らせ候はゞ、討死あるまじ。今度宗綱を討ち、早速註進あるべき所に延引、思の外近年、小田原を粗略に致さるゝ段は、謂れなき事なり。逗留の中、右緩々と承るべし。之に依つて、先づ御籠居あるべしとて、兼ねて企みし勢出合ひ、座鋪牢へ入れ申し、きびしく番を附け置きけり。夫より由上は、門外へ罷出で、由良・長尾殿の衆中へ、趣を申渡しけり。新足兩家の儀、近年氏直へ無禮、之に依つて、御城へ召籠められ候。面々先づ歸り申さるべしとの御意なり。譯は押付城代一族方へ申遣すべしとの御

事なり。何れも左様に相心得候べしと、申されければ、御供の人々驚き五右衞門に向つていひけるは、是は存の外なる事を承り候。尤も仔細ありて御逗留有之とも、兩主の中一人は、某共に對面あるべき筈なり。仔細を承知仕候はゞ、歸り申すべしといひければ、五右衞門聞きて、各の心體至極せり。去ながら、大將の大事に及ぶ程の事あるまじ。各は先づ御歸り然るべしといひければ、金井田傳吉郎・細谷甚九郎・堀口彥助・林又十郎・金井新藏を始めとして、兎角五右衞門案内し給ふべしと、目と目見合せ、御供の中間小者に至る迄立騷ぎ、五右衞門を取巡して、城中へ亂れ入らんと犇きけり。されども五右衞門物馴れたる者なれば、騷がず申しけるは、扨々各は不覺の至なり。某が申す儀、用ひ給はずば、却つて不忠となるべし。狼藉がましき事あらば、御兩主の御爲宜しからず、定めて仰分けられ、押付御歸城なさるべしといふ所へ、城中へ御供仕りたる成重公の侍に、外丸源之丞・長澤半九郎・木村助七郎・小泉彌吉郎。顯長公の侍に、市川主馬之助・宮崎五太夫・江川海老之助・齋藤佐左衞門・芳野次郎・小菅・關口馬之助・岩崎彌內を始め、大汗になりて走り來り、城中の趣を語りければ、

諸人剛心を和げ、五右衞門も城中へ入りけり。則ち氏直聞召して、總て新足兩家の者共は、一騎當千の奴原なり。其方が例の謀にて、靜りたりと見えたり。速に新足へ討手を遣し、一族を追散らさんと思へども、先づ其志を窺ひ見よと、新田・足利へ使を以て、諸士の心をはかりけり。扨又兩家の侍に、外丸源之丞・江川海老之助、御供の連の内より拔出で、御召領の馬に乘りて、小田原より新田迄は四十餘里の所を、十時計に、金山の城中へ乘付け、馬は其儘死にけり。兩人小田原の趣を申上げければ、横瀬殿始め家老の面々、其外諸侍集つて、上下驚き騷ぎけり。館林・足利・小俣・桐生へも告げ知らすべし。出城・寄居の者共も嘸騷ぐらん。諸へ觸れて、先づ騷動を靜むべし。押付小田原より打つて來るべし。一族物頭の面々、金山へ集り居て、軍法を致すべしとて、御母公・横瀬殿始め、上下拳を握り、胸をさすり給ひけり。

一、北條氏直公、山上五右衞門・北條安房守を召して仰せけるは、今度由良・長尾を籠め留むる事、天の與へ給ふ所と思ふなり。新足へ軍勢を向け、彼の一族共を追散らし候はんや。先づ使者を以て、敵の心體を引き見候はんやとありければ、時に安房

守承りて、御尤に奉レ存候。去ながら用捨は、後日の讐と罷成るべくや、早く追討の勢を御向け然るべしと、申されければ、山上申しけるは、安房守殿宣ひ給ふ所、御尤に候へども、新田・足利兩家の儀は、自餘と替り、文武强義の士共に候へば、深き術なくては、味方を費し申すべきなり。先づ御使者を以て、心根を御覽もや候はんかといひければ、氏直聞召して、五右衞門が申す所、謂れあるべき儀なりとて、則ち多米九郎・平塚亦五郎に、歩弓三十餘人相添へ、新田・足利へ遣さる、其狀に曰く、今度兩主、小田原に留むる事は、近年の不屆、又宗綱を討取り、早速註進延引、山上五右衞門を差遣す以後、漸く參入し、譯を聞かるゝ條不出來なり。之に依つて、親談申合すべきため、暫く逗留あるべきなり。一族家老物頭の者共、殘らず此方へ參らるべし。居城の儀、此方より加番を遣すべし。滯る仔細あらば、據なかるべしと仰遣されける。

一、金山には、新足の一族晝夜會合して、兩主歸城の內議評定ありける處に、小田原の使者來りければ、本城には橫瀨勘九郎・小金井四郎右衞門・矢場內匠之助・屋內修理

之亮・大澤下總守・林越中守・同伊賀守・烏山淨山。足利の一族には、白石豐前守・大沼淡路守・阿方源內・荒井圖書・南江右衛門・小根彈正・高山右馬之助を始め、兩家の諸侍、三間十五間の廣間に並み居て聞き、胸を冷し汗を握りて並み居たり。勘九郎殿、如何にも騷がざる體にて、使者に向つて申されけるは、兩家、小田原に逗留に付きて、御使難ㇾ有奉ㇾ存候。輕卒ながら御返事を賴み奉る。其間御休息ありて、明日御滯りなさるべしとて、珍物を調へ種々馳走、兩家の剛士・若侍・老者相交りて、通夜酒宴して使者を慰めけり。扨諸士は、北の陣に集りて詮議內談あり。大澤下總守申されけるは、御兩末如何の上は、謀を巡すとも、詮あるまじき間、此度の使者押へて獄屋に押籠め、足輕共を耳・鼻をそいで、小田原へ追歸し申すべしといひければ、横瀨勘九郎殿聞き給ひて、下總守申さるゝ所、其謂れあり。兩家運の極にや、一族にも內談なく、小田原へ參らるゝは、八幡大菩薩も見捨て給ふと覺えたり。然れども居城を小田原へ渡すべき事は、縱令運命果てたりとも、各一族在命の內は、加番も入るべからず。今度和談に事寄せて、兩家の士族の志を、引き見給ふ所と存ずるなり。然らば敵

の謀に從ひて、何卒兩主繼命にして、歸城あらん事、知謀を廻らし申すべし。先づ使者を和げ歸すべくやとありければ、皆此儀に同せり。小俣吉勝公仰せられけるは、兩主の内一人留められて、末代の意趣たり。使者の儀に任せて、某・横瀬兩人、小田原へ行くべし。但し新足兩家の内にて、剛士を選み連れ行き、和談を調へ、長尾を同道すべし。萬一首尾善からずば、城中にて思ふ儘狼藉して、氏直が首を握つて後は、八つ裂きにせらるゝも悔なかるべし。仕損じたる分にて、安房守抔が首を取らざる事はあるまじ。我等討死する程ならば、小田原には、萬人塚をいくつも築くべし。自然討死するならば、新足・館林・小俣の軍勢を一つにして、弔軍を勵み給はるべしと仰せられければ、大沼田淡路守・小金井四郎右衞門承つて、是は勿體なき事を仰せられ候ものかな。御兩主取籠められ給ふ。又大將分の御方々討死あらば、誰あつて讐を報じ、絶えたるを興す事あるべき。唯御命を全うして、敵に心奥を謀らせず、御兩主の一刻も長命ならせ給はん謀こそ、廻らさるべきにて候と、申されければ、義勝公も横瀬殿も、此趣に附き給ひて、和談の儀を使者に含めて、小田原に歸しけり。

氏直、新田足利を攻めしむ

一、林越中守、小田原の使者に向つて申しけるは、今度由良・長尾御留置に付、御使者の趣、具に承知奉る。之に依つて、兩家近年粗略の儀、仰下さるゝ趣は、兩家並に一族に至る迄、小田原の御事は、諸事に付き御賴もしく、氏神同前に崇め奉り、御粗略の儀、心奥全く存じ奉らず。逆心の儀毛頭も存ぜば、今度兄弟共に參上仕るに及ぶべからず。近年の無禮、詫び奉るべき爲めにこそ、御使者を幸に致し、伺候仕りたるにて候。兩主其科御座候とも、御赦免を蒙り、向後は愈御下知に隨ひ、御家風を仰ぎ奉るべし。且又居城の儀、御加番仰付けらるゝに及ぶべからず。兩家の者共在番仕るべし。先づ以て、兩家の歸城を願ひ奉ると宣ひければ、多米九郎治郞・平塚又五郞、速に小田原に歸りて、右の有增申上げければ、氏直聞召し、尤も赦したくは思へども、今度の意趣は、末代にても報ぜんと思ふべし。然る時は、永く北條家の敵となられん。今此時に新足館迄敗〔追カ〕散し、小田原より支配いひ付くべしとて、則ち安房守を大將として、二千五百餘騎、侍大將には、伊藤大和守・多米主膳・大道寺某・山上五右衞門・成田左衞門佐案內者として、忍・深谷・岩付の軍勢を催促して、二月十八日新

田・右戸の渡りを越えて、上は中瀬・小島、下は中條・小泉・吉原・赤岩までは、川を後に當てゝ野陣を張り、篝を焼いて諸勢を待揃へて、新足の手分をして攻むべしとて、麓邊の寄居を待ち居たり。館林は忍・深谷・岩付の勢を、花房内膳に組合せて、上下二百五十騎押への爲めに遣し、寄居・八形の勢をば强馬を選び、上下三百五十餘騎、足利を攻むべしとて、光西原に陣を取り、先づ富士山の要害を追散らし、小泉寄居迄狼藉せよとて、神原治部・濱島與吉郎・大磯勘解由左衞門を大將として、近邊の民百姓・神社・佛閣を狼藉致し、扨前橋・伊勢崎・大胡・山上の者共は、瀧川道見と同じく居城して、番人を集めて用心を構へ、小田原の合戰例歲と替り、互に討死多かるべしと、口々に訇り騷ぎけり。

一、北條安房守は、中瀬村江原といふ所に着陣ありて、爰に一夜明し、諸軍を見合せ、甲乙なく川を渡せと下知せられ、平塚の渡りを越えて、木崎・德川・江田・田中の民家を焼拂ひて、脇屋・反町に幕を打つて、先づ金山を攻むべしとて、勢の手分をして押寄せける。扨金山には、兩家の兵士集り、軍評定取々なり。橫瀨殿申されけるは、今度

の軍は大將なき事なれば、物頭の面々、某と同體になりて、敵を駈惱まし、味方を損せず、城を堅固に守るべき御術を廻らさるべし。此城は敵を見下し、方便は日本無雙の名地なり。去りながら敵、廣澤・桐生に亂入し長陣せば、俵〔兵〕糧・秣に難儀すべし。さる時の餓ゑざる術を慮りし給ふべし。之を防ぐ兵には、藤生紀伊守に、桐生の地侍を相添へて、河在見・藪塚・長岡・大鷲村前原に備へ塚を拵へて、伏兵を置いて亂杙・逆茂木を引きて、峯々谷々には石弓を構へ、寺井・由良・細谷・岩松の者共に、鳥山主膳・金谷丹後守を大將にて、由良の出城に籠り、敵の足がらみにせんと待ち居たり。

金山城の防備

一、金山の城には、横瀬勘九郎殿・小金井四郎右衞門・林越中守・大澤下總守・屋内修理亮・濱田内匠・畑六之助・江田兵藏・堀口彥五郎・矢場主計を先として、宗徒の勇士三十九人手支配して、前後左右の持口を堅めたり。長手口の大將には、小金井四郎右衞門・屋内修理亮・大澤下總守、强戶・成塚・鶴生田・萩原の鄕人を、西面の谷々に籠置き、吉澤・古郡の者共をば、荒井主稅助・茂木右馬丞組して、岡田石見・薗田彥七郎・伊藤十藏・長谷川與左衞門・渥見源三郎・大道寺勘太郎を先として、丸山の峯に寄居て、後口

へ廻る敵を押へけり。新田口の大將には、橫瀨勘九郎殿を始めとして、侍大將十六人、熊野口の大將には、林越中守・同伊賀守・堀口彥五郎・矢場內匠・野山九郎兵衞を始め、宗徒の人々十三人、坂下平地に集りて、石弓・落穴を拵へて待ち居たり。燒山・金井の間には、縣播磨守・矢木田淸九郎・內田左門・久保田金藏・松原勘解由・淸水三左衞門・唐澤出羽を始めとして百三十八人、馬場の西に陣取りて、燒山の峯に物見を居ゑ、鳴を靜めて待ち居たり。市場口上には、態と人を置かず。桐生・廣澤には、山中の物頭關口尾張守・風間將監・大谷勘解由左衞門・津久井左京・松島古伯入道・阿久澤道伴・石原石見守・彥部加賀守相集りて、名ある勇士百五十八人、其外鄕民を合せて五百餘人、廣澤寄居に集り居て、峯には遠見番を置き、金山に軍初らば、橫鑓を入れんと控へたり。小俣には義勝公、手勢・鄕民を集めて、桐生川の左右に亂杙・逆茂木を入れて、用心嚴しく下知をなし、中島笛吹坂に人勢を置き、萬一新田の城落ちたりと聞かば、總勢速に此所へ退き一合戰、某、旆を取るべしとて待ち居たり。羽鹿・大前・栗の谷・板倉の强士地侍共は、小俣の加勢し、川端備塚に伏して、前後の樣體を聞合せけり。

山下・五十部・大岩の地侍郷人は、蓮臺寺山の前後に集りて、足利勢と相離りて、下知を請けたりけり。

足利城の守備

一、足利の城には、白石豐前守・立木圖書助・大沼田淡路守・市川左衞門・久米伊賀守・荒井圖書・小曾根筑前守・南掃部・小浪庄九郎・小菅縫殿助・江川左衞門・山川丹後守を始として、諸兵寄合つて合戰の評定して、種々の術を構へ居たり。富士山には、人勢を態と置かずとて、龍舞・朝倉の者共は、川の東へ引越して、自然佐野勢、幸ひ此節と、横鑓をせんも知れずとて、迴間山に、俄に遠見番を置きて、矢野九郎兵衞を大將として、觀音堂の土山に伏兵を置きて待ち居たり。彥間・名草・藤坂・月谷・田島の地侍郷人は、皆要害山腰に集りて、色々術を拵へたり。

館林の防備

一、館林には、金谷因幡守を大將として、大畑治部・久下越後守・江戶宗印・大久保甚七郞・設樂新八郞・久保田若狹守・長谷川道伴・野田志摩守・大島彌平次・莘沼左內・篠塚半彌宗徒の人々十三人、近邊の鄕民步弓三百六十八餘、高根・川俣・加保志・小曾根を取迴し、落穴・亂杙・逆茂木を引きて、御兄弟の弔師して、討死せんと待ち居たり。

一、新田金山にては、御母公、老中御一家の面々に仰せられけるは、今度小田原より大勢にて攻め來ると風聞あり。兄弟謀に逢ひて、留め置かるゝの上は、二度見えん事あるべからず。義重公より當家迄、新田・足利領地は、中絶なく相傳はる子孫の端共なり。相雜る家士多しと雖も、此時に至つて、各別して所存はあるべし。異儀なく城を渡す程ならば、新田代々の名譽は、永くすたるべし。如何にも謀を廻し、當城を堅固に守りて、家名を末代に殘し給へかし。若し各心體不一致ならば、城を保つ事なるべからず。敵の近付かぬ先に、自ら命を落して、後世には生を男に變じて、今の此讐を敵に思ひ知らせんと、御淚せきあへさせ給はず、御胸を撫らせ給ひければ、諸士承りて、俱に淚を袂にしぼりける。横瀨殿、鳥山に申されけるは、仰の如く、御兩主斯くの如きの上は、一命を輕んじ、居城を堅固に守りて、御兄弟御命さへ、今世に御座す程ならば、御運を開かせらるゝ事候べきか。今度御家人、遍く忠義の爲めに、死を輕くせんと思ひ、勇氣を顯して、御家運開くべき瑞相、明らかに候と、仰上げられければ、御母公にも御心よげにて、諸軍勢を勇めさせ給ひけり。

一、新田金山の城にては、諸物頭集り居て、根岸三彌筆取にて、人勢を印しけるに、上下七百三十餘騎、雜兵總て三千餘人と記しける。小金井四郎右衞門申されけるは、新足の御大將程、御果報に御座すは、他になけれども、今此大事に逢はせ給ふ者かな。武士の儀は勿論、土民商人に至り、志を味方に運び、數代の御憐を、何の時にか報じ奉るべき。當時命を抛つて、金山の城を守護し奉らんと思ふ念力の、誠に天にも通じなん。八幡大菩薩捨てさせ給ふべきなれば、御命には必ず御恙も御座あるまじく、何れも隨分骨を盡し給ふべしと、諸卒を勇め、内談評定ある所に、成田左衞門尉が使者到來して申しけるは、此度兩御城主、小田原へ御逗留には、剩へ兩所へ人數を向けて、小田原軍兵發足して、近邊に立所なし。且又新田・足利の儀、努々粗略に存せず。去ながら此間は、持病に責めらる。之に依つて、音信を承らず、心許なく存ずるなり。御一家の御内か、又は家老中へ、内談仕度事御座候。御入り希ふ所なり。之に依つて、橋本嘉右衞門を進らする所なりと申宣べたり。此使者は、元來新田出の侍なり。横瀨殿老中の面々、始終を聞き給ひて、横瀨殿仰せられけるは、忍・岩付の者共

は、小田原方に組して寄せ來る沙汰あり。成田殿の儀は、新足へ重縁なり。御使者忝く存ずれども、御存の通、一族家中闇の如くになり、仁義を略し、唯敵の寄せ來らんを待ち、上下共に早く討死して、主恩を報ぜんと存ずれば、何方へも能く御報さへ仕らず候と、申渡されて、嘉右衞門は歸りけり。諸士申しけるは、成田殿の大謀の、使者もらしたるも口惜し。此頃忍・岩付の勢、館林の押へに、飯野・大久保・北大島・浪端に集り居て、館林よりも新足の後詰をせば、其留守へ乘込むべし。手間も取らずに、追散さんと、羽田内膳・小林伊織大將として、百四五十騎控へたると承及候と、各申合されける。横瀨殿仰せられけるは、兎角成田は、心變りと見えたれども、試みの爲めにこそ、使者馳せたるなれ。又口是謀り見よとて、増田伊勢守・廣瀨長藏を相添へ、歩弓三十餘人相伴はせ遣されければ、成田殿他出の由にて、家老中さへ出合はず、詮なく使は歸りけり。横瀨殿聞召して、大方成田は、是へ寄せ來るべし。其陣を見屆けて、成田一家が首切つて、軍神に奉るべしと、頓て待儲をこそしたりけれ。案の如く成田殿は、奈和・伊勢崎・前橋道見・朝葉甚内抔を語らひて、小田原と一味し、此度案内

小田原勢敗る

して、寄來るの由、脇屋の郷民告げ來りけり。

一、天正十二年六月上旬、小田原の軍勢、先づ金山を攻めて、足利へは西光寺原迄、押への勢を出し置き、長手・熊野西の方より攻上るべし。新田金井口をば攻むるに及ばずとて、朝葉・成田を先として、二千五百餘騎を二手に分けて、長手口の大將には、北條安房守・多米伊勢守・山上五右衞門・成田左衞門佐千五百餘人、鼓・貝を鳴らし、口喚き叫んで攻上る。城中兼ねての事なれば、小金井四郎右衞門は、坂の中途に下り、名ある侍百餘人・歩弓三百餘人を前後に立て、峯には石弓・丸木・土俵を竝べて攻入る。敵の眞先に落し懸け、旌を取りて下知をしける。成田勢二百餘騎、忽に木石に當つて微塵になる。是には遲疑せず、大軍討死を乘越え攻登る程に、あはやと思ふ所に、又木石虛空に切つて落し、矢種を惜まず射ける間、勇氣盛の小田原勢、一度に備崩れて、風に散る木の葉の如く、谷底へなだれ落ちける。山上五右衞門、後陣の備を立直し、强戶・鶴生田繩手へ引退き、味方を見れば、三百餘人討死し、半死の者は數知らず。成田も手勢百人餘討たれ、我身も疵を負ひ、馬も深手得たりければ、谷底へ

跳入りて死にけり。小金井大音を揚げて、如何に成田殿、謂はれず案内して、小田原殿にまで損懸け給ふ。今日明日は術も替り候間、重ねては案内を止めて、隨分けいあんこそ大切になさるべきにて候。猶寄せ給はゞ、重々小田原殿の速に逃げ給ひ候へと、古木を叩き二三度罵りけれども、耳にも入れず、攻口の諸勢本陣指して引退きける。

一、小金井四郎右衞門は、思の儘に敵を仕負はせ、谷底の死人を見、打笑ひながら、名城の印は此時なり。味方一人も生きたらん内は、落城は思ひもよらずと、嫡子釆女を坂中に殘し置きて、我身は本城に戻つて、鳥山淨仙・御母公・横瀨殿へ、合戰の次第を仰べられける。何れも斜ならず悅び給ひて、遠見所へ登りて樣を見給ふに、敵、熊野口に充滿して、合戰最中と覺えたり。横鑓を入れて、敵を漏さず搦め捕れとて、新田口の勢を引連れ、寺が入の坂本に陣を備へ、敵の後陣を前に當て、鬨の聲を揚げたりけり。熊野口の寄手の大將北條陸奧守・伊勢大和守・前橋道見・松山外記、雜兵都合千三百五十餘騎、淺葉甚內案內して、寄居・八形・川越の鄉人合五千人、蛇川の左右前

後に置き、勇士三百餘騎、鐘・貝を響かし攻上る。此口には林越中守・大澤下總守を大將にて、茂木右馬助・關口尾張守・増田紀伊守・外崎源内・大山兵藏を始として、上下二百七十餘人、谷合の藪陰に隱れ居て、鳴を靜めて待ち居たり。甚内申しけるは、長手・太田口には、大勢は大〔脫字アルカ〕を備へ、此口は小城と見えたり。手間も〔脫字アルカ〕本城へ亂れ入らんと、眞先に進んで攻登りける所を、兼て用意の事なれば、谷・峯・難所に木石・落穴を拵へてありける所、小田原の三百餘騎、青龍の備に連つて押し來る。時分よしと林越中守・大澤下總守、相圖を下知しける程に、谷峯に伏し居たる者共、木石を逆落しに放しかけける程に、敵思ひ寄らざりければ、亂れ立つてひしめく所を、射手を揃へて、散々に射させければ、麻の如く立並んだる事なれば、あだ矢は一つもなかりけり。此口は取分け嶮岨なりければ、坂本より見上ぐる計にて、矢に當り木石に打たれて、伊勢大和守・前橋道見、旌を振る迄もなく、引返さんとする所に、燒山切通に隱れ居たる者共是を見て、礫を雨の如く投懸け、遠矢を射て鬨を揚げければ、放々にして、長岡・新島・濱田の廣場へ引退く所を、小金井四郎右衞門見て、一文字に追懸

けける。田畑に落穴を數々拵へ置き、味方は案内を知り、小田原勢は知らざりければ、馬を乘落し、逆返りに落され、人馬方々へ散亂する所を、此處彼處にあらはれて切立てける程に、淺葉兄弟を始として、一族下人三十四人、枕を並べて討たれける。前橋道見も、燒山の南の深堀へ馬を馳込みけるを、供廻の中間、馬を打つて跳ね上げんとしければ、馬は大きに驚いて、虛空に飛び跳ねける程に、道見は逆さまに跳ね落されて、腰骨を折つて半死になりて、漸く戶板に乘りて、辛々前橋へ落行きける。扨四郎右衞門は、本城に歸りて、大澤下總守・林越中守、其外の人々に參會して、合戰の手立、軍の雜談して、互に悅ぶ事限なし。御母公より、長櫃を樽肴御持たせ、御見舞の爲めにとて、鳥山淨仙・林田宗壽御供にて、新田口の馬場迄御出で、諸士に御對面なされ、今度は大將御座さゞりけれども、鄕民共に心を揃へて、勵み合ひ戰ひたるこそ、肝に銘じて感じ入り候なりとて、御盞を下され、諸人感淚を流し、愈義心を勵みけり。

一、扨金山には、老中會合して難有御酒頂戴して、暫く謳謠止まらざりけり。橫瀨殿仰せられけるは、小林主膳が首・淺葉兄弟が首、長手・鳥山の間に獄門に懸くべし。早

く寺が入古郡の者共へ觸れ渡すべしとて、彦右衞門・丹三郎を召して仰せられけるは、寄手の討死五百三十八人、獄門に懸けたり。城中には三十餘人、蛇川・由良・細谷の郷人、出城に集りたる勢、百餘人討たれけり。

一、北條安房守・同陸奧守・山上五右衞門を始め、軍に懸負け、江田・反町本陣へ引退き、合戰の形粧を小田原へ註進す。氏直公驚き給ひ、則ち大畑兵庫助・桑山掃部を召して、今度合戰に、味方利を失ふ由告げ來る。定めて忍・岩付・前橋の鄕人草武士を思ひ寄らず、大軍を賴んで負けたると覺ゆるなり。古より新田の一族家人は、軍に及び一足も退かず、大敵を怖れず、千騎が一騎になる迄働く事、每度にあり。兩人行向つて謀を運らし敵を討取るべし。近邊の鄕民・草武者、必ず足がらみをなし、不意に懸亂さば、味方手負あるべし。其分心得給へとありければ、兩人畏つて候とて、二百餘騎の勢を引率して、中條の渡りに着陣して事を聞くに、小田原散々に打負け、淺葉兄弟・前橋道見も討たれし由なり。小林・屋村・中條に勢を殘し、上下三十騎にて、反町さして急ぎける。安房守對面ありて、諸事御物語ありて、山上五右衞門申しけるは、

謀を如何程なすとも、此度は落城あるまじ。戻して味方損ずる計なるべし。金山は日本無雙の名城、又家中は五里四方に滿ちて、民百姓に至る迄、城主の籠居を悲み、上下一致し、只討死を專にせんと思ふ色あらはれ見ゆ。外に謀もあるべき事に候と申しければ、諸物頭上下、共に肝を消し顏になりて、一言いひ出す者もなかりけり。

一、多米主膳・大道寺明之助は、蛇川の岸に備へて、長手口の大將・熊野口の大將攻倦くまば、後詰して、新手を替へて攻むべしと思ふ處に、由良の出城に籠りたる金井田傳吉郎・家內伊織・片岡治郎兵衞・天竺甚太郎・靑木內匠助・細屋・岩村の鄕人、以上二百人餘籠りたりけるが、金井田傳吉郎思ふ樣、今度の戰に合はずんば、末代殘念多かるべしと思ひ、出城を忍び出て、主從十八騎、馬を早めて乘り行くを、寄手の者共是を見て、此城の押へこそ、五騎・七騎宛落行かば、後には鷺のから堀を守ると同じ。是れを討留めよとて、我先にと追懸る。本城の合戰より大軍になりて、敵味方入亂れて、東西南北まくり合つて、互に火を出し戰ひければ、新田方百餘人討たれ、寄手も七十餘人討死す。傳吉郎取つて戻し、能き敵七八十餘騎切つて落し、我身は手

をも負はず、一族家人引連れて、金山へ行くは易けれども、出城の狼藉心許なしとて、駒の手縄を引戻しけり。

一、北條安房守・同陸奥守、諸物頭を集めて、詮議内談せられけれども、勝つべき術もなかりけり。多米主膳進み出でて申されけるは、關八州の軍數度、某抔馳合せ候へ共、斯樣に味方の方、便を失ひ候事なし。小田原人勢殘らず寄集り、金山の城を取卷く事叶ふべからず、大勢長陣せば、寄手の勢は餓ゑて難儀に及ばん。故は桐生・小俣・足利・館林皆以て、金山一族の事なれば、糧詰も甲斐あるまじ。早く小田原へ仰上げられ然るべしと申されければ、安房守聞き給ひて、各々了簡、其謂れ尤に存じ候へ共、近邊の加勢を催し攻め、兼て退いたるなんどと、酒宴咄にならん事、口惜しかるべき事なり。殊に桑山・大畑抔を加勢に招き寄せば、小田原の思召も如何と思ふなり。兎角今一合戰して、有無を晴したき者なりと、申されければ、陸奥守申さるゝは、尤も合戰幾度したりとも、さのみ負くるといふ事あるまじけれども、勝つべき術も見えず。愁に軍して、歩弓人を討たせ、長陣の後退かば、指をさゝれ嘲られんは、猶然るべか

らずとて、兎角評定ある程に、廿四日を送り、士卒も草臥重ね増しけり。敵も如何なる術か廻らさんと、
一、金山にては、一族諸兵集つて、若し夜討やあらん。麓に逆茂木引懸け、城内水も乏しければ、水饑を敵に討たれじと、池の泥を以て、西南五十間金の手に塀を塗り廻して、馬を挽出し、白米を以て湯洗抔して、種々の術をなしにけり。敵長陣する事、食攻の企なるべし。近邊の糧を亂妨せられぬ用心をせよとて、觸れたりける。然る所に、金龍寺・長輪寺より使僧來りて申しけるは、今度の御合戰、新田・足利の御勝利承りて、兩僧も大悦、各と同じ。且つ又出家の事にて、討死の忠孝も、佛祖の憚あり。叶はぬ迄も兩寺、小田原へ參り、和談を申詫びて、兩主御歸城を願ふべしと、宣べたりければ、上下斜ならず。横瀨殿使僧に向つて、仰の趣難有こそ珍重に存じ候へ。隨分御扱ひ願ひ奉ると御返事ありければ、使僧戻つて、其趣を申しければ、兩寺早速小田原へ馳行き、和談の詫を申されければ、氏直公聞召して、殊勝千萬に存ずるにて候。近邊寺社僧多しといへども、今此時に至つて、武の勇氣を和げ、國士を安泰ならしめんと思立ち給ふ事感じ入り候。御望の意趣は、

成田左衞門方へ申渡すべく候とあり。兩寺へは御振舞珍物を譴し仰付けられ、其上雪舟の圖書を拜領して歸りけり。
一、北條氏直公は、成田左衞門佐を招き寄せて仰せられけるは、兩寺の扱は、新足へ諸勢を向はせ候事、不慮に兩城主留置く故なり。氏政代にも攻めず、越後・甲州・佐竹、何れも攻めざる者共なれば、近年無禮數多し。此度出馬しても、攻落すべきなれども、兩寺の志一族の働、至極感應せり。今度は軍を退け、由良・長尾も歸城申付くべし。去りながら枝族の中より一人宛、人質を出し置くべし。此趣其方計らひ申さるべしと、仰せければ、成田承つて兩寺を招いて、新田・足利へ通じて、天正十二年七月廿日、兩主歸城の事、定つて小田原勢も退陣す。新足の上下悦んで、天道を禱り諸神を敬つて酒宴しけり。扨御迎には、小金井四郎右衞門・藤生紀伊守・金井田傳吉郎、小田原へ參る。此外新足の人數八百五十餘人にて、川越の野原へ出づる。林越中守は、佐川・中瓦に待ち居たり。成田・山上御供にて、佐川の端迄送り給ひ、互に禮儀あり酒盛ありて、五右衞門は小田原へ歸りけり。兩主は態と小勢にて、上下十八人にて御供

す。江田兵庫助は小田原に留置かれ、三十日替りに相勤めけり。由良・長尾殿、夜を日についで、御急ぎありける。程なく中條の渡りに着き給ふ。時に新足の寺社の僧・郷士・百姓、横瀨殿を大將にして、御迎六萬餘人、目出度歸城なされけり。

由良長尾共に歸城

一、御母公、馬場迄御出で、御兄弟に御對面ありて、一族並に諸兵士・歩弓・郷民の忠節は、一生語つても盡くまじとて、御悅の淚にむせび給ふ。成重公仰せられけるは、今度不意に小田原に留められ、籠の中にこめられ、已に危く思ふ所に、一族諸士百姓に至るまで忠義深き事を、天の憐み給ふ所なり。之に依つて、命を繼ぎ、速に歸城仕候とて、御悅限なし。頓て酒宴初りける。顯長公も、早速足利へ御歸城ありて、金龍寺・長輪寺へ御入り、數々御禮ありて、御先祖の御墓を拜ませ給ふ。成田左衞門殿も、新田・足利へ御越、諸事御物語每度ありければ、目引鼻引きして、扨も顏の皮の厚き人やと、指をさしけり。

一、長尾顯長公・由良成重公御繁昌ありて、新田・足利の武士・百姓・町人、神社・佛堂を增し、信仰重(いや〳〵)しければ、大將も憐み深くましますす故、郡內安泰に治まりける故、春は花

見、秋は月見踊を催しけり。爰に又不意發れり。小田原へ、上方より大勢を以て、攻來ると風聞あり。之に依つて、新田・足利へも三百餘騎、小田原へ加勢あるべき由告げ來る。近年泰平又此事出來、武士の骨を折り、晴がましき事多かるべしと、弓よ鞍よと動揺せり。天正十七年十一月廿六日、小金井四郎右衛門・藤生紀伊守・林伊賀守・金井田傳吉郎・茂木馬之丞・江田兵庫助を大將として、上下三百六十餘人、成田左衛門殿の幕下になりて、小田原へ馳せたりける。程なく相模守山田村に着陣、諸士小田原に參りければ、多米主膳・山上五右衛門參會して、斜ならず悦びけり。扨氏直公御對面ありて、小金井四郎右衛門に御馬拜領す。其外大將分の人々には、御太刀・鎧・長刀、夫々に拜領す。新田・足利と小田原の御使番には、長澤半十郎・佐川田喜左衛門兩人なり。是は力、常の人に替りて、利根川滿水にても、川を渡す事、小川を走るより易く、物馴れたる武剛の者なり。極月初には、上方の大軍攻め來る。山中城には新田七左衛門を大將にて、百五十餘騎籠り居たり。樫坂・畑・塔の澤には、石丸源太左衛門・大道寺友之助・石塚三郎左衛門・樋口主計助・萩田左近・大磯久五郎・丸橋藤治郎、宗

徒の勇士上下八十五人、山峯谷の細道に、石弓・木弓・落穴・堀切を拵へて、種々術をなして待ち居たり。寄居・八形・松山・大宮・八幡の地士郷人は、久永但馬守に隨つて、北條安房守の下知を請けて、出城寄居に楯籠る。小田原枝葉從類廣大なれども、天正十八年春、大將分の人百五十餘人生捕られ、討死は上下八百廿九人、情なき有様なり。新田・足利の士峯岸主計・栗原內膳・內田庄之助・山川佐內・戸島甚五郎・渥美源四郎・籾山久兵衞・芳野次郎八、以上六十二人討死す。其外五六人も、生捕られたる風聞もあり。

一、佐野は、天德寺殿御代になりて、彌御繁昌ありけれども、新田・足利並に人質遣しあるに依つて、是非なく御末腹の御舍弟毘沙門殿を遣されけるが、程なく小田原攻の御沙汰告げ來るに依つて、天德寺殿、山上道及御內談ありて、上方勢に組して、道筋海川の難所を繪圖にして遣され、上方より色々御褒美ありて、先陣の案內を仰付けられける。其事隱なく小田原へ聞えければ、是非なく毘沙門殿誅せられ給ふなり。

小田原落城

一、小田原落城以後、上方より御仕置になりて、關八州の大名・小名、剛心を和げ、太平

に諚を守りて、士農工商夫々に道を守り、目出度代となりにける。 由良殿は、三百餘騎の小田原加勢相聞え、罪科遁れ難しとて、桐生へ御つぼみある故、神妙なる有様とて、卯宿へ御取換へ、わづかの住居とならせ給ふ。 足利殿は、佐竹殿御取成を以て、漸く御預り人とならせ給ふ。 澁川殿は、秋本殿の預にならせ給ひ、不思議の浪人とならせ給ふ。 之に依つて、新田・足利・小俣の浪人數を知らず。 或は先祖の知行に、假に住居し、或は士民百姓の縁者を尋ね、山中に取籠り、自然と鍬鎌を習ひ、農業を勤め、つらき命をつなぎ、時の至るを待ち居たり。新田家の譜に、始祖鎭守將軍義重卿十九世の嫡流、由良源朝臣貞繁始め、其外武功之面々、忝も御當家の召に應じて見參す。

上州坪弓老談記 巻之下 大尾

上州金山軍記

一、里見隨見勝安、越州へ退出なされければ、謙信公も、頼もしき御挨拶遊ばさるゝ故、月日を送り御座ありけり。越後にても數度の高名、比類なき事なり。桐生又二郎殿御敗亡の由を、聞き及び給ひて、某退出の以後は、猶以て萬端宜しからずと見えたり。兼ての事とは申し乍ら、殘多き御代の榮えやうかな。上總入道に御恩賞なされ、某共半俗の名の親、彼是思へば、昔こそ懷しき事共やとて、袖に淚を添へさせ給ひけり。入道殿御切腹の儀は、津府子・山越が讒言を以ての事なり。桐生殿を恨み申すにてもなし。如何にもして一先づ桐生へ參着して、讒言の者共を、思の儘に討亡し、桐生殿の敵なれば、城代に置きたる藤生紀伊守に矢一筋射て、本望達したき事かなと、朝夕思ひ給ひける。さるつれ〴〵に、緣者の吉身(よしみ)ある方軍弟子に、右の思案の儀を、御咄ありければ、何れも賴もしき方々と、大方一味同心の衆、百人計出來たりけれ

里見勝安高津戶に城を構ふ

ば、兄弟衆喜悦して、天正五年九月初より催し、上州桐生に參着して、隣邊の樣子を聞合せ給ふに、黑川・澤入の面々は、近年の騷動にも、何方の加勢にも出でず、下八一族家名慥にあり。是は古入道に吉身(よしみ)あり、懇他事なき者共なれば、今度の儀、運に賴み見んとて、黑川・神梅へ御越なされ、道伴古伯入道に、初中後を御物語ありければ、兩人承りて、讒言の敵を討ちたき望至極なり。桐生を御攻めなされたく望まば、少勢にて存も寄らず、新田・足利兩家の鋒先は、今出づる日の如くにて、隣邊隨はずといふ事なし。代々の懇の中絕も宜しからず。甲山を御住宅に催し申すべしとありければ、御兄弟悅喜して、有增(あらまし)普請なされけるが、思召替へて、高津戶へ引きて、要害を普請なされけり。是は桐生・山中堺地、領主知らざる處なれば、攻むる方もなし。先年上總入道、皿久保亂の時、此山に陣を張りて、桐生・赤萩の用を構へられたる處なり。

西南は、渡瀨川引廻し、口北は高山岩角立ち大木生へ、重ねて入間の住家になるべしとは思はず。東は平地反地にて、五町計の廣み、所々に堀切・落穴を拵へて、味方働くべき便よし。三方は、鳥も飛ぶべき處もなし。城内は、三段四段に掘切り土

手をつき、幷其上に、七尺計の作木を引並べ、如何なる大力妙武士なりとも、忍び入るべき處もあるまじとて、隨見・勝安悅び給ひ、入道存生の內、此の如くの普請を催すならば、斜ならず思召もあるべきに、近年の亂に、我も人も、思ふ事も皆僞の世となり行けば、我等計の處に思はれて取合はず。濕るゝ袖を干すべき隙もなかりしとて、越後より同道の面々を、招き寄せ集めて、酒宴をしてぞ遊ばれける。隨見仰せられけるは、松島古伯入道は、今度連勢する事もあるべし。上總入道とは、取分入魂なり。其上口孫彌四郎は、半俗の親なりと仰せられければ、勝安承りて、尤には候へども、安久澤能登守をも、一所に賴みたき事にて候。さもなくんば、古伯も、慮を用ふる事もあるべしと申しければ、此儀然るべく思召し、則ち安久澤と松島へ、意趣內談ありければ、安久澤申しけるは、古例仔細ありて、兩人下人一族は、日本國中亂劇に及びて相戰ふとも、加勢に出でず、軍役も勤めず。山中を堅固に存ずる計なり。全く粗略仕るべき志もなしと、申しければ、力なくぞ歸りけり。是は扨置き、小倉・砂永高津戶の仔細を、紀伊守方へ告げ知らせければ、大に驚き、石原・右見・砂永八藏・薗田次郎

を召寄せ、事の樣を尋ねられけり。三人申達しければ、高津戸要見山迄、松島が領內と承り候。山中の者共を賴みて、隨見・勝安住宅を、賴み申すと聞及ぶなり。吉身緣者の侍を、引連れ來り申す事は、皆牢人者共なり。新田・足利の鋒先を承及び、御所望にて參りたるも知らず。一節には上總入道の生害を、殘念に存じ、桐生又次郎殿敗散を聞及び、心許なく思はれ、參着致さるゝ處に、取沙汰有之と、申し談じければ、紀伊守聞き給ひて、さり乍ら隣邊の事なれば、萬端油斷を致さるまじとぞ仰せられける。扨隨見は、御下人の正木大藏を近付け、仰せられけるは、近邊の淸水の便を拵へ、俵物は、麥・米・大豆・小豆、何れも用意を油斷なく心得申すべき旨、仰付けらるゝ故、近邊民の藏を、數千俵買調へて、高津戸の城內へ込められける。如何にもして石原兄弟・津府子山・越を討亡し、其後桐生へ亂れ入るべしと思召し、折々佐野・足利へ、御忍に御越ありて、討つべき便を待ち給ひける。里見兄弟心の內、憐れまぬ人はなかりけり。
一、新田國繁公は、此由を聞召し給て、尤も逆心者の末類にてもなし、惡むべきにはあらざれども、目近き某方へ、一通の通路もせず、後日山中を語らひて、旗を上ぐべき

願もやあるらん。諸牢人を抱へ置くは、心奥心許なき有様なり。横瀬勘九郎殿に御內談ありければ、横瀬殿承りて、仰の如く僞なき取沙汰あり。さり乍ら里見兄弟が分にて、何程の事や仕出し申すべき。定めて石原兄弟を恨み、津府子・山越に意趣を込めて、時節を任すと聞えたり。領分へ狼藉などさへ仕らずば、其分なり。抑へ取るべきは、何時なりとも、手間も取り申すまじく候と、申上げられければ、新田殿、奥頼もしく思召し御笑あり、横瀬殿と、連節の謠を出し給ひける。去程に隨見思召すは、山越出羽守は、討死するなり。如何にもして、津府子刑部めを討ちたしとて、佐野へ御越なされ、色々に謀りて見給へども、討つべき處もなし。さり乍ら久蘭原の遠藤織部とは、吉身ある中にて、是を賴み見んと思召し參られければ、對面して、越方の物語などして、四五日御逗留なされ、內々意趣を咄し給へば、織部承りて、刑部も此頃病氣に罷なり、人前も罷成るまじと風聞仕候。罪作りに同じくは、御延引ありて然るべしと申しける。里見殿聞召し、夫必定ならば、討つも詮なし。人の因果は急報なるものやとて、達氣を和げ給ひける。夫より御歸りなされ、石原石見めを打つ

て、入道の孝養に報せんとて、天正六年五月二日に、里見兄弟・正木大藏・大祓長順丸・平山猪之助上下廿三人、石原が住宅へ押寄せ、撫切せんとなされけれども、里見兄弟近隣御座ありて知りて、兼て用心を構へ、朝夕の遠見番をやしたりけん、今立去りたる樣子にて、人一人も之なく落去りければ。力なく歸らせ給ひける。其以後は、猶以て用心嚴しく、石見親子は、足利・栗崎といふ所へ居て、用明の住宅をば、下人一族計十四五人差置くなり。新田殿、此由を聞召し、藤生紀伊守を召して仰せられけるは、里見兄弟此頃色々親の敵、又二郎敵、大祓左京子共等の敵、討たんと望み、石原が住家へ押込み、狼藉したると聞及ぶなり。尤も侍の志は、さもありたき所なれども、石原兄弟は、某幕下になりて、地侍幷び勤むる事なり。目前にて討たせて宜しからず。如何せんと仰せられければ、紀伊守承りて、仰の如く必定なり。兎角追散らし、立處之なきやう仕らずば、何迄も狼藉絶ゆる事あるまじ。さり乍ら越後牢人、上下百五十人と打聞き候へども、少勢にては叶ふべからずと、申上げたり。新田殿も、彌後日を氣遣に思召され、さあれば桐生・新田勢を催し、用明・古出城に集め置き、攻むべき

新田國繁里見勝安を攻む

體に催すならば、大方逃亂るゝ事もあるべし。某方へ、一通の見舞通路も達すべき處に、延引の心意程心許なし。又此方へ逆心もなき者共を、急に攻むべき道理もなし。又里見の先祖は、代々新田家に吉身深し。上綱入道は、近年仔細ありて、通路をせざりけり。鴻野臺根津尾張守攻の時、新田勢に交はらず、佐竹義信方に寄り居て、日和を見合せありければ、佐竹勢も是を見て、幕下に內通の勢にてもなし。新田勢と組すべき侍なり。心兒して、横鑓・裏切を仕出す事も知らず、油斷をするなと、觸れたりければ、首尾を失ひて、其以後は、新田方へも出入なし。漸く桐生大炊之助殿を賴みてありけるが、過ぎぬる年亡びしなり。其子供なれば、通せざるも斷あり。夫とても近隣邊土の狼藉者を、宥兒もなるまじ。兎角押寄せて追散らすべし。異儀に及ばゝ撫切せよと、仰せられければ、紀伊守承りて、則ち人勢を揃へ、高津戸の要害へ押寄す。先陣は關口尾張守・荒井主水・茂木右馬丞・荒卷式部・伊藤帶刀・大谷勘解由左衞門・福田權三郎・森下長左衞門・風間將監・佐下橋右近・岩谷喜太郎・岩下織部・飯塚又五郎・常見隱岐・籾山太郎右衞門・件田久六郎・箱島牛之助・江原與右衞門・下山監物・

鹿貫將監・片山十藏・宮寺左近・中里若狹・彥部加賀・齋藤丹後・伊藤右京・福島出雲・伏島勘解由・野村彥八郎・津久井左京・下山縫殿之助・內田兵庫・峯岸志摩・稻垣源二郎・垣上甚四郎・堀越內藏・木村縫殿之助・大澤午之助・薗田彥六・砂永八藏、是等は紀伊守旗に付きて、我先にと乘出す。新田勢は後陣にて、金谷因幡守を大將として、丸橋越前・金井田傳吉郎・引田善八郎・岡田石見・木村伊豆守・齋藤織之助・戶島源三郎・渥美又兵衛・同源五左衛門・安藤二郎助・松井半之丞・寺島小兵衛・島田九五郎・永島外記・板橋戶一郎・岡新三郎・堀越茂左衛門・高山平六・坂庭與一郎・生方隼人・藤沼彈右衛門・中根內藏之助・小林虎之助・川上民部・小泉左京・芝山大介・薗田彥七郎・井上出羽守・篠瀨藤九郎・小田音右衛門・瀧野良之助・宮路一十郎・鈴木新之丞・荒山兵部・大塚半藏・木戶彌二郎・久永圖書、以上宗徒の人々卅六騎、上下三百五十八人、淺間原を行過ぎて、切原村の下に陣を備へ、桐生勢と同時に、攻寄すべしと待ち居たり。大方紀伊守勢も、揃つて用明の出城に集る。高津戶にては是を見て、隨見・勝安・越勢悅びて、今迄戰ふべき敵もなくて、口陣退屈に及びけるが、何樣新田・桐生も、兵を勝つて寄せ來る由、沙汰是

あるこそ、望む所の働なるべし。必ず懸るとも引くとも、身方を捨つる事あるまじ。敵は大勢味方は小勢、若し敵に取込めらるれば、故なき死をぞすべし。兎にも角にも、同じ枕に討死して、新田・桐生の者共、目をさまし申さんとて勇みけり。天正六年九月中旬の事なり。新田・桐生の大勢、野も山も前後も軍勢取廻し、籠の内の鳥の如くにて、越後勢も口を消し、國元へ、形見の書狀を認めて送る人もあり。去程に桐生勢、新田兵も先をせられては、末代迄の恥辱なるべしとて、大谷勘解由左衞門・常見隱岐・荒巻式部、手勢に內談を含めて、拔駈に乘出し、北方の攻口より押寄せ、鯨波を揚げたり。城中には聲も合せず、態と靜まり返りて、矢の一筋も射出さず居たりけり。新田の人勢是を聞き、扨こそ桐生勢共、拔駈に押寄せたるとて、我先にと押寄せ、渡良瀨川を隔てゝ鯨波を揚げ、遠矢を射懸くる者もあり。金谷因幡守旋を取り、川を渡せと、下知なしけれども、俄の事なり、左右前後に亂れ合ひて、過半川岸に臨みて迷ひけり。其隙に桐生勢押寄せ、落穴をうめ、逆茂木を引退けて、亂れ入らんとしたりければ、堀中より勝安進み出で、堤の上に登りて、大聲揚げて名乘りけるは、斯樣

に申す者は、上總入道が二男平四郎勝安。寄せ來る方々は、如何なる方より、何なる意趣有之、是程の大勢を催し給ふぞや。我々兄弟は、近年越州を迷ひの住家に仕候へ共、當國は出生のなる所故、懐しく存じ、此處に住宅を催し、先年の友輩を賴み、末代子孫迄、露命を繼ぐ地と奉存處に、思ひの外難節の取沙汰を、惡しくなさるゝ故、新田・足利殿も、誠に思召し、御腹立故なるべし。夫とても、今は恨むべき道理もなし。某兄弟恨むべき方は、定めて心ある方には、御存知候はん。今度討死仕り、彼者共を安樂に仕るべき事、無念至極なり。同じくは、今度は速に其陣を引きて給はれかしと、申しければ、新田・桐生勢共是を聞きて、至極する族もあり、是程に催し、是非の合戰をせんといふ者もあり。其隙に、新田・足利の物頭共、我先にと川を越えて、無二無三に攻め寄する。新田・桐生の勢共、逸り過ぎて、伴久六・岩下織部・永島外記・板橋戸一郎、以上宗徒の侍十三人、目前に討たれけれれば、藤生紀伊守・金谷因幡守も、以の外に驚き、耗取直し、用明の堀切迄人數を引きて、暫く息を休めけり。其外下々人・歩弓人、落穴・逆茂木に打たれて、死者數も知らず。少勢を侮り、只一揉にせんと思ふ

勝安用明の城を夜討にす

故に、大勢を討たれぬると、口々に申しけり。其日は暮れて、皆明日の勝負をせんと野陣を構へ、大方用明城に取入りて居たりけり。

一、去程に隨見・勝安、合戰に討勝ちて、御悅斜ならず。さり乍ら、未だ敵も遠く引きもせず、大方用明に集り、夜明を待ちて、明日は早天より押寄せ、今日の恥辱を雪がんと思ふべし。某兄弟、何れも連勢衆も、明日は討死は必定なり。新田・足利・桐生の大勢を引請けて、勝つべしとは、初より思はず。如何にもして、藤生紀伊守・金谷因幡守を討取り、大炊之助殿の孝養に報じたき計なりと、仰せられければ、越後勢承りて、仰さもある事なれ。遁れざる身を以て、死すべき處を知らざるに似たり。今夜此方より、用明へ押寄せ、無二無三の勝負をせんと、申しければ、隨見聞き給ひ、內々我等も、夫を願ひ申すなり。各其志あれば、悅入り候とて、思ひ〳〵に裝束して、其夜の八つ時分に押寄せ、百人計の人數を三手に分けて、三方より鯨波を揚げければ、新田・桐生の勢共驚き、晝の合戰に草臥れて臥す所を、〔脫字アルカ〕知らざる者多かりければ、太刀・長刀・鑓を奪ひ合ひて、亂杙・逆茂木に行當りて、倒るゝ者もあり。敵働き來

るを、味方の者も思ひて、馴々しく近付きて、討たるゝ者多かりけり。藤生紀伊守是を見て、敵はかすか四五十迄もあるまじ。面を見知らざる者をば、縦ひ味方なりとも討つべし。松明出せとて、大音になりて下知致されければ、大方味方も本性になりて、新田・桐生の勢も、一集りに寄り居て、敵味方の分を見合ひたり。越後勢も、思ひの儘働きて、引取らんとしたりけるを、藤生紀伊守是を見て、一人も漏らすなと追懸け、散々に戰ひけり。越後勢も、其時廿三人、枕を並べて討たれける。新田にては、引田彌八郎・渥美又兵衛・島田久五郎・藤沼源右衛門抔討死す。桐生勢には、木村縫殿之助・大澤午之助・遠田彦六郎・稲垣源二郎、以上桐生・新田兵、上下八十六人死したりけり。手鑓疵を負ひたるは、數知らず。隨見勝安も、漸く高津戸へ引入りて、味方の討死手負を改むるなり。勝安も、深手を負ひければ、養生の手立も叶はず死しけり。平三郎・隨見・越後勢力を落し、渡舟に、棹を捨てたる如くにて、泣々口なりけり。斯くて隨見も力なく、今迄は兄弟ある内は、如何なる鬼神なりとも、恐るべき心もなかりけるが、勝安死する上は、國土の樂もなし。一時も急ぎて死を極めて、勝

勝安討死

安と同道に行かなんとて、正木大藏を以て、藤生紀伊守方へ申達しけるは、某兄弟、生國の樂を以て、住宅を構へ候處に、如何なる讒者ありてか、人勢を向け給ふ。夫に依つて、筋なき戰を仕候。越後連勢の者共、皆牢人執行武士共なり。自然の人ありて取成もあれば、新田・足利の御下人にもなりたき望に、速なる御尋にも預かるべきかと、願ひ侍り候處に、此の如き儀に及べり。此上は、某兄弟の首を送り申すべし。越後勢の儀、本國へ返し給ふべし。委細は、某兄弟に赦免あるべしと、申遣しければ、藤生紀伊守此由を聞き、趣の段神妙なる事に候。其地敗散に及ばゝ、切腹に及ぶべからず。越後連勢の衆も、此方より武士の法意頼もしき志の方々なり。速に其地退失候はん事、尤なり。此方より、本意たるやうもなし。御兄弟の儀も、節を以て、國繁・顯長方へ、然るべき取成を申宣ぶべしと返事せらる。大藏悅びて歸られ、具に申宣べたりければ、越後勢・隨見も、悅喜致され、さり乍ら我等事、今死を遁れば、末代里見の家の恥たるべしとて、速に切腹致され、兄弟の道をぞ送りける。紀伊守是を見て、是程には及ぶべからず。御いとしき有樣かなと、則ち新田殿へ實檢なし奉りけ

れば、新田殿も御覧ありて、扨々不便なる事や。彼等は里見の末孫といひ乍ら、知勇の道を失はず、子孫の者もあらば、御取立なされたしと仰せられ、御涙を浮めさせ給ひけり。則ち御首をば、大藏に下されければ、懇に弔ひ奉りけり。扨越後勢も力を落し、涙諸共に、本國に歸りけり。

新田、安久澤松島等を攻む

一、上州勢、田郡・神梅の寄居に、安久澤能登守・松島式部、代々武士の名家を失はず、其谷の支配全うして、桐生大炊之助・子息又治郎殿迄、幕下になりてありけるが、又次郎殿、桐生敗散の以後は、緣者の取成を得て、小田原へ、年中に一二度宛相勤むる計なり。新田殿是を聞及び給ひて、去る時分、小金井・藤生仰せられけるは、桐生領内安久澤・松島が事は如何にと御尋あり。兩人承りて、委細は存せず、小田原へ通路を賴み申すと、取沙汰仕候と申上げければ、新田殿聞召して、扨は桐生落去、里見兄弟生害の事を、情なく思ひ目を懸けき。某が幕下を願はず、無禮至極なる者共なり。夫れ必定ならば、桐生の地侍・新田の歩弓人を交へて遣し、追散らし候べし。新田の物頭・馬上の軍兵は、一人も出すべからず。譏の者事なり。其上山中案内を、新田の

軍勢は知るまじ。能々御聞届け候へと、仰せられければ、兩人承りて、事の樣子を聞くに、彌々小田へ勤むる事は必定なり。時日を移さず押寄すべしとて、吉澤・廣澤・境野・菱公方・荒戶・本宿・小倉仁田山・高津戶の地下八七百五十人。名侍には、大谷・岩水・森下・風間・佐下橋・荒井・茂木・戶山・荒卷・伊藤・小林・薗田・石原・砂永・粼山・福田・垣上・常見・大澤・箱島・永井・稻垣・江原・加藤・栗原・鹿貫・片山・野田・下山・內田・高橋、是等は地下人引連れ、桐生峠を越えて、鹽原神明の森に集まる。新田の軍勢は、金谷因幡守を大將として、吉澤・廣澤の鄕人。宗徒の人々には、薗田・岡田・萩原・關口・中里・大澤・津久井・下山・伏島・野口・岩下・彥部・小泉・布目・梶坂・橋・寺田・川上・矢野・嶺岸・島田・松下、彼是步弓八、殘らず因幡守旌に付きて、尼向坂峠を越えて、梨の木坂の上下に集りて、桐生勢と內談して、押寄せんとて、伊藤右京、木村縫殿之助、鹽原の內談に遣しけり。日も暮方の事なりければ、步弓八三十八計連れ、よう瀨山の岸を通り、穴原へ出で、何樣敵味方の見合をもせばやと思ひ、押行く處を、高草木・江戶の者迄、松島式部方內談の通り、右の人數を見て、すはや敵は押寄するなり。大勢ならば逃散らすべし、

小勢ならば討止めて、軍神に奉らんと、事の次を見るに、上下五十人計ならば、此方より切つて懸り、夜中迄戰はゞ、無案內なるべし。押詰め〳〵戰ふならば、一人も逃さず討取るべしとて、上下四五十人、手者共ありければ、左右前後は、味身方の事なり、忍に觸れよとて、先立つて觸渡しければ、谷々澤々より、我先にと出合ひ、前後三百人計集りて、左京・縫殿之助、火水に攻寄する。兩人是を見て、遁るべき樣なければ、下人一族・歩弓人の者を討たす事、不便千萬に思へども、是こそ死すべき時節なれと思ひ、面も振らず切つて懸り、東西南北へ下知して戰ひけれども、敵は大勢の事なり、夜の事なれば、無案內故、行方を失ひ、働くべき便もなければ、一人も殘らず討たれて死しけり。新田・桐生の者共、是をば夢にも知らず、夜明けなば、早朝より押寄せんと待てども、右京縫殿之助も來らず、其隙に、討たるゝ由を告げ來りければ、拐山中の者共は、早備を出し、待居たりと聞えたり。さらば桐生勢に相談迄も及ばず、押寄よとて騷ぎけり。金谷因幡守以下驚き、粗忽に攻寄せて、如何なる大事か出來なんと思ひ、藤生紀伊守と同心に攻入り、身方損せざる處にとて、其日は內談し

て、日を暮したりけり。是は扨置き、山中の物頭共、神梅の寄居に集りて、内談詮議仕りけるは、只一向に神梅寄居を、新田方へ相渡し、後日に和を願ひて然るべしと、いふ者多かりけり。其時鄉戸・草木の者共申しけるは、我等共思案を存ずるに、新田殿も、山中の古例、松島・安久澤の家名主從不入の事をば知らず、時の讒言に任せて、勢を向け給ふと覺えたり。叶はぬ迄も、今度は和を願ひ給へかし。昨夕狼藉、新田勢も、無念を思はぬ事はあるまじ。さあれば此度は、無二無三の戰あるべし。何と合戰を勵むとも、身方の勝利あるべからず。山中の一族は、根葉を切つて、滅亡は必定なりといひければ、道伴古伯入道是を聞きて申されけるは、鳥海の彌三郎・栗谷川次郎より數代の家名、亡ぶべき時節なりと見えたり。驚くべき事はなけれども、家人一族の亡ぶべき事、無情叶ふべしとは思はねども、紀伊守方へ通じ見よとて、則ち松島彌太郎に、犬目・平澤・多澤・和久丸を相添へて、高津戸へ遣しければ、紀伊守・因幡守も對面して、事の樣を尋ねられける。彌太郎若輩者なれば、犬目・平澤罷出で申しけるは、松島・安久澤家と申すは、天儀五年の春、阿部の貞任、九州へ流刑の時、上下

七百三十人、奥州より御供仕り、中にも栗谷川次郎・鳥海の彌三郎一家の者共、數多御供仕りたり。義家公仰せられけるは、箱根山を越えては、大勢叶ふべからず。御供百人には過ぐべからずとて、皆殘し捨てられて、涙を流し御別れ申すなり。其時貞任仰せられけるは、行先の國は、遠國の究と聞及ぶなり。奥州へ中次の文便の爲に、此邊に住家をせよと仰せられて、松島・安久澤兩人、下人一族百人計、此所に殘し置かれ、殘る者共は、皆奥州へ歸りけり。義家公の御朱判具に御認め、末代此谷合澤內、殘らず住宅に拜領して、數代全くありけるを、いかなる者が、讒言申上げたりけん、斯樣に新田勢を向け給ふ事、思の外に存候。新田・足利御取成賴入候と、申達したりければ、紀伊守此由を聞きて、仰の段、尤にはありけれども、桐生又次郎代迄は、幕下に組して、其以後は、目前近き新田の幕下も願はず、萬端近年不屆の儀は、眼前に數多し。讒言有之とも、聞かずといひければ、犬目・平澤承りて、向後は御支配を請けて、幕下に罷成勤め申すべし。仰の趣、山中の油斷、此度赦免に預り、末代繁昌の爲め、一族の內より、新田殿へ、證人を參らせ申すべしといひければ、紀伊守も

初中後を聞きて、尤も此度赦免なくば、山中の一家滅亡は必定なり。思へば情なき次第なりとて、新田へ此旨申遣しければ、新田殿聞召して、近年の不屆、免じ難き事なれども、譏者の事なれば、其志に任せよと、仰遣されければ、紀伊守悦びて、山中へ意趣を通じたりければ、大に悦びて、喜意の思をなしてんげり。小中・草木の者共、此和談を知らず、爰彼にて軍初り、鄉戸・鹽原・花和・宍原の者共は、殘らず撫切に合ひたると聞きて、皿久保・五軍田へ走集りて、事の樣を聞くに、未だ彌四郎・犬目・平澤・田澤・和久丸も、高津戸より歸らず、心許なしとて、人數三百人計、平押に出しけるを、新田勢、梨木坂の上の原より、是を見て、敵は大勢備陣を催し、押寄すと見えたり。攻め來る新田勢共が歸りて、山中の勢に寄攻に合ひたる抔と、隣邊取沙汰も恥しき事なり。川を越えて戰ふべしとて、我先に乘出し、上下五百六十人、一度に川を越えて、よろ瀨の西北に群つて、火を出し戰ひけり。合戰最中に、高津戸の和談告げ來れども、其陣を引く者もあり、又皿久保・五軍田迄追懸け、追討に戰ふもあり、宍原・奈良坂の方へ逃亂るゝ勢もあり。金谷因幡守是を見て、早鐘を打つて人勢集め、新田より、此

度御赦免なり、皆々速に歸陣なさるべしとて、新田・桐生勢共、引歸しけり。故なき事に、俄に起りて、新田・桐生者、百八十人死したり。奈良坂麓にて、松島彌四郎も討死したりければ、犬目・平澤も深手を負ひて、三日過ぎて死したりけり。阿久澤道伴と新田殿と、和談をば極めたりけれども、又小田原よりの首尾を、心許なくや思ひけん。此度新田勢討死の首を揃へて、小田原へ註進を入爲とて、持參したりければ、氏直公御對面なされ、物語を聞召し、御悦喜遊ばされ、御褒美下されて歸し給ふなり。氏直公仰せられけるは、山中の奴原、新田・足利へ通路せざるは、隣邊と無禮なる事なり。此度の和談も、新田・足利も、我々が前、遠慮ある故なるべし。さり乍ら、由良・長尾も、早速註進に參らざるは、後日の罪科なるべしと仰せられけり。扨阿久澤能登・松島式部、小中・高草木の者共を引連れ、新田・足利へ參上して、初中後の仔細を詫びて、金谷因幡守・小金井四郎右衛門取成して、向後幕下の勢約して歸りけり。

一、佐野宗綱公は、極月廿九日に、富源太を召されて仰せけるは、來る元朝より、藤本の人數計にて、足利へ押寄せて、上下無意の所を討つべし。本道寺岡は道法遠し。其

上宗綱出馬と聞かば、館林・新田の勢共、即時に集り後詰すべし。此度は名草へ出て、藤澤寄居を蹈散らし、須花の小曾根筑前が住家を攻めて、樣子能くば、足利本城へ攻入る事もあるべし。兼て心得て、萬一新田・館林の大勢集り、佐野引兼ぬると見候はゞ、物頭・歩弓人・鄕人を進めて働き出づべし。先づ旗本計にて出馬せんと、仰せられける。源太も物語を承りて、御返答も申上げず候處、又仰せられけるは、佐野・足利度々戰ひけれども、一度も後れを取る事なし。先年の若林・猿田・川端の合戰の時、野田・小曾根を越えて押詰め、館林の城邊を狼藉して、歸陣したり。新田・足利の後詰、大勢催し來る故、佐野方引退きたり。其以後は、兎高の城の戰も、佐野勢負けず、足口・西川邊の初留合戰の時も、鄕人・歩弓共に、數々討取られ、佐野方は、須花・糀崎を賴み置きたる小野兵部兄弟を、討たれたる計なり。其遺恨故か、近年兎高領名草境の馬草場を荒し、麻の畑を蹈散らし、立毛をふり、色々の狼藉限なし。山上道及・天德寺などが、思ふ所も恥しき事なりと、仰せられける處へ、大祓隼人參上仕りたり。隼人にも、右の旨仰聞されければ、隼人承りて、尤も仰聞けらるゝ事共は、具に心

佐野宗綱足利顯長を攻む

得致し申すなり。さり乍ら、來る元朝の御出馬は、御延引あるべし。小の月の晦日正月朔日は、合戰の日取に、項羽も大きに嫌ひ申すなり。三月初迄は、御延引然るべしと、申上げけれども、御承引之なく、大年〔十二年カ〕の夜の丑の刻に相觸れて、御出馬催しけり。

一、足利にて顯長公、諸物頭を召して仰せられけるは、此頃の取沙汰には、佐野宗綱、近年の遺恨により、人數を出し、無二無三に働を願ひて、近日奈草より寄せんと風聞あり。取分須花城主筑前が小勢心許なし。歩弓を加へ、鄉人共迄も油斷なき樣に、相守るべしと仰せられ、自然佐野勢大勢寄せ來らば、新田・館林・小俣の加勢を入れて、前後左右に草武者を置きて、此度は一人も逃さず討留めて、佐野を、足利より、支配の地となすべしと、仰渡されける間、兼て用心嚴しく居たりけり。

一、天正十一年極月廿九日の夜丑刻に、佐野勢が發足して、名草・藤坂の寄居へ押寄せ、正月朔日の早旦より、狼藉撫切して、彥間筑前が居城へ寄すべしと仰せられ、諸物頭に向つて觸れけれども、此處彼處の山を隔てゝ居たりければ、思召の通り、無調

儀にして、人數集り兼ねければ、宗綱公腹立して、彦間の方へ御馬引廻して、馬廻計にても、須花へ乘入れて、討戰ふべしとて、馬に鞭をすゝめ給へば、其時赤見・大祓・富源太を始め、申上げけるは、此度は先づ佐野へ御歸陣なさるべし。元朝の合戰なれば、歩弓・物頭も、心勇み申さゞるやうに相見ゆるなり。其上足利遠見番所の早鐘の音烈しく聞え候。定めて後詰も來るまじ。朝霧深くして、前後左右も知らずと、申しければ、宗綱聞召し、尤さはあれども、運は天にありと思ふべしとて、馬に鞭を頻に當て給へば、平地・坂地を嫌はず駈出し、味方一人も連れず、藤坂山の北口乘延べ給へば、如何なる方より來りけん、鐵炮の流れ玉來りて、内甲の鈕際を通りければ、馬より落ちて、暫く息絶えさせ給ひける。御供一人もなければ、是非なく田畔に御腰を懸けてぞ御座ありける。是は扨置き、足利にては、彦間・須花・藤澤の者共は、殘らず撫切にせられたると、告げ來りければ、顯長大に驚き給ひて、早鐘を打たせて、近邊の勢を集めて、後詰に遣され、御出馬あるべしとて、人數手分を仰せられ、館林・新田・小俣へも、急使して騷ぎける。芳野加右衞門・柳田隼人・山口播磨・杉本縫殿之助を

始め、驅付け次第に遣されける。荒井圖書・大沼田淡路・市川右衞門・久米伊賀守・岡田・關口・小菅・湯澤を先として、以上百五十三騎、平押に押出し、佐野勢歸陣せば、本城迄も追討にせよと下知して、乘出しける。新田・小俣勢の加勢、取る物も取敢ず、我先にと乘出し、松田・栗谷を越えて、藤坂山の峯迄押上りければ、藤坂・須花の寄居は落去。彥間城は、堅固に有之と告げ來る。夫迄は、宗綱討死も知れざるなり。

一、宗綱公續く勢もなく、心地彌惡しくなりて、御腹を切らんと思召す處へ、若侍一人走り來り、何樣能き鎧甲の武者なり。佐野勢の內にも、大將分の仁と見申すなり。速に鎧甲を御渡しあるべしといひければ、宗綱聞召し、如何にも亂防の望にあらば、安き事なり。頸共に取らすべし。さり乍ら、名字を聞きて、最期せんと仰せられければ、七右衞門承り、御命は助け申すべしといひければ、宗綱聞召し、今此有樣に及びて、やさしき志を申す者かなと仰せられ、兎や角といふ處へ、大勢寄せ來り、亂妨狼藉せんと、犇く者多かりければ、人手にかけ申さんより、某御首を申請けんと、押竝べて組伏せ、御首を取つて立去りける。寄集勢共之を見て、大方是首は、佐野宗綱公と

怪しみけり。やゝありて口々申しけるは、宗綱は、藤坂山の北細田畔にて、討死ならせ給ふと、いひ傳へければ、赤見・大祓・富源太驚きて、前後左右へ手分をし、尋ね奉りけれども、其行方も知れず。討死は必定なりとて、心を亂し弓矢を捨て、東西くれて居たりけり。其時富源太申しけるは、此の如き上は、彥間本城に、御首御座あるべしと、無二無三に亂れ入りて、御首なりとも返さずば、萬一討死に及ぶとも苦しからず。兼て二世三世迄、御供仕るべしと、思ひ定めし事なれば、一時も延引あるまじとて、乘出さんとしたりければ、赤見內藏助是を見て、先づ〳〵思ひ留り候べし。縱ひ大將討死必定たりとも、各我等此度討死は、入らざる事なり。敵悅の上の大悅なるべし。山上道及・天德寺など、有合ふ事ならば、其軍法もあるべし。當分は留守なり。斯樣に大利を失ひたる時は、心を靜めて、敵に後日を、心許なく思はせぬる謀こそ、軍の第一なれ。大將は兩人迄あり。各某などある上は、何と足利繁昌に及ぶとも、時節を以て、顯長首をも申請くべし。先づ〳〵此度は、速に歸陣致すべしといひければ、源太も至極して、剛心を和げ、淚と共に、歸陣あるこそ無念なれ。

一、正月五日には、足利御城に於て、御一家御下人を集め、御悦の例式あり。各召出し、御盃を下され、面々へ仰聞けられけるは、今度計にてもなし、度々佐野・足利の取合に、民百姓・諸物頭・草伏も油斷なく、宗綱計取る事。悦喜斜ならず。各武力眞實ある故なりと、仰せられければ、皆々承りて、諸物頭申上げけるは、當家長久の本なり。佐野・桐生は、思召通りに罷成、此上は、上州・野州・武藏・常州迄も、御手に入り申すべしと、申上げければ、顯長公御機嫌斜ならず、御盃は先づ小曾根筑前に下され、次に豐島七右衞門に下されて、御言懸けらる。七右衞門尉目出たしと仰せられけり。扨夫より面々に、下され候處に、江戶豐後といふ侍、御盃頂戴仕り、涙をはら〳〵と流しければ、座中の上下、不審に思ひける。長尾殿御機嫌變り、强敵を討取り、共に悦喜すべき處に、愁へたる有樣は、佐野方に緣者ある故かと、仰せられければ、豐後承りて、御屋形樣の仰とも覺え申さず。縱ひ親兄弟立別れて、合戰に及ぶとも、平に恥ぢて、他人より猶義理强く討死するも、昔より其例多し。某野心を存せば、數年一命を輕んじ、忠孝を盡し申すべくや。今又御前へ罷出づるには及ばず。能き御言葉の

次手なれば、其思案を申上ぐべし。宗綱を討取り給ふ上は、先づ急ぎて、小田原へ御註進然るべし。今日迄御延引御油斷なり。近國大名多けれども、肩を並ぶるはなし。氏繩公より今氏直迄、五代繁昌なされ、御一家御譜代廣し。新田・足利・佐野・桐生をも、如何にもして御下人衆に、進められたき事もあるべし。さり乍ら、新田・足利は、兼て御年禮御入魂にて、互に前後も論せず、御座ありと見えたり。佐野・桐生は、新田・足利へ討取り給へば、御兄弟討なり。何としても小田原は、雙なき大名なれば、時々の御勤は遊ばされ、然るべき樣に存候。將又彥間・藤坂の寄居抔も、加勢增して、御用心あるべき儀も仰付けられず、佐野方の者共、取分此度は、無念に志して、透間を知らば押寄せ、無二無三をせんと思ふべし。甲の緒をしめたき事と、申上げければ、國繁公・顯長公聞召し、其方思ふ處、一つも除くべき事なし。神妙に申したりとて、御機嫌和ぎ給ひけり。さり乍ら、小田原へ註進の間隙なし。又寄せ來る敵は、討たずして置くべきかと、仰せられければ、豐後又申上ぐるは、敵體を存ずる者をば、御退治は尤なり。斯樣に大利得たる時は、前三後七とて、用心に定りあり。今度宗綱

討死も、士卒の働にて、御下人御一族、一身同心にして控ふべきならば、縱ひ運命盡きたりとも、やみ〳〵とは御座なき事なり。天德寺・山上道及抔は、今度は留守なり。其上元朝の日取故、天罰請けさせ給ふと見えたり。朝葉兄弟・小曾根筑前・荒井圖書、其外の人々、某申上ぐる義理に當らずと思召すや。御心底心許なしとて、大眼開きて申しけり。座中の上下、一言の返答もなかりけり。

一、由良國繁公、御死去の刻、御一家子供衆へ、御遺言數箇條の外に、仰聞かされけるは、昔義重公よりの居城は、德川なり。平城堀一重屋敷構計り。さり乍ら、三德ありて、城郭妙あり。某今金山の城を取立つる事、本來を背くに似たれども、以前と替り、奈和・伊勢崎・前橋も、皆和談して、味方同前ある故なり。自然三ノ輪・鷹野巣・小幡・沼田、東は佐野・結城・榎本・栃木・三部・小山より寄せ來るとも、左右前後を取卷く人數ありとは覺えず。若し八州を敵に請けば知らず、夫も一重二重漸くと覺ゆる。旗本の勢計にて、目の下に見て、嬲り討にせんも安かるべし。山頂上には池あり。用水・薪・高草に乏しからず。遊山無類の名城なり。楠正成が千破劒の城は、五德相應

の名地なり。其城に一德も違はず。然りと雖も、夫を樂みて、籠城はあるべからず。日本國の勢を引請くとも、東北は渡良瀨、西は利根川、何れも十里內へ、馬足を入れられざる樣に、理を謀りて、大將心奧を研かば、五十年百年戰ふとも、落城はあるまじ。大將の祕する所は、軍の度每に奧儀あり。夫は敎外別傳なり。由良・長尾は、兄弟の事なれば、別儀あるまじ。近邊の大名國主より招くとも、行事は必ず延引あるべし。酒宴遊興の時も同じくあるべからず。出陣の時、同じく集り陣すべからず。隣邊の小名を登し、下人一族を、大節に思はるべし。逆心無忠を発すべからず。民の小科を、取沙汰すべからず。神社佛塔を掠め破却すべからず。其外筋なき弓矢を催すべからずと、仰渡さるゝなり。横瀨殿を始め、御一家御下人集り、淚を流し、御諚意難有と感じ、袖を卷きて泣居たり。

一、足利・長尾殿は、宗綱を討取る事を、小田原へ註進なさるべしとて、則ち御名代として、横瀨勘九郎殿に久米伊賀守を相添へて遣されければ、氏直公御對面なされ、始終を御聞遊ばされ、新田・足利働、今に初まらず、至極せり。下人一族の武勇、感じ入る

處なりとて、御悅喜斜ならず。横瀨殿・伊賀守にも、御褒美下されて歸りけり。同正月廿五日に、小田原より、前橋・新田・足利へ、御名代として、御年禮に、山上五右衞門を遣されける。取分由良・長尾殿へ、御懇の御口上あり。先年由良殿武勇を以て、桐生又次郎を退治、今度長尾殿、宗綱を討取る。兩家の武勇雙なし。此上甲州・信州・野州迄も、御手に入るべし。先づ以て、佐野宗綱が下人一族、居城を堅固に守りて有ㇾ之。如何にもして、彼等を追亂し、佐野・枥木を、支配地に致さるべし。三部・結城・小山迄も、出馬あらば、此方より、後詰の人數を遣すべし。寄居・八形の者共にも、兼て其志を含めて差置くなり。何れも兩家の軍法、心許なく存候はず。又兩家の出馬にて、攻落したる名地たりとも、此方に望なし。初中後の物語内談多し。近年兩家の御苦勞、察入り申すなり。今度山上五右衞門を遣すの儀も、其表御志に任せ、御誘引候へかしと存ずる處なり。同御兩家に奉ㇾ希候と、仰せられければ、何の了簡も論せず、由良殿・長尾殿も、山上五右衞門と伴ひて、小田原へ御越なされける處に、存の外御對面もなし。暫く相催し、山上五右衞門を以て仰出されけるは、何れもの參府、

珍重の至なり。將又兩家の武勇を以て、佐野宗綱を討取り、相働の樣子、飛書を以てなりとも、註進有之べき處に、延引の段、無念に存ずる處なり。淵名合戰の時も、各勝利有之と雖も註進なし。先年北條安房守・伊勢大和守・多米伊豫守を以て、佐野を攻め候砌、成田が勢案內して、行田・岩付・日沼・川越の勢、殘らず加勢に出づる。夫に依つて、佐野前河原迄押詰め、宗綱が二三の備を切崩し、口後備迄色めき立ちて、危く見え候處に、佐野家來細治右衞門・富源太・赤見・竹澤・大祓以下の者共、左右前後に備へたりけれども、旗本と一調儀なりて、旌取直し、火を出し戰ひける故、宗綱備も色を直し、自身に旌を取り、下知して攻戰ふ故、岩付・行田・川越の勢、大畑與十郎・佐川田玄蕃抔を始め、宗徒の者共十八人、討死を遂したり。其時兩家より加勢出づ。近國の事なれば、難所の案內を知らせ候はゞ、討死あるまじ。各除くの段、心中なきの至なり。今度宗綱を討取り、早速首を持參して、註進達すべく候處に、延引の段、總別近年粗略致さるゝの段、いはれなき事共なり。逗留の內、近年無禮、緩々と承るべし。夫に依つて、先づ〳〵御籠居あれとて、兼て勢出合ひ、座敷籠へ入れ奉り、嚴しく番の

者を置きたり。扨夫より山上五右衞門、連地の門外へ罷出で、由良・長尾殿を、御供の中へ申渡しければ、新田・足利兩城主、近年氏直方へ、不屆無禮有ㇾ之に依つて、只今猶御城に召籠め、留め置かれ給ふ間、御供の面々は、先づ〳〵歸らるべしとの御定意なり。仔細の儀は、押付城代一族方へ申遣すべしとの御事、何れも左樣に相心得申さるべしと、申渡しければ、御供の面々、此由を聞き驚き、五右衞門に向つていひけるは、是は存の外なる儀承り候。尤も仔細ありて、御逗留有ㇾ之共、御兩主の內一人は、某共對面を遊ばさるゝ筈なり。委細を得心仕り、罷歸りたく存候。さもなくて本國へ罷歸り、一族城代に、申宣ぶべき道理之なし。又當地へ御供致し、某共の主の行方を知らず、罷歸るべき儀は、侍の道も立たず。兩主の內御一人、面談を仕るべしとて、五右衞門と、同城中へ亂れ入らんとしたりければ、五右衞門此由を聞きて、尤も各思召候處、至極仕候。さり乍ら、兩將の大事に及ぶ程の儀にてはあるまじきに、速に先に御歸ありて、然るべしと申しければ、金井田傳吉郎・細谷甚九郎・堀口彥助・林又十郎・金井新藏を始として、兎角罷歸る儀なり難し。御城の內へ、其方案內を賴み入

候と、目と目を見合せ、大勢の供廻り立騒ぎて、五右衛門を眞中に取廻し、挨拶に依り討留め、せめては城中へ亂れ入り、討死をせんと思ふ氣色に、見えたりければ、兼て五右衛門も軍法の上手、少しも論ぜず、申しけるは、扨々各は、某申す段、少しも用ひざるは、却て不忠の至と存候。兩將の御爲と存じ、某罷出で、事の樣を和談に申宣ぶるなり。當分の血氣に任せて、各城中へ狼藉有之ば、兩主の御爲も宜しからず。定めて仰分けられ、押付御歸城なさるべき處に、後前を論ぜず、面々の義理計達しては、忠孝の道あるまじと、言葉を殘さず申談ずる處へ、城中へ御供仕りたる成重公の御家人外丸源之丞・長澤半十郎・木村助七郎・小泉彌吉郎、顯長公の御家人市川主馬助・宮崎五太夫・江川海老之助・齋藤作左衛門・芳野二郎八・小菅彌太郎・關口馬之助・岩崎彌内を先として、大汗になりて走り來り、右の旨初中後を語りければ、夫を聞きて、供廻りの面々少し靜まり、剛心を和げけり。五右衛門も本城へ歸りけり。則ち氏直公へ、供廻の志を申上げたりければ、聞召され仰せられけるは、さもあるべし。新田・足利家來共は、皆一騎當千の奴原なり。某謀を以て、無事に靜まりたると見えたり。

新田足利の家人金山城に據る

早速新田へ討手遣し、家人一族を追散らしたく思へども、先づ〳〵其志を聞きて見よとて、新田・足利一族方へ、使を以て、事の樣子を謀りけり。扨御供の面々、色々內談詮議ありて、兎に角に先づ〳〵本國へ委細を通ずべしとて、外丸源之丞・江川海老之助、御召領の馬に乘りて、小田原より新田迄は、四十里前後の道を、十時計に乘着きければ、其日中に馬は死しけり。兩人諸共に、金山の本城に登りて、𠮟中後を申上げければ、橫瀨殿を始め、城代家老早馬に乘りて集り來りて、此旨を聞きて驚き、上を下へぞ騷ぎける。館林・足利・小俣・桐生へも、早速事の樣子を通ずべし。出城・寄居・民百姓も、此由を聞きて、定めて騷動すべし、諸物頭に觸れて鎭むべし。押付小田原より、討手來るべし。一族物頭の面々、殘らず金山に集り、軍謀を盡す。御母公橫瀨殿、上下の面々、拳を握り胸を摩り、上を下へぞ返しける。

一、北條氏直公は、山上五右衞門・北條安房守を召して仰せられけるは、此度由良・長尾留置く事は、天運の致にてもあるべし。新田・足利へ人數を出し、下人一族追散らし候はん。夜入通して、使を以て、兩家の一族下人の志を引き見んかと、仰せられけ

れば、安房守承りて、尤に存候へども、用捨は後日惡逆を起す者なり。卽時に人數を遣され、然るべしと存候なりと、申されたりければ、山上五右衞門此由承りて、先づ以て、使者仰遣され、新田・足利一族家人の樣體を聞届け、其上にて、何分にも仰付けらるべし。自餘の家と替り、兩家と申すは、文武二道の者多し。謀なくては、速に支配の地となり難く存候と、申上げければ、氏直公聞召して、五右衞門志の處の儀、能き謀なりとて、則ち多米九郎次郎・平塚又五郞に、步弓三十人相添へ、新田・足利の一族へ遣されけり。其下狀に曰、此度兩家の大將、小田原に留る事、近年の不屆。此度宗綱を討取り、早速註進致さるべき處に、山上五右衞門を差下しの上、漸く參着して、被相聞の段、恨む處數々多し。其外御慰の爲にも、三四年程御逗留に極りなり。幷に一族家老・物頭の者共、相殘らず此方へ參府あるべし。居城の儀は、此方より加番の軍兵を遣すべし。少しも滯る仔細あれば、據なかるべしと仰遣しけり。

一、金山本城には、新田・足利の下人一族集り、兩家の歸城を願ひ、每日寄集り、色々に謀り、內談僉議ある處に、右の使者來りければ、本城に於て口上・下し狀の趣承る人々

には、横瀨勘九郎・小金井四郎右衞門・矢場內匠之助・屋內修理之亮・大澤下總守・林越中・同伊賀守・鳥山淨山、侍大將殘らず。足利の御下人には、白石豐前・大沼田淡路・阿方源內・荒井圖書・南江左衞門・小沼彈正・高山馬之助を始め、兩家の物頭、三間十五間の廣間に並み居て、事の樣を聞き、胸を冷し拳を握り、懷中に汗を浮べて、並み居たりけり。横瀨勘九郎殿、此由を聞召して、少しも論ぜず申されけるは、兩家小田原に逗留の儀に付、氏直公御念を入れられ、留守居の者共に、爲御知の段、難有御返事を、憚り乍ら賴み奉るべし。緩々と御休息ありて、明日御歸あるべしとて、山海の珍物を催し、御馳走申せとて、新田・足利の剛力若侍に、老體を少し交へて、終夜酒宴して、馳走をなしたりけり。少しも心免すな、目を放す事あるなとて、所々口々に加番をして、金山の前後左右を取卷きて、近邊の鄕人迄も犇きけり。扨横瀨殿を始め、物頭・老中殘らず、北の陣に集りて、僉議內談ありけるが、大澤下總守申しけるは、御兩主此の如き上は、何と謀をなしても、死して別れ申したると、同理も祕も入らず。此度使を返し申すまじ。捕へて獄屋に入置き、足輕共を、鼻を以て、小田原へ返し申す

べしといひければ、横瀨殿聞召し、尤も下總思はるゝ處も至極なり。兩家心なく了簡もせず、一族各にも内談もなされず、小田原へ參らるれば、運命盡果て、八幡大菩薩に見捨てさせ給ふと見えたり。某口惜しき事は限なし。其上に居城の儀、小田原より申付くべき旨、存も寄らず。縱ひ城主運命盡きたりとも、各某ありて番ある上は、小田原の加番も入らず。各我々が心意を引き見ん爲めに、和談に事寄せて、此度の使は來ると覺えたり。さり乍ら、兩主繼命の道なり。此度使をば、先づ何となく和に返事をして、送返すべしと、仰せられければ、新田・足利の者共、尤と感じけり。小俣の城主義勝公、仰せられけるは、新田・足利の内一人留め置かれて、末代の意趣たり。但使の趣に任せて、其横瀨兩人、小田原へ行くべし。供廻に、新田・足利にて、剛力を選び連れ行きて、委細和談を希ひ、樣子能くば、由良・長尾を同道すべし。萬一首尾惡しくば、城中へ狼藉して、氏直が首を取る事もやあらん。仕損じたる分にて、安房守が帶刀、などか首を取らぬ事はあるまじ。我々討死をせば、小田原に、萬人塚を築いて置くべし。自然討死と聞かば、新田・足利・館林・小俣の軍勢を、一調儀にして、兩主

某・横瀬四人に、弔軍して給ふべしと、御涙を浮め給ひて仰せられける。∴大沼田淡路・小金井四郎右衞門、此由承りて、是れ勿體なき御軍法を、仰せらるゝ者かな。大將を取子（とりこ）にせられたるに、殘心多し。各初め大將分の方々、心を亂し討死あらば、敵、悅の上の喜悅なるべし。斯樣に利を失ひたる時、心奥を敵に謀られざらん樣に、仕るこそ第一なれ。如何にもして、兩主の命延べたき謀をなさるべし。何と小田原より謀るとも、居城抔の儀は、安々とは渡すまじ。今生に御命ある上は、先づ／＼和に返事して、後日の沙汰を謀り給ふべしと、申しければ、義勝公・横瀬殿・諸物頭も、此儀然るべしとて、此の如く返事和にして、小田原の使を返す。

一、小田原よりの使者に出向ひて、林越中申達しけるは、此度由良・長尾事、其地に逗留に付きて、御念に入れられ御使者に預かり、難レ有奉レ存候。就レ夫近年、粗略・無屆の意趣、段々仰聞けらるれば、存の外なる御事にて、近邊に大名多しと雖も、小田原の御事は、新田・足利上下心奥に、頼みたく存じ、朝夕氏神同前に崇め奉る。尤も粗略無禮を謀りて、志を逆心に存せば、此度兄弟共に、參府仕るには及ぶべからず。近年の無

北條氏直新田足利勢を攻めしむ

屆無禮を、詫び奉るの爲めに、幸の砌を悅びて、參着致す處なり。兩家屑にして、縦ひ其科ありとも、御赦免を願ひ奉り、向後何分にも、御支配に任すべし。且又居城の儀、小田原より加番を仰付けらるゝの段には及ばず。新田・足利の一族下人、在番仕るべし。先づ以て、由良・長尾、速に歸城を願ひ奉ると、申渡しければ、多米九郎二郎・平塚又五郎も、早速小田原に歸りて、事の樣を具に申上げければ、氏直公聞召して、尤も赦免もありたき事なれども、留置の意趣は、末代迄も無念を志して、北條の家の大敵とならん事、疑あるまじ。幸の時を得たり。人數を出し、新田・足利・館林迄も蹈散らし、小田原より支配申付くべしとて、北條安房守を大將となし、二千五百餘騎を催し、侍大將には、伊藤大和守・多米主膳・大道寺・山上五右衛門・成田左衛門殿は、案内者にて、忍・深谷・岩付の人數を相添へて、二月十八日に、新田・古戸の渡を越えて、上は中瀨・小島、下は中條・小泉・吉田・原・赤岩迄は、川を後に當てゝ野陣を催し、篝を焚きて、諸勢を待揃へ、新田・足利の手分をして攻むべしとて、隣邊の寄勢をぞ待ち居たり。館林へは、忍・深谷・岩付の勢を、花房内膳に組合せて、上下二百五十騎、押への

爲に遣し、寄居八方の人數をば、馬を選び、以上三百五十騎、足利を攻むべしとて、光西寺原に陣を取りて、先づ富士山の要害を撫切して、小泉の寄居迄も狼藉せよとて、神原治部・濱島與吉郎・大磯勘解由左衞門大將として、近邊の民百姓、神社・佛塔に亂れ入りて、狼藉限なし。扨前橋・伊勢崎・大後・山上の者共は、瀧川道見と、同じ居城居城の番衆を集めて用心を構へ、小田原・新田の合戰は、例年とは違ひ、互に討死も多かるべしと騷ぎ、口々に申しけり。小田原の使者に向つて、何たる事をか返事せられたるやら、俄に人勢の攻め來るは、此度こそ、新田・足利の滅亡なりと、近國上下の者共、緣者吉身の面々、手に持つものを捨て、財寶を土に埋め、山の奧へなりとも、逃入らんと騷ぎけり。

北條安房守金山を攻む

一、北條安房守は、中瀨村江原といふ所へ御着ありて、一夜野陣を構へて、前後の軍勢を見合せ、川を越させよと、下知せられけり。大方人數揃へければ、平塚の渡を越えて、木崎・德川・江田・田中の民家を燒拂ひて、脇屋反町に野宿を構へ、先づ金山城を攻むべしとて、人數手分をぞなされける。扨金山には、新田・足利の上下集りて、

軍の評定取々なり。横瀨勘九殿仰せられけるは、此度の儀は、何れも大將なき合戰なれば、某物頭面々計なり。必ず氣を亂さず、何事も心を合せて、上下共に、落城せざる軍法と思はるべし。さり乍ら、敵無二無三に働くとも、味方は強く働かざる謀、專一なるべし。金山の城は、敵を目の下に見て、動くべき方便は、日本國に雙なき名城なり。併敵廣澤、桐生に亂れ入りて、長陣せば、馬草・兵糧に、飢ゑざる方便、能くせらるべし。先づ是を第一に防ぐべき者共には、桐生の地侍と、藤生紀伊守を大將にて、淺見・藪塚・長岡・大鷲村の前原に、備塚を拵へて、伏兵を置き、亂杙・逆茂木引きて、峯々谷々には、石弓を構へ置き、寺井・由良・細谷・岩松の者共は、鳥山主稅・金谷丹波守を大將にて、由良の出城に籠り、敵の足からみにならんと待ち居たり。

一、金山本城には、横瀨勘九郎・小金井四郎右衞門・林越中・大澤下總・屋內修理・濱田內匠、畑六之助・江田兵藏・堀江彥五郎・矢場主稅を先として、宗徒の大將、大小卅九人、手分手配して、前後左右の持口を堅めけり。長手口の大將には、小金井四郎右衞門・屋內修理・大澤下總守・鄕戶・成塚・鶴・生田・萩原の鄕人を、西面の谷々に籠置き、吉澤・

古郡の者共は、荒井主税・茂木馬之允に組して、岡田石見・薗田彦七郎・同藤十藏・長谷川與三左衞門・渥美源三郎・大寶寺勘太郎を先として、丸山の峯に寄居て、後口へ廻る敵を押へけり、新田口の大將には、林越中・同伊賀・堀口彦五郎・矢場內匠・野々山九郎兵衞、以上宗徒の人々十三人、坂下の平地に集り、石弓・木石・落穴を拵へて待ち居たり。燒山・金井の間には、縣播磨守・矢木田淸九郎・內田左門・久保田金藏・松原勘解由・淸水三郎左衞門・唐津出羽、都合鄉人を組して百三十人、馬場の西に陣家を催し、燒山の峯に物見番を置きて、鳴を靜めて居たりけり。市場只上りには、態と人數を置かず、桐生・廣澤には、山中物頭・關口尾張・風間將監・大屋勘解由左衞門・津久井左京・松島古伯入道・安久澤道伴・石原石見・彥部加賀守、以上名ある侍百五十人、鄉人を組して、五百餘の人數、廣澤寄宿に集りて、峯には遠見を置き、金山に軍初まらば、橫鑓を入れんと控へたり。小俣の城には、義勝公、御下人鄉人を散らさず、桐生川の左右に、亂杙・逆茂木を入れて、用心嚴しく下知を觸れて、中島笛吹坂に人數揃へ置き、自然新田の城落城と聞召さば、總人勢を、速に此地へ引退き一合戰、某旋を取

るべしとて、待ち居たり。初め鹿大前・松田・栗谷・板倉の郷人・地侍共は、小俣の加勢に寄居て、川端備塚に伏して、前後の様體を聞合ひけり。山下・五十部・大岩の郷人・地侍は、蓮臺寺山の前後に集りて、足利勢に交りて、事の下知を請けたりけり。

一、足利御城には、白石豐前・立木圖書・大沼田淡路・市川右門・久米伊賀守・新井圖書・小曾根筑前・南掃部・小沼庄九郎・小菅縫殿助・江川左衞門・山川丹後を始め、寄り居て、合戰の評定謀をなしたり。富士山には、人數を態と置かず、騎舞・朝倉の者共は、川東へ引越えて、自然佐野勢、此度幸を希うて、横鑓せんも知れずとて、羽佐間山に、遠見番俄に催し置きて、矢野九郎兵衞を大將とし、觀音堂の土山に、伏兵を隱し置きて待ち居たり。彥間・名草・藤坂・月谷・田島鄕侍地下人、皆要害山の腰に集りて、石弓・木石を用意せり。

一、館林御城には、金井因幡守を大將とし、大畑治部・久下越後守・江戸宗印・野田志摩守・大島彌平次・大久保勘五郎・設樂新八郎・窪田若狹守・長谷川道伴・菱沼左助・篠塚半彌、宗徒の人々以上十三人、近邊の鄕人・歩弓三百六十八餘り籠りて、高根・川俣・加保

志・小會根を取廻し、落穴・亂杙・逆茂木を竝べて、敵寄せ來らば、御兄弟の弔戰して、討死せんと待ち居たり。

一、是は扨置き、新田金山にては、御母公は、老中御一家の面々に仰せられけるは、此度小田原より、大勢攻め來ると風聞あり。兄弟の者共、謀に會うて、小田原に留置かるゝ上は、二度眼見せん事はあるまじ。義重公の御代より當家迄、新田・足利中絶無之相傳はる。子祖の端ともなり、夫に相交る家の子數多といへども、當代此時に至りて、各違計なり。定めて口惜しき所存は、同然なるべし。此度異議なく城渡しなば、新田代々の名印は捨るべし。假令ば兄弟の者は、死して別れたると同じ。此度計りは、如何にも謀をなし、居城を堅固に守りて、新田の家名を殘し給へかし。下人一族、其志之なくば、敵寄せぬ先に、某をも自害して、來世には男に生れ變へて、今の某が無念至極を、敵に思ひ知らせんと仰せられ、御涙の隙々に、胸をさすらせ給ひけり。御一族老中・物頭の面々、此由を承りて、始終を至極して、共に涙を浮べぬ者はなかりけり。横瀬勘九郎・鳥山淨山、此由を感じて、申上げられけるは、縱ひ仰の段

之なくとも、御兩主此の如き上は、一命を輕んじ、せめて居城を堅固に守りて、御兄弟の命さへ、今世にあらば、運を開かせ申さぬ事はあるまじ。さるに依つて、御家人の面々、此度は取分忠意を拵へて、縱ひ討死に及ぶとも、一足も引退く事あるまじと、忠義を顯し、潔く見え申すなりと、仰上げられければ、御母公御悅喜斜ならず。

一、新田金山の城にて、一族老中・諸物頭集り、根岸三彌筆取りて、帳に記して、人勢の數を見るに、以上七百三十騎・上下三千餘と聞えけり。小金井四郎右衞門申されけるは、新田・足利の大將程、過寶ある大將はなけれども、御運命の大事に及び給ふものかな。今度下人・一族・民百姓に至る迄、其志深く、縱ひ大將御座なくとも、數年の御情、何れの世に報ゆべき。城主のため命を奉り討死して、子孫の名を殘さんと、思ふ者多し。念力天に通じ地に渡りなば、爭でか八幡大菩薩も、見捨て給ふまじ。大方御命には、相替る事もあるまじと、諸物頭を勇めて、內談僉議ある所に、成田左衞門尉より使者來り、申達しけるは、此度兩城主、小田原に御逗留に付、剩へ兩所へ人數向ひ、小田原の軍兵發足して、近邊に立處なし。且又某儀も、新田・足利の

儀は、粗略に存せず、此頃持病に責められ、夫に依つて、音信を聞かず、初中後心許なく存ずる所なり。御一家の内か老中へ、具に內談仕りたき事あり、御出來を希ひ申すなりと、申宣べたりけり。其使の家名橋本加衞門と申す者なり。元來新田出の侍なり。橫瀨殿老中、加衞門に對面ありて、始終を聞召して仰せられけるは、忍・岩付の者共は、小田原方に組して、寄せ來る取沙汰あり。成田殿の儀は、新田・足利には重緣深し。御使の委細は、左も忝き樣子なれども、御存知の通り、一族下人も、東西闇になりて、仁義を略し、只敵寄せ來らば、上下共に討死して、兩主の御供を、來世迄も願ひ奉る計、何方よりの御報も、態と延引仕る御事にて候と、仰渡されて、加衞門は歸りけり。扨橫瀨殿を始め、諸物頭口々に申しけるは、成田殿より使者來るは、大謀にて御座候はん。此頃忍・岩付の人勢は、館林の押へに集り居て、飯野・大久保・北大島の沼端に陣屋を催し、館林の者共、新田・足利の後詰せば、其留守へ城乘して、手間取らずに、追散らし申さんと、脇田內膳・小森伊織を大將とし、百四十騎程控へたりと承り候と、いふ者多かりけり。小金井四郎衞門・橫瀨殿仰せられけるは、兎角

に成田は、心變りと見えたれども、心見の爲に使を以て、樣子を見分ありたき所なりとて、益田伊勢守に、廣瀨長藏を相添へ、步弓三十人伴ひて遣されければ、成田殿も御他行、老役衆も出合はず歸りけり。橫瀨殿仰せられけるは、大方成田は、心變りと覺えたり。自然寄せ來らば、先づ其陣場を見屆けて、軍神に奉るべし。成田一家の首を取る者には、上下に寄らず、百貫の加增を下さるべしとて、居丈高になりて腹立多し。諸物頭も、共に奥齒をならしけり。案の如く成田殿は、奈和・伊勢崎・前橋・道見・朝葉甚内抔を語らひて、小田原方になりて、此度の案内をなさるゝ由を、脇屋の鄕人告げ來りけり。

一、天正十二年六月上旬に、小田原勢金山を攻めて、足利へは、光西寺原迄、押への人數計出し置き、長手・熊野兩方より攻上るべし。新田口・金井口は、攻むるに及ばずとて、淺葉・成田を先とし、二千五百餘騎を二手に分けて、永手口の寄手の大將には、北條安房守・多米伊勢守・山上五右衞門・成田左衞門佐、上下千五百餘人、鐘鼓を打つて、喚き鳴つて攻め登る。城中にも、兼て用意の事なれば、小金井四郎右衞門に、坂中

へ半分計りさがつて、名ある侍百餘人・歩弓三百人を、前後に引連れ、通りの峯には、石弓・丸木・土俵を幷べて敵の攻入る馬の先に落懸り、旆を取つて下知仕られける間、成田勢上下二百人計、木石に當つて死したりけり。大勢後より押上る事なれば、先陣の討死を知らず、押鼓を打つて、我先に進む者は、馬武者・歩弓に依らず、谷へ轉び落ち、石弓に向つて、風に木葉の吹き集まる如くにて、後陣中備の敵は、口口こみ角あり、つぶて岩を投入る間、引く事もならず、登るには及ばず、立所にて死する者多し。山上五右衞門之を見て、後陣の備立直し、鄕戸・鶴・生田の繩手へ引退き、味方の樣體を見るに、上下三百人計り討たれ、手負半死の者は、數を知らず。成田殿も、下人一族百人餘討たれ、漸く命計を遁れ、乘りたる馬も深手を得て、坂中の谷へ跳入りて死しけり。其時小金井四郎右衞門大音を揚げ、如何に成田殿、此城乘の案内は、重ねて御無用。今日に明日は軍謀を替へても寄手の爲めにあらじ、此方は骨を折らざる處に、城の用意仕り置くなり。御寵愛しき小田原勢の有樣かな。成田殿の案内にて、思召の外、人馬の破損出來申すなり。速に此度は、歸陣なさるべしと、二三度四五度

小田原勢敗る

に及びて、木石を叩いて申されける。諸勢鯢波をば、山も崩るゝ計に揚げ、鳴り響きければ、小田原勢、二度と攻寄すべしと思ふ者共は、上下共になく、漸く本陣を指して引退くなり。

一、四郎よりは、敵を思ひの儘に、麓迄追下し、人馬の谷へ落ち、木石に當り、死したるを見て、名城の德は、何時も是なり。新田下入一族、一人も生殘る內は、落城する事はあるまじと悅びて、小金井采女を坂中へ殘し置き、我身は本城に歸りて、鳥山淨山・御母公・横瀨殿、一合戰の次第を申宣べければ、何れも悅喜斜ならず。夫より遠見所へ登りて、四方の攻口の樣體を見物あるに、熊野口敵充滿して、合戰最中と覺ゆるなりとて、横鑓に入れて、一人も洩らさず討留むべしとて、新田口の人數を引かれ、寺が入の坂本に陣を備へ、敵の後陣を前に當て、鯢波の聲を揚げたりけり。熊野口寄手の大將淺見甚內、案內者にて、北條陸奥守・伊勢大和守・前橋道見・松山外記千三百五十騎、以上寄居・八方・川越の鄉人、合せて五千人計の勢共、蛇川の左右前後に殘し置き、能き武者三百騎程揃へて、鐘鼓を打つて攻登る。此口は、林越中・大澤下

總を大將とし、茂木馬之介・關口尾張・益田伊勢守・外崎源內・荒山兵藏を始め、以上二百七十人計、谷合の藪影に籠りて、鳴を靜めて居たりければ、甚內申しけるは、長手大田口には、大勢を備へ、此口には、小勢なりと見えたり。手間も取らず、本城へ亂れ入らんと、眞先に進んで攻登りける所を、兼て用意の事なれば、谷峯の難所、木石・落穴を謀りて、透間もなく有之ければ、敵二三百人、靑籠の備になして寄せ來る。時分はよしと、林越中・大澤下總旗を取つて、谷嶺に伏せ置きたる者共、木石を落し懸け、能き射手を揃へて、敵を目の下に見て、散々に射たりければ、仇矢は一本もなかりけり。此口は、取分嶮岨なりければ、敵登り滯る所を射立てられ、前後左右に色めき渡る。伊勢大和守・前橋道見是を見て、旗振廻し、麓へ引かんとしたる所を、燒山・切通に備へ居たる者共、是を見て、つぶてを雨の降る如くに投懸け、遠矢を射て、鯢波を揚げければ、長岡・新島・濱田の廣みへ引退く。小金井四郎衞門是を見て、無二無三に追懸る。田畑堀水に、落穴は數々拵へ置き、味方は案内を知り、敵は知らず。或は馬を乘入れ、人は脇だけ首だけに落入りて、人に人重りて、死する者多かりけ

り。坂中けづりの下にて、朝葉兄弟下人一族卅四人、枕を並べて、木石に當つて死す。前橋道見も、燒山の南深堀の中へ馬を乘入れ、引けども上らず、供廻りの者共、馬を打つて、飛上らんとしたりければ、馬大に驚き、跳落され、脇骨を打折り、半死の如くなりけるを、漸く戸板に乘せて、早々前橋へ落行きける。扨四郎よりは、本城に返して、大澤下總・林越中、其外諸物頭參會して、互に合戰の方便、軍の樣體咄合ひて、悅喜斜ならざる處へ、御母公より、長持樽肴を取持たせ、御見物とて、鳥山淨山・村田宗壽、御供遊ばされ、新田口の馬場迄御出なされ、始終を仰せられ、今度大將なければども、一族下人鄕人迄、其志を揃へて勵み、合戰をしたる者かな。是程過實ある大將と生れ、大難に遇ふ事は、情なき浮世かなと仰せられ、御袖をしめし給ひける。

一、扨老中を始め、御一家の面々、諸物頭集りて、御母公よりの酒肴を分散して、難レ有御酒かなとて、暫く謠も止まざりけり。橫瀨殿仰せられけるは、成田左衞門下人小森主膳が首・淺葉兄弟の首は、鳥山の間に、獄門に懸くべし。早速寺が入・古郡の者共、觸渡すべしとて、則ち彥右衞門・舟三郎を召して仰付けられけり。寄手の討死上

下五百廿八人、手負半死は數知らず。城中には、手負死人三十人迄に過ぎず。蛇川・由良・細谷の鄉人、出城に集りたる者共、百餘人討たれたる計なり。

一、北條安房守・同陸奧守・山上五右衞門を始め、軍に利を失ひ、人數を集め、江田反町本陣へ引退き、合戰の樣子を、小田原へ註進仕られければ、氏直聞召して驚き給ひ、則ち大畑兵庫助・桑山掃部を召して、此度の合戰に、味方利無之由を告げ來る。定めて忍・岩付・前橋の鄉人・草武者共、吟味なしに寄集り、大軍を賴みて、負けたると覺ゆるなり。古より新田一族下人は、軍に及んで一足も引かず、大敵を見て恐れず、千騎が一騎になる迄も働くなり。兩人罷越して、合戰の了簡を謀りて見るべし。近邊の鄉人・草武者、足がらみになりて、必ず合戰に存じ寄らず、手負死人ある者なりと、仰せられければ、兩人承りて、加勢三百餘騎引率して罷下り、中條の渡りに着陣して、事の樣を聞くに、小田原勢散々討負け、本陣反町といふ所へ引退き、淺葉兄弟・前橋道見も、討死の取沙汰御座候と申しければ、小森・屋村・中條に、人數を揃へ置き、上下卅騎計にて、反町を指して急ぎける。安房守殿も御對面なされ、初中後の御物語仰聞

けられけり。　山上五右衞門申しけるは、何と謀をなすとも、此度は、落城はあるまじ。　返つて味方損ずべし。　金山名城は日本無雙、下八一族は、五里十里四方に滿ちて、民百姓共に至る迄、城主の鳥籠(とりこめ)を悲みて、無二無三の働、討死を希ふ氣色見えたりと、申しければ、諸物頭を始め、肝消し顏になりて、一言の返答もせざりけり。

一、多米主膳・大道寺友之助は、蛇川の岸に備へて、長手口の大將・熊の口大將、攻倦むならば、後詰して新手を入替へ、攻むべしと思ふ所に、由良の出城に籠りたる金井田傳吉郎・家內伊織・片岡次郎兵衞・天笠甚太郎・青木內匠之助・細谷・岩松の鄕人、上下二百人計、集り居たりけるが、金山に軍初りたる音を聞きて、金井田傳吉郎思ふやう、今日の合戰に、出合はぬ侍は、末代迄も殘念多かるべしとて、出城を忍び出で、十七八人引率し、馬を急ぎ乘行くを、寄手の者共是を見て、此城の押へにこそ殘り居たれ、五騎七騎宛落行かば、後は鷺のから堀を守ると同じ。　之を討留めよと、我先に追懸くる。　城中より是を見て、金井田を討たせじと、我先にと出でゝ戰ひける。　本城の合戰より大軍になりて、敵味方入亂れ、東西南北に亂れ合ひて、互に火出づる程戰

ひければ、新田方の者共も、百人餘り討たれけり。寄手も六七十人討死したり。傳吉郎取つて返し、敵を押卷りて、能き武者七八騎切つて落し、我身は手も負はず、下人一族も、かす手も負はざりければ、金山本城へ行くは安けれども、出城の狼藉心許なしとて、則ち駒の手綱を引返しけり。

一、北條安房守・同陸奥守、諸物頭を集めて、合戰の手立僉議、色々內談せられけれども、勝つべき道理に當らず。多米主膳進み出でて申しけるは、關東八箇國の軍に、某など出合はずといふ事はなけれども、此度の樣に、味方働くべき便を、失ひ申す事はなし。小田原領內の人數、殘らず寄せたりとも、思ふやうに取卷く事はなるまじ。さり乍ら、山城の事なれば、大勢籠り居て出陣せば、水飢に及ぶ事あるべし。俵糧の儀は、地國なる故、かづえまじといひければ、山上五右衛門此由を聞きて、尤も仰の段巨細なり。さり乍ら長陣せば、寄手の大勢飢ゑて、難儀なるべし。桐生・小俣・足利・館林、皆一族の事なれば、中々落城は無定なり。早速此由を仰遣され然るべしと、申しければ、安房守聞召して、尤も各僉議の道理、捨つべきにはあらねども、大勢を催し、近

邊の加勢を觸れて、攻倦んで引退きたる小田原の者共かなと、酒宴の物語にならんも、口惜しき事なり。桑山・大畑抔も、加勢に招き寄せぬ前ならば、尤なれども、小田原の思召も、如何と思ふなり。兎角今一戰して、有無の所存を晴らしたき事なりと、仰せられければ、諸物頭を始め、陸奥守殿申されけるは、尤も合戰は、幾度したりとも、さのみ負くるといふ事もあるまじけれども、勝つべき道理を見付けず、慭に歩弓人を討たせ、長陣して引退かば、後日の爲め宜しからずとて、色々內談ある故に、十四日迄日を送り、延引するに依つて、寄手も草臥增さりけり。

一、金山にては、一族家人集り、所々の番所の用心を構へ、自然敵、夜討などに、望あるも知れずとて、麓に逆茂木を引並べ、御城には、池の泥を以て、西南に壁所を五十間、金の手に懸廻し、馬共を引出して、白米を以て湯洗を催し、水飢を、敵に量られじとしたりけり。 俵糧・草薪の便は盡きざるなり。 只敵の大勢長陣するは、食攻の軍法なるべし。夫は存も寄らず。さり乍ら、近邊の俵物、敵方へ亂妨せられぬ用心をせよとて、觸れたりける。 斯りける所へ、金龍寺・長輪寺より、使僧來りて申しけるは、

今度の合戰、新田・足利勝利本望の至、兩寺共悅喜仕候、城勢に同じ。且又出家の身にして、討死の忠孝も、佛祖へ憚あり。希ふ所は、叶はぬ迄も、兩寺小田原へ參着して、和睦を申詫びて、兩城主御歸國を願ひ奉る所なり。夫に依つて、御一族老中、諸物頭へと、申宣べたりければ、御母公を始め、横瀨殿・鳥山淨山・小金井四郎衞門、喜悅の眉を開き給ふ。扨兩寺、難ㇾ有御心奥かなと、彌其志を達へず、御支配奉ㇾ賴候と、返事なされければ、使者返りて、事の意趣を申しければ、兩寺、早速小田原へ參られ、始終を詫び申上げければ、氏直公聞召され、奇特千萬なる志かな。近邊寺社の面々、多しと雖も、此時に至つて、武士の心を和げ、國土の亂を鎭めんと思召す事、感じ入る所なり。御望の意趣は、成田左衞門方へ、申遣すべしとて、兩寺へ御振舞の獻菓、數を盡し仰付けられ、其上雪舟の懸物を拝領なされ、御歸りなり。

一、北條氏直公は、成田左衞門佐を招き寄せて仰せられけるは、兩寺の御沙汰を聞かれ、此度新田・足利へ、人數を出し候は、不慮に兩城主を留め置く故なり。氏政代にも攻めず。越後・甲州・佐竹、何れも攻めざる者共なれども、近年無禮不屆、數々多

し。尤も今度加勢を出し、出馬してなりとも、攻落すべき事易けれども、兩寺の志、下人一族の働、至極多し。夫に依つて此度は、速に人數を退け、由良・長尾も、歸城を申付くべし。さり乍ら、家族の内より一人宛、質を出し置くべし。其道理を、其方申達すべしと、仰せられければ、始終を承りて、兩寺を招き寄せ、新田・足利へ歸りて、天正十二年七月二十日、御歸城に定り、小田原軍勢も引退きけり。新田・足利の上下悦びて、日待酒宴は限なし。扨御迎の人數、上下八百五十人餘、川越の原迄、小金井四郎衞門・藤生紀伊守・金井田傳吉郎等を先とし、出でられける。小田原迄の御迎には、態と小勢にて、漸く兩主の御下人、五十人には過ぎず。林越中を大將として、佐川の中河原に待ち居たりければ、成田・山上五右衞門御供仕り、佐川端迄送り出でられ、互に禮儀終りて後、少時の酒盛を初めて、五右衞門は歸りけり。江田兵庫之助を、小田原に殘し置き、卅日替に相勤めけり。夫より夜を日に繼ぎて、歸城せられければ、程なく中條の渡に、御着なされけり。新田・足利の鄉人・寺社佛塔の者迄も、横瀨殿を大將にて、御迎は何樣五六萬人もあるべしと悦び給ひて、本城へ入らせ給ひけり。

一、御母公も、馬場迄御出なされ、御兄弟に對面なされ、御悦斜ならず。此程の御苦勞、御下人一族の忠義の御物語、一生の內、咄しても盡すまじとて、悅の御淚、御袖もしめり給ひけり。成重公仰せられけるは、今度小田原に留め置かれ、籠の鳥になり、已に危く思ひしに、一族下人民百姓に至る迄悲み、忠義深き事を、天是を憐み給ふなり。夫に依つて、速に歸城を得たりとて、御悅の酒盛こそ初めけれ。顯長公も、早速足利へ御歸城あり。御悅は限なし。金龍寺・長輪寺へ、御參詣遊ばされ、御先祖の御墓を拜し給ふなり。成田左衞門殿へも、新田・足利へ御越なされ、初中後の御物語ありけれども、上下の人々、目引きはな引き、顏の皮はらひたき人かなとて、さゝやきけり。

一、長尾顯長・由良成重公は、彌御繁昌ありて、新田・足利の武士・町人・神社・佛塔・民百姓に至る迄、忠孝の道、眞深なりければ、大將も憐み多し。さるに依つて、領內太平に治り、近年上下共に集り催し、酒宴花見かけ踊を催し、喧嘩口論も之なく、諸人の心靜なる事、何れの御世にも勝れたり。爰に俄なる事觸れ來り、小田原へは、上方より、

大勢を以て攻め來ると、風聞あるに依つて、新田・足利へも、三百餘騎の加勢を、出すべしとの御事なり。是は又近年の坪軍とは替りて、武士の骨を折る、晴がましき事多かるべしと騷ぎけり。天正十七年十一月廿六日には、小金井四郎右衞門・藤生紀伊守・林伊賀守・金井田傳吉郎・茂木右馬之允・江田兵庫之助を大將となし、上下三百六十人、成田左衞門殿の幕下になりて、小田原へ發足したりけり。程なく相模守、山田村に着陣して、諸大將小田原へ參られければ、多米主膳・山上五右衞門參會して、大將斜ならず。其後氏直公も、御對面遊ばされ、御機嫌よく、小金井四郎衞門には、御馬など下され、其外の大將分には、御腰物・鑓・長刀、夫々に拜領したりけり。新田・足利と、小田原の御使番には、長澤半十郎・佐川田喜左衞門兩人は、剛力道の達者、常人に勝れたり。戸根滿水になるとも、川を渡る事上手なり。其使飛脚の便は、鋸を以て木を挽く如くにありけり。程なく極月初には、上方勢攻め來る。山中の城には、新田七左衞門を大將とし、百五十騎籠り居たり。樫坂・畑塔の澤には、石丸源太左衞門・大道寺友之助・石塚三郎左衞門・樋口主計之助・萩田左近・大磯久五郎・丸橋藤次

郎、宗徒の侍上下八十五人、山峯谷の細道に木石・落穴・掘切を拵へて待ち居たり。寄手八方・松山・大宮・八幡山の地侍郷人も、久永但馬守施に附きて、北條安房守殿下知を請けて、出城寄居に楯籠り、用心嚴しく居たりけり。此の如く御領内も廣く、御一家御下人も多けれども、御運命盡きければ、天正十八年の春は、小田原本城迄落城に及びて、御一族名ある侍百五十餘人生捕らる。討死は、上下八百廿九人、無情の有様かな。足利・新田の峯岸主計・栗原內膳・內田庄之助・山川左內・戸島甚五郎・渥美源七郎・籾山久兵衞・芳野次郎八、上下六十二人、討死したりけり。其內五六人は、生捕られたると風聞あり。

小田原落城

一、佐野天德殿御代になりて、彌御繁昌ありけれども、新田・足利幷に人質を催促あるに依つて、是非なく末腹の御舍弟毘沙門殿を遣されけり。程なく上方より、小田原攻の御沙汰告げ來りければ、山上道及・天德寺殿御內談にて、上方勢に組して、道筋・海川難所を、繪圖になされ遣されければ、上方より、色々御褒美などに預かり、先陣の案內を仰付けられけり。其事隱れなく、小田原へ聞えける間、毘沙門殿も、罪科

になされ給ふと聞えけり。

一、小田原落城の以後、上方の御代になりて、關東八州の大名小名、剛心を失ひ、太平に註目を守りて、民百姓に至る迄、悅ばざる者はなかりけり。由良・長尾殿も、三百餘騎の加勢、小田原方に屬す。罪科遁れ難き故、由良殿は、桐生へ御つぼみなされ、御赦免之なし。さり乍ら、神妙なる有樣かなとて、卯宿へ御所替なされ、僅の住居にならせ給ひける。足利・長尾殿は、佐竹殿御取成を以て、漸く御預入とぞなり給ふ。澁川義勝公も、秋本殿の御預りにて、御住家御知行、殘らず召上げられ、思ひ寄らず、御牢人とぞなりにける。夫に依つて、新田・足利・小俣の御下人、數知らず牢人となりて、或は先規の知行に住家を極め、民の緣者を望み、人の通はぬ山中に引込み、農作を專に、心惡くる者多かりけり。

上州金山軍記　大尾

新田正傳記

足利の先祖

源義國　陸奧三郎式部大輔、母者有國の娘なり。陸奧守義家の三男、上野國新田庄を傳領し給ふ。是れ新田・足利兩家の元祖なり。（嫡男義重、新田の一流元祖。二男義康、足利の一流元祖。）近衞院御宇久安六年に、故ありて下野國足利郡大野鄕別墅に下向し給ふなり。（足利庄司太郎太夫・藤基綱の婿なり。依つて爰下向。）

新田の先祖

義重　新田庄司式部大夫、母者上野介敦基娘なり。上野國新田庄世良田鄕に御在城故、新田姓となり給ふなり。是れ新田一流の元祖なり。高倉院御宇治承三年己亥、

賴政兵を擧ぐ

高倉宮御謀叛の時に、兵庫頭參議源三位入道賴政に仰せ、新宮十郎義盛（後十郎藏人行家といふなり、六條判官爲義が子なり）是を使として、令旨を遣され、諸國の源氏を催さるゝ時、義重等は、源氏の中にも、一二の者なれば、殊に賴まれ仰下られけり。義重領掌して、内々軍兵を催しける處に、宮の御謀叛不慮に顯れさせ給ひ、都を落ちて、三井寺に赴き給ひ、暫く宇

頼朝兵を擧ぐ

治の平等院に御座の處に、平家方より、左兵衞督知盛大將として、追懸け奉り、宇治川を隔てゝ合戰す。平家川を渡りて合戰す。源三位頼政入道・嫡子伊豆守仲綱・二男源太夫判官兼綱以下自害し、宮も流矢に中りて、失せ給ひければ、國々の源氏力を失ふ。源頼朝は、翌治承四年八月謀叛を起し、東國の軍兵を、潛に催しける。義重味方に組すべしと催されけるに、義重も自立の心ある故に、所存ありと稱して、催促に應せず。同九月晦日、義重入道上西は、東國未だ一揆せざる時、其身は故陸奥守の孫たるを以て、自立の志を挾むの間、頼朝御書を遣さるゝと雖も、返報に能はず。剩へ上州片岡郡寺尾城に引籠りて、軍兵を聚む。同十二月廿二日、新田入道上西方へ、足達藤九郎盛長を遣され召寄せらる。上西則ち參上す。然るに左右なく鎌倉に入るべからざるの旨、仰せらるゝによりて、山内邊に逗留す。是れ去頃上西軍兵を招き集め、上州寺尾城に引籠る由、風聞するに依つてなり。新田入道陳防申しけるは、心中更に異議なしと雖も、國中鬪戰あるの砌、輙く城を出で難きの由、家人共諫め申すによりて、猶豫仕る處に、今已に此命に預る事、大恐に思ふと申す。盛長樣々執成

義重、頼朝の勘氣を蒙る

すによりて、聞召開かれ免許あり。又上西が孫里見太郎義成、里見太郎義俊子なり、京都より參上す。是は日來平家に相屬しけれども、源家御繁榮を傳へ承りて、參る由申す。賴朝卿に、其志、祖父義重には異なり、早く昵近すべき由、之を免ぜらるゝなり。義成語り申して云、石橋の合戰の後、平家頻に計略を廻らし、源氏一類悉く追討すべき由、內々用意せらるゝ間、關東に下向して一族等に申合せて、賴朝を襲ひ討つべきの旨、義成僞りて申す處に、淸盛入道大に喜悅し、免許せしむるの間參向す。然るに駿河國千本松原にて、長井齋藤別當實盛・瀨下四郞廣親等に相逢ふ處に、彼兩人語りけるは、東國の勇士は、皆賴朝に從ひ奉る。仍つて賴朝鎌倉に入り、其勢平家に十倍す。吾等二人は、先日平家の約諾を蒙る事あるに依つて、上洛する由語る間、義成爾鞭を揚げて、馳せ參ずると申す。同六年七月十四日、新田入道上西、賴朝の勘氣を蒙る。其故を尋ぬるに、義重息女は、賴朝の舍兄鎌倉の惡源太義平の後室なり。然るを此程賴朝より、伏見冠者廣綱を使として、潛に艷書を通ぜらると雖も、更に許容せず。是故に父義重入道に仰せらるゝ處に、義重も思慮を廻らし、賴朝の御臺所は、

嫉妬深く御座すの間、後聞を恐れ、俄に彼娘を以て、師六郎に嫁せしむ。故に御憤ありて、勘氣を蒙る處なり。故に義重遁世して、黒谷に入る。師法然上人なり。建仁二年正月十四日御逝去。建久四年四月廿八日、右大將源頼朝公、野州那須野原御狩より、上州渡御。上西公、新田館に於て御遊覽なり。此處より、直に鎌倉に還御なり。

義重一男
義俊　新田太郎、里見と號す。伊賀前司義成の父なり。

二男稱嫡男
義兼　新田太郎藏人大夫と稱す。法名鑁義。

三男
義範　新田三郎、山名伊豆守と號す。

四男
義季　新田四郎、徳河と號す。

五男
義經　新田五郎、額田と號す。

六男
義益　新田六郎。

七男
刑部卿律師昌學。

女子祥壽姫　鎌倉惡源太義平御室。義平御自害の後、又新田に歸り給ひ、後に師六郎に嫁し、老いて尼となり、淨念比丘尼と號すなり。寛元四年御死去。萬徳寺開基なり。

新田政義由良を稱す

義重公四人臣　沼尻（武州）。小金井（上州）。横瀨（武州）。志摩（上州）。横瀨七郎領ニ新戒・古市・大塚・石塚・中瀨・高島・横瀨一。

義兼嫡男
義房　新田六郎藏人大夫、法名冩義。建久四年十一月十日、三島大明神奉ニ神馬一上使なり。

義兼息女
女子　岩松藏人時兼〔室脫カ〕。號ニ新田禪尼一。爲ニ御化粧一免ニ岩松郷一、御ニ添御輿入一也。時兼法名青蓮寺殿。

義房一男
政義　新田太郎。寛〔元〕元年京都御在番之砌、遁世なり。事の由を、番頭城九郎泰盛、六波羅へ達せず、不參の由を、鎌倉へ註進あり。故に御評定ありて、新田所領沒收に定む云々。程經て關東へ御下向、最明寺殿を以て、宗尊親王將軍宮へ、遁世の次第、官名左衞門藏人を以て、御願ひ叶はざる故、御室に入り御出家なり。之に依つて、本領半分拜受、世良田鄕館を退き、御領內由良臺原へ御移りなされ、新御館に御在居なり。故に此處を、臺源氏と申すなり。是より以來、姓を由良と御改めなり。又最明寺殿御時に、横瀨三郎太夫爲清評定衆廿三人の內なり。散位由良政義入道、御法名圓福寺殿阿義禪門と號す。御臺は足利義氏御息女なり。政義入道、御室山圓福寺御建立なり。御室山と號する事は、御室に於て御遁世の故なり。御本尊は河內國

通法寺觀世音、奥州衣河安部貞任・宗任御追罰の時、奥州新通法寺御建立。其以後八幡殿より、御三男義國公へ御讓る。夫より代々御嫡へ御相續。政義公、圓福寺に安置し奉るなり。

政義一男
政氏　新田由良太郎、法名靜義禪門。

二男
家氏　大館次郎。

三男
家貞　堀口三郎。

四男
貞政　市井四郎。

右四家に分るゝなり。

政氏嫡男
基氏　新田冠者由良六郎、法名沙彌道義。

基氏嫡男
朝氏　新田由良六郎。法名沙彌源光。

二男
氏光　朝氏養子、先達つて逝去なり。

朝氏嫡男
義貞　新田小太郎。滿行大權現化身。新田一族の中に、宜しき御養子無之故に、義重公三男里見太郎義俊公六代。里見大炊介義忠、五男里見五郎義貞公を、朝氏公の

御養子になされ、因レ之里見由良を御改め、新田小太郎と御名乗り、新田家御相續なり。後に左中將贈亞相正四位上官軍總大將なり。上野・越後・播磨三箇國主なり。本領八千貫なり。元德年中、由良の御館を、反町へ御移し、御居城なり。金山にも、御要害を御構へなされける。御生害後破壞なり。元弘三年、相州入道宗鑑下知として、楠正成追罰、河内國に至り、後醍醐天皇より、高時追討の綸旨を賜はり、虛病を構へ本國に歸り、旗を擧げ給ふなり。鎌倉の兩使出雲介・黑沼彦四郎、世良田に於て討取り、梟木せしむるなり。一ノ井生品大明神神前に於て、御一族五十餘人、二心なき神水を呑み、思召立ち給ふなり。御旗塚・起請塚・床机塚有レ之なり。反町の御城より、御出馬なり。生品大明神神前に於て、綸旨を拜讀し奉る。

高時追討の綸旨

被二綸言一偁、敷二化理萬國一者、明君德也。撥レ亂鎭二四海一者、武臣節也。頃年之際、高時法師一類、蔑二如朝憲一、恣振二逆威一。積惡之至天誅巳顯焉。爰爲レ休二累年之宸襟一、將レ起二一擧義兵一。叡感尤深。抽賞何淺(あさからん)。早運二關東征罰策一、可レ致二天下靜謐之功一者。綸旨如レ此。仍執達如レ件。

元弘三年二月十二日　　左　少　將

新田小太郎殿

諸軍勢謹承焉。　上野・下野・越後・信濃・武藏・下總・常陸の勢を催す。五萬餘騎なり。大將軍新田義貞・副將軍脇屋次郎義助・左將軍大館次郎家氏・右將軍江田三郎行義・上將軍堀口三郎貞滿・裨將軍大島讃岐守守之。　大館次郎宗氏は討死なり。

一、八幡宮、鎌倉より、大島郷に奉勸請、新田家御信拜なり。

一、觸不動明王、御長一寸八分。　義貞御身を離さゞる守本尊なり。金山城南榎澤と、天神澤との間の中段に、御堂御建立なり。　義貞御旗擧げ給ふ時に、越後・信濃軍勢御觸る事、此尊と、金山八王子の天狗過亂坊なり。　今安養寺不動尊是なり。　補佐の臣世良田三郎滿氏・侍所由良越前守光氏・長濱六郎左衛門治繁・執事船田入道。　四天王栗生左衛門賴方・篠塚伊賀守重廣・亘新左衛門甲勝・畑六郎左衛門時吉。　御馬廻十六騎黨あり。　杉原下總守・高田薩摩守・難波備前守・河越三河守・高山遠江守・山上六郎左衛門・葦塚七郎・青木五郎左衛門・同七郎左衛門・藤田三郎左衛門・同四郎左衛門・同六

郎左衛門・阿波新左衛門・薗田四郎左衛門・栗生左衛門・篠塚伊賀守、右十六人なり。

義貞公、高時禪門を亡し、御上洛後、上野・越後・播磨三國を賜ふなり。

義貞戰死

一、延元二年丁丑閏七月二日、越前國足羽郡藤島に於て御生害。行年卅七歲。長崎の道場に葬り奉る、法覺阿彌陀佛と諡し奉るなり。

義助病死

義助　正三位刑部卿。曆應二己卯年、北國軍敗れて、吉野へ參勤なされ、正三位刑部卿に任ぜられ、南海の官領となる。伊豫國へ御發向なり。此時副將軍は、大館左馬介氏明、上州の軍勢を率して、四國に下向なり。同三年庚辰年五月十一日、義助病死。御法名正法寺殿と號す。伊豫國國分寺より、上州新田郡脇屋村へ告げ來るなり。本は萬妙山聖寶寺なり。是より脇屋山正法寺と改むるなり。本尊は、正觀世音行基御正作なり。御長五尺三寸。義助御館の邊、御堂有之なり。

義貞長男
義顯　新田越後守。建武四年三月六日、越前國金崎にて、十八歲にて生害。法名勅號正英、母は安東の女なり。

次男
義興　新田德壽丸。號威光寺殿。奧州國司北畠黃門顯家卿御同道、一萬餘騎率して

義興自害

上洛。吉野内裏より、正五位上左兵衛督に任ぜらる。母は由良女なり。延文年中義宗・義治・義興右三人、越後國に御座しける。關東より内通の者ありて、三將の內一人、關東へ御出馬ありて、鎌倉基氏と合戰仕るべし。大將無之故に、合戰なり難しと、數度申越す故に、義興、越後より御出、暫く新田反町城に御座して、鎌倉攻の計策あり。同四年己亥十月三日、武藏國矢口渡にて、江戸下野守・竹澤右京が策にて御生害。御供には、世良田右馬介・由良兵庫介・大島周防守を始め、總じて十三人、從者供に沒す。仍つて死靈となる。新田大明神と崇め奉るなり。

義貞□男
義宗　新田武藏守。法名大幢了潤大禪定門。建武年中昇殿。武藏少將。母は安東の女なり。武藏野合戰敗れて、笛吹峠より信濃を歷て、越後に引退く。義宗・義治、越後より、出羽國羽黒山に籠居。後に四國に渡り、伊豫國土居得能を御頼み、彼國にて御逝去なり。新田大明神と崇め奉るなり。上宮・下宮是なり。

一、後醍醐天皇王子後村上天皇、興國元年御卽位。南朝吉野内裏、楠守護なり。同王子征西將軍宮良懷親王、肥後國御安座。菊地守護。同王子征東將軍宮宗良親王、上

野國新田由良に御所を構へて、御安座なり。義宗は、同所臺源氏館に御座し、守護なり。義貞御存命の內なり。後宮薨ず。圓福寺へ葬り奉るなり。宗良親王若宮國良親王。今圓福寺に五重寶塔二つあり。一は宗良親王、一は國良親王なり。其外新田家御代々の御石塔あり。

一、新田源氏類苗多し。村田・田島・江田・世良田・德河・由良・橫瀨・岩松・脇屋・大島・里見・鳥山・大館・堀口・山名・額田・田中・一ノ井・細谷・矢場・桃井・豐岡・金谷・大江田・綿打・西谷・廣澤・今井・小金井・小野・竹林・堤・羽川・靑龍寺・靑襲・綿田・荒井・泉・諏訪・堀越。

一、延元の頃、義貞・義助、北國御長陣の時、新田反町城は、大館左馬介氏明へ御預なり。是は父宗氏、元弘に、鎌倉にて本馬と戰ひ討死。莫大の忠勤の故なり。反町城の艮方に當り、寶藏寺建立。開山賴覺法師なり。

一、觀應二年の頃より、應永廿三年まで、岩松氏、由良館に居住。御屋形殿と申すなり。東上州七郡の領主なり。

一、義興御生害後、康安の頃より、新田御城は、新田四郞義一卿守護なり。鎌倉基氏

公と、六箇年餘合戰なり。其頃、岩松前司賴宥、鎌倉基氏公と一味し、故に四郎殿、終に敗北す。是より岩松家、東上州七郡の領主なり。

一、觀應の頃、烏山右近將監賴仲、猛威を振ひ、剰へ寺尾を押領す。岩松前司賴宥下知として、小此木馳せ向ひ追却し、漸く烏山の郷を宛行はる。西慶寺開基開山良覺法師、貞治元壬寅九月二十日遷化なり　烏山賴仲は、四郎義一の弟なり。

貞氏（義宗一男）　横瀬六郎。安養寺殿悟叟了道大居士。若宮・若君、信濃國御座なり。爰に横瀬黨の旗頭横瀬近江と、觸不動の別當鄉律師快尊兩人、密々に信州に參り、御兩公を、相州藤澤へ御供いたし、遊行上人の御弟子となし、若宮は六寮御兒と號し、若君は呑嶺律師と號し奉る。義宗公の若君なり。博學多才の君なり。程經て横瀬、竊に新田へ御伴ひ、反町御城の東に蟄居。村田鄉内呑嶺と申す處あり。又横瀬が計にて、金山東狸が入に移り、幽居を營み給ふ故、殿入とも、呑嶺とも申すなり。尙隱し奉る爲め、快尊の弟子となし、御隱し申すなり。觸不動御堂は、天神澤・榎澤の間中段、鍛冶曲輪の東なり。此處、呑嶺とも申すなり。快尊と横瀬と、守護し奉るなり。二十歲

新田横瀨の祖
大新田

の御時に、御還俗なされ、横瀨近江婿名跡に御立ち、横瀨六郎貞氏と申し奉るなり。是れ新田横瀨の元祖なり。義宗迄を、大新田と申すなり。

一、應永年中、貞氏坂中に御座の時、正月二日夜御夢に、田を耕すと御覽。翌日家臣横瀨左近大輔時昌出仕の時、御物語あり。御氏寺由良鄕圓福寺長諄阿闍梨へ、横瀨左近并大澤四郎治郎を遣して、御夢御祈禱御賴なり。阿闍梨曰、新春の田は、新田と合し申さる。新田御本意御安堵の御瑞夢と、祝し申すなり。則ち御祈禱修行なり。程なく新田御本意なされ、仍つて三畾白御幕・大中黑御旗、圓福寺に於て仕立て奉レ之なり。御吉例として、金山實城代々御家督の時、先づ圓福寺より、御幕御旗仕立奉レ之なり。依レ之代々御崇敬なり。

大中黑之寸法。但し新田御紋一文字一引龍といふ。四二打中に黑拉子引く。三畾白。一白二黑三白四黑五白。但し足利御紋二引龍といふなり。

一、將軍賴義公、安部貞任兄弟御追討の時、天子より、錦御旗に、金銀にて日月附けたるを拜受。之に依つて、日月文字、新田・足利兩家旗御紋なり。

一、金山御城は、人皇五十二代嵯峨天皇御宇、正三位宰相小野篁、東州鎭守府の爲め、

陸奥守に任ぜらる。關東下向の時、上州新田郡金山に、初て城を築き居住せらる。小新田山と申すなり。其後義貞公、要害を構へ給ふ。義貞公御生害後、破壞するなり。金山二つ池あり。大池を滿月と云ひ、小池を半月といふなり。

一、應永廿三年、上杉右衞門佐入道禪秀逆心にて、新御堂滿隆公、雪下殿持仲を大將として、關東諸士、上州には岩松治部大輔滿純、上杉禪秀と一味なり。鎌倉公方持氏公へ敵す。持氏公幷當管領上杉安房守憲基敗北して、相州小田原城主大森信濃守を御賴み、夫より駿河今河を御賴み、明春御進發なり。此時新田には、野內・橫瀨・林三家、御忠節を存じ、六郎貞氏公、其頃律師公と申す。金山坂中殿と申すを、取立て奉り、御一族御家臣舊好の衆中、悉く相催し、御忠義有之なり。新御堂殿・雪下殿・禪秀其外同意衆中、悉く滅亡なり。是より貞氏公、新田庄所の御領地となるなり。新田御本意と申すなり。此時橫瀨・野內・大澤・林、四天王と御定め、金谷・田村・藤生は、執職と御定め、其時分、御家中五つ備になされ、是より金山御城御築き、實城と號し、御在城なり。直衆千騎と申すなり。此時京都將軍義敎公、御敎書を、橫瀨六郎貞氏・大

石石見守・皆川山城守・舞木駿河守等に給ひ、岩松滿純を攻亡し給ふなり。岩松入道寶泉、桐生へ退き、後に鎌倉辻堂にて生害。其子家純、一ノ井感應寺に忍居す。是れ伯母尼寺なり。後に家純へ、一ノ井にて、二十貫文の地宛行ふなり。野內右近に御預なり。岩松家臣金井新左衞門・坂邊將監・今井筑後・菊地內膳。

一、岩松氏系圖

時兼　政經　經家　直國　滿國　滿純（治部大輔 入道寶泉）　家純　明純（治部大輔）　尚純（兵庫頭）　昌純（治部大輔）

一、應永廿四年、新田橫瀨六郎貞氏公、御本意の時、坂中屋形より、金山御城御取立て、實城と號す。是れ吉野の內裏の奧に、實城寺といふあり。故に若宮、金山に御安居、之に准じ實城と號すなり。

一、曹洞宗天眞和尚御弟子大見龍禪師、當國來臨の時、御歸依なり。則ち義貞公を始め、御一門追善の爲め、御法事執行なさる。是は義貞公、越前國杣山籠城の時、天眞和尚御昵近故なり。永享十二年七月、越前國足羽長崎の道場より、上野國新田金山

南麓へ、義貞公御尊骸遷るなり。即ち龍禪師導師として、義貞公法名金龍寺殿眞山良悟大禪定門と謚し奉り、御廟所御信拜堂御建立なり。其後大見禪師、越前國侘良慈眼寺移轉、又無底靈微和尙庵室に御安居なり。今に無底座禪石あり。此僧を以て、太田山開闢の導師たり。又無底禪師、越前國慈眼寺に移轉なり。其後貞國入道御子天台の沙門なりしが、還俗の思召あり。之に依つて、十五歳の御時、御父貞國公御勘氣にて、浪々なされ、越前國に至り、無底禪師を師として、在室長端と號す。前度金山にて、舊識の好故なり。而後に新田御招請なされ、齊家宗古岩松氏の菩提所、新野邑東光寺御入院、曹洞宗に改む。又金龍寺御建立、千人法幢執行なり。金龍寺・東光寺御兼對なり。金龍寺を本庵とす。後に東光寺は、宥主弟子差置き申されける。依つて金龍寺草創は、大見・無底兩禪師。伽藍法幢は、在室長端大禪師なり。

一、應永廿四年より、横瀨六郎貞氏公、東上州七郡の主公なり。金山・反町兩城主なり。群馬府那波・佐位・勢田・新田・山田・邑樂。

一、永享年中、京都將軍義敎公より、貞氏忠勤故、上野の守護職仰付けらるゝなり。

新田御本意とは、此御事なり。貞氏公、横瀨稱號の事、京都將軍家へ御伺の所、養父苗字横瀨を、暫く名乘るべき旨、仰出さるゝなり。

一、新田卅六騎　横瀨六騎　掃部今泉　左近田中　兵部矢場　平七同　加賀反町城外　隼人藪塚

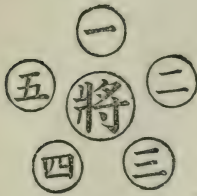
根岸武州　諏訪强戶　鳥山　野内上江田　泉矢田堀　坂庭脇屋　梶塚高林　吉田一ノ井　小此木境南　小

金井　毛呂中江田　大澤反町城外　金谷細谷　岡山仙石　田村仁田山　栃沼堀口　林下小林　矢部矢部　藤

生廣澤　西谷西谷　堀越廣澤　市場國府寺城金山出丸城代備中　富岡西金井　岡田東金井　小日向反町出丸本名岡田氏　菊

地一ノ井　堀口堀口　高山　薗田小倉　增田長岡

一、貞氏公御陣備圖、委くは金山切紙といふ軍書にあり。

貞氏公御小家五ッ備なり。唐御公六花備御用なり。新田車懸なり。敵へかゝる樣口傳あり。

魚鱗　鋒火　鶴翼

孔明八陣　方圓　偃月

長蛇　衡扼　鴈行

一、永享十年、鎌倉持氏謀叛故關東大亂。同十一年未年、京都將軍義教公、十萬餘騎を率して、東州に御發向。同年七月、終に持氏討負け切腹なり。若君天王丸・賢王丸・泰王丸、上方へ召され、濃欅井の道場にて、之を討つなり。四男春王丸成氏、長尾金吾入道賢昌取立て、古河に遷し奉る。辰崎に御所を構へ、古河公方と號し奉るなり。

貞氏嫡男
貞俊　横瀨六郎信濃守。法名曹源寺殿等林了齋大居士。今泉邑御隱居、御館前下馬橋あり。

貞俊嫡男
貞國　横瀨新六郎信濃守入道。應仁二戊子十二月三日、武州須賀にて討死し給ふ。緣應寺殿傑宗了順庵主と號す。御討死に付きて、京都公方義政公より、御追感御內書。御嫡男國繁公へ遣されけり。其文曰、父信濃入道討死の由、自分にも蒙レ疵之段、痛敷被レ存。且數輩損之旨、御文言有レ之。東金井寺入一寺建立なり。金山南金井の

上、甲山の坂中は、丸屋敷と申す出丸有之。是は東南を見る時の場なり。貞國入道、御隱居所なり。則ち甲山龜甲山緣應寺を御建立なされ、金龍寺の末寺なり。金龍寺領目錄に、緣應寺領所共に有之なり。

國繁　橫瀨新六郎信濃守。文明十戊戌年、吉澤鄕內萩原に御館を構へ、御隱居なされける。鹿島大明神御勸請なされける。長享二戊申年五月十五日御逝去。笑山宗悅大居士と號す。

二男
貞繁　矢場左馬介。倉澤殿の御養子となり、法名笑岩性忻居士。惠林性智大姉、笑岩山惠林寺御建立なり。開山大年宗彭大和尙、金龍寺三世なり。

國繁嫡男
業繁　橫瀨六郎信濃守。上野國司、永正の初、太田道灌入道を招き、金山御城御要害、御相談なされける。總堀御普請奉行今井左近繁信なり。道灌屋敷の跡あり。永正八辛未八月八日逝去。法名靈雲寺殿義山宗忠大居士、飯田鄕に有之なり。

業繁嫡男
國經　橫瀨六郎信濃守。上野國司、大永元壬午二月二十日逝去なり。御法名白毫寺殿大榮宗功大禪定門。村田鄕に有之なり。

國經嫡男
泰繁　横瀨六郎信濃守。上野國司、天文十四己巳九月九日、野州壬生にて討死。御法名龍得寺殿威嶽宗虎大居士。江田鄕に有之なり。御先祖貞氏公より七代、横瀨と御名乘なり。長尾照長、新田城を掠むる事あり。御防ぎ、御城堅固に御守なり。享祿二年根來二王坊、始めて鐵炮を持參し御指南。其弟子般若坊住居の跡有之なり。
二男
基繁　泉中務大輔。金山御城の內、西城殿泉伊豫守基國公、御子無之。因之、泰繁公御舍弟中務大輔基繁を、基國の御養子となさる。矢田堀村領主なり。法名山英良海居士と號す。基繁公御子伊豫守繁俊、法名瑞岩寺殿前豫州大守傑翁宗英大居士。慶長二丁酉九月十三日、御逝去なり。瑞岩開山金龍七世梵鶴大和尙なり。

成繁　由良六郎信濃守。上野國司。天正六年六月晦日御逝去。御法名鳳仙寺殿中山宗得大居士と號す。此君の御代に、由良御改なり。是れ御先祖の御名字なり。御當家中興の良將。其頃常州佐竹・房州里見・上州由良・少將に任せらるゝなり。天文十五丙午二月上旬、成繁公、那和御合戰。那和太郞廣澄新田家に背き、剩へ長尾家に與力し、家來井田笹兵衞・松本丹波・新井七騎・九尾・西津田・佐野・眞見塚二百餘騎、

境町邊迄出張す。是れ尾張、後詰を頼む故なり。新田先手高山・金谷・堀越等五百餘騎馳せ向ひ、合戰度々有之故に、兼て小此木左衛門方へ內通す。之に依つて、横鑓を入れける。那和方敗軍なり。廣澄自害す。弟廣光は牢人して、甲州へ落行く。花澤合戰の時に、那和無理介、隱なき侍なり。那和合戰の時、新田方七本鑓とて有之、正田平左衛門・藤生四郎治郎・大澤監物・林杢藏・田村五郎八・岡田助內・廣町久助、右七人なり。那和の城は、林伊賀守に御預なり。死後に、横瀬勘九郎殿に御預けなり。同年、甲州信玄公、戸石合戰より、直に笛吹峠へ出張なり。由良公御發向なり。上杉方衆藤田・諸岡・萩谷・筑田出向ふなり。甲州先陣板垣殿なり。同年四月廿一日、武州川越夜軍。上杉憲政敗軍なり。北條家勝利。永祿二己未年三月、長尾謙信、沼田城主北條孫次郎を攻落し、厩橋城主北條丹後を攻落し、長尾謙忠を籠置く。近士の人質を取置き、西上州平井城に住す。同年、謙信東上州へ發向。大胡城主増田伊勢・小奈淵圖書・山上伊豆を攻落し、増田は、横瀬掃部緣類なる故、新田に來り、長岡に住す。山上は、北條幕下となり、膳備中守案內者にて、謙信東上州に出張して、廣澤茶臼山

上杉憲政敗軍

の取出を攻落し、在番衆悉討死す。夫より小俣御館を攻落す。小俣殿は、小田原へ御越なされける留守なり。夫より足利を御通り、佐野へ御入なり。歸りには、金山南を御通り、沖村邊にて、大鼓を捨てられける。今沖村延命寺に有之。夫より二宮を放火して、越後へ歸るなり。膳備中案内して、當地へ引入る事、近邊といひ、其意を得難し。之に依つて、同八月廿二日、由良公、膳の城を攻亡し給ふなり。大澤下總守に、千貫の地を添へ、籠置くなり。同年、北條氏政より、黑川山中へ御書を通はさる。依之黑川衆、小田原へ與力す。故に新田公より山中を攻む。終に黑川衆、新田へ隨伏なり。同三年三月上旬、謙信、西上州平井城に住す。上杉方太田三樂齋、關東諸士へ廻文を通はし、各平井の城へ參勤。謙信は、上杉憲政公の御養子となり、小田原を攻む。北條勢、態と引入りて戰はざれば、夫より鎌倉鶴岡八幡宮にて、拜賀を執行ひけるが、忍城主成田下總守長泰の無禮を怒りて、謙信扇子を以て、成田が顏を打ちし故、大に憤り、己が居城武州忍城へ引籠る。是を見て關東諸士、謙信を見放ち、己が居城に逃歸る。上杉の陣、俄に無勢になりにける。北條氏康此變を聞き、時を得

たりと勢を出し、上杉と戰はる。越後勢散々に戰負けて、上州平井城へ引退く。夫より越後に歸り、同五月下旬に上洛して、京都公方義輝公に謁し、關東管領職幷に御諱輝字給はり、網代輿・文裏書・朱柄傘御免。管領上杉輝虎入道謙信と號す。同年八月、安良岡馬場へ御出で、矢場鹿毛を乘らせ御遊覽なり。御家中御馬揃なされける。同年、氏政武州へ出馬。松山城主太田三樂齋を攻め給ふなり。是は去三月、關東中へ廻文の故に、景虎大將として、小田原を攻むる意趣なり。三樂齋敗北して新田へ來り、成繁公を御賴み申し、北條と數度戰なり。新田より御加勢、御先手は小泉・大澤・林・岡山・梶塚强戰す。故に御利運なり。之に依つて、三樂齋、松山歸城なり。同五壬戌年三月上旬、深谷より掠め來る由、武州横瀬七郎方より、正田平左衞門方より、金山へ註進有之。則ち矢場殿御陣代御合戰。新田御勝利。是れ河瀬合戰といふなり。此正田平左衞門は、去る天文十五年、那和合戰の時、一番鑓を仕る故、横瀬・新谷古市・大塚・中瀬・高島・石塚、右七村と定め、今度又比類なき高名なり。那波鄕の內上宮を御加恩、御感狀下さるゝなり。直衆高名の覺、金谷出雲十七度、金子重助十二度、

江戸五郎左衞門八度、矢場殿衆の内水野萬喜九度、倉澤伊豆七度。新藤新四郎十五度、首一つ。淸水彥内十四歲、首一つ。同九丙寅年、甲州信玄公、笛吹峠へ出張。成繁公御出陣。御手勢雜兵一萬三千餘人、板鼻の陣場より御取懸り、合戰有ㇾ之、碓氷を境としての戰なり。終に新田方御利運なり。甲州方退去す。同十二年十月二日、上州・總州・武州・野州・古河公方御家來上杉家郎從等、謙信を大將として、甲州信玄を語らひ、小田原北條氏政と合戰あり。酒匂を放火し歸陣なり。北條家にも、松田・山角・上野・伊勢・福島・大同寺等出合ひ防戰なり。此時成繁公御病氣故、御出陣無ㇾ之。御名代として矢場殿なり。同年、氏政より、矢場鹿毛御所望。御使者石卷彥四郎遣さるるなり。一郡にも替へ難き名馬故、進せられざるなり。元龜二辛未年、桐生大炊介と申すは、佐野祐綱公の御隱居所なり。大炊介祐秀迄七代なり。祐秀實子なき故に、佐野小太郎宗綱・舍弟又次郎殿を御養子となし、大炊介殿の家督續ぎ給ふ。則ち佐野より御附人兇鳥館主高瀨與惣左衞門遣されける。御普代家老威勢を論じ、何事も不和にして、評定決せざるなり。元龜二年、新田と桐生水論有ㇾ之。往古より廣澤村

松原に、渡良瀬川を掘入れ、是を新田堀と號して、新田の用水なり。桐生より新田へ申越しけるは、當年より永百貫文、水錢と號して出すべき旨なり。新田方よりの返答には、古より流れ捨つる水に、水錢出すべき謂れなしと、蛇度挨拶あり。桐生方之を聞きて、松原瀬を取拂ひ大口切塞ぎ、十五間に馬蹈七間に築立て、松苗五本並木を植うるなり。新田方是を見て、右築立てたる並木を取拂ひ、二十間高さ七間の關を築立て、用水本の如し。水番として、侍大將藤生紀伊守、馬上二十騎・弓大將林丹波守足輕五十人・鐵炮頭關口尾張足輕三十人にて、强勤番す。桐生方是を見て、元宿富士山より、桐生元來要害の堀有ㇾ之。今度堀を深く掘り、渡良瀬川塞き入れ、桐生川に落し入る。依ㇾ之新田へ用水行かざるなり。之に因つて、桐生の城攻亡すべき評定有ㇾ之。元龜二年、新田公桐生退治として、御陣代矢場城主横瀬兵部少輔殿御手勢百餘騎・實城衆二百餘騎、都合三百餘騎。先陣横瀬隼人、後陣林左京、侍大將田村佐渡守・堀越内藏介・大澤監物・金谷因幡守・旗奉行高山甚平・岡田宗雲、鑓奉行林左兵衞・藤生河内守、弓頭高橋丹波守・金井出雲守・近藤出羽守・齋藤修理亮、鐵炮頭金子重助・

飯塚淡路守・富岡内匠介・妙央寺開山長俊和尙、只上原にて勢揃して、密に葉鹿諏訪瀬を渡り、小俣の後大平を越え、小友澤へ出で、上菱段澤を越え、三口へ攻入るなり。桐生方、もとろの岸に柵を振り、寄山木戸は、元宿住新居美濃守之を堅む。笛吹木戸は、下菱一色住山越出羽守之を堅む。富士山木戸は、書上駿河守之を堅む。町屋木戸大手谷民部堅む。山王木戸は、平井澤住茂手木右馬介之を堅む。新田方搦手大將藤生紀伊守・金谷因幡守、東小倉より、山通りに、城の後山より、眞逆に攻入り、桐生にも、上泉・津府子・荒巻等出合ひ防戰すと雖も、叶はずして。桐生又次郎殿、夜に紛れて、多良澤より、佐野へ落ち給ふなり。新田勢城を乘取り、金谷・藤生に御預けなり。同三年、由良國繁公、戌年御生れ故、綿打村妙滿山大慶寺・大館村呑嶺山安養寺へ、不動尊御奉納なり。天正元癸酉年四月十二日、甲州信玄公御逝去なり。新田より御悔として、林與七・田村五郎八兩人を遣されける。是れ軍使役なり。取次馬場民部なり。是は道筋武田家の家風斥候(ものみ)なり。同二年、越後國大守上杉輝虎、東上州へ發向。寺尾邊にて、小金井・津久井等出合ひ高名。田中就橋にて、横瀨・野内・林・大澤

桐生勢敗軍

信玄逝去

等各後詰故、新田方御利運なり。桐生へは、直江山城守攻め來り。藤生・田村・高橋・堀越・關口等出向ひ勝利なり。謙信、山上より艮へ去る。是は永祿十二年小田原攻の時、成繁公御出陣無ㇾ之故、遺恨を以てなり。同四丙子年、成繁公、桐生御城へ御隱居なり。金山御城は、御嫡男國繁公へ御讓なり。

國繁（成繁嫡男）由良六郎、信濃守。上野國司。同年秋、織田信長公、江州安土天守御祝儀として、新田より、矢場鹿毛を牽かせ之を進らすなり。御使者は、藤生新助・瀧主水なり。織田の家風幷道中、城下斥候の爲なり。同六年六月晦日、成繁公御逝去。同七月下旬、信長公御弔として、使者高淵新兵衞・目賀多四郎七を遣されける。御進物には、矢の根三百本・御誂矢根千本、御屆なり。是は關東の新田家風斥候の爲なり。同八年、厩橋城代長尾玄意齋を改めて、伊勢崎城に入置くなり。依つて新田家より、伊勢崎城を攻落し、横瀨勘九郎殿へ御預けなり。那波は舟渡場故、在番城仰付けられける。同九年八月上旬、國繁公御舍弟、矢場殿へ御入り、御馳走として、實城衆御供五十人を御選び、陪臣によらず、御集なされて、的弓なされける。寄合と申す處、矢場に有ㇾ之な

信長弑せらる

り。同十年、信長公、甲州を攻亡し給ふなり。依レ之瀧川左近將監一益に、上信兩國を給はり、厩橋の城に入部して、關東の管領に補せられける。諸士悉く瀧川に隨ふなり。同六月、信長公京都本能寺に於て、生害せし故、瀧川上洛して後に、關東の諸士、悉く北條家に從ふなり。由良・長尾兩公、北條家に隨はず。依レ之氏政僞り計りて、由良御兄弟を擒とせし。猶大軍を催し、金山を攻め、三年に及びて陷らず。金龍寺・長輪寺、小田原へ參り歎きし故、由良公御歸城なり。

秀吉小田原を攻む

同十八年、太閤秀吉公小田原攻。三月十九日京都を御立。同廿九日に合戰始まる。北條家百餘日籠城。新田家にも、小田原の催促に應じ、天正十七年十二月、三百餘騎加勢出されける。御名代として、堀越十郎左衞門、（氏政公御朱印、今に子孫の家にあり、）侍大將藤生紀伊守馬上百騎、旗奉行高橋丹波守、鑓奉行大澤四郎右衞門、弓奉行遠藤與十郎、鐵炮奉行塚越六郎兵衞、足輕百餘人・小人二百餘人遣されける。小田原品川口を堅めけるなり。御母公は、北條に恨を含む事ありて、其讐をせんと思召立ち給ひて、御嫡孫由良新六郎殿を御召連れ、三百餘人を引具して、桐生城を出づ。碓氷口の寄手大將前田利家・上杉景勝、此軍勢の先手に

小田原落城

新田家離散

加はり、松枝の城攻にも、軍忠を勵しける。同四月二日、小田原へ參向して、右の仔細を申上げ、秀吉公に謁す。相從ふ輩には、柳井四郎右衞門・大澤美濃守・根岸參河守・縣近江守・森隼人佐。一族には矢場・鳥山等を從へける。秀吉公仰せけるやうは、汝が子供兩人は、朝敵北條に與力す。然るに汝は女の身にて、北條に從はず、嫡孫幷に家人を率ゐて、碓氷口先手に加はり、松枝にて忠戰、唯今是まで參る事、甚だ以て神妙なり。老母の武勇は、今度に限らず、信長卿逝去の後も、氏政・氏直僞り計り、由良兄弟を擒とせしに、汝は猶も從はず、金山・桐生兩城を抱へ、氏政が大軍にて、三年の間圍まれ乍ら、兩城共に陷らず。終に其敵を追拂ふ。誠に希代の高名なり。今亦早速味方に參り、拔群の働なり。今度北條退治して、老母方への忠賞には、常陸國牛久にて五千石を給ふべく、嫡孫を段々に取立つべしと宣ひて、直に契約し給ひけり。小田原落城の後、關東の諸士、悉く所領を召上げられ、牢人となりける。新田公にも、常陸牛久御移なり。應永廿四年より、天正の末に至り百七十餘年、上州の守護國司なり。同十九年二月九日、國繁公、去年小田原與力して、秀吉公に敵しけれども、

御母公の忠節他に異なりとて、大坂へ召出され給ふなり。嫡子新六郎殿は、家康公へ召出され、御小姓を勤めけるが、成長して後、江州にて五千石を給はりけり。

附　錄

一、新熊野山觀音寺、當山修驗宗開基新田義重公。開山小坂上人。建久年中立。小坂坊・館坊・大谷坊・梅元坊・池本坊・

一、新長谷觀音、金山艮方有之。今館林善道寺にあり。

一、大日堂、東金井鄕金山の麓、足利大日相向に立つなり。鍐阿山胎藏寺といふなり。

一、綿打村妙滿山大慶寺、開山空覺上人。開基新田公。

一、細谷鄕如意山敎王寺、開山妙忍律師。開基金山の城主國繁。金山四代目なり。

一、由良醫光寺、開基義興公。威光寺殿と號するなり。

一、小金井村東雲寺、開山覺翁能正大和尙。開基古河殿。中興小金井四郎右衞門。法

名春谷宗馨居士なり。本尊藥師如來、野老にて煉玄なり。御長八寸座像、定朝の正作なり。鰐口銘、上野國薗田庄米寺へ寄進。永祿七甲子九月廿二日珠益沙門とあり。

一、飯田村靈雲寺、本尊釋迦如來。運慶の作。

一、臺鄕大倉山觀音寺、本尊觀世音。行基御正作。大同二年御建立。開基行基菩薩。中興林氏。

一、太田山金龍寺、開山在室長瑞大和尚。前住始祖。大見禪龍大和尚禪師。

一、木崎村大通寺、開山大拙大和尚。金龍寺八世なり。開基泰繁公御臺。蘭室玄芳大姉。天正四年六月二十日。

一、丸山靑瀧山淸光寺、開基義貞公。越後國米山藥師御移なり。

一、大島鄕東陽寺、開基大島氏。

一、藪塚村藤光山長圓寺、開山自心法印。開基藤生氏。

一、同所羽黑山胎養寺、開山玄惠法印。出羽國羽黑へ移る。

一、廣澤村大雄院、開山日榮春作大和尙。開基藤生氏。

一、下久方村桐生山鳳仙寺、開山佛光淨照禪師（金龍寺七世觀芝梵鶴）。開基由良信濃守成繁公。

一、荒戶

一、同田中山淨運寺、開山存譽上人。開基堀越氏。

一、同所光明寺、開基行基菩薩。中興木村氏。

一、植木野村宗金寺、寶物弘法大師御作。まな板名號有之。開基堀越淡路守。

一、矢場村意林寺、開山大年宗彭大和尙（金龍寺三世なり）。開基矢場氏。

一、瀧山不動院、本尊不動尊。三井寺開山智證大師御正作なり。

一、世良田村長樂寺、開山榮朝大禪師。開基世良田殿。

一、同所總持寺、開基世良田殿。

一、東金井永福寺、開山洞雲天巽大和尙。開基長尾入道賢昌。

一、今泉村曹源寺、開基貞俊公。中興開山天安睦大和尙。中興開基以千良勝居士。

一、一井寶珠山勝光寺、本尊阿彌陀佛。定朝の正作なり。開基尼御臺所。大御堂御

造營。

一、大館村呑嶺山安養寺、開基貞氏公。

新田正傳記　大尾

新田正傳或問

上野國新田郡寺尾城開闢主公

新田大炊助正五位上式部大輔源朝臣義重公。御法名上西公。八幡太郎鎮守府將軍正四位上兼陸奥守源姓義家公三男式部大輔茂國公御嫡男なり。上州主公。武州所所・東海道十五箇國管領なり。寺尾七堂といふ所あり。古、大光院殿舊跡なり。堂の東に寺尾御城あり。舊跡地藏窪の邊なり。此所に地藏あり。弘法大師御作なり。寺尾山聖鷹にあり。治承四年庚子、賴朝公、東州御旗御擧の節、補佐の臣なり。大功御遂なり。義重公、女子を以て、惡源太義平に嫁さしめ、義衡御生害の後上州に住す。後師六郎殿御内室。建久四年四月廿八日、源將軍賴朝公、那須の御狩より上州に渡御。上西公、新田館に於て御遊覽。此所より直に鎌倉へ還御なり。建仁二年正月十四日御逝去。御法名義重山新田寺大光院殿鎮守府將軍と贈す。方山西公大居士と

諡し奉るなり。

若公五人

義兼公　新田太郎藏人。上州。御法名鎭義。大島氏嫡家。

義範公　山名。遠州又上州。綠野郡の內にあり。

義俊公　里見。上州碓氷郡の內にあり。

義季公　德川四郎。上州。御法名英雄公長樂寺。開基新田郡の內にあり。

姫君　萬德寺開山淨念比丘尼。寬元四年卒去。

義經公　額田五郎。武州。

義重公四人臣下　沼尻（武州）。小金井（上州）。志摩（上州）。橫瀨（武州小野氏）。

橫瀨七鄕　橫瀨・新谷・古市・大塚中瀨・高島・石塚

義兼公若君義房公　新田六郎冠者。御法名家義。

建久二年十一月十日、三島大明神に神馬を奉る。上使新田六郎。

義房公同姫君　後禪尼新田と號す。

新田政義由良を稱す

足利上總介義兼公御法名鑁阿寺殿二男義純公、畠山重忠公御養子なり。遠江守義純公と號し奉るなり。此殿御臺なり。玆に因り、義純公二男岩松藏人時兼公と申すなり。御婚禮の節、御化粧免として、岩松鄕添へ進せらる。故に斯の如く申傳ふるなり。

義房公　若君

政義公新田太郎、寛元二年上京在番の砌、俄に御遁世なり。事の由、城の九郎泰盛にも達せず、六波羅へも奏せざるの由、鎌倉へ註進ある故、御評定ありて、新田所領、之を沒收遊ばさる云々。程經て關東へ御下向。最明寺殿を以て、宗尊親王將軍の宮へ、遁世の次第、官名左衞門藏人御願ひ叶はざる故、御室に入り御出家。依之本領半分拜受。寺尾御館の領內由良邑臺原へ御遷りなされ、新御館御城在邑遊ばさるゝなり。故に此所を、臺源氏と申すなり。是より以來、氏を由良と御改めなり。最明寺殿時代、橫瀨三郎太夫爲淸評定衆廿二人の內なり。散位由良政義入道御法名所義御逝去の後、圓福寺殿と謚し奉り、御室山と號さるゝ事、御室に於て、御遁世の故なり。御內臺足利上總介義氏公の御女なり。御本尊河內通法寺觀世音、奥州衣川安倍貞

任・宗任御追罰の節、奥州新通法寺御建立。八幡太郎義家公三男義國公へ渡し、夫より御代々御嫡子へ御相續。政義公、圓福寺へ移し奉るなり。靈驗殊勝の事、礡計し難き者なり。

政義公若君四人

嫡政氏、新田由良太郎。御法名靜義禪門と申し奉るなり。二男大館治郎家氏。三男堀江三郎家貞。四男一ノ井貞政。是より四家に分る。

政氏公若君

基氏公。新田冠者由良六郎。御法名沙彌道義。元弘四年六月十二日、行年七十二歳にて卒す。

基氏公若君

嫡朝氏。新田由良太郎。御法名沙彌源光。二氏光。朝氏公の御養子となり、先達つて御逝去なり。

新田御一族中に、宜しかるべき御養子なるの故、義重公三男里見太郎義俊公より六

代、里見大炊介義重公五男里見五郎義直公、御養君遊ばさるゝなり。義重公より七代の孫なり。里見由良を御改め、新田小太郎義貞と御名乘り、新田家御相續なり。後（左中將宰相と贈す）榛名滿行宮大權現化身なりと云々。脇屋義助公、後に出生なり。義貞公八千貫の領主なり。三萬石餘なり。後に上野・越後・播磨三箇國主なり。正四位上官軍總大將なり。元德年中、由良御館出御。反町御城御開闢、府城遊ばさるゝなり。金山御要害、籠城の爲めなり。義貞公、越州足羽にて御生害の後、金山御城破壞なり。然る所に、義宗公若君貞氏公、上杉禪秀滅亡なされ、應永廿四年、新田御本意の節、金山良坂中館より、金山再興。其後由良中山公、破損御普請なされ畢。

反町、古は一ノ井鄕內なり。

金山の名稱

金山と號さるゝ事、金山彥尊敷地故なり。

新田山の名稱

新田山と申す事は、新田郡の內にある故なり。

金山開山と申す事は、人王五十二代嵯峨天皇御宇、正三位宰相小野の篁公、東州鎭守の爲め、陸奥守に任じ、關東御下向の節、上州新田郡金山城、初めて開主故、金山開

山と申すなり。小新田山とも申すなり。總じて小の字を用ふる事あり。下野國足利郡高野學校開基なり。亂ゆゑ故、大日の內、政所空屋敷へ移る。長尾景仁公時代なり。

金山池あり　大池は滿月。小池は半月。

義貞公、元弘年中、相模入道宗鑑下知として、楠正成追罸、河內へ御上り。其節後醍醐天皇より綸旨拜受。聊か虛病なされ、黑沼彥四郎入道、世良田に於て討取り、梟本せしめ、一ノ井鄉生品神前にて、御一族中五十四人、二心あるまじと、神水を呑み、思召立ち給ふなり。御旗塚・起請塚・机塚之あり。反町城より御出馬なり。生品大明神反町より、北方の赤城大明神勸請なり。本地は大己貴尊なりと云々。元弘三年五月八日卯刻御立なり。綸旨、生品神前拜讀。諸軍勢謹んで承る。

被綸旨偁、敷化理萬國者、明君之德也。撥亂鎭四海者、武臣之節也。頃年之際、高時法師一類、蔑如朝憲恣振逆威。積惡之至、其誅已顯焉。爰休累年之宸襟、將起一擧之義兵、叡感尤深。抽賞何淺覽。早運關東誚策、可致天下靜謐之功者。

綸旨如レ斯。仍執達如レ件。

元弘三年二月十一日　左少將

新田小太郎殿

鎌倉攻

上野・下野・越後・信濃・下總・常陸催勢五萬餘騎。

大將軍義貞公新田小太郎殿。後羽林將軍官軍總大將。贈亞相金龍寺殿奉レ諡。

副將軍義助公脇屋治郎。後正三位刑部南海西海管領。正法寺殿奉レ諡。

左將軍宗氏公大館治郎。鎌倉極樂寺功通本馬合戰討死。安養寺殿奉レ諡。寺所館跡あり。

右將軍行義公江田三郎。後丹後守。館跡中江田にあり。

上將軍貞滿公堀江三郎。後美濃守。館跡正覺寺にあり。

禪將軍守之公大島讃岐守。館跡金山南にあり。大光殿御建立の所と云々。

一、八幡宮、鎌倉より、大島鄕へ勸請。新田家拜する所なり。

一、觸不動の御事、御長一寸八分の尊像なり。義貞御身を離さゞる御守本尊なり。

金山の南、榎澤と天神澤との間の山の中段に、御堂御立なり。閻浮檀金の佛作なり。義貞公、御旗御擧の節、越後・信濃の軍勢御觸の事。金山八王子天狗過亂坊と不動尊御觸と申傳ふるなり。今安養寺に御在尊なり。

新田源氏類苗

但村田・田島は岩松新田。江田は世良田新田。泉は甲斐源氏。

徳川・世良田・由良・横瀨・岩松・脇屋・大島・里見・鳥山・大館・堀口・山名・額田・田中・一ノ井・江田・細谷・矢場・桃井・豐岡・金谷・村田・大江田・大井田・綿打・田島・西ノ谷・廣澤・今井・小金井・泉甲斐源氏・諏訪・小野・竹林・若桃・小野・堤・羽川・青襲・青龍寺・船田、武州にあり。

義貞公補佐の臣。滿氏世良田三郎。後光錄。

侍所　光氏。由良越前守。上州。新田郡由良郷領主。治黨。長濱六郎左衞門殿。武州。八幡山邊。長濱領主。

執事　義政。船田入道月岸養子なり。船田長門守經政。本苗新田大島氏。

四天王　栗生左衞門尉賴方(上州)。篠塚伊賀守重廣(上州)。亘利新左衞門早勝(奥州)。畑六郎左衞門時吉(信州)。

義貞公御馬廻十六騎黨

松原下總守・高田薩摩守・難波備前守・河越參河守・高山遠江守・山上六郎左衛門・善斗堀七郎・青木五郎左衛門・同七郎左衛門・藤田三郎左衛門・同四郎左衛門・同六郎左衛門・川波新左衛門・薗田四郎左衛門。栗生・篠塚、此黨にも入るなり。

義貞公若君三人あり。

嫡男義顯公。越後守。安東腹。

二男義興公。徳壽丸左兵衛督。御法名正英公。敕號新田大明神。由良腹。

三男義宗公。左兵衛少將兼武藏守。後中將。建武年中昇殿。御家嫡。安東腹。御法名大嶝了潤大禪定門。

義顯公、建武四年三月六日、越前國金崎にて、行年十八歳にて御生害。新田郡新野村瑠璃山東光寺。濟家宗にて、岩松家代々御菩提所なり。岩松藏人時兼公以來、寶泉公に至る迄、由良屋形御座なさるゝなり。然るに岩松滿純、桐生へ立退き、寶泉野御改め、宗良親王御所なり。同所臺源氏御館新田義宗公御座なされ、宗良の宮守護遊ばされ畢。若宮國良親王。新田義貞公御孫義宗公御子横瀬六郎貞氏公、應永廿四

年、新田御本意の時節、金山艮坂中屋形より、實城御取立て、御在城なされ候。其後曹洞宗天眞和尙御弟子大見禪龍遍參の節、金山へ山居なさるゝ處、御見參候て、禪法御聞き候て、御歸依なされ、則ち義貞公・義宗公御兄弟御一門、並郎從眷屬追移として、御法事執行。則ち大見禪龍導師として、相勤められ候。御廟所御位牌堂御建立なされ候に付、義貞公を、金龍寺殿と號し奉る者なり。其後大見禪龍、越前方へ移轉なされ候。亦其後無底靈徹、右の庵室へ山居なされ候。今に無底池座禪石在之、此僧を以て導師として、太田山を開き、貞氏公御子横瀨新六郎・左馬助貞俊・其子横瀨信濃守貞國入道・緣應了順の子在室長瑞は、始め天臺沙門是なり。還俗の思付起り候に付、十五歳の時、御父の勘當にて、越前の方へ浪々、宅良慈眼寺に、底無の住持せられ候に付、先年金山舊識好弟子となり、禪法修行し、在室長瑞と號し候。其後新田へ御招きなされ候。其頃岩松寶泉の子孫淨喜と、岩松菩提所新野濟家東光寺と不和出來。其上岩松家寶泉以來、謀叛企に付、京都より鎌倉・新田・横瀨殿の家臣四天王の内、野內右近將監時經に御預け、由良卿內室、泉屋鋪に差置き候間、東光寺

も寺領無之、衰微候得共、古き好にて、師旦の間に候處、不慮の不和故、東光寺を捨て、出奔せられ候。依之寺領山林は、領主へ上り申すに付、濟家宗相止み曹洞宗になり、在室長瑞入院法幢なされ修行候。其後金龍寺の伽藍を建立なされ、千人法幢修行なされ候。金龍寺と東光寺、兼持たせられ候。其内金龍寺を以て、本庵東光寺に看守し、弟子を差置かれ候。依之金龍寺草創は、大・見無底兩禪師にあり。伽藍法幢は、在室禪師にて候に付、開山在室とも申候。貞國公の御子信濃守國繁入道笑山宗悅公御代なり。天正十八年八月、新田實城九代由良信濃守源國繁公、常陸國牛久へ御移の時、金龍寺を引移し申候。其時大拙和尚、牛久にては太田山を無用になされ、大見山と號し、額を打ち申され候。國繁公御覧なされ、何國へ移し候とも、右の好を以て、太田山と號し、然るべき旨仰せられ、今以て太田山と號し、金山艮の坂中は、貞氏公始めて御居所、後に金山實城御取立御移り。依つて御代々新田金山實城殿と申候。金山の南、今井の上、甲山の坂中は、丸屋鋪とも申候出丸にて御座候。南東を見晴す場なり。貞國入道緣應了順御隱居所なり。則ち甲山の內、龜甲山緣應寺

を御建立なされ候。金龍寺の末寺なり。金龍寺の地領目錄に、緣應寺領所の書付に小緣應寺とあり。應永年中、貞氏公、坂中に御座候時、正月二日の夜夢に、田を耕すと御覽なされ候て、翌朝家臣四天王の內橫瀨左近大夫時昌出仕の節御物語。御氏寺由良圓福寺長淳阿闍梨·橫瀨左近大夫幷大澤四郎を遣され候て。御夢想御祈禱仰付けられ候。新春の田は、新田と合せ申候て、新田御本領御安堵の瑞夢祝ひ申され候。御祈禱修行なされ候。其後程なく新田御本意遊ばされ候。仍つて三畾白幕·大中黑御旗、圓福寺に於て御仕置差上げられ候御吉例に付、金山實城御代々御家督の時、先づ圓福寺にて御幕·御旗仕立て差上申候御例なり。依之御代々御崇敬御歸依なり。

大中黑寸方。但新田御紋一文字一つ引龍といふ。四つ折に中二つ黑し。

三畾白は、五畾の內。一白二黑三白四黑五白上中下白に四黑。但足利御紋、二文字二つ引龍といふ。

新田拉子引。⧓。

新田將軍源氏義宗公。御法名大幢了潤大禪定門と謚し奉る。

貞氏公。呑嶺律師公。御法名悟叟了道大居士と謚し奉る。

岩松殿、觀應二年の頃より應永廿三年迄七十餘年、東上州御屋形と號す。應永廿三年、上杉禪秀謀叛。岩松滿純一味故、京鎌倉の大樹より、舞木駿河守持廣・新田・横瀨・坂中の貞氏公、大石石見・皆川山城守攻戰ふ。岩松家衰後、六郎貞氏公、新田所々安堵遊ばされ畢。是れ新田御本意と申すなり。

一、御紋、多田滿仲公より、大將軍賴朝公に至るまで龍膽。河内守賴信公、御法名蓮心。伊豫守賴義公の信海。陸奥守義家公御法名信了。河内國守坪井城主義貞公守御本尊、御長一寸金佛、聖觀音通法寺の觀音御信仰。弘法大師の作、御室山にあり。圓福寺千手觀音政義公守御本尊なり。

一、將軍賴義公、安倍貞任御追罸の御時、天子より錦の御旗、金銀にて日月を附けさせ拜受。依之日月文字、新田・足利の御紋なり。安倍賴時、衣川城主貞任・宗任が父。の貞任は厨川城主、宗任、鳥の海の城主なり。

一、羽州金澤城主清原武衡。鎭守府將軍陸奥守。家衡。八幡太郎義家之を討つ。

一、平家一黨の御紋は、上羽の蝶なり。

一、新田義興公、徳壽丸殿と申し奉りし節、奥州國司北畠黄門顯家公御同道、一萬騎を率し御上洛。正五位の上に左兵衛督に任ぜられ、關東へ御下向。宮方八州總司なり。御母公は、由良越前守光氏公御息女なり。義興公・義宗公・脇屋義治公、武藏野御合戰敗れて、笛吹峠より信州を經て、越後へ引退く。延元の頃、義貞公・義助公・北國御長陣の節、新田反町の城大館左馬之助氏明公へ御預けなり。玆は御父宗氏公、元弘の亂の節、鎌倉にて本馬と戰ひ討死。莫大の忠勤故なり。反町御城艮に當りて、寶珠山寺御建立。開山賴覺法師なり。

義貞戰死

一、義貞公、曆應元戊寅閏七月二日、越前國足羽郡藤島の城に於て御生害。行年廿七歳なり。長崎道場に於て葬り奉り、御法名覺阿彌陀佛と謚し奉る。北陸道七箇國大將足利尾張守高經と御合戰の節に、越中國住人氏家中務丞重國御首を取り、吉野天子より宸筆の綸旨、鬼伐(おにきり)・鬼丸の大小、足利將軍尊氏公へ上る。伊勢國渡會郡へ下さるるなり。天正の頃迄、彼國、氏家の姓ありと傳にいふ。鬼伐・鬼丸は、尾張守上らざる故、尊氏公を背くと云々。

一、後醍醐天皇御子後村上天皇は、興國元年御卽位。南朝吉野の內裏に御座なさるなり。楠守護の同王子良懷親王征西將軍宮、筑紫・肥後國へ御座なさるゝなり。菊地之を守護す。同王子宗良親王征東將軍宮、上野州新田郡由良邑寶泉野に御所を構へ、御座なさるゝなり。新田義宗公、同鄉臺源氏御館に御座なされ、御守護の所なり。親王薨後、圓福寺に於て葬し奉り、尊き石塔あり。新田御代々御石塔あり。義貞公御存命の節なり。

一、曆應二年己卯、脇屋義助公、北國軍敗れ、和州吉野へ參勤なり。天子より正三位に任ぜられ、刑部卿に補せられ、南海・西海管領になり。伊豫國へ御發向なり。此節副將軍として、大館左馬之助氏明公、上野軍勢を率して、四國へ御下向なり。同三年庚辰五月十一日御病死なり。御法名正法寺殿傑山宗英。其頃世良田殿・大島殿、越後國へ御內通あり、御三將の內にて御一人、關東へ御出馬遊ばさるべきなり。鎌倉基氏公と、一合戰仕るべきなり。大將無レ之故、合戰仕り難き趣、數度有レ之故、越後より義興公御出馬。暫時反町の御城に御座なされ、鎌倉攻の計策なり。

一、新田義興公、延文四己亥十月三日、武州八口の渡にて、江戶下野守竹澤右京策にて、御生害畢。怨靈驗ある故、敕諡し奉り、新田大明神と云々。尊像雷公の如く、同所にて世良田右馬之助・由良兵庫助・大島周防守討死なり。

一、義宗公・義治公、越後國より、羽州羽黑山籠居、四國へ渡り、豫州居得に於て、能く御賴なり。

一、若宮・若君、信州に御座なさるゝなり。爰に橫瀨黨旗頭橫瀨近江と、觸不動別當鄉律師快尊兩人、密に信州へ參り、御兩公を藤澤へ御供仕り、遊行上人御弟子になし奉り、六寮の御兒になさせられ、若君貞氏公・呑嶺律師公と申し奉るなり。博學多才の君なり。程經て橫瀨、竊に新田へ御供仕り、反町御城東に蟄居遊ばさるゝなり。村田鄉內に、呑嶺と申す所あり。

若君貞氏公、武藏少將義宗公御嫡なり。

一、金山を實城と號さるゝ事は、吉野內裏の奥に實城寺あり。若宮、金山御城に御座なさるゝ故、之に准ず。實城と號さるゝなり。若宮薨後、圓福寺に葬し奉るなり。

一、義興公御生害後、康安年中より、新田御城は、新田四郎義一公御守護なり。鎌倉基氏公と、六箇年餘御合戰なり。此四郎殿は、船田長門守經政が舍弟なり。其頃岩松前司賴看公・典厩基氏公御一味故、四郎殿終に敗北。是より岩松公、東上州七郡の領主なり。

一、觀應の頃、鳥山右近將監賴仲、近邊猛威を振ひ、剩へ寺院押領故、貶鵬鳥山寺開基なり。開山良覺法師は、義一公舍兄なり。本尊不動尊は、弘法大師の作なり。外定朝の作佛あり。廿五寺の本尊なり。其頃岩松前司賴看公下知として、小柴馳向ひて追却す。暫く鳥山鄉宛行はるゝなり。良覺法師は、貞治元壬寅九月二十日遷化。

一、新田岩松御先祖、鎭守府將軍陸奥守八幡太郎源朝臣義家公三男、式部大輔義國公二男、足利矢田判官義康公御子、足利上總介義兼公・正二位大納言兼右大將征夷大將軍源朝臣賴朝公・畠山重忠公、此三將は、北條時政公の御婿なり。義兼公、足利の大日堂御造營なり。人王八十三代土御門院御宇正治元年薨御。鑁阿寺殿と諡號を奉り、御子左馬頭義氏公・御舍弟義純公、二位禪尼平政子御甥なり。將軍朝家公・右大臣

畠山重忠自害

實朝公御從弟なり。然るに重忠公、右衞門佐朝政佞人表裏にて、相模川にて御生害なり。重忠公、御實子無之故、女公御願にて、足利義純公を御養子となし、老將軍仰出さるゝなり。則ち畠山遠江守義純公と、御申し奉るなり。兩家老本多治郎近常・榛澤六郎成清御婚禮は、新田太郎藏人頭義兼公姫君なり。後新田禪尼と號し奉るなり。御化粧免として、岩松卿御添へ輿入なり。是れ岩松公元祖なり。岩松八幡宮を御造營となり。後御逝去。岩松山青蓮寺殿と、謚號し奉るなり。

一、岩松經兼公・政經公・經家公・直國公、治部大輔、觀應の頃なり。滿國（法名寶泉）・滿純・上杉禪秀婿家純・岩松治部大輔明純・岩松兵庫頭尙純（新田岩松治部大輔）・昌純、觀應の頃より、應永廿三年迄七十餘年、岩松家秀で盛なる故、反町城傍に、呑嶺公隱住なり難く、橫瀨計として、金山東狸ヶ入移營、幽居なさるゝなり。故に殿の入とも、呑嶺の入とも申すなり。猶隱れ奉らんとして、觸不動別當卿律師快尊御弟子となり、御隱なさるゝなり。觸不動御立の山は、天神澤と榎澤との間中段にあり。鍛冶本輪東なり。此所呑嶺とも申すなり。快尊は、橫瀨守護し奉るなり。二十年の節、御還俗なされ、橫瀨近江婿

名跡に御立て、横瀬六郎貞氏公と申し奉るなり。新田横瀬元祖此君なり。

一、新田元祖正五位上大炊助式部大輔義重公より義宗公迄、大新田と申すなり。

　　徳川新田　山名

後末　横瀬新田　大島

　　里見新田　亦脇屋

　　岩松新田

一、伊豆北條元祖時政、遠江守執權始、小田原北條元祖成氏。法名早雲。

一、應永廿三年丙申十一月、前管領上杉右衛門佐禪秀逆心にて、御堂殿・滿隆公・雪下殿・持仲公大將として、其外關東諸大名、上州には岩松治部大輔滿純は、入道禪秀一味なり。鎌倉公方持氏公へ敵す。持氏公并當管領上杉安藝守憲基敗北にて、相州小田原の城主大森信濃守御頼み、夫より駿河國主今川刑部大輔御頼み候て、明る春御進發。此時新田には、野内・横瀬・林三家御忠節を存じ、六郎貞氏公、其頃律師公と申し、新田坂中殿と申候を、大將に守立て奉り、御一族御家臣舊好衆中相催し、御忠

節有之候。新御堂殿・雪下殿・禪秀並に同意の衆中、悉く皆滅亡。以後に新田庄所々御領知なされ候。是を新田御本意と申すなり。此節に横瀨・野內・大澤・林、四天王と御定めなされ候。金谷・田村・藤生は、執權職と御定めなされ候。此時分は、御小身にて、御家中五備なされ候。是より金山御城築きなされ候。實城と申候。御代々御相續なされ候直參衆千騎、是を新田千騎と申候。先手衆又は同心衆、騎馬足輕迄着到三千餘騎と、由良記に相見え申候。此節京都公方樣將軍義敎公より、橫瀨六郎貞氏公・大石石見守・皆川山城守・舞木駿河守持廣へ御敎書下し、岩松殿御追罸の爲なり。滿純、由良反町にて打負け、桐生へ御退きなり。其後一ノ井感應寺へ御忍び、御座なさるゝなり。是は伯母尼寺なり。天正年中世良田へ御移し、地下民呼びて、御屋形と申すなり。但し滿純は、鎌倉塔辻にて御生害。御子家純の御方へ、一ノ井にて、二十貫地を宛行ひ、野內右近に御預けとあり。由良實泉野に御座なさるとあり。

一、岩松家長臣。金井新左衞門、後淡路守と號す。由良に舊跡あり。小柴左衞門・坂庭將監・金谷筑後・菊池內膳。

一、新田橫瀨の元祖六郎信濃守貞氏公、金山實城主の初一なり。反町城主なり。

一、永享十年、鎌倉持氏公謀叛。關東大亂。同十一年己未、京都將軍義敎公薨去。御法名普光院殿。持氏公と御不和故、自ら十萬餘騎を率して、東州へ御發向。同年七月終に持氏公打負け切腹なり。若君天王丸・寶王丸・泰王丸、上方へ召上せられ、濃州垂井道場にて討たるゝなり。春王丸成氏公を、長尾金吾入道昌覽取立て、古河へ遷し奉り、辰の崎に御所を構ふるなり。古河公方と號し奉るは是なり。御法名乾亨院殿。是より五代義氏公、喜連川へ御移りなり。天文十五年十二月廿二日逝去。

一、將軍義敎公、關東御制法御改めなり。新田家の御末葉、悉く御穿鑿なり。

一、新田元祖義重公若君德川治郎入道義季公、御法名英雄公の御嫡子新田世良田參河守賴氏公、其御子世良田治郎敎氏公、其御子世良田三郎滿氏公、義貞公補佐の臣なり。後光祿大夫とす。世良田右馬之助政義公、矢口にて討死。其御子德川親季公・同有親公・同親氏公迄八代なり。親季公より三代、窂々として德川鄕に蟄居す。遁れ難く思召し、時宗の僧となり、長阿彌と號され逐電なり。長阿彌途中にて病死。德川阿彌一人孤となり、出歩くなり。亦順阿彌ともあり。程經て參州酒井鄕に御落着。

後に松平鄕へ御移り、太郞左衞門の家督を御繼ぎ、婿名跡なり。松平太郞左衞門親氏公と申し奉るなり。是れ則ち新田松平元祖なり。

一、貞氏公、永享十二年庚申七月、越前國足羽郡長崎道場より、上野新田郡金山城南麓へ、御尊骸御移なり。尊師大見禪龍禪師なり。太田山金龍寺殿正四位上前羽林將軍へ、新田源氏中興義貞公直山了悟大居士と諡し奉り、開山在室長瑞大和尙なり。義貞公より五代の孫、金山の實城主橫瀨信濃守貞國公の御嫡子なり。故ありて御出家なされ、無底和尙御弟子なり。又濟家の比丘ともあり。初は新野村瑠璃山東光寺に御住職。後に金龍寺へ御入院、御開山なり。御命日六月七日。傳へいふ、岩松殿由良の鄕實泉野御所跡押領の節、東光寺退轉を御再興遊ばされ、濟家宗と申傳ふるなり。永享年中、岩松家衰へて後、靈寶等悉く、在室和尙金龍寺へ持參なり。

一、尊氏公、京都天龍寺御建立。南帝御追移なり。

一、貞氏公、新田金龍寺御建立。義貞公御追善なり。

一、橫瀨御講號の儀、京都へ御伺の所、養父苗橫瀨、暫時名乘るべき旨、仰出さるゝ

なり。
一、大館の郷安養寺破壞の節、貞氏公、御修復を加へらるゝなり。故に呑嶺山と號せらるゝなり。郷律師快尊奉行なり。大館氏の人なり。貞氏公御法名安養寺殿悟叟了道大居士。義重公御法名大光院殿。不動御影とも申傳ふるなり。
一、貞俊公、金山實城主なり。横瀨六郎、後に信濃守と號す。御法名曹源寺殿東源了西大居士と謚し奉るなり。東今泉村鹿島へ御隱居なり。北御館の前に下馬橋あり。曹源寺中興開山天安睦大和尙、中興開基叟千了勝居士。横瀨掃部頭なり。
一、貞國公、金山實城主なり。横瀨新六郎、後信濃守と號す。應仁二年戊子十二月三日、武州須賀にて御討死。右御討死に付、京都公方樣慈眼院殿義政公、東山殿より御追感の御內書、御嫡子國繁公へ遣され候。其文言に云、父信濃入道討死之由、自分も被疵之段、被官等數討損之旨御文言あり。御法名緣應寺殿傑宗了順庵主と謚し奉るなり。東金井郷寺の入に御建立なり。由良中山公、天正四年、桐生へ御隱居後、金山渡城の節より、下野國梁田郡朝倉郷へ引移し、濟家宗に改め候。明暦の頃、聊か

故ありて滅却す。

一、東上州先方薗田氏元祖成實主は、淵名家より出づる。祖秀郷、將門討取り、野州・武州の守護なり。鎌倉大將軍賴家公御代、和田謀叛の節、薗田一黨之に與す。玆に因つて、成朝以下悉く討たるゝなり。其後下河邊庄司五代の孫薗田輔光と名乘る。又舞木より相續とも、申傳ふるなり。建武の頃より、新田・足利へ隨身なり。

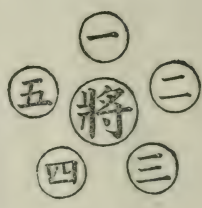
秀郷公御子。田原太郎千時・同千晴（江州田上城主近藤氏元祖）・千國・千種・御舍弟藤治宗郷。

一、橫瀨六郎貞氏公、應永廿四年より、東上州主公なり。新田郡反町城・金山南城主なり。東上州七郡領主なり。

一、永享年中、義教大將軍へ、貞氏公御忠勤故、上野守護職仰付けらるゝなり。新田御本意と申すは、此御事なり。此節新田三十六騎、悉く皆貞氏公なり。

新田三十六騎

橫瀨六騎・橫瀨掃部（今泉）・橫瀨兵部（矢場）・橫瀨（加賀）・反町（城外）横瀨左近（田中）・橫瀨平七（西金井）・橫瀨隼人（藪塚）・・根岸武士・諏訪強戸・鳥山下鳥山・高山下四島・野内上江田・泉坎日堀・益田西長丘・坂庭脇屋・梶塚高林・吉田一ノ井・小柴堺南・小金井小金井・塚越反町出丸開主、本名岡田

氏なり・毛呂（中江田）・大澤（反町城外後地延）・金谷（細谷）・岡山（仙石）・田村（仁田山）・梯沼（堀口）・林（下小林大倉）・矢部（矢部）・藤生（阿佐美）・西谷（西谷御所）・富岡（東金井）・市場（國濟寺城金山より出丸城代備中）・岡田（東金井元出ニ吉澤ー）・小日向（反町城出丸杉本苗岡田）・菊地（一ノ井石塚）・薗田（植木野）・堀口（堀口）

貞氏公御小家の節五備なり。

唐の衛公六花備御用ひなり。

新田の車懸り是なり。

敵へ懸りやうは口傳にあり。

一、貞氏公御陣備圖形。委しくは金山斬紙といふ軍書にあり。但是は東上州主公の節なり。

魚鱗	鋒矢	鶴翼
	方圓	偃月
長蛇	衡桅	鴈行

一、長谷部國重弟子定順、上州へ流罪。新田家へ御預なり。金山の鍛冶曲輪是なり。

其子孫農鍛冶にあり。

一、力王太刀、七十一大和千手院乙太郎四條院天福の頃、鷄足寺にあり。宗良親王若宮國良忠良とも親王、今別所圓福寺に宮あり。

由良横瀨家舊老衆

横瀨。臣下横瀨は、正三位宰相小野篁の孫なり。最明寺殿時代、評定衆廿二人の内。横瀨三郎太夫爲清。

野內。武州横山黨柳井とも屋那井とも書くなり。

大澤。野州小山の庶子。大澤鄉主在名なり。

林。本國加州なり。越智氏なり。

藤生。昔は平親王將門公御舍弟厨三郎將賴公臣下なり。生品は赤城大明神なり。尊體は、大己貴尊とあり。由良記に云々。

田村。坂上氏なり。　金谷。新田氏族なり。

一、貞國公御子國繁公、文明十年戊戌、吉澤鄉內荻原御館御構へ御隱居なり。長享二年戊申五月十五日御逝去。御法名明星山圓福寺殿笑山宗悅庵主と謚し奉る。今泉村より、鹿島明神勸請なされ、鎭守になさる。横瀨新六郎後信濃守貞國。御子三人

あり。

一在室、二國繁、三定繁公。左馬助長林左京大澤石見倉澤主計矢場殿御養子なり。養父母卒去後、笑岩山惠林性智大姉開基なり。開山金龍寺三代太年宗彭和尙なり。

一、業繁公、後改めて新田横瀨六郎となされ、後信濃守。上野國司金山實城主なり。永正の初め、太田道灌招請なされ、金山御城取所々御要害、御相續遊ばさるゝなり。道灌屋鋪の跡あり。實城總堀御普請總奉行金井左近繁信なり。永正八年辛未八月八日御逝去。御法名靈雲寺殿義山宗忠大居士と諡し奉る。飯田鄕にあり。

一、國經公、新田六郎横瀨、後信濃守。上野國司金山實城主なり。大永二年壬午二月二十日御逝去。御法名白毫寺殿大禪榮宗功大禪定門と諡し奉る。村田鄕にあり。

一、泰繁公、新田横瀨六郎。上野國主。其頃長尾照長公、新田城掠め領すと雖も、遂げざるなり。横瀨公之を防ぐ。國城堅固に御持なり。天文三甲午年、武田・北條一味にて、上杉衆と合戰あり。天文十四年乙巳九月九日、野州壬生にて御討死なり。御法名龍得寺殿威岳宗虎公と諡し奉るなり。江田鄕に在り。貞國公より茲迄七代、

横瀨御名乘なり。

家々鐵炮始めの事

鐵炮始

一、北條氏綱公御代永正七年、小田原玉瀧坊、堺の津にて求レ之獻上。

一、武田信虎公御代天永六年、西國浪人井上新左衛門獻上。

一、武田横瀨泰繁公御代享祿二年、根來法師寶切、小器を持參、新田指南なり。其弟子般若坊跡あり。

一、天文六年七月十五日、夜軍ありと北條記にあり。川越城主上杉朝定公敗れて、北條氏綱公勝利なり。

三長尾

一、三長尾。越後長尾・白井長尾・足利長尾。平氏梶原なり。

一、御紋。新田中黑。新田横瀨拉子引。臣下横瀨違杵。小野氏。

一、金山實城の內、西城殿泉伊豫守基國、御子無レ之故、泰繁公御舍弟御養子なされ、泉中務大輔基繁公、御法名山英良海居士。基繁公御子泉伊豫守繁俊公、御法名瑞巖寺殿前豫州之權大守傑翁宗英大居士と諡し奉る。矢田堀村領主高家なり。慶長二丁

酉九月十三日御逝去。開山金龍寺七代貫芝廣照林託鶴大和尚。本尊十一面觀世音。運慶作なり。成繁公御納なり。

一、天文十五年の頃、伯父菩提のため、成繁公一寺草創の御志仕るゆゑ、開基成繁公なり。

一、天文八年己亥、小金井善忠と新田常陸と、應永年中より、忍の城主成田一味して軍あり。

一、天文の頃信州四大將。

小笠原長時（小室城主）・木曾義隆（福島城主）・諏訪頼重（諏訪城主）・村上義清（上田城主）

越後謙信御頼みなり。右四大將、甲斐信玄公、十五年にて攻落し、甲信兩國主となり、諏訪殿の息女御菊殿の腹に、勝頼出生。夢想諏訪明神絶えて、武田の子と生れ、代を繼ぎて、社家を失ひ〔失ふカ〕

一、天文の頃、足利將軍光源院殿御代、

日本兩大將。（中國十五箇國主周防山口在城大内吉隆公。關東管領上野國平井在城上杉憲政公。）

四大將

北條氏康公。平氏相模守。相州小田原在城。　武田晴信公。源氏信濃守。早州府在城。　織田信長公。平氏上總助。江州安臺在城。　長尾景虎公。平氏信濃守。越州府在城。

其頃十三大將

奥州會津盛氏。　上州新田中山由良信濃守成繁公。　房州里見義廣。　江州小谷淺井備前守。　濃州齋藤山城守龍義。　藝州毛利元就。雲州尼子滅後。十三箇國主なり。　上總萬吉少弼。　河州松永彈正。　丹波赤井惡右衛門。　武州太田三樂。岩槻城主。江戸川越とも。美濃守賢正。　伊豫久留島〔本ノマヽ〕、中國小早川隆景。　越前朝倉金吾義景、

一、三州德川家康公、右數に入らずと雖も、恐れて之を除く。

一、成繁御代、氏を由良と御改なり。　御先祖御苗なり。

横瀨新六郞、後信濃守。　新田中興名大將なり。

天文年中武田信玄公・長尾謙信公・新田中山公・三法大將、日本無類の名將なり。　其頃常州佐竹殿・房州里見殿・上州由良殿、少將に任ぜらるゝなり。

一、天文十五丙午二月上旬、成繁公、那波御合戰の事。那波太郎廣隆、新田家に背き、剩へ長尾家に與力す。家來井田笹兵衞・松本丹波・新井。同七騎には、力丸・尾西・津田長尾、後詰を賴む。斯くの如く金山を聞召され、成繁公御先手高山・金谷・塚越等五百餘騎馳せ向ひ、御合戰數度あり。兼て內通あるの故、小柴左衞門横鑓を入るゝ故、那波方敗軍なり。廣澄は自害し畢。舍弟廣元は牢人、甲州へ落行き、武田家へ勤めなり。花澤合戰にも、那波無理齋と名乘り、隱なき侍なり。那波合戰の節、新田方七本鑓衆、正田半左衞門・藤生四郎治・大澤監物・林𠀋藏・田村五郎八・岡田助內・廣町久助。

一、同年、甲斐信玄公、信州戶谷合戰。直に笛吹峠へ出張なり。由良公御發向なり。上杉衆藤生・諸岡・莊屋・筑田出向ふなり。甲州の先陣は、板垣信形なり。新田方御利運なり。此時景虎公十七歲なり。信形は、其日高名の侍にて朱椀、高名無之侍には、黑椀を用ふるなり。

一、同年四月二十日晚、武州川越夜軍。上杉憲政公八萬騎敗北なり。北條氏政公、八千騎にて勝利なり。但し北條記には、夜軍とは無之なり。

一、享祿三年合戰始め、上杉憲政公廿七歳、北條氏康公十七歳なり。天文廿二年、上杉家敗北なり。同年憲政公若君、十三歳にて御座なされて、北條氏康公より、伊豆最勝院にて殺レ之。御曹子龍若殿と申す是なり。御守神託。治部左衛門尉。其頃狂歌に、

上杉を切倒されて美濃守頼みし森の景虎もなし

廿二年合戰あり。其内大合戰十三度。

石火矢棒火矢

一、石火矢・棒火矢、（文龜二年辛酉、天文廿二年ともあり、）南蠻國より、房會といふ者持參、謂く、大伴此器を獻せしむ。周州又石内藏之助といふ者傳レ之。明石火矢といふなり。（高基といふ。）亦播州明石茂太夫といふ者傳レ之。明石火矢といふなり。但し明石と書くか。鐵羽熊野天狗隱中堂に仰付けらるゝなり。

一、永祿二年丙未三月、長尾謙信公、沼田城北條孫次郎攻落すなり。夫より厩橋城北條丹後攻落し、長兼忠籠居。近侍の人質、厩橋城へ置かれ、西上州平井城に住す。長尾領分越後國々、東上州代々持つとあり。

一、同年景虎公、東上州へ御發向。大胡城主益田伊勢・小奈淵圖書・山上伊豆攻落し、

益田は、横瀨掃部緣類なれば、新田へ參り、西長岡を在領。山上は北條家へ、各新田幕下なり。然るに備中を攻め、景虎公へ隨身。案內者にて、仁田山小斧の取出攻落し、廣澤茶臼山取出攻落し、在番衆討死なり。夫より小俣御所攻散らす。折節澁川相模守義勝公、小田原へ參り、口留守なりと。傳に云、澁川殿は、鷄足寺領分養子なり。板倉御所駒場山澁川左京殿御舍弟なり。古は、小俣より今福迄、唯上りも所領といふ。別府樅山・石井口勝寺方なり。澁川殿は、足利源氏なり。家來石井尊空・同安藝・泉備前・阿戶・小泉・小野里・久保澤・大澤等出向ひ防戰なり。夫より足利筋を御通り、佐野へ御着なり。御歸國の節は、金山南口に御通りなり。新田邊にて、大鼓を御捨てなさるゝなり。沖迺村延命寺にあり。二宮放火御歸國なり。膳備中案內不屆故、新田より膳の城攻落さる。備中家來齋藤左近・鶴貝玄蕃・月田又四郎出合ひ、防戰すと雖も、終に相負くるなり。備中忰越前儀、小日向大和緣類故、新田へ降參なり。膳の城は、大澤下總に千貫の地を下され、預け置かるゝなり。

一、同年北條氏康公より、黑川山中へ、御教書遣さる。依之小田原へ與力す。新田方

より山中攻。成繁公御代なり。終に黑川衆、新田へ隨身なり。

一、永祿三年庚申三月上旬、景虎公、西上州平井城へ住す。上杉方の長士岩槻城主吉田美濃守堅正、法名三樂齋より、關東の諸大名衆廻文あり。各平井城へ參勤。七十六備あり。人數九萬六千騎あり。上杉殿の人數、一萬七千騎あり。都合十萬三千餘騎なり。小田原攻、上杉殿御名代には、景虎公なり。八千騎、自分の人數なり。由良信濃守成繁公、實衆千騎、陪臣衆合せて三千餘騎の大將なり。大口を放火し、二の門蓮迄攻入り、夫より鎌倉八幡宮へ社參。謙信公一の座に御附き、關東の諸大名衆へ、仰渡さるゝ趣は、憲政公約束の今日より、某關東管領に任ず、上杉の旨なり。景虎公短氣故、成田下總守長康に推參あり。依之長尾に不和故、八州の諸將衆悉く背く故、漸々上州平井城に引取る。長尾方より狂歌、

味方にも敵にも早く成田殿長康刀きれもはなれず

景虎公、近衞殿御息呼下し、公方樣と仰ぎ奉り、平井城殘し捨て、同年五月上旬、越後へ歸國なり。同月下旬上洛。公方光源院殿義輝公より、御諱なり。輝の字拜受。

網代輿・公文の裏書御免、歸國後、上杉管領輝虎と名乘るなり。謙信公上洛の後へ、小田原より厩橋攻取り、また北條丹後を籠置く。是は北條三郎殿御守りなり。是より關東衆、小田原へ隨身なり。氏康公、八州討治め、關東國主なり。人數一萬騎あり。久しく輝虎公出陣無之故、成田方より狂歌、

輝虎は越後帷子ながう着てぬま田に入りて足たけもせず

一、同年七月上旬、中山公、御小姓横瀨今若・金谷萬作召伴はれ、唯上り御茶屋へ渡御。則ち猿樂召出され、御遊覽の節、横瀨今若御側に御呼び、口るべしと仰せられ、御扇にて御あふぎ下さるゝなり。其節、金谷萬作一首、

ともすればおもふ方にぞなびくなり扇の風も人の心も

殿御返歌、

獨をばほこりもかけじ獨をば荒き風にもあてじとぞ思ふ

一、同年八月、安良岡馬場へ渡御。矢場鹿毛乘らせ、御遊覽なり。御家中諸士衆、馬揃なさるゝなり。

一、同年氏康公、武州へ出馬。岩槻城主吉田三樂齋を攻め給ふなり。茲は去る三日、關東中へ廻文ある故なり。景虎公大將にて、小田原攻の意趣なり。三樂齋敗北。新田へ落着き、成繁公御頼み故、數度御合戰ある故なり。御先手小泉・大澤・林・岡山・梶塚强戰故、御利運遊ばさるゝなり。三樂齋歸城なり。

一、永祿五年壬戌三月上旬、武州横瀬七鄕、深谷より掠め來る由、正田平左衞門方より、金山へ註進有レ之故、矢場御陣代にて御合戰あり。手勢實衆加勢百餘騎馳せ向ふ。新田方勝利なり。是を小阿瀨合戰と申すなり。此正田平左衞門は、去る天文十五年、那波御合戰の節、一番鎗是を勤むる故、横瀨・新開・古市・大塚・中瀨・高島・石塚、右七箇村掟仰付けらるゝなり。今度亦比類なき高名ある故、那波郡の內上宮村にて御加恩、御感狀下さるゝなり。新田方御勝利なり。實衆高名、金井出雲十七度、金子重助十二度、江戶又左衞門八度。

矢場衆高名

一、水野萬喜九度、倉川伊豆七度、新藤新四郎十五歲首一級。淸水彥內十四歲首一級。

一、坂中滿仲坊狂歌讀。本苗南氏なり。金山坂中住居故云々。

一、永祿九年丙寅、甲斐信玄、笛吹峠へ出張せられ、成繁公御出陣御手勢三千餘騎・雜兵一萬三千餘人。板鼻御陣場より御取懸り御合戰あり。碓氷川を境に戰ふなり。終に新田方御勝利なり。甲州方原・跡部退去。

一、永祿十二年十月二日、上野・下野・武藏・下總、古河の公方義氏公御家來・上杉家郎徒等、謙信公大將にて、信玄公を語らひ、小田原氏政公と御合戰あり。酒匂を放火し御歸陣なり。

北條家にも、松田尾張・山角上野・伊勢備中・福島伊賀・大道寺駿河・出合ひ合戰なり。此節、中山公御病氣故、御出陣無之、御名代矢場殿なり。

一、同年氏政公より、矢場鹿毛御所望。御使者石卷彥四郎を遣さるゝなり。一郡に替へ難き名馬故、進ぜられざるなり。

一、元龜二年辛未、桐生山城守祐秀公を攻落す事、佐野大炊助祐綱公の御隱居所なり。祐秀公七代山城守殿に、實子無之故、佐野小太郞殿の御舍弟を養子なされ、桐

生又次郎殿申さるゝなり。佐野殿家老兎鳥館主高瀬與惣左衛門を附け遣さるゝなり。御普請代家老衆と、威勢論にて不和なり。何事も評定極まらざるなり。
一、桐生合戰の事、渡良瀬川より、大口鐘と名付け、松原瀬より、新田領用水、先規より取來る故、新田堰とも申すなり。此川を、新田川と申すなり。例年の如く用水取る所、桐生よりも、先規の通り水錢永百貫文遣さるべき旨、仰越さるゝなり。新田より御返答は、流れ捨つる水に、水錢遣すべき儀無ㇾ之候。但し矢場川・御厨川よりも、水錢取り申され候やと、御挨拶なり。古より取來らざるより、左候はゞ、新田方よりも、出すべき事無ㇾ之と、御返事なり。桐生方聞ㇾ之、松原瀬取拂ひ大口鐘を切塞ぎ、鋪十五間・馬蹈五門築立て、松苗五本並に植置くなり。新田方より是を打拂ひ、鋪二十間・馬蹈七間築立て、松苗十本並に植置くなり。其番頭侍藤生紀伊守馬上二十騎・弓大將高橋丹波・足輕五十人・鐵炮頭關口尾張三十人・廣澤十騎・境野十騎とも申すなり。其外地侍相加はり、嚴しく強く勤番なり。桐生方見ㇾ之、元宿の富士山の腰より、桐生川へ、元より要害掘あり。今度玆を深く廣く掘り、渡良瀬の水を塞ぎ入る。

依レ之新田領の用水、來らざるなり。然る間、桐生城攻落すべき評定究るなり。御陣代矢場の城主横瀬兵部少輔殿、手勢百餘騎、實城衆二百餘騎差添へられ、都合三百餘騎、先陣横瀬隼人・後陣林左京・侍大將田村佐渡・大澤監物・金谷因幡、旗奉行高山甚平・岡田宗雲、鑓奉行林左兵衛・藤生河内、弓頭高橋丹波・金井出雲・近藤出羽、齋藤修理、鐵炮頭金子十助・飯塚淡路・富岡内匠・長山將監を先として馳向ふなり。案内矢場惠林寺五代大安文恕なり。後島山妙央寺に開山なり。唯上りの原にて勢揃、密に葉鹿の諏訪の瀬を渡り、小俣の後太平を越し、小友澤へ出で、上菱樫澤を越え、桐生へ攻入るなり。兼て桐生方にも、下泥の岸に柵を振寄せ、山の木戸元宿の住荒井美濃堅レ之。則ち下富士に住す。谷民部町家大木戸堅レ之。笛吹木戸下菱一色の住山城出羽堅レ之。下富士山木戸攪上駿河之を堅め、平井澤に住す。茂木右馬介、山王口之を堅め、吾妻近野に住す。新田方藤生紀伊・金谷因幡・搦手大將を奉る。藤生紀伊は、荒井美濃緣者なり。東小倉より山通り、城山後の山より、眞逆に攻落す。桐生方にも、右五人の外、上泉・津府子・荒卷等出合ひ、防戰すと雖も、叶はず。桐生殿

父子夜に紛れ、多良澤より、佐野へ落失せ給ふなり。則ち新田御城乘取り、金谷因幡・藤生紀伊御願なり。同三年、仁田山里見左京進、法名瑞賢、桐生攻の節、後詰の答にて、桐生より、直に新田勢攻懸り、御先手田部井主膳・金井淡路、先陣旗色進み、高名を勝げん爲めなり。瑞賢も、高津戸に要害を構へ、防戰すと雖も叶はず。家老須永山城・薗田・田部・星野・前原、强く戰ふと雖も、終に討負け畢。剩へ瑞賢をば、家來石原討取り、高津戸破却なり。

一、同年深澤城主阿久澤能登守を攻む。然るに日光坂へ出張、手振の番所にて、寄手の麾を取るなり。家來塞梅右近・田井・磯田防戰なり。寄手大將矢場兵部少輔殿鐵炮に當り、高股を打拔かれ、矢場衆大澤石見・水野萬喜・中村右近・倉河伊豆・淸水因幡・鄕良庭彥兵衞・進藤新四郎・石原喜兵衞、其場を去らず攻入り、兼て新田より、黑川の廿一騎へ內通有之故、後詰ありて、深澤落城なり。塞梅右近、新田へ降參なり。

一、同年由良國繁公、戌年故、綿打郡那滿山大慶寺・大館郡呑嶺山安養寺へ、不動尊御納なり。慈覺大師作。

一、天正元癸酉四月十二日、甲斐信玄公御逝去。行年五十三歲。御卽位として、新田中山公御使者林與七郎・田部五郎八遣さるゝなり。是れ軍使役なり。其頃取次馬場民部なり。是は道筋武田家風の爲め、斥候遣さるゝなり。

一、同二年甲戌、輝虎公、東上州へ御發向。家老甘牧近江・栜崎和泉、千餘騎宛引率す。攻寄せ、寺井邊にて、小金井四郎左衛門出合ひ高名あり。甲中就橋にて、橫瀨・津久井・岩崎働あり。野內・大澤・林等、各後詰故、金山方利運なり。桐生の城下へは、直江山城攻め來る。藤生紀伊・金谷因幡・田部・高橋・關口出向ひ勝利なり。謙信公、山上より退去。是は永祿十二年、小田原攻の節、成繁公御出陣無之御遺言〔恨カ〕なり。

一、同四年丙子、中山公桐生御城へ御隱居遊ばさるゝなり。御居館御座なさるゝなり。則ち新田金山實城御嫡男由良信濃守國繁公、御相續遊ばさる。

一、同年秋、織田上總助平信長公へ、國繁公より、矢場鹿毛引き進らるゝるなり。是は江州安土に、天守を御建立遊ばさるゝ故、御祝儀として進ぜらるゝ者なり。是れ日本天守の根元なり。御使者藤生新助・瀧主水、小田家風、道中城下斥候の爲めな

謙信逝去　成繁死去

り。

一、同六年寅三月十三日、上杉謙信公頓死。行年四十九歳。

一、同年六月晦日、成繁公御逝去。御法名鳳仙寺殿前信州大守中山宗德大居士と諡し奉る。

一、天正六年七月下旬、平信長公より、御弔として、御使者馬淵新藏・目賀多次郎七遣さるゝなり。御進物矢の根三百本・御誂矢の根千本御屆なり。關東次第に、新田家風斥候なり。

一、同七年、武田勝頼公、東上州御發向故、城攻なり。甲州近士脇又市働あり。大澤下總、金山へ參勤留守なり。家來小吳筑前與七左衞門働あり。甲州勢退去。

一、同八年、厩橋御城代長尾玄意齋を攻出し、伊勢崎城へ入置く。北條丹後厩橋城代として、〔本ノマヽ〕

一、天文十五年春、成繁公、那波太郎廣澄を攻落し、御家臣林伊賀に御預なり。伊賀死去後、横瀨勘九郎に御預なり。那波城舟渡場故、在番城仰付けらるゝなり。

信長弑せらる

一、天正九年八月上旬、國繁公御舍弟矢場能登守殿へ渡御、御馳走として、實城衆勢兵五十四人を擇び、陪士に依らず御集なされ、的弓御覽遊ばさるゝなり。寄合と申す所に矢場あり。

一、天正十年壬午、織田信長公、信州口より、甲州へ攻入り、先陣川尻氏なり。駿河口より、先陣牧野右馬之允攻入りて、御旗にて攻落し候、三月十一日、武田勝賴公・同信勝公、御生害なさるゝなり。其威勢に乘じて、信長公の臣下瀧川左近將監一益、信州へ下され、關東管領とす。厩橋城主なり。關東八州へ廻文あり。其文言に曰、

主君信長公知二天下一、其臣瀧川關東管領也。早速參禮ある族には、本領不レ可レ有二相違一、其品可レ有二加增一者也。

各此文章を見て、小幡上總・內藤大和・和田石見・木部宮內・安中左近・上田安樂齋・高山遠江守、近邊の諸士參禮あり。

一、天正十年六月二日、信長公京都本能寺、長男信忠卿二條御城にて、明智日向守光秀の爲に御生害なり。北條氏直公御兩將にて、一萬餘騎を率して、上州御發向なり。

氏政公御嫡子前橋城押詰め、瀧川攻落し、北條丹後御成敗なり。是は瀧川を、城へ曳入れたる罪なり。是より北條家へ、上州・武州・野州悉く隨ふなり。

一、由良國繁公・長尾顯長公御事、金山治亂記に詳なり。略之。天正十年より同十六年迄、七箇年籠城なり。北條家には、金山攻なり。大敵取挫ぎ難しとて、新田金龍寺・足利長林寺小田原へ參上、曖にて、由良公より、桐生御城へ移りなさる。桐生領一萬三千石御領知なり。金山城へは、淸水上野、城領三千貫にて、小田原より在番なり。

一、中條出羽守、金山にて討死の事如何。里見殿と合戰、國府臺にて討死と、北條記にあり。不審。

一、天正十三年酉、大軍にて、小田原より、金山御城取卷き、寺社迄仕置あるなり。

一、長尾公、館林の城渡し、小田原より、北條美濃守氏親に下さるゝなり。顯長公、足利領二萬石にて、小屋の城主なり。後、小屋の城、小田原より攻落すなり。

一、北條左京大夫平氏直公、關東大守として、皆治九年にて又亂る。元祖氏成公、始め伊勢新九郎と申すなり。是より五代、永正年中より、天正の末に至るまで、百餘年

なり。

秀吉小田原を攻む

一、天正十八庚寅年、太閤秀吉公小田原攻。三月十九日京都御立ち、同廿八日合戰始まる。北條家にも、百餘日籠城なり。北條家に、山上左衞門高名あり。寄手方にも、藤堂和泉守內渡邊勘兵衞あり。其節軍勢催促には、新田由良信濃守國繁公御名代として、小金井四郞左衞門尉、侍大將藤生紀伊守馬上百騎、旗奉行高橋丹波、鑓奉行大澤四郞衞門、弓大將遠藤與十郞、鐵炮頭塚越六郞兵衞、足輕百餘人・小人二百餘人遣さるゝなり。小田原に於て、早川口を堅む。城渡し後、首尾見合せ、嚴しく相固むるなり。

氏政自盡

一、天正十八年七月二日、氏政公切腹。行年五十三。檢使石川備前守・佐々淡路守・蒔田權助・柳原式部大輔。御法名慈雲院殿勝岩傑公大居士尊靈。

一、小田原城請取衆。本多中務大輔・榊原式部大輔・井伊兵部少輔

氏直死去

一、氏直公高野山へ退去。文祿元年十一月四日卒す。行年三十一歲。御法名松巖院殿前右京兆大圓徹大居士尊祇。

一、文祿元壬辰年、太閤秀吉公高麗〔攻脫カ〕。兵陣加藤左馬之介淸正・小西攝津守。
一、由良公・横瀨公、應永より天正の末迄、七十餘年、上州守護國司なり。
一、應永廿三丙申、上杉禪秀亂より、慶長十九年迄、百九十六年。諸國開東亂れ、大坂陣迄なり。
一、上野國古高四十六萬八千石。新田荒勢馬上二千餘騎・雜兵二萬五千人國なり。其外旗・鑓・弓・鐵炮・小荷駄二疋づゝ、馬數合せて六千疋なり。鎌倉荒勢、馬上三千騎・雜兵三萬人・乘馬三千五百疋・小荷駄六千五百疋、合せて一萬疋、雜兵合せて四萬三千人なり。
一、館林・足利兩城主長尾但馬守平顯長公、御旗下七騎。富岡對馬（小泉）・淺羽甚內（兎島）・片見因幡（比江島）・富田亦市郎（藤丘）・眞六越前（板倉）・松平丹波（越名）・淵名上野（鴻野）
一、成田遠江守名草殿名代成田中務執事。（毛呂因幡）。城代（久下越前・久保田若狹）・家老（白石豐前・江戸豐後）・寄合（小柴備中・縣播磨・野田志摩・大沼田淡路・小川丹後・小曾根筑前）・侍大將大畑治部・矢野九

郎兵衛、此外數多あり。略之。
一、佐野小太郎宗綱公衆。
一族、皆川山城守・佐野和泉・小野寺安房・佐野帶刀・山上道及・赤見常陸・小野兵部・富士源太・高瀨與惡左衞門。後桐生に参るなり。此外數多あり。略之。
一、佐野宗綱公討死。名草淵花坂なり。御首、長尾殿御内豐島彥七郎取る。後七右衞門といふ。小の月大晦日・正月朔日に懸けて、合戰は攻口とも嫌み給ふなり。足利より乘付くる侍には、芳野喜左衞門・柳田隼人・山口播磨・杉本修理・大沼田・市川・久米等なり。小曾根筑前・小野兵部組合ひ、雙方討死。弓矢の道には、三が一七とて、六方勝を、勝とするなり。良將は奧にあり。
一、新熊野山觀音寺、當山修驗宗開基新田義重公。開山は小坂上人。建久年中建立。小坂坊館坊・大黑坊・梅元坊・池元坊。
一、新長谷觀音、金山實城の艮にあり。今館林は、善導寺にあり。運慶作。
一、大日東金井鄕、金山にあり。大日谷といふ。足利大日と相向ひ立つなり。今別

當鑁阿山胎藏寺といふ。

一、大根郷妙滿山大慶寺。開基新田氏族。開山讃岐守貞氏公。尊氏の父なり。

一、由良郷。威光寺。

一、一ノ井。寶珠山勝光寺。開山本尊阿彌陀。定朝作。開基左將軍大御堂御造營。

一、東金井。金井山永福寺。開山洞靈天巽派加葉山。龍樂院末三代目。但天山亮禪師ともあり。

一、押切村。行基山福正寺。

一、世良田郷。世良田山長樂寺。開山榮朝禪師。中興慈眼大師。開基德川四郎新田入道英雄公。

一、東金井。義宗山玉岩寺。開山觀音。昔は坂東札所。開基前相州大守輝州宗光大居士。

一、足利。帝釋山法元寺。是は岩松殿ともいふ。横瀨殿ともいふ。不審。

一、世良田。總持寺。開基世良田殿。

一、飯田村。靈雲寺。釋迦運慶作。

一、小金井。小金井山東雲寺。開山覺翁能心和尙。春屋宗頓居士。開基古河殿。中興小金井氏。

本尊藥師野晃にて、煉立佛作なり。御長八寸。座像。定朝作は誤なり。

一、鍔口銘曰、上野國薗田庄米山寺寄進之願主珠金沙門。永祿七年甲子九月十二日。

一、臺之鄉。大藏山觀音寺。本尊觀音。行基作。大同二年建立。開山行基。中興開基林氏。（寶生廣山と改む）

一、木崎町。新田山大通寺。開山大拙和尙。金龍寺八世なり。開基蘭室。自芳大姉金山實城康繁公先室。天正四六月二十日卒す。

一、足利。行道山淨恩禪寺。開山偉山和尙。

一、太田町。太田山金龍寺。開山行基。木崎町大道寺と同斷。

一、藪塚村。藤光山長圓寺。開山自心法師。開基藤生出羽守。古は湯の入寺山にあり。今芝塚にあり。

一、同鄉。羽黑山胎養寺。中興開山玄意法師。開基新田氏。古は經の入にあり。一切經堂あり。

出羽國羽黑山を移し、關東山仕出世寺なり。不動山護摩院と號し、攝家法華の內御下向。修驗補任下さるゝなり。

一、德川鄉。永德寺。

一、丸山村。靑龍山淸光寺。開山開基新田義貞公。相模入道御誅罪の節、上野・越後・播磨、三箇國主なり。

越後國米山藥師如來御遷し、御崇敬あるなり。

一、大島村。東陽寺。開山開基大島氏。

一、大鷲村。　大鷲山威德院。
一、　雲祥寺。　開山開基林伊賀。
一、廣澤村。　大應院。　開山開基藤生紀伊。
一、郗松村。　光明寺。　開山開基木村美濃。
一、堺野村。　正雲寺。　開山開基高橋丹波。
一、植木野村。　宗金寺。　開山開基堀越淡路。
一、上州總鎮守西上州一之宮。人王十八世履中天皇姫宮。拔鉾大明神を崇め奉る。
一、榛名滿行權現、天照皇太神五代元口彦尊なり。
一、三夜澤大明神。　武智大臣なり。
東上州、群馬・那波・佐渡・勢田・新田・山田・邑樂。
西上州、碓氷・緑野・甘樂・多胡・庄岡・吾妻・利根。
　山田郡の内庄四つ所、山田庄・公野庄・眞張庄・薗田庄。
一、大町村芋宮明神。　東上州山田郡。

一、北日出井村。長良宮。同邑樂郡。

一、瀧山不動院。濫觴三井寺。開山智澄大師作。

新田正傳或問　大尾

大正四年十一月十二日印刷
大正四年十一月十五日發行

不許複製

國史叢書
上州治亂記　全
上州坪弓老談記　全
上州金山軍記　全
新田正傳記　全
新田正傳或問　全

定價金壹圓

編者　黑川眞道
發行者　國史研究會
右代表者　小瀧淳
東京市本郷區駒込林町二二四番地
印刷者　楢山定吉
東京市神田區三崎町三丁目一番地
印刷所　友文社
東京市神田區三崎町三丁目一番地

發行所　國史研究會
東京市本郷區駒込林町二百廿四番地
振替貯金口座東京二七〇二四番